2025年8月29日(金)

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-01]

Examining the Relationship among Students' Perceived Constraints Support, Efficacy Beliefs, and Physical Activity Intention

Students' Perceived Constraints Support, Efficacy Beliefs, and Physical Activity Intention

*Hsu Weiting[1] (1. National Dong Hwa University)

[03心-ポ-03]

The Influence of Achievement Goal Orientation of University Handball Players on Team Cohesion and Team Performance

The Influence of Achievement Goal Orientation of University Handball Players on Team Cohesion and Team Performance

*JEON MIGYEONG[1]、OH KYUNGROK[1] (1. Kyung Hee Univ.)

[03心-ポ-05]

The Influence of Coaching Styles on Practitioners’ Experiences in Pilates

A Qualitative Phenomenological Approach

*JEONG JIYUN[1]、Oh Kyung rok[1] (1. KyungHee Univ.)

[03心-ポ-07]

観察者の性別の違いが速さと正確さの両方を要求される課題のパフォーマンスに及ぼす影響

男性熟練参加者についての検討

*兄井 彰[1] (1. 福岡教育大学)

[03心-ポ-09]

VRを用いた初心者用硬式テニスサーブのトス練習システムの開発と練習効果

*井上 裕美子[1]、野尻 祐貴[1] (1. 大阪工業大学情報科学部)

[03心-ポ-11]

防御的な文脈情報は防御の選択反応を無意識に促進する

*奥村 基生[1]、木島 章文[2]、横山 慶子[3]、山本 裕二[4] (1. 東京学芸大学、2. 山梨大学、3. 名古屋大学、4. 新潟医療福祉大学)

[03心-ポ-13]

フランカー課題における色の違いが選択的注意に与える影響

*坂部 崇政[1]、高井 秀明[2] (1. 京都教育大学、2. 日本体育大学)

[03心-ポ-15]

タイムプレッシャーの強度が精神的負担に及ぼす影響

スタンバーグ課題による検討

*大久保 瞳[1]、高井 秀明[1] (1. 日本体育大学)

[03心-ポ-17]

運動学習の“非一様地形”とその安定・発展を読み解く

筆跡図形の部分構造と軌道エントロピーの関係

*村上 宏樹[1]、山田 憲政[2] (1. 金城大学、2. 中京大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

[03心-ポ-19]

文脈情報によるバイアスが側方へのステップ反応に及ぼす影響
左右の刺激呈示比率に着目して

*三枝 徹平[1]、上野 壮士朗[1]、近藤 克磨[1]、國部 雅大[2] (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学体育系)

[03心-ポ-21]

体育授業における原因帰属と自己調整学習との関係における自己効力感の調整変数としての機能

*須﨑 康臣[1]、久保 研二[2]、田中 輝海[3] (1. 島根大学、2. 広島大学、3. 駿河台大学)

[03心-ポ-23]

運動へのストレスコーピング、基本的心理欲求、今後の運動意欲の関係
通信制高校に在籍する生徒の好意的・忌避的態度に着目して

*田中 将也[1]、中須賀 巧[1] (1. 兵庫教育大学)

[03心-ポ-25]

高校男子ラグビー選手における身体不満と出場機会が心理的パフォーマンスに対するセルフ・エフィカシーに及ぼす影響

*深見 柊真[1]、高井 秀明[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

[03心-ポ-27]

所属ステレオタイプと自己ベスト更新率の関係

*幾留 沙智[1]、渡邉 諒[1,2]、大塚 理瑚[3]、三島 未琴[3]、中本 浩揮[1] (1. 鹿屋体育大学、2. 日本学術振興会特別研究員 （PD）、3. 鹿屋体育大学大学院)

[03心-ポ-29]

高校野球選手における心理的能力に関する特徴
チーム内地位及びチーム最高成績からの検討

*大石 達也[1]、高井 秀明[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

[03心-ポ-31]

個人の気質と熟考との関連に対する認知的柔軟性の媒介効果

*髙橋 由衣[1]、高井 秀明[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

[03心-ポ-33]

スポーツドラマチック体験とレジリエンス要因の関連

*堤 愛美子[1]、杉山 佳生[1] (1. 九州大学大学院)

[03心-ポ-35]

目標達成を目指す大学生アスリートにおける個人特性に応じた認知的方略選択の重要性

*大塚 理瑚[1]、幾留 沙智[2]、渡邉 諒[2,3]、中本 浩揮[2] (1. 鹿屋体育大学大学院、2. 鹿屋体育大学、3. 日本学術振興会特別研究員（PD）)

[03心-ポ-37]

スポーツ競技における失敗の価値観尺度の信頼性・妥当性の検討

*柴原 健太郎[1] (1. 北九州市立大学)

[03心-ポ-39]

競技スポーツ領域における心理的安全性研究の今とこれから
スコーピング・レビュー

*松原 旭飛[1]、人羅 美帆[2]、高井 秀明[3] (1. 日本体育大学大学院、2. 医療法人横浜未来ヘルスケアシステム、3. 日本体育大学)

[03心-ポ-41]

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

スポーツ競技者におけるライフスキルの構成概念の検討
体育会柔道部学生を対象として

*藤島 将太[1]、西田 順一[2] (1. 近畿大学大学院、2. 近畿大学)

[03心-ポ-43]
大学体育授業における主観的恩恵評価とライフスキル獲得との関係

*藪中 佑樹[1]、早川 琢也[2]、成相 美紀[2]、前田 奎[2]、田中 奏一[2]、高橋 啓悟[3]、金田 和輝[2]、銘苅 淳[4]、小俣 貴洋[2]、細野 裕希[2]、梶田 和宏[2]、新野 弘美[2]、濱中 良[2] (1. 龍谷大学経営学部、2. 京都先端科学大学健康医療学部、3. 徳島大学大学院社会産業理工学研究部、4. アルバモス大阪)

[03心-ポ-45]
3歳から8歳児の身体活動と社会情動的スキルとの関連
身体活動の頻度、屋外活動時間及び仲間の人数

*松尾 安優子[1]、川田 裕次郎[1,2,4]、染谷 由希[1,2,6]、中村 絵美[3,6]、木藤 友規[1,2]、松井 公宏[2,5]、松永 美咲[6]、鈴木 宏哉[1,2,4,6] (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部、3. 順天堂大学保健医療学部、4. 順天堂大学スポーツ健康医科学研究所、5. 横浜市立大学附属病院、6. 順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構)

[03心-ポ-47]
陸上短距離選手のスタート前におけるルーティンのパターンと効果について

*鈴木 龍馬[1] (1. 新潟医療福祉大学)

[03心-ポ-49]
男性柔道指導者が指導の考え方を獲得していくプロセスに関する予備的検討

*柴田 大地[1]、高井 秀明[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

[03心-ポ-51]
「イップスの操作的定義」を基準とした野球競技におけるイップスの実態調査

*池田 和司[1]、渡邊 裕也[1]、甲斐 裕一[1] (1. 日本経済大学)

[03心-ポ-53]
男子大学生ウエイトリフティング選手における心理的競技能力と競技不安の相関関係

*鶴田 幸大[1]、時田 晃佑[1]、中澤 史[2] (1. 法政大学大学院スポーツ健康学研究科、2. 法政大学)

[03心-ポ-55]
男子大学生における首尾一貫感覚と運動に関する意思決定バランスとの関連

*園部 豊[1]、平山 浩輔[1] (1. 帝京平成大学)

[03心-ポ-57]
ダンスの創造的プロセスが不安および抑うつに及ぼす影響
即興創作ダンスと模倣ダンスの比較

*酒井 美鳥[1]、清河 幸子[2]、溝川 藍[1] (1. 名古屋大学、2. 東京大学)

[03心-ポ-59]
2型糖尿病患者の血糖管理と自己効力感がレジリエンスに与える影響

*西垣 景太[1] (1. 東海大学　健康学部)

[03心-ポ-61]
アスリートにおける熱望・警戒イメージ尺度の作成

*相川 聖[1]、高井 秀明[2]、平山 浩輔[3]、三村 覚[2]、齋藤 雅英[2] (1. 関西学院大学、2. 日本体育大学、3. 帝京平成大学)

[03心-ポ-63]
パリ2024大会におけるアスリートの精神的健康とSNS上の誹謗中傷との関連の検討

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

*本郷 由貴[1]、冨永 哲志[1]、大西 壮流[1]、立谷 泰久[1]、柄木田 健太[1] (1. ハイパフォーマンススポーツセンター　国立スポーツ科学センター)

[03心-ポ-65]

デフアスリートへの心理的支援が心理的能力に及ぼす影響
JISS競技心理検査による検討

*前田 凌汰[1,2]、後藤 賢二[1]、根本 玲[1]、幸田 剣[1]、土屋 裕睦[2] (1. 和歌山県立医科大学 みらい医療推進センター げんき開発研究所、2. 大阪体育大学大学院)

[03心-ポ-67]

スポーツ指導者がコーチング場面で経験する心理的葛藤の質的検討
大阪府リーグ社会人サッカー監督を対象として

*筒井 香[1]、伊藤 瑞希[2] (1. 株式会社BorderLeSS、2. OsakaCitySC)

[03心-ポ-69]

競技的身体性は描画に表れるか：描画判別課題による探索的研究
風景構成法を用いて

*伊藤 友記[1]、森 司朗[2] (1. 鹿屋体育大学大学院、2. 鹿屋体育大学)

[03心-ポ-71]

スポーツと人格形成に関する意識調査
体育専攻学生を対象に

*佐々木 史之[1] (1. 環太平洋大学)

[03心-ポ-73]

サッカーのPK戦における意思決定に関する質的研究

*大嶋 拓[1]、関矢 寛史[2] (1. 広島大学大学院、2. 広島大学)

[03心-ポ-75]

ハンドボール競技における試合のよい“流れ”を引き寄せるオフェンスプレー
H大学女子チームの3年間の地方１部リーグ戦による事例研究

*板谷 厚[1]、上野 壮士朗[2]、能代 時矢[2]、高瀬 淳也[1] (1. 北海道教育大学、2. 筑波大学)

[03心-ポ-77]

インセンティブが投球課題時のリスクテイキングに及ぼす影響と関連する心理特性の検討

*上野 壮士朗[1]、近藤 克磨[1]、三枝 徹平[1]、國部 雅大[2] (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学体育系)

[03心-ポ-79]

視覚運動刺激が自己運動知覚に与える影響
傾斜が速度知覚に与える影響に関して

*森 司朗[1] (1. 鹿屋体育大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1102-111] バイオメカニクス（奇数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-01]

剣道競技における競技力と下肢筋力および筋力発生率(RFD)の関係性の解明

*西川 浩太郎[1]、鶴田 理[1]、桜井 伸二[2] (1. 中京大学 スポーツ科学研究科 、2. 中京大学 スポーツ科学部)

[05バ-ポ-03]

腹臥位でのチューブバンドを用いたYW運動による肩・肘障害予防

*森本 大雅[1] (1. 新潟大学)

[05バ-ポ-05]

速度変化を伴う移動視標に対するタイミングコントロール

*西面 智華[1]、藤原 素子[2] (1. 奈良女子大学大学院、2. 奈良女子大学)

[05バ-ポ-07]

口コモ度テスト立ち上がりテストにおける片脚立ち上がり可否による立ち上がり動作の比較

*伊藤 知之[1] (1. 大阪大谷大学)

[05バ-ポ-09]

大学スポーツ選手における腰痛と脊柱運動の評価

*村井 楓子[1]、五十嵐 健太[1]、山田 洋[2,1] (1. 東海大学スポーツ医科学研究所、2. 東海大学)

[05バ-ポ-11]

マインドフルネストレーニングがダーツの投動作に与える影響

*渡辺 日向[1] (1. 新潟大学)

[05バ-ポ-13]

100mの加速局面における上肢の疾走動態

*中橋 侑敬[1] (1. 新潟大学大学院)

[05バ-ポ-15]

競泳スタートの入水時に生じる流体力定量化の試み

*山川 啓介[1]、工藤 重忠[1]、武田 理[2] (1. 筑波大学、2. 筑波大学大学院)

[05バ-ポ-17]

体操熟練者の運動学的特徴
下肢屈伸を伴う上肢内外回旋動作に着目して

*坂口 泰志郎[1]、岸 凌大[2]、須藤 惇[2]、三宅 良輔[2]、西山 哲成[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

[05バ-ポ-19]

eスポーツにおける感度と前腕動作に関する研究
シューティングゲームを対象として

*星宮 貴弥[1] (1. 新潟大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育経営管理

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育経営管理

[3b1112-116] 体育経営管理／ポスター発表

[06経-ポ-01]

運動の意欲を金銭的に可視化する

*笹田 周作[1]、宗野 文俊[2] (1. 相模女子大学栄養科学部健康栄養学科、2. 相模女子大学学芸学部子ども教育学科)

[06経-ポ-02]

特定の地方自治体における公共施設の整備のあり方や現状
特に公共施設等総合管理計画に着目して

*永田 秀隆[1] (1. 仙台大学)

[06経-ポ-03]

2020年東京オリンピックにおけるインバウンド観光客の消費および旅行形態の予測 ― 支払意思額（WTP）の活用による

*JUNG HYUN YE[1] (1. 筑波大学)

[06経-ポ-04]

大学生アウトドアリーダーにおける活動から得られる恩恵の特徴

*松岡 咲綾[1]、中井 聖[2]、神野 周太郎[2]、佐藤 眞史[3] (1. 大阪電気通信大学大学院、2. 大阪電気通信大学、3. 特定非営利活動法人ナック)

[06経-ポ-05]

大学生の女子剣道部におけるチームワークに関する研究
高知県での地域貢献イベントの運営の事例をもとに

*大井 理緒[1]、柴山 慧[2]、浦 佑大[1]、岡田 大暉[1] (1. 環太平洋大学、2. 福山平成大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：保健

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／保健

[3b1117-123] 保健／ポスター発表

[10保-ポ-01]

定期健康診断および健康に対する学生の関心と知識

*星野 秀樹[1]、岡田 摩紀[1]、加藤 渡[2]、淺川 正堂[2]、寺田 恭子[3]、寺田 泰人[3]、菊池 理恵[4]、渡部 努[5]、藤巻 裕昌[6] (1. 愛知文教女子短期大学、2. 修文大学短期大学部、3. 桜花学園大学、4. 名古屋柳城短期大学、5. 岡崎女子短期大学、6. 名古屋女子大学短期大学部)

[10保-ポ-02]

ヘルスリテラシーと保健の知識，感情・価値・期待，活用との関連

*物部 博文[1]、小浜 明[2]、砂田 芽衣[3] (1. 横浜国立大学、2. 仙台大学、3. 赤坂台中学校)

[10保-ポ-03]

クロノタイプ夜型学生の生活習慣と気分および主観的睡眠評価の特徴

*大石 祥寛[1] (1. 帝塚山大学教育学部)

[10保-ポ-04]

輻射熱の有無が同等湿球黒球温度環境での歩行時の体温調節反応および温熱感覚におよぼす影響

*山下 直之[1]、永井 暉之[2]、和田 健太郎[2]、吉村 颯馬[2]、久米 雅[3] (1. 京都工芸繊維大学、2. 京都工芸繊維大学大学院、3. 京都文教短期大学)

[10保-ポ-05]

高校生を対象としたリスク診断アプリケーションによるリスク測定
ストレス・生活時間の傾向および性格との関連

*満下 健太[1]、安永 太地[2]、塩田 真吾[1] (1. 静岡大学、2. 早稲田大学)

[10保-ポ-06]

福岡県KDBシステムのレセプト件数・医療費の加齢変化および関連要因
福岡市・北九州市・筑豊地域の2022年度のデータから

*池田 孝博[1]、中原 雄一[2]、青柳 領 (1. 福岡県立大学、2. 久留米大学)

[10保-ポ-07]

キャンパス内のテントサウナを用いた積極的休養の効果

*高橋 珠実[1] (1. 東洋大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：運動生理学

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／運動生理学

[3b1124-128] 運動生理学（奇数演題）／ポスター発表

[04生-ポ-01]

膝関節伸展屈曲時の膝関節角度が筋力発揮に与える影響
新たに開発したゴニオメーターを用いて

*石川 芽生子[1]、森本 拓実[2]、廣田 音奏[3]、成田 泰崇[4]、小谷 恭子[5]、河鰭 一彦[1] (1. 関西学院大学、2. 早稲田大学　、3. 大阪産業大学　、4. 国士舘大学、5. 帝塚山学院大学)

[04生-ポ-03]

事前の軽負荷運動が伸張性運動後の筋損傷および動脈スティフネス及ぼす影響

*橋本 佑斗[1,2]、江崎 一希[3] (1. 明治安田健康開発財団, 健康増進支援センター、2. 日本体育大学, 体育研究所、3. 日本体育大学大学院)

[04生-ポ-05]

暑熱下運動中におけるペルチェ素子による頸部冷却の有用性の検討

*内藤 貴司[1] (1. 北海学園大学)

[04生-ポ-07]

月経周期が持久性運動時の血中I-FABPに及ぼす影響

*松田 知華[1]、山田 満月[2]、鰐渕 めぐみ[3]、山瀬 花[3]、須永 美歌子[3] (1. 名古屋大学、2. 和光大学、3. 日本体育大学)

[04生-ポ-09]

有酸素運動および食事・栄養指導介入が女子大学生の糖化マーカーに及ぼす影響

*中島 早苗[1]、山田 直子[2] (1. 共立女子短期大学、2. 文教大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-01]

各種スポーツ施設における暑さ指数の系統誤差に関する研究

*高橋 和文[1]、金 興烈[2]、稲嶋 修一郎[3] (1. 金城学院大学、2. 南山大学、3. 愛知県立大学)

[08測-ポ-02]

規定テンポステップテストのテンポの検討

*青木 宏樹[1]、出村 慎一[2]、長澤 吉則[3]、浮田 咲子[4]、永山 亮一[5]、藤谷 かおる[2] (1. 福井工業高等専門学校、2. 金沢大学、3. 京都薬科大学、4. 関東学院大学、5. 北陸学院大学)

[08測-ポ-03]

演題取り下げ

[08測-ポ-04]

幼児における子ども口コモ判定と跳躍距離及び平均台歩行時間の関係

*浮田 咲子[1]、出村 慎一[2]、佐藤 敏郎[3]、青木 宏樹[4] (1. 関東学院大学　教育学部、2. 金沢大学大学院自然科学研究科 、3. 新潟医療福祉大学、4. 福井工業高等専門学校)

[08測-ポ-05]

非認知能力の高低群における体力・運動能力の関係
年長児を対象として

*横谷 智久[1]、杉浦 宏季[1]、山次 俊介[2]、山田 孝禎[2] (1. 福井工業大学　スポーツ健康科学部、2. 福井大学)

[08測-ポ-06]

幼児期における腸内細菌叢の経年変化
３年間の縦断的調査から

*小栗 和雄[1] (1. 岐阜聖徳学園大学 教育学部)

[08測-ポ-07]

幼児の体力・運動能力の現状と年次推移把握のための資料提供システムの完成度

*村瀬 智彦[1] (1. 愛知大学)

[08測-ポ-08]

小・中学生における体力合計点と根気得点（Grit）の相対年齢効果

*神舘 盛充[1,2]、森戸 剛史[3] (1. 日本健康・運動データ総合研究所、2. Pestalozzi Technology株式会社、3. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

[08測-ポ-09]

中学生および大学生野球選手における身体的要素とスイング速度の関係

*大城 勝生[1]、今若 太郎[2]、畑島 一翔[1]、田中 重陽[1] (1. 国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科、2. 上智大学基盤教育センター)

[08測-ポ-10]

高校野球選手におけるバット速度に及ぼす除脂肪量指数の影響

*山田 健二[1]、大野 貴弘[1]、竹島 弘晃[3]、須藤 明治[2] (1. 国士舘大学体育学部体育研究所、2. 国士舘大学体育学部、3. 株式会社Noble Action)

[08測-ポ-11]

高校野球における体づくりへの選手の意識の違い

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

*須藤 明治[1]、大野 貴弘[2]、山田 健二[2]、竹島 弘晃[3] (1. 国士舘大学体育学部、2. 国士舘大学体育研究所、3. 株式会社Noble Action)

[08測-ポ-12]

肩関節可動域が野球投手の投球速度に及ぼす影響

*長谷川 伸[1] (1. 九州共立大学)

[08測-ポ-13]

野球選手におけるスクワットのパワー発揮特性とスイング速度の関係

*齋藤 大成[1]、田邉 凱聖[1]、畑島 一翔[1]、田中 重陽[1] (1. 国士舘大学大学院)

[08測-ポ-14]

野球内野手におけるショートバウンド捕球の動作特性

*森 崇信[1]、大田 穂[2] (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学)

[08測-ポ-15]

ストレートのタイプからみた投手へのアプローチ評価

*大野 貴弘[2]、山田 健二[2]、竹島 弘晃[1]、須藤 明治[3] (1. 株式会社Noble Action、2. 国士舘大学体育学部体育研究所、3. 国士舘大学体育学部)

[08測-ポ-16]

大学野球選手における投球障害との関連性に着目した肩甲骨偏位の縦断的検討

*百武 晃希[1]、藤井 雅文[2]、前田 明[2] (1. 鹿屋体育大学大学院、2. 鹿屋体育大学)

[08測-ポ-17]

盗塁を意識した走塁条件下における走動作特徴と下肢形態との関係

*久野 峻幸[1]、西本 浩章[1]、野上 展子[2] (1. 神戸医療未来大学、2. 大阪成蹊大学)

[08測-ポ-18]

大学男子ソフトボール選手のパワー発揮特性とスイング速度の関係

*田邉 凱聖[1]、齋藤 大成[1]、畑島 一翔[1]、秋葉 茂季[1]、田中 重陽[1] (1. 国士舘大学大学院)

[08測-ポ-19]

実業団女子ソフトボールにおける期待得点値を最大化するラインナップの選定

*中村 陽南[1]、廣津 信義[2]、大田 穂[3] (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学健康データサイエンス学部、3. 順天堂大学スポーツ健康科学部)

[08測-ポ-20]

カーリング競技におけるストーン速度の違いと動作特性の個人差

*小林 秀紹[1] (1. 札幌国際大学)

[08測-ポ-21]

様々な状況に応じた女子ラクロスのパスの正確性の検討

*富岡 咲紀[1]、勝見 康平[1]、来田 宣幸[1]、幸田 仁志[1] (1. 京都工芸繊維大学)

[08測-ポ-22]

関東大学サッカーリーグ戦における競技成績決定構造の特徴

*大石 健二[1,2]、矢野 晴之介[1]、小中 英嗣[2] (1. 日本体育大学、2. 名城大学)

[08測-ポ-23]

キンボールスポーツのプレー動作と運動強度・運動量の関係性の検討

*西口 治佳[1] (1. 太成学院大学)

[08測-ポ-24]

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

新体操における演技構成立案の方法について

*小澤 来瞳[1]、山田 健二[2]、須藤 明治[3] (1. 国士舘大学大学院、2. 国士舘大学体育学部体育研究所、3. 国士舘大学体育学部)

[08測-ポ-25]

トランポリン競技の国際審判員における出来栄えの採点傾向
審判階級間の比較

*河野 由[1]、實宝 希祥[2]、窪 康之[3]、横澤 俊治[3] (1. 大東文化大学、2. 九州共立大学、3. 国立スポーツ科学センター)

[08測-ポ-26]

大学運動選手における浮き趾の有無による足趾筋力、ファンクショナルリーチ、体格、及び身体組成の比較

*佐藤 敏郎[1]、出村 慎一[2]、青木 宏樹[3] (1. 新潟医療福祉大学、2. 金沢大学、3. 福井工業高等専門学校)

[08測-ポ-27]

座位姿勢における動的関節制御能力と足底圧様式の評価および足趾把持力との関連

*坂口 雄介[1]、尾山 裕介[2]、村山 敏夫[3] (1. 北陸大学、2. 桐蔭横浜大学、3. 新潟大学)

[08測-ポ-28]

若年者における支持基底面変動器具上での重心動揺変数の信頼性、及び前後と左右受動的バランス能力の性差及び方向差

*長澤 吉則[1]、出村 慎一[2]、青木 宏樹[3]、永山 亮一[4] (1. 京都薬科大学基礎科学系健康科学分野、2. 金沢大学、3. 福井工業高等専門学校、4. 北陸学院大学)

[08測-ポ-29]

高齢者における支持基底面積を基準とした有効支持基底面積の割合の性差

*杉浦 宏季[1]、山次 俊介[2]、山田 孝禎[2]、横谷 智久[1]、武 可[3] (1. 福井工業大学、2. 福井大学、3. 福井工業大学大学院)

[08測-ポ-30]

対側肢の力発揮がグレーディング能力に及ぼす影響

*速水 達也[1]、廣野 準一[1] (1. 信州大学)

[08測-ポ-31]

インソール型歩容センサーを利用した地域高齢者に対する健康・見守り支援の試み
利用者が感じる効果における男女の認識の違い

*佐藤 進[1] (1. 金沢工業大学)

[08測-ポ-32]

踏み出し戦略に着目した「転倒誘発装置」の検討
平衡能力と移動能力に焦点を当てて

*檜皮 貴子[1]、井上 咲子[2]、加藤 玲[3] (1. 新潟大学、2. 新潟大学大学院、3. 東京藝術大学)

[08測-ポ-33]

体力テストによる客観データと問診による主観データから見た転倒リスクに対する加齢の影響

*加藤 貴英[1]、早坂 太一[1]、近藤 雅哉[1]、川越 隆[2]、大須賀 洋祐[3] (1. 豊田工業高等専門学校、2. 愛知医科大学、3. 国立長寿医療研究センター)

[08測-ポ-34]

地域在住高齢者における肩関節の水平屈曲および水平伸展筋力とフレイル進行度との関連

*中谷 敏昭[1]、灘本 雅一[2]、金子 竜大[3] (1. 天理大学、2. 桃山学院大学、3. 京都先端科学大学)

[08測-ポ-35]

高齢者の体力を評価する質問項目の選定

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

*坂井 智明[1]、石原 一成[2] (1. 名古屋学院大学スポーツ健康学部、2. 福井県立大学)

[08測-ポ-36]

高齢者の反応ステップテストにおける敏捷性・平衡性と身体・認知機能との関連

*尾山 裕介[1]、坂口 雄介[2]、村山 敏夫[3] (1. 桐蔭横浜大学、2. 北陸大学、3. 新潟大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-01]

高校陸上競技部における選手選考の現状と課題

*深見 英一郎[1]、岡田 悠佑[2] (1. 早稲田大学、2. 明治学院大学)

[09コ-ポ-03]

幼児における短距離走トレーニングとしての【7秒間走】の効果

*浦田 達也[1]、野方 円[2]、秋山 大祐[3]、小田 俊明[4] (1. 関西学院大学、2. 中部学院大学、3. 岡山商科大学、4. 順天堂大学)

[09コ-ポ-05]

即時フィードバックがリバウンドジャンプに及ぼす影響
女子跳躍競技者を対象とした検討

*中川 未加子[1] (1. 日本女子体育大学)

[09コ-ポ-07]

陸上競技の女子短距離選手を対象としたそうパフォーマンスの向上に向けた支援のあり方に関する事例的研究

*髙木 陽[1] (1. 日本体育大学大学院)

[09コ-ポ-09]

大学生駅伝選手における腸内環境の改善が鉄栄養状態へ及ぼす影響
選抜選手とその他の選手との比較

*渡邊 香緒里[1]、谷口 耕輔[1]、安達 瑞保[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

[09コ-ポ-11]

ランニングにおける反実仮想説明法を用いたトレーニングの個別最適化に対する可能性探索

*稲葉 龍一郎[1]、宮崎 陽輔[1]、平野 賢[1] (1. 株式会社アシックス)

[09コ-ポ-13]

学生コーチが抱く役割認識と困り感

*渡邊 裕也[1]、池田 和司[1]、冨田 剣太郎[1]、大井 理緒[2] (1. 日本経済大学、2. 環太平洋大学)

[09コ-ポ-15]

チアリーディングにおけるロンダート宙返りの動感に関する研究

*早田 剛[1]、藤原 悠太[1]、坂本 康輔[1] (1. 環太平洋大学)

[09コ-ポ-17]

運動学習における練習頻度の違いが技術習得と技術保持に及ぼす影響

*坂本 拓巳[1]、上田 真也[2] (1. 森ノ宮医療大学、2. 天理大学)

[09コ-ポ-19]

体操競技の跳馬における〈片外手片内手着手〉〈伸身ユルチェンコ3/1ひねり〉に関する発生分析

*橘 汐芽[1] (1. 筑波大学大学院)

[09コ-ポ-21]

指導用動作モデルを用いたピルエット動作指導に関する研究
フィードバックトレーニング効果について

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

*河鰭 真世[1]、堀内 健太郎[1]、津田 博子[1]、松本 真咲[1]、仲間 若菜[1]、阿江 通良[1] (1. 日本体育大学)

[09コ-ポ-23]

大学野球選手のバッティングにおける踏込み動作の実態と踏込み後の打撃動作との関係

*桑原 潤也[1]、藤井 雅文[2]、前田 明[2] (1. 鹿屋体育大学大学院、2. 鹿屋体育大学)

[09コ-ポ-25]

バスケットボールのドライブにおけるフェイントのキネマティクス的分析

*宮平 健介[1]、阿江 数通[2]、内山 治樹[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

[09コ-ポ-27]

疾走速度が高い女子ラグビー選手の加速局面におけるバイオメカニクス的特徴

*和田 直樹[1]、西山 哲成[1]、谷口 耕輔[1]、堀内 健太郎[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

[09コ-ポ-29]

国際レベルのレスリング選手を対象としたミッドサイプルにおける力学的指標の長期モニタリング

縦断的ケーススタディ

*小黒 喬史[1]、松本 慎吾[1]、関 星汰朗[1]、槇野 陽介[1]、月野 雄一[1]、橋本 瀬成[1]、林 嵩之[1]、松本 紘到[1]、黄 仁官[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

[09コ-ポ-31]

マルチサイクル構造のピリオダイゼーションにおける具体的展開

*青山 亜紀[1]、青山 清英[1] (1. 日本大学)

[09コ-ポ-33]

トレーニング経過に伴うベンチプレスでの最大筋力と最小速度閾値の変化

*砂川 力也[1,2]、平良 怜南[2] (1. 琉球大学、2. 琉球大学大学院地域共創研究科)

[09コ-ポ-35]

サッカーにおける新規間欠的持久力テスト(CHU-Test)の生理学的特性

大学生男子サッカー選手を対象にして

*上田 真也[1]、坂本 拓巳[2] (1. 天理大学、2. 森ノ宮医療大学大学院)

[09コ-ポ-37]

大学男子水球選手における水中でのフィールドテストとコーチ評価との関連性

*谷口 耕輔[1]、西山 哲成[1]、堀内 健太郎[1]、和田 直樹[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

[09コ-ポ-39]

エペ種目を専門とする男子大学フェンシング選手におけるコンディションに関する研究

コーチング現場の活用に向けて

*横川 汐音[1]、杉田 正明[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学体育学部)

[09コ-ポ-41]

バスケットボール競技のシュートの精度と遠投力の関係

大学男子バスケットボール選手を対象に

*中嶽 誠[1,2]、木藤 友規[1,2]、青木 和浩[1,2] (1. 順天堂大学スポーツ健康科学部、2. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科)

[09コ-ポ-43]

Do Go players have distinct playing styles? Analyzing player styles using an automatic image recognition system

Go players' playing styles

*Lung Hung Chen[1], Tsai-Cheng Wu[2] (1. National Taiwan Sport University, Taiwan, 2. National Tsing Hua University, Taiwan)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

[09コ-ポ-45]

バレーボールの自チームの攻撃時助走経路が相手ブロックに与える影響

*宮内 健嗣[1]、串阪 達哉[1]、宮地 弘太朗[1] (1. 大阪体育大学)

[09コ-ポ-47]

日本フロアボール選手権大会男子競技におけるチームスタッツの一考察

*浅井 泰詞[1]、鈴木 タケル[2,3]、北 徹朗[4] (1. 高千穂大学　人間科学部、2. 武蔵野美術大学大学院、3. 日本プロゴルフ協会、4. 武蔵野美術大学)

[09コ-ポ-49]

JRTLとJRLOの得点状況の比較

*山本 巧[1] (1. 防衛大学校)

[09コ-ポ-51]

ハンドボール競技におけるゲームの流れに関する認識
対戦した両チームの選手を対象としたインタビュー調査

*小俣 貴洋[1]、河田 浩貴[2] (1. 京都先端科学大学　健康医療学部、2. 順天堂大学　健康スポーツ学部)

[09コ-ポ-53]

卓球とバドミントンの授業が大学生のスポーツに対する態度と継続意欲に与える影響

*宮﨑 孝一郎[1]、和久井 健吾[1]、牛山 幸彦[1] (1. 新潟大学)

[09コ-ポ-55]

日本体育大学のアスリートにおけるメンタルヘルスの特徴と対応策の検討
NASSを利用したアスリートを対象に

*折茂 紗英[1]、中川 あい[2]、高井 秀明[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学、2. 東京都公立学校スクールカウンセラー)

[09コ-ポ-57]

大学運動部活動における組織文化の変容に関する事例研究
指導者の取り組みに着目して

*矢野 広明[1]、伊藤 雅充[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

[09コ-ポ-59]

NASS（Nittaidai Athlete Support System）の取り組みにおける成果と課題

*杉田 正明[1]、谷口 耕輔[1]、渡邊 香緒里[1]、和田 直樹[1]、堀内 健太郎[1]、中川 あい[1]、西山 哲成[1] (1. 日本体育大学)

[09コ-ポ-61]

大学スポーツ選手のコミュニケーション能力と種目特性・性・役職経験・競技レベルとの関連

*井藤 英俊[1]、青柳 領、坂口 英章[2] (1. 九州医療科学大学、2. 日本経済大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／アダプテッド・スポーツ科学

[3b1196-203] アダプテッド・スポーツ科学／ポスター発表

[13ア-ポ-01]

高齢者の主観的健康及び幸福感に及ぼすアダプテット・スポーツの影響に関する研究

*坪内 怜[1]、河野 喬[1] (1. 広島文化学園大学)

[13ア-ポ-02]

健口体操指導者による指導活動の心理的変化について

熟練指導者による体操教室指導に着目して

*島崎 百恵[1] (1. 東海大学国際文化学部)

[13ア-ポ-03]

肢体不自由児者の運動指導の合理的配慮検討における簡便な知能検査の活用

レーブン色彩マトリックス検査活用の有効性について

*松浦 孝明[1] (1. 国士舘大学文学部)

[13ア-ポ-04]

パラ陸上（低身長症）男子やり投における投てき動作の質的分析

世界トップ選手と日本トップ選手との比較

*山手 勇一[1]、山下 直紀[1]、阿江 通良[2]、内山 治樹[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

[13ア-ポ-05]

健常者のボッチャのエイミング能力と距離の調整方略の検討

*宮崎 彰吾[1]、木村 駿介[1]、藁科 侑希[1] (1. 静岡産業大学スポーツ科学部)

[13ア-ポ-06]

特別な教育的支援が必要な児童生徒の保健体育授業を実践する教員の信念と経験

特別支援学級教員を対象に

*笹本 剛太[1]、内田 匡輔[2]、吉岡 尚美[2]、保坂 凜[1] (1. 東海大学大学院体育学研究科、2. 東海大学体育学部)

[13ア-ポ-07]

日本における小学生から大学生を対象にしたゴールボールの教育実践研究に関するシステマティックレビュー

*濱中 良[1]、宇野 直士[2]、小俣 貴洋[1]、金田 和輝[1] (1. 京都先端科学大学、2. 山陽小野田市立山口東京理科大学)

[13ア-ポ-08]

交流型クライミング体験の意味の探求

参加者を対象としたインタビューから

*中道 莉央[1]、伊藤 相[2]、林 綾子[1] (1. びわこ成蹊スポーツ大学、2. 東京外国語大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-01]

ティームティーチングの活用によるカーリング授業展開

カーリング競技経験者の教員を活用した単元構成

*侘美 俊輔[1]、水嶋 星陽[2] (1. 育英館大学、2. 北海道教育大学附属旭川中学校)

[11教-ポ-02]

大学講義授業における社会人基礎力ルーブリックによるリフレクションの効果

*平工 志穂[1]、藤田 恵理[2]、滝 聖子[3]、小林 勝法[4] (1. 東京女子大学、2. 帝京大学、3. 香川大学、4. 文教大学)

[11教-ポ-03]

女子大学生における大学体育実技種目の選好

*中原 雄一[1]、池田 孝博[2] (1. 久留米大学　人間健康学部、2. 福岡県立大学　人間社会学部)

[11教-ポ-04]

アダプテーション・ゲーム実践による社会的スキルへの影響

中学校におけるバレーボール単元での実践

*村瀬 浩二[1]、梅澤 秋久[2]、田中 克実[3]、田島 亜也奈[4,5] (1. 和歌山大学、2. 横浜国立大学、3. 東海学院大学、4. 西濃高等特別支援学校、5. 兵庫教育大学大学院特別支援教育専攻障害科学コース)

[11教-ポ-05]

肩甲骨操作に着目した倒立練習法の効果検証

*熊谷 慎太郎[1] (1. 岐阜聖徳学園大学)

[11教-ポ-06]

保健体育科におけるウォーキングアメリカンフットボールの授業構想

女子高校生を対象として

*苫米地 里香[1]、鈴木 優太[2]、近藤 雄大[3]、崎田 嘉寛[4] (1. 札幌国際大学、2. 北海道大学アメリカンフットボール部、3. 津山工業高等専門学校、4. 北海道大学)

[11教-ポ-07]

小学生を対象とした側方倒立回転の指導プログラムに関する研究

*黒田 栄彦[1] (1. 北翔大学大学院　生涯スポーツ学研究科)

[11教-ポ-08]

体育の学習指導論の変遷に関する研究

2016年以降の学習指導論に着目して

*成家 篤史[1]、石塚 諭[2]、阿部 隆行[3] (1. 帝京大学、2. 宇都宮大学、3. 玉川大学)

[11教-ポ-09]

高等学校体育におけるサッカーの実践報告

エコロジカル・アプローチを活用した授業デザイン

*枝村 隼人[1]、梅澤 秋久[2] (1. 横浜国立大学教育学研究科、2. 横浜国立大学)

[11教-ポ-10]

水泳領域における「心得」の指導内容の検討(第2報)

現行（2017告示）及び前（2008告示）学習指導要領における英訳版を手掛かりにして

*稲垣 良介[1] (1. 岐阜聖徳学園大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

[11教-ポ-11]

体育授業が女子専門学校生の運動に関する意識と気分の変化に及ぼす影響
学生の運動有能感とポジティブ感情尺度に着目して

*岡崎 祐介[1]、石立 克己[1]、陳 昱龍[1] (1. 至誠館大学)

[11教-ポ-12]

ベースボール型ゲームにおける走塁先行アプローチの試み

*石塚 諭[1]、土田 了輔[2] (1. 宇都宮大学、2. 上越教育大学)

[11教-ポ-13]

球技学習におけるルールに関連する諸概念

*山崎 竜誠[1]、鈴木 理[2]、伊佐野 龍司[2] (1. 日本大学人文科学研究所、2. 日本大学)

[11教-ポ-14]

大学体育授業における運動種目の違いがライフスキル獲得に及ぼす影響

*田中 奏一[1]、小俣 貴洋[1]、金子 竜大[1]、成相 美紀[1]、前田 奎[1]、藪中 佑樹[2]、細野 裕希[1]、新野 弘美[1]、高橋 啓悟[3]、濱中 良[1]、杉山 敬[1]、鷹野 都[1]、銘苅 淳[4] (1. 京都先端科学大学、2. 龍谷大学、3. 徳島大学大学院、4. アルバモス大阪)

[11教-ポ-15]

倒立の学習に重点を置いたマット運動の授業進行に伴う成功の見通しと技の習熟度の変化
接転技群後転グループを対象として

*松長 大祐[1]、中井 聖[1]、神野 周太郎[1] (1. 大阪電気通信大学)

[11教-ポ-16]

平均台運動における運動アナロゴンの開発に関する研究

*齋藤 卓[1] (1. 筑波大学)

[11教-ポ-17]

ベースボール型球技の技術的特質に関する研究
時間構造に着目して

*岡崎 太郎[1]、佐藤 亮平[3]、竹田 唯史[2] (1. 北翔大学大学院、2. 北翔大学、3. 宮城教育大学)

[11教-ポ-18]

体育授業におけるペア・グループ編成に伴う学習者の抵抗感の実態と要因（第2報）

*大坪 俊矢[1] (1. 崇城大学)

[11教-ポ-19]

そりを用いたレジスト走および推進方向からチューブを用いて引っ張るアシスト走を用いた中学校における走運動授業は生徒の意欲を高める

*松村 昌紀[1]、直井 清貴[2]、繁田 進[3]、伊藤 信之[4]、森山 進一郎[3] (1. 東京学芸大学大学院、2. 東京学芸大学附属小金井中学校、3. 東京学芸大学、4. 横浜国立大学)

[11教-ポ-20]

性格特性と体育授業における言語的・非言語的コミュニケーションとの関係

*河合 甫[1]、中島 寿宏[2] (1. 北海道教育大学教職大学院、2. 北海道教育大学札幌校)

[11教-ポ-21]

工業高等専門学校学生によるバレーボール映像教材作成と活用サイクル構築の試み

*髙津 浩彰[1]、勝野 太介[2] (1. 豊田工業高等専門学校、2. 岐阜工業高等専門学校)

[11教-ポ-22]

ダンス学習における音楽リズムと身体リズムが学習者に与える心理的・身体的反応

*小島 理永[1] (1. 神戸女子大学)

[11教-ポ-23]

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

中学3年生を対象とした知識構成型ジグソー法とMI理論を活用したバレーボールの授業の開発と検証

*小林 永佑[1]、石切山 大[1]、大多和 秀樹[1] (1. 常葉大学大学院学校教育研究科)

[11教-ポ-24]

保健体育科教員の生徒指導担当における役割認識変容プロセス
チーム学校における新たな役割の模索

*岡田 大暉[1]、齋藤 祐一[1] (1. 鳴門教育大学大学院)

[11教-ポ-25]

高等教育における「体育史」授業教材の一提案
学生の体育・スポーツ経験の教材化

*石立 克己[1]、近藤 雄大[2]、舩場 大資[3] (1. 学校法人菅原学園至誠館大学、2. 津山工業高等専門学校、3. 山口学芸大学)

[11教-ポ-26]

小学校教育実習の授業実践を通した実習生の学びに関する事例的研究
2回の授業協議会の談話分析を中心に

*江藤 真生子[1]、三田 沙織[2] (1. 琉球大学、2. 國學院大學)

[11教-ポ-27]

初心者を対象とした陸上競技「背面跳び」の指導展開における学習課題

*近藤 雅哉[1]、上原 三十三[2] (1. 豊田工業高等専門学校、2. 愛知教育大学)

[11教-ポ-28]

新任体育教師における運動観察内容の変容過程

*篠﨑 明彦[1]、伊佐野 龍司[2]、鈴木 理[2] (1. 日本大学学院文学研究科教育学専攻（体育学）、2. 日本大学大学院)

[11教-ポ-29]

跳び箱運動における恐怖心の要因に関する研究
開脚跳びとかかえ込み跳びに着目して

*坂本 康輔[1]、浦 佑大[1] (1. 環太平洋大学)

[11教-ポ-30]

駅伝要素を取り入れた長距離走授業の有効性に関する研究

*柴田 一輝[1]、大越 正大[2] (1. 東海大学大学院体育学研究科、2. 東海大学体育学部)

[11教-ポ-31]

試験委員の言説からみる「文検」體操科
戦前日本の体育教師養成の実態

*栗原 武志[1] (1. 熊本学園大学)

[11教-ポ-32]

体育科教育において質的研究手法がもつ可能性に関する一考察

*佐藤 亮平[1]、岡崎 太郎[3]、近藤 雄一郎[2] (1. 宮城教育大学、2. 福井大学、3. 北翔大学大学院)

[11教-ポ-33]

日本の水泳指導に関する研究動向と課題の検討

*豊田 郁豪[1,2]、橋本 翔[4]、森山 進一郎[3] (1. 桃山学院大学、2. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、3. 東京学芸大学、4. 明法中学・高等学校)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 14:00 ~ 15:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1237-245] バイオメカニクス（偶数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-02]

パンチスローで用いるメディシンボールの質量の違いが体幹回旋運動に関わる動力学的変数に与える影響

*石川 慎二[1]、北村 瑞望[1]、大塚 光雄[1] (1. 日本体育大学)

[05バ-ポ-04]

漸増負荷ペダリング運動中の筋電図周波数様相の変化

*和久井 健吾[1]、牛山 幸彦[1] (1. 新潟大学)

[05バ-ポ-06]

ウォーキング時の香り呈示が歩容・時間知覚・生理的反応に与える影響

レモン香料とペパーミント香料のケーススタディ

*遠藤 慎也[1]、吉川 叡史[2]、伊藤 兼敏[3]、高橋 芳梨[3]、西垣 景太[1,2] (1. 東海大学 健康学部、2. 東海大学大学院 健康学研究科、3. 高砂香料工業株式会社 研究開発本部)

[05バ-ポ-08]

各種腕振り動作の違いが地面反力の大きさに及ぼす影響の定量化

*藤谷 瑠菜[1]、田内 健二[2] (1. 中京大学スポーツ科学研究科、2. 中京大学スポーツ科学部)

[05バ-ポ-10]

バスケットボールスリーポイントシュートにおける力学的エネルギーの有効性

*奥山 幹太[1] (1. 新潟大学)

[05バ-ポ-12]

サッカーのキック動作によるボール速度に対する疾走速度の割合における男女差の検討

*服部 あおい[1]、田内 健二[1]、大家 利之[1] (1. 中京大学)

[05バ-ポ-14]

走幅跳におけるテイクオフゾーンの導入が助走、踏み切り動作に与える影響

*木戸 陽介[1]、北村 瑞望[1]、小林 史明[1]、大塚 光雄[1] (1. 日本体育大学)

[05バ-ポ-16]

柔道「内股」を身体合成重心の鉛直方向変位からみる

*池田 希[1]、西尾 悠介[2]、宮崎 誠司[3] (1. いけだ接骨院、2. 日本体育大学大学院、3. 東海大学)

[05バ-ポ-18]

トランポリン競技の後方伸身2回宙返り3回捻り動作における踏切局面中の角運動量が滞空時間に及ぼす影響

*岸 凌大[1]、山口 雄大[1]、和田 直樹[1]、山崎 博和[1]、西山 哲成[1] (1. 日本体育大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：運動生理学

2025年8月29日(金) 14:00 ~ 15:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／運動生理学

[3b1246-250] 運動生理学（偶数演題）／ポスター発表

[04生-ポ-02]

Effects of Injury of College Athletes on Training Participation Motivation and Exercise Commitment in the COVID-19 Situation

*KO GIHYUN[1]、LEE JOONHEE[1]、OH CHAEYUN[1]、JANG DEOKJIN[1] (1. Kyung Hee Univ.)

[04生-ポ-04]

スパルタンレースに参加する選手の体力の検討

*吉村 真美[1]、瀧本 未来[2] (1. 豊田工業大学、2. 鈴鹿医療科学大学)

[04生-ポ-06]

鍛錬者と非鍛錬者における上肢ウェイトトレーニング後の筋痛の強度の比較

*李 忠林[1]、山田 孝禎[2]、武 可[3] (1. 井岡山大学、2. 福井大学、3. 福井工業大学)

[04生-ポ-08]

空気圧による加圧・減圧の繰り返しが下肢コンディショニングに及ぼす影響

*新井 彩[1]、笹壁 和佳奈[2]、福岡 義之[1] (1. 同志社大学、2. ミューラージャパン株式会社)

[04生-ポ-10]

運動誘発性筋損傷後のアイシングが卵胞期女性の炎症反応に与える影響

*舟喜 晶子[1]、須永 美歌子[2] (1. 帝京科学大学、2. 日本体育大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-02]

女子陸上長距離種目の指導者に向けたコーチング法の検討

女子長距離選手の月経状態に着目して

*黒川 光[1]、杉田 正明[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学　体育学部)

[09コ-ポ-04]

トレーニング日誌の記述情報と心拍変動による自律神経コンディションとの関係

陸上競技女子七種競技者を対象として

*伊藤 明子[1,2]、木越 清信[3] (1. 株式会社セレスポ、2. 筑波大学大学院 人間総合科学学術院、3. 筑波大学)

[09コ-ポ-06]

女子投てき競技における競技力向上に寄与する体力特性の探索的検討

*中西 啄真[1]、佐藤 大典[2]、熊﨑 敏真[3] (1. 大阪体育大学、2. 大阪体育大学スポーツ科学センター、3. 大阪体育大学スポーツ科学部)

[09コ-ポ-08]

女子円盤投選手の円盤初速を高める動作の指導法の検討

*山下 直紀[1]、杉田 正明[2] (1. 日本体育大学大学院体育学研究科、2. 日本体育大学　体育学部)

[09コ-ポ-10]

陸上競技400m走におけるアスリートのタイプを考慮した最適なペース配分の究明とコーチングモデルの構築

*山元 康平[1] (1. 福井工業大学)

[09コ-ポ-12]

パラスポーツコーチの成長に関する体系化への試み

*橋口 泰一[1]、伊藤 雅充[2]、伊佐野 龍司[1]、大嶽 真人[1] (1. 日本大学、2. 日本体育大学)

[09コ-ポ-14]

保守的コーチングからの脱却プロセス

大学部活動若手指導者のコーチングのゆらぎ

*東海林 祐子[1]、加藤 亮介[2]、藤本 元[2]、會田 宏[2] (1. 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科、2. 筑波大学 体育系)

[09コ-ポ-16]

パルクール指導における動向と発生運動学的アプローチの可能性

*中村 真由美[1] (1. 清泉大学短期大学部)

[09コ-ポ-18]

３Dダンス学習支援教材の作成

第２版サンプルコンテンツを用いた試用実験と課題

*鈴木 純[1]、中川 源洋[2] (1. 宮城教育大学、2. 株式会社ニコン)

[09コ-ポ-20]

垂直跳びの沈み込み姿勢における動感

*豊嶋 陵司[1] (1. 愛知淑徳大学)

[09コ-ポ-22]

大学女子ラクロスにおけるシュート精度維持可能なシュート速度域

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

*上北 江里華[1]、吉村 颯馬[1]、山下 直之[2] (1. 京都工芸繊維大学大学院、2. 京都工芸繊維大学)

[09コ-ポ-24]

Velocity-based trainingにおけるエキセントリックおよびコンセントリック局面の速度変化
スクワットジャンプを用いた経時的観察から

*平良 怜南[1]、砂川 力也[1,2] (1. 琉球大学大学院地域共創研究科、2. 琉球大学)

[09コ-ポ-26]

野球の打撃と走塁が組み合わさる運動において素早い切り替えによる高いパフォーマンスを発揮する選手の特徴

*大山 栞爾[1]、前田 明[2] (1. 鹿屋体育大学 大学院、2. 鹿屋体育大学)

[09コ-ポ-28]

大学生テニス選手のボレーにおける下肢の動作特性解析

*勝見 康平[1]、富岡 咲紀[1]、来田 宣幸[1]、幸田 仁志[1] (1. 京都工芸繊維大学大学院 生体行動学研究室)

[09コ-ポ-30]

大学女子一流ソフトテニス選手における切り返し動作の特徴
左右差に着目して

*堀内 健太郎[1]、西山 哲成[1]、篠原 秀典[1]、谷口 耕輔[1]、小黒 喬史[1]、和田 直樹[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

[09コ-ポ-32]

アマチュアボクシング選手の疲労に伴うパンチパフォーマンスの変化

*木本 慎也[1]、前田 明[1] (1. 鹿屋体育大学)

[09コ-ポ-34]

国立スポーツ科学センターにおけるフィットネスチェックの活用実態に関する検証

*野澤 巧[1]、後藤 晴彦[1]、沼津 直樹[1]、松林 武生[1] (1. ハイパフォーマンススポーツセンター国立スポーツ科学センター)

[09コ-ポ-36]

卓球サービスに対するレシーバーの視線の特徴

*浦 侑穂[1]、吉田 和人[2] (1. 順天堂大学大学院 スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学大学院)

[09コ-ポ-38]

同一競技における国内一流選手の体力からみたJOCエリートアカデミー選手の体力の比較

*沼津 直樹[1]、谷村 祐子[1]、山下 大地[1]、小口 貴久[2]、松林 武生[1] (1. 国立スポーツ科学センター、2. 公益財団法人日本オリンピック委員会)

[09コ-ポ-40]

大学生ラグビー選手におけるリバウンドジャンプパフォーマンスに注意方略が及ぼす影響
ポジションの違いに着目して

*古橋 侑季[1]、上岡 優二郎[2]、村冨 浩太朗[3,5]、吉田 拓矢[4]、谷川 聡[5]、前村 公彦[5] (1. 法政大学、2. 浦安D-Rocks、3. 順天堂大学、4. 国立スポーツ科学センター、5. 筑波大学)

[09コ-ポ-42]

大学女子サッカー選手を対象としたスプリントトレーニングの有効性の検討に関する事例的研究
大学女子サッカー選手におけるスプリントトレーニングに関する事例的研究

*温水 鴻介[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

[09コ-ポ-44]

日本における男女ラクロスのルールの違い

*丸山 伸也[1]、大橋 信行[2] (1. 中央大学、2. 帝京大学)

[09コ-ポ-46]

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

バスケットボールのゲームにおける状況認知等の基礎的知識と状況判断能力との関連による速攻場面の類型化

*八板 昭仁、青柳 領

[09コ-ポ-48]

イングランド男女サッカーリーグにおけるプレー様相の比較分析

*鈴木 健介[1] (1. 国際武道大学)

[09コ-ポ-50]

15人制ラグビーの防御局面に関する戦術研究

N大学にける実践的検証

*廣瀬 恒平[1]、髙橋 仁大[2] (1. 尚美学園大学、2. 鹿屋体育大学)

[09コ-ポ-52]

ある大学の剣道部所属学生の心理的傾向に基づく指導の検討

*玉田 理沙子[1] (1. 志學館大学)

[09コ-ポ-54]

女子バスケットボールのメンバーチェンジにおける個別最適な心理状態とその類型

*酒井 佑[1,3]、谷口 ちゆき[2]、雨宮 怜[3]、坂入 洋右[4] (1. 筑波大学　人間総合科学学術院　体育科学学位プログラム、2. 清泉女学院中学高等学校、3. 筑波大学 体育系、4. 常葉大学 教育学部)

[09コ-ポ-56]

JOCエリートアカデミー事業が競技力に及ぼす影響

*小口 貴久[1]、江田 香織[2]、谷村 祐子[3]、沼津 直樹[3]、大越 光介[4]、友利 杏奈[3] (1. 日本オリンピック委員会、2. 東洋大学、3. 国立スポーツ科学センター、4. 順天堂大学スポーツ健康科学部)

[09コ-ポ-58]

大学ラグビーにおける競技人口の推移

関西大学ラグビーリーグを対象として

*青木 敦英[1]、溝畑 潤[2] (1. 芦屋大学、2. 関西学院大学)

[09コ-ポ-60]

日本におけるサッカー女性審判員の男子トップカテゴリー参画に関する一考察

*小泉 朝香[1]、竪石 亜也子[2]、山口 香[3] (1. 株式会社トリデンテ、2. アデコ株式会社、3. 筑波大学)

[09コ-ポ-62]

志向倫理に基づくスポーツ・インテグリティ教材「Coach me」の開発と評価

ジュニアアスリートを対象として

*安永 太地[1]、藤井 基貴[2] (1. 早稲田大学スポーツ科学学術院、2. 静岡大学教育学部)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-02]

Awe and Sport fan pro-environmental behavior

*Kuo Che-Chun[1]、Chen Lung Hung[2] (1. National Taiwan University of Sport、2. National Taiwan Sport University)

[03心-ポ-04]

Leisure, Psychology, Flow, Text Mining, Social Network Analysis, Textom, CONCOR, Digital Culture, Emotion, Experience.

*lee Jaegyun[1]、Oh Chae Yun[3]、Jang Deok JIn[2]、Choi Jae Woo[4]、Hur Seung Eun[5]、Lee Joon Hee[6]、Oh Kyung Rok[7] (1. Kyung Hee University、2. Shin Han University、3. Kyung Hee Univ、4. KyungHee University、5. In Ha University、6. Kyung Hee Uni、7. Kyunghee University)

[03心-ポ-06]

Structural Analysis of Psychological and Mental Keywords in Elite Sports
A Social Big Data Network Approach

*oh chaeyun[1]、Jang DeokJin[2]、Hur Seungeun[3]、Oh KyungRok[1] (1. Kyung Hee Univ.、2. Shin Han Univ.、3. Inha Univ.)

[03心-ポ-08]

走運動の上下反転が勢い知覚に与える影響

*山本 真史[1]、荒木 雅信[1,2] (1. 日本福祉大学、2. 大阪体育大学)

[03心-ポ-10]

個人間の力発揮課題におけるプレッシャーが力の誤差補正に与える影響

*升本 絢也[1]、原 幸輝[2] (1. 広島文化学園大学、2. 広島文化学園大学大学院人間健康学研究科)

[03心-ポ-12]

他者身体との空間的/解剖学的適合性のパフォーマンスへの影響

*成瀬 九美[1] (1. 奈良女子大学生活環境学部)

[03心-ポ-14]

バーチャルリアリティを用いたボール追従時の頭部運動とタイミング予測の関係の検証

*原薗 迪子[1]、渡邉 諒[2,3]、井上 純輝[1]、中本 浩揮[2]、樋口 貴広[1] (1. 東京都立大学大学院、2. 鹿屋体育大学、3. 日本学術振興会特別研究員（PD）)

[03心-ポ-16]

ウエイトリフティングのスナッチにおける挙上重量が視線行動およびバーベルの運動学的特徴に与える影響

*新谷 遼[1]、菊政 俊平[1] (1. 金沢学院大学スポーツ科学部)

[03心-ポ-18]

ラグビー選手の有効視野におけるポジション間の比較

*國部 雅大[1]、近藤 克磨[2]、上野 壮士朗[2]、三枝 徹平[2] (1. 筑波大学、2. 筑波大学大学院)

[03心-ポ-20]

女子大学生の運動物体の予測特性
斜め下方向と水平方向の比較

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

*戸枝 美咲[1]、山﨑 紀春[2]、中島 弘毅[3]、新井 健之[4]、竹市 勝[5] (1. 日本女子大学、2. 上智大学、3. 松本大学、4. 高千穂大学、5. 国士舘大学)

[03心-ポ-22]

スポーツにおける指導行動認知尺度の開発に向けた検討

*村上 弘通[1]、杉山 佳生[2] (1. 九州大学大学院人間環境学府、2. 九州大学大学院人間環境学研究院)

[03心-ポ-24]

自己決定理論による動機づけ及び基本的心理欲求が運動継続の自信に与える影響
批判的思考態度の高低に焦点を当てて

*鳥井 淳貴[1]、中須賀 巧[2] (1. 宝塚医療大学、2. 兵庫教育大学)

[03心-ポ-26]

創作ダンス活動におけるリーダーシップ及び動機づけと集団凝集性との関連

*鈴木 ゆきの[1] (1. 聖徳大学)

[03心-ポ-28]

教師の指導スタイル、運動有能感、劣等コンプレックスが将来の運動実施意欲に及ぼす影響

*山田 佑響[1]、山本 浩二[2]、中須賀 巧[1] (1. 兵庫教育大学大学院、2. 関西福祉大学)

[03心-ポ-30]

Jリーグクラブのユース選手がプロサッカー選手になるために必要な心理的能力および心理的特性
プロサッカー選手を輩出した指導者による視点

*北橋 達朗[1]、寺岡 英晋[1]、高井 秀明[1] (1. 日本体育大学)

[03心-ポ-32]

指導者がチーム内の人間関係に感じる困難さと認知的方略の関係

*木村 駿介[1] (1. 静岡産業大学)

[03心-ポ-34]

自然体験活動において児童がポジティブ感情を経験する場面の探索的検討
環境感受性の個人差に注目して

*矢野 康介[1] (1. 筑波大学)

[03心-ポ-36]

レジリエンスとグリットは退学リスクの予測因子になり得るか
GPAと大学不適応感との関連から

*重藤 誠市郎[1] (1. 新潟医療福祉大学)

[03心-ポ-38]

中学校体育におけるフィードバックの認知と学習成果との因果関係の推定
学年に焦点を当てた検討

*山本 浩二[1]、中須賀 巧[2]、島本 好平[3]、杉山 佳生[4]、尼子 尚公[1] (1. 関西福祉大学、2. 兵庫教育大学、3. 法政大学、4. 九州大学)

[03心-ポ-40]

ポストコロナの身体活動量とレジリエンスの関連性に関する研究
アドベンチャー教育プログラム実施後の比較から

*江川 潤[1]、吉田 雅人[1] (1. 神田外語大学　体育・スポーツセンター)

[03心-ポ-42]

個人競技者の年代別・競技レベル別にみるチームへの帰属意識

*中村 詠美[1]、畝中 智志[1] (1. 北翔大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

[03心-ポ-44]

バーンアウトの発症プロセスにおける競技状態の年代別比較

中学生から社会人までを対象として

*田中 輝海[1] (1. 駿河台大学)

[03心-ポ-46]

大学生の男女共習体育授業に対する意識と男女平等意識および運動有能感との関連

*金沢 翔一[1]、豊田 隼[2] (1. 山梨大学、2. 東京大学・日本学術振興会)

[03心-ポ-48]

ゲーミフィケーションを取り入れた大学教養体育の教育的有効性の実践的検討

運動に対する動機づけと健康意識の変化に着目して

*松浦 佑希[1]、福地 修也[2]、水野 哲也[3] (1. 宇都宮大学　共同教育学部、2. 筑波大学大学院　人間総合科学学術院、3. 東京科学大学大学院 地域・福祉口腔機能管理学分野)

[03心-ポ-50]

Transformational Coaching Scaleの日本語版作成と因子構造の検討

*深見 将志[1] (1. 日本大学商学部)

[03心-ポ-52]

体育授業における運動技能指導に関する教員の認識

運動技能の指導に動作意識は活用されているのか

*永山 貴洋[1]、髙橋 功祐[1] (1. 石巻専修大学)

[03心-ポ-54]

ジュニアユースサッカーチームにおけるチームビルディングの事例的検討

*松井 花織[1]、伊藤 英之[2] (1. 日本体育大学、2. 國學院大學)

[03心-ポ-56]

トラウマを抱えながら生きる

異なる行為形態の対人暴力被害による複雑性PTSDの発現リスク

*豊田 隼[1,2]、尾見 康博[3] (1. 東京大学、2. 日本学術振興会、3. 山梨大学)

[03心-ポ-58]

大学新入生における運動習慣が体力に及ぼす直接効果と特性的自己効力感による間接効果

*今野 亮[1] (1. 明治薬科大学)

[03心-ポ-60]

受傷した女子大学生アスリートが期待していたサポートと予測していなかったサポートに関する一考察

*安田 貢[1] (1. 山梨学院大学スポーツ科学部)

[03心-ポ-62]

野球の審判員の心理的課題と対処行動に関する検討

2024–2025年調査からの報告

*西貝 雅裕[1]、来田 宣幸[2] (1. 太成学院大学高等学校、2. 京都工芸繊維大学)

[03心-ポ-64]

大学生アスリートの身体意識と反芻・省察に関する縦断的調査

多変量潜在成長モデルを用いた検討

*堀 彩夏[1]、高井 秀明[1]、篠原 秀典[1]、齋藤 雅英[1] (1. 日本体育大学)

[03心-ポ-66]

大学生アスリートの認知的方略と心理的能力との特徴

J-PATEAを用いて

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

*藤本 太陽[1] (1. 大阪産業大学)

[03心-ポ-68]

パリ2024大会における村外サポート拠点での心理サポート利用に関する調査

*柄木田 健太[1]、冨永 哲志[1]、大西 壮流[1]、立谷 泰久[1]、本郷 由貴[1] (1. ハイパフォーマンススポーツセンター　国立スポーツ科学センター)

[03心-ポ-70]

サッカーの公式試合に伴うレフェリーの心理的変化

*高井 秀明[1] (1. 日本体育大学)

[03心-ポ-72]

グループでのダーツ実施による心理的・対人的効果
個人戦・チーム戦形式における気分と親密度の変化

*吉武 誠司[1]、酒井 佑[2]、坂入 洋右[3] (1. 目白大学短期大学部、2. 筑波大学人間総合科学学術院、3. 常葉大学教育学部)

[03心-ポ-74]

複数選択肢下での適切な意思決定と正確な運動出力の両立を支える運動制御方略
サッカーのインサイドキックを対象として

*三宅 麟太郎[1]、中本 浩揮[2] (1. 鹿屋体育大学大学院、2. 鹿屋体育大学)

[03心-ポ-76]

フェイント対処時の脳内情報処理
電流源密度推定法を用いた運動準備電位による検討

*木村 勇大[1]、正木 宏明[2] (1. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科、2. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

[03心-ポ-78]

スポーツ版不合理な信念尺度の再検討

*伊藤 英之[1]、土屋 裕睦[2] (1. 國學院大學、2. 大阪体育大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-01]

Toward indicator-driven governance: Hybrid AHP applications in sustainable community sports policies

indicator-driven governance for sustainable community sports policies

*WENBIN LIN[1] (1. Taipei National University of the Arts)

[07発-ポ-02]

児童における身体組成と下肢の運動機能の関連性

*髙橋 功祐[1] (1. 石巻専修大学)

[07発-ポ-03]

幼児の着地衝撃緩衝能に関する予備的研究

*多胡 陽介[1] (1. 聖泉大学)

[07発-ポ-04]

幼児の運動能力と家庭における運動あそびの頻度および内容との関連

走・跳・投運動に着目して

*濱長 勇馬[1]、髙本 恵美[2] (1. 大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科、2. 大阪体育大学)

[07発-ポ-05]

中学野球選手における補食摂取が身体づくりに及ぼす影響

*笹原 千穂子[1] (1. 明星大学)

[07発-ポ-06]

習慣的なトランポリン運動経験と運動調節能力・バランス能力の関連性

*小板橋 京汰[1]、吉藤 恵里子[1]、青木 和浩[2]、河村 剛光[2] (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部)

[07発-ポ-07]

新体力テストからみた中学生の誕生月別体力推移の分析

相対年齢効果に着目して

*木戸 大貴[1]、吉川 鷹吏[1]、佐藤 智樹[1]、大島 秀武[2] (1. 京都教育大学大学院、2. 京都教育大学)

[07発-ポ-08]

中学生における運動嗜好と体力レベルの関係

学年別傾向の検討

*佐藤 智樹[1]、木戸 大貴[1]、吉川 鷹吏[1]、大島 秀武[2] (1. 京都教育大学大学院、2. 京都教育大学)

[07発-ポ-09]

幼児の簡便な運動能力評価ツールSMC-Kidsの結果票作成システムの開発

*香村 恵介[1]、出村 友寛[2]、髙橋 功祐[3]、小椋 優作[4]、松浦 稜[5]、喜屋武 享[5,6]、縄田 亮太[7] (1. 名城大学、2. 仁愛大学、3. 石巻専修大学、4. 中部学院大学短期大学部、5. 琉球大学、6. 京都大学、7. 愛知教育大学)

[07発-ポ-10]

発育発達を考慮した体格指標の検討

*石原 勇次郎[1]、宇野 直士[2]、新美 尚行[3]、松田 晃二郎[4] (1. 岡山理科大学、2. 山陽小野田市立山口東京理科大学、3. 九州国際大学、4. 城西大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

[07発-ポ-11]

高這い姿勢の幼児が手で体を支える運動指導方法の開発

*佐近 慎平[1]、中曽根 裕[2]、中井 聖[3]、金子 勝司[4] (1. 新潟医療福祉大学、2. 仙台青葉学院短期大学、3. 大阪電気通信大学、4. 大阪体育大学)

[07発-ポ-12]

大学生の主観的健康感と体力レベルおよび生活習慣との関係

*吉川 鷹吏[1]、木戸 大貴[1]、佐藤 智樹[1]、大島 秀武[2] (1. 京都教育大学大学院、2. 京都教育大学)

[07発-ポ-13]

トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験に関する大規模調査（1）
単純集計による実態把握

*篠原 俊明[1]、長野 康平[2]、堀内 亮輔[3]、中村 和彦[4] (1. 共栄大学、2. 比治山大学短期大学部、3. 東京女子体育短期大学、4. 山梨大学)

[07発-ポ-14]

トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験に関する大規模調査（3）
性差による検討

*長野 康平[1]、篠原 俊明[2]、堀内 亮輔[3]、中村 和彦[4] (1. 比治山大学短期大学部、2. 共栄大学、3. 東京女子体育短期大学、4. 山梨大学)

[07発-ポ-15]

幼児期における国際交流経験は記憶を通じたSES向上につながるか
南アフリカとの身体活動・体験活動を通して

*山﨑 幸歩[1]、村山 敏夫[1]、樺澤 茉宝[1]、亀岡 雅紀[2] (1. 新潟大学、2. 新潟医療福祉大学)

[07発-ポ-16]

トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験に関する大規模調査（2）
マルチスポーツ経験による検討

*堀内 亮輔[1]、篠原 俊明[2]、長野 康平[3]、中村 和彦[4] (1. 東京女子体育短期大学、2. 共栄大学、3. 比治山大学短期大学部、4. 山梨大学)

[07発-ポ-17]

幼児の日常活動における運動遊びと身体活動動作
保育者調査から

*佐々木 玲子[1]、石沢 順子[2] (1. 慶應義塾大学、2. 白百合女子大学)

[07発-ポ-18]

大学1年生アスリートのキャリア観とキャリア支援の実態 －個別対話の有用性に着目して－
1対1の対話によるキャリア形成支援の可能性を探る －競技生活からワークキャリア・ライフキャリアへの拡張－

*竪石 亜也子[2]、小泉 朝香[3]、山口 香[1] (1. 筑波大学、2. アデコ株式会社、3. 株式会社トリデンテ)

[07発-ポ-19]

小学校教諭養成課程のシラバスから見た運動遊びの位置づけと幼児期との接続に関する教授内容

*吉田 伊津美[1] (1. 東京学芸大学)

[07発-ポ-20]

セーリング競技における帆走に関する宣言的知識の艇種による違いについて

*坂口 英章[1]、青柳 領 (1. 日本経済大学)

[07発-ポ-21]

妙高市産学官連携による幼児の数学的な能力に着目した自然体験型運動あそびプログラムの開発と実践

*樺澤 茉宝[1]、木下 昭二[2]、村山 敏夫[3] (1. 新潟大学大学院、2. ミズノ株式会社、3. 新潟大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

[07発-ポ-22]

５歳児の足圧中心動揺における試行間信頼性

*溝畑 潤[1]、青木 敦英[2]、秋武 寛[3]、三木 伸吾[4]、田路 秀樹[2] (1. 関西学院大学、2. 芦屋大学、3. 西南学院大学、4. 島根大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-01]

Examining the Relationship among Students' Perceived Constraints Support, Efficacy Beliefs, and Physical Activity Intention

Students' Perceived Constraints Support, Efficacy Beliefs, and Physical Activity Intention

*Hsu Weiting[1] (1. National Dong Hwa University)

[03心-ポ-03]

The Influence of Achievement Goal Orientation of University Handball Players on Team Cohesion and Team Performance

The Influence of Achievement Goal Orientation of University Handball Players on Team Cohesion and Team Performance

*JEON MIGYEONG[1]、OH KYUNGROK[1] (1. Kyung Hee Univ.)

[03心-ポ-05]

The Influence of Coaching Styles on Practitioners’ Experiences in Pilates

A Qualitative Phenomenological Approach

*JEONG JIYUN[1]、Oh Kyung rok[1] (1. KyungHee Univ.)

[03心-ポ-07]

観察者の性別の違いが速さと正確さの両方を要求される課題のパフォーマンスに及ぼす影響

男性熟練参加者についての検討

*兄井 彰[1] (1. 福岡教育大学)

[03心-ポ-09]

VRを用いた初心者用硬式テニスサーブのトス練習システムの開発と練習効果

*井上 裕美子[1]、野尻 祐貴[1] (1. 大阪工業大学情報科学部)

[03心-ポ-11]

防御的な文脈情報は防御の選択反応を無意識に促進する

*奥村 基生[1]、木島 章文[2]、横山 慶子[3]、山本 裕二[4] (1. 東京学芸大学、2. 山梨大学、3. 名古屋大学、4. 新潟医療福祉大学)

[03心-ポ-13]

フランカー課題における色の違いが選択的注意に与える影響

*坂部 崇政[1]、高井 秀明[2] (1. 京都教育大学、2. 日本体育大学)

[03心-ポ-15]

タイムプレッシャーの強度が精神的負担に及ぼす影響

スタンバーグ課題による検討

*大久保 瞳[1]、高井 秀明[1] (1. 日本体育大学)

[03心-ポ-17]

運動学習の“非一様地形”とその安定・発展を読み解く

筆跡図形の部分構造と軌道エントロピーの関係

*村上 宏樹[1]、山田 憲政[2] (1. 金城大学、2. 中京大学)

[03心-ポ-19]

文脈情報によるバイアスが側方へのステップ反応に及ぼす影響

左右の刺激呈示比率に着目して

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

*三枝 徹平[1]、上野 壮士朗[1]、近藤 克磨[1]、國部 雅大[2] (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学体育系)

[03心-ポ-21]

体育授業における原因帰属と自己調整学習との関係における自己効力感の調整変数としての機能

*須﨑 康臣[1]、久保 研二[2]、田中 輝海[3] (1. 島根大学、2. 広島大学、3. 駿河台大学)

[03心-ポ-23]

運動へのストレスコーピング、基本的心理欲求、今後の運動意欲の関係

通信制高校に在籍する生徒の好意的・忌避的態度に着目して

*田中 将也[1]、中須賀 巧[1] (1. 兵庫教育大学)

[03心-ポ-25]

高校男子ラグビー選手における身体不満と出場機会が心理的パフォーマンスに対するセルフ・エフィカシーに及ぼす影響

*深見 柊真[1]、高井 秀明[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

[03心-ポ-27]

所属ステレオタイプと自己ベスト更新率の関係

*幾留 沙智[1]、渡邉 諒[1,2]、大塚 理瑚[3]、三島 未琴[3]、中本 浩揮[1] (1. 鹿屋体育大学、2. 日本学術振興会特別研究員 （ＰＤ）、3. 鹿屋体育大学大学院)

[03心-ポ-29]

高校野球選手における心理的能力に関する特徴

チーム内地位及びチーム最高成績からの検討

*大石 達也[1]、高井 秀明[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

[03心-ポ-31]

個人の気質と熟考との関連に対する認知的柔軟性の媒介効果

*髙橋 由衣[1]、高井 秀明[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

[03心-ポ-33]

スポーツドラマチック体験とレジリエンス要因の関連

*堤 愛美子[1]、杉山 佳生[1] (1. 九州大学大学院)

[03心-ポ-35]

目標達成を目指す大学生アスリートにおける個人特性に応じた認知的方略選択の重要性

*大塚 理瑚[1]、幾留 沙智[2]、渡邉 諒[2,3]、中本 浩揮[2] (1. 鹿屋体育大学大学院、2. 鹿屋体育大学、3. 日本学術振興会特別研究員（PD）)

[03心-ポ-37]

スポーツ競技における失敗の価値観尺度の信頼性・妥当性の検討

*柴原 健太郎[1] (1. 北九州市立大学)

[03心-ポ-39]

競技スポーツ領域における心理的安全性研究の今とこれから

スコーピング・レビュー

*松原 旭飛[1]、人羅 美帆[2]、高井 秀明[3] (1. 日本体育大学大学院、2. 医療法人横浜未来ヘルスケアシステム、3. 日本体育大学)

[03心-ポ-41]

スポーツ競技者におけるライフスキルの構成概念の検討

体育会柔道部学生を対象として

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

*藤島 将太[1]、西田 順一[2] (1. 近畿大学大学院、2. 近畿大学)

[03心-ポ-43]

大学体育授業における主観的恩恵評価とライフスキル獲得との関係

*藪中 佑樹[1]、早川 琢也[2]、成相 美紀[2]、前田 奎[2]、田中 奏一[2]、高橋 啓悟[3]、金田 和輝[2]、銘苅 淳[4]、小俣 貴洋[2]、細野 裕希[2]、梶田 和宏[2]、新野 弘美[2]、濱中 良[2] (1. 龍谷大学経営学部、2. 京都先端科学大学健康医療学部、3. 徳島大学大学院社会産業理工学研究部、4. アルバモス大阪)

[03心-ポ-45]

3歳から8歳児の身体活動と社会情動的スキルとの関連

身体活動の頻度、屋外活動時間及び仲間の人数

*松尾 安優子[1]、川田 裕次郎[1,2,4]、染谷 由希[1,2,6]、中村 絵美[3,6]、木藤 友規[1,2]、松井 公宏[2,5]、松永 美咲[6]、鈴木 宏哉[1,2,4,6] (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部、3. 順天堂大学保健医療学部、4. 順天堂大学スポーツ健康医科学研究所、5. 横浜市立大学附属病院、6. 順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構)

[03心-ポ-47]

陸上短距離選手のスタート前におけるルーティンのパターンと効果について

*鈴木 龍馬[1] (1. 新潟医療福祉大学)

[03心-ポ-49]

男性柔道指導者が指導の考え方を獲得していくプロセスに関する予備的検討

*柴田 大地[1]、高井 秀明[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

[03心-ポ-51]

「イップスの操作的定義」を基準とした野球競技におけるイップスの実態調査

*池田 和司[1]、渡邊 裕也[1]、甲斐 裕一[1] (1. 日本経済大学)

[03心-ポ-53]

男子大学生ウエイトリフティング選手における心理的競技能力と競技不安の相関関係

*鶴田 幸大[1]、時田 晃佑[1]、中澤 史[2] (1. 法政大学大学院スポーツ健康学研究科、2. 法政大学)

[03心-ポ-55]

男子大学生における首尾一貫感覚と運動に関する意思決定バランスとの関連

*園部 豊[1]、平山 浩輔[1] (1. 帝京平成大学)

[03心-ポ-57]

ダンスの創造的プロセスが不安および抑うつに及ぼす影響

即興創作ダンスと模倣ダンスの比較

*酒井 美鳥[1]、清河 幸子[2]、溝川 藍[1] (1. 名古屋大学、2. 東京大学)

[03心-ポ-59]

2型糖尿病患者の血糖管理と自己効力感がレジリエンスに与える影響

*西垣 景太[1] (1. 東海大学　健康学部)

[03心-ポ-61]

アスリートにおける熱望・警戒イメージ尺度の作成

*相川 聖[1]、高井 秀明[2]、平山 浩輔[3]、三村 覚[2]、齋藤 雅英[2] (1. 関西学院大学、2. 日本体育大学、3. 帝京平成大学)

[03心-ポ-63]

パリ2024大会におけるアスリートの精神的健康とSNS上の誹謗中傷との関連の検討

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

*本郷 由貴[1]、冨永 哲志[1]、大西 壮流[1]、立谷 泰久[1]、柄木田 健太[1] (1. ハイパフォーマンススポーツセンター　国立スポーツ科学センター)

[03心-ポ-65]

デフアスリートへの心理的支援が心理的能力に及ぼす影響
JISS競技心理検査による検討

*前田 凌汰[1,2]、後藤 賢二[1]、根本 玲[1]、幸田 剣[1]、土屋 裕睦[2] (1. 和歌山県立医科大学 みらい医療推進センター げんき開発研究所、2. 大阪体育大学大学院)

[03心-ポ-67]

スポーツ指導者がコーチング場面で経験する心理的葛藤の質的検討
大阪府リーグ社会人サッカー監督を対象として

*筒井 香[1]、伊藤 瑞希[2] (1. 株式会社BorderLeSS、2. OsakaCitySC)

[03心-ポ-69]

競技的身体性は描画に表れるか：描画判別課題による探索的研究
風景構成法を用いて

*伊藤 友記[1]、森 司朗[2] (1. 鹿屋体育大学大学院、2. 鹿屋体育大学)

[03心-ポ-71]

スポーツと人格形成に関する意識調査
体育専攻学生を対象に

*佐々木 史之[1] (1. 環太平洋大学)

[03心-ポ-73]

サッカーのPK戦における意思決定に関する質的研究

*大嶋 拓[1]、関矢 寛史[2] (1. 広島大学大学院、2. 広島大学)

[03心-ポ-75]

ハンドボール競技における試合のよい“流れ”を引き寄せるオフェンスプレー
H大学女子チームの3年間の地方１部リーグ戦による事例研究

*板谷 厚[1]、上野 壮士朗[2]、能代 時矢[2]、高瀬 淳也[1] (1. 北海道教育大学、2. 筑波大学)

[03心-ポ-77]

インセンティブが投球課題時のリスクテイキングに及ぼす影響と関連する心理特性の検討

*上野 壮士朗[1]、近藤 克磨[1]、三枝 徹平[1]、國部 雅大[2] (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学体育系)

[03心-ポ-79]

視覚運動刺激が自己運動知覚に与える影響
傾斜が速度知覚に与える影響に関して

*森 司朗[1] (1. 鹿屋体育大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-01] Examining the Relationship among Students' Perceived Constraints Support, Efficacy Beliefs, and Physical Activity Intention

Students' Perceived Constraints Support, Efficacy Beliefs, and Physical Activity Intention

*Hsu Weiting[1] (1. National Dong Hwa University)

Purpose: This study examined the relationship between students’ perceived constraints support in physical education and their intention to engage in physical activity, utilizing the constraints-led approach and social cognitive theory. The mediating role of tripartite efficacy beliefs (i.e., self-efficacy, other-efficacy, and relation-inferred self-efficacy) was examined. Methods: A total of 325 high school students participated in the study. Structural equation modeling and bootstrapping analyses were employed to analyze the data. Results: The structural equation modeling indicated that perceived constraints support directly influenced physical activity intention, both directly and indirectly through efficacy beliefs. Among the efficacy beliefs, self-efficacy emerged as the most significant predictor of physical activity intention. Conclusions: The findings emphasize the value of constraints-led approached teaching strategies that aim to boost self-efficacy, foster peer trust, and enhance perceived teacher support to effectively motivate students toward physical activity. By linking perceived constraints support to physical activity intention through efficacy beliefs, this study extends the application of constraints-led approach beyond motor skill development to include psychosocial outcomes. Future research should investigate additional psychological factors and adopt longitudinal designs to examine sustained engagement in physical activity over time.

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-03] The Influence of Achievement Goal Orientation of University Handball Players on Team Cohesion and Team Performance

The Influence of Achievement Goal Orientation of University Handball Players on Team Cohesion and Team Performance

*JEON MIGYEONG[1]、OH KYUNGROK[1] (1. Kyung Hee Univ.)

The purpose of this study is to provide insights for enhancing performance by examining the influence of achievement goal orientation of university handball players on team cohesion and performance. Data were collected from 140 players from March to April 2025, using convenience sampling. Statistical analyses conducted with SPSS 29.0 included frequency analysis, factor analysis, reliability analysis, t-tests, one-way ANOVA, correlation analysis, and multiple regression analysis. Key findings are: First, significant differences in achievement goal orientation were observed based on playing experience, while team cohesion varied significantly with gender, grade level, and playing experience. Team performance differences were noted based on grade level and playing experience. Second, task goal orientation positively influenced individual-social, group-social, individual-task, and group-task cohesion. Third, task goal orientation was found to positively impact athletic performance, teamwork, and game performance. Fourth, team cohesion positively affected athletic performance, with individual-social and individual-task cohesion influencing it. All cohesion types positively influenced teamwork, and individual-task and group-task cohesion enhanced game performance. Individual-task cohesion also positively impacted competitive performance. This study offers foundational data on achievement goal orientation’s role in improving team cohesion and performance, aiding players in competitive environments. By leveraging these insights, the study aims to enhance team dynamics and performance, contributing to improved game results on the field.

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-05] The Influence of Coaching Styles on Practitioners' Experiences in Pilates

A Qualitative Phenomenological Approach

*JEONG JIYUN[1]、Oh Kyung rok[1] (1. KyungHee Univ.)

Purpose: The purpose of this study was to explore how different coaching styles affect the lived experiences of Pilates practitioners. By applying a phenomenological approach, this study sought to understand how verbal and non-verbal coaching behaviors shape practitioners' physical, emotional, and cognitive engagement during Pilates sessions.
Method: A total of eight adult Pilates practitioners with more than six months of training experience participated in this study. Participants were selected through purposive sampling to ensure diverse experiences with different coaching styles (directive, supportive, and inquiry-based). Data were collected through in-depth semi-structured interviews and analyzed using Giorgi's descriptive phenomenological method to extract essential themes from participants' narratives.
Result: First, directive coaching provided clarity and a sense of safety in movement performance but had negative effects on autonomy and motivation.Second, inquiry-based coaching enhanced self-awareness and active engagement, promoting greater cognitive and emotional immersion.Third, non-verbal elements (e.g., tone of voice, eye contact, and physical presence) significantly influenced trust, comfort, and satisfaction with the session.Fourth, participants reported that coaching style influenced their motivation, movement confidence, and body awareness during practice.
Conclusion: These findings highlight the importance of coaching styles in shaping the qualitative experience of Pilates practitioners. Integrating coaching psychology into Pilates instruction can improve motivation, self-efficacy, and long-term engagement. This study contributes to the development of more participant-centered instructional models in mind-body exercise settings.
Key words: Pilates, Coaching Style, Phenomenology, Lived Experience, Exercise Motivation, Body Awareness

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-07] 観察者の性別の違いが速さと正確さの両方を要求される課題のパフォーマンスに及ぼす影響

男性熟練参加者についての検討

*兄井 彰[1] (1. 福岡教育大学)

運動を行う際に観察者がいると、パフォーマンスが向上する場合は社会的促進、低下する場合は社会的抑制と呼ばれる。また、観察者の性別によってパフォーマンスへの影響が異なると考えられている。さらに、参加者の運動課題に対する熟練度によっても、観察者の影響は変化する可能性がある。本研究では、課題に熟練した男性参加者を対象に、観察者の性別が速さと正確さの両方が求められる課題のパフォーマンスに及ぼす影響を検討した。男性の熟練参加者24名に対し、できるだけ速く、かつ正確にバスケットボールのフリースローを10回連続で行うよう指示した。実験は異なる日に3条件（観察者なし、男性観察者あり、女性観察者あり）で実施し、観察者はいずれも参加者と面識のない2名で、マスクとトレーニングウェアを着用していた。結果、10回の成功回数および所要時間に条件間で有意差は見られず、観察者の有無や性別によるパフォーマンスへの影響は確認されなかった。一方、課題終了後に実施した動機づけ（視覚的アナログ尺度：VAS）および集中度（5段階尺度）の調査では、観察者がいた条件の方がいずれも高かった。以上より、観察者の有無や性別はパフォーマンスに直接的な影響を与えなかったが、動機づけと集中度の両方が高まる可能性が示唆された。先行研究では、未熟練の女性および男性参加者の両方で観察者のパフォーマンスに及ぼす影響が確認されており、観察者の効果は課題の熟練度により異なる可能性がある。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-09] VRを用いた初心者用硬式テニスサーブのトス練習システムの開発と練習効果

*井上 裕美子[1]、野尻 祐貴[1] (1. 大阪工業大学情報科学部)

初心者を対象としたテニスの練習は、ストローク、ボレー、サーブの3つに大きく分けられる。本研究では、試合に必須となるサーブに着目し、サーブの中でも、不出来が大きな割合を占めるトス上げを取り上げた。環境に関わらず練習できるように、VRを用いたトス練習システムを開発し、その開発したシステムを利用した効果について検証した。
開発したシステムの構成は、制御用PC、ヘッドマウントディスプレイ、コントローラからなる。サーブのトス位置を安定させるため、VR空間内のトスの頂点に「頂点目標」を黄色い球体で示し、ラケットとボールが接する位置に「接点目標」として白い球体を設置した。体験者には、この2つの目標を通るようにトスを上げる練習をしてもらうシステムとした。また、「補助」として、トスを上げ始める「開始点」と手を離す「リリース点」を設置した。「補助線」として、頂点目標、接点目標、開始点、リリース点を結ぶ直線を提示する機能も追加した。
実験参加者は、男子学生14名とした。練習コンテンツを補助ありで行う「補助あり群」と補助なしで行う「補助なし群」の2群にランダムに分けて実験を行った。実験の手順は、安静、プレテスト、練習①、練習②、練習③、ポストテスト、安静の順に行った。プレテスト、ポストテストでは、「頂点目標」、「接点目標」および「補助」を提示しないで行った。
両群とも、プレテストと比較すると、練習を重ねると頂点目標に達する数が増加し、2要因分散分析の結果、テスト練習間の主効果に有意差が示された。接点目標に達した数については、頂点目標と同様の傾向が示された。多重比較では、補助なし群のプレテストと練習3のみ、有意差が示された。どちらかといえば、補助なし群の方が、練習効果が高い傾向が示された。つまり、目標がシンプルに示された方が、効果が出やすい傾向が示された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-11] 防御的な文脈情報は防御の選択反応を無意識に促進する

*奥村 基生[1]、木島 章文[2]、横山 慶子[3]、山本 裕二[4] (1. 東京学芸大学、2. 山梨大学、3. 名古屋大学、4. 新潟医療福祉大学)

対人スポーツの知覚－反応実験では，投げる・打つなどの単一の動作の動画を参加者に観察させて選択反応の精度を測定することが多い．しかし，実際のスポーツでは，状況が攻撃的・防御的であるかどうかの文脈情報に合わせて選択反応することが多い．すなわち，スポーツの攻防の選択反応は文脈依存的であるが，実験では文脈が取り入れられることが少ない．他方，実験心理学に目を向けると，意味の重複度や関連性が高いプライムの呈示によって，ターゲット刺激の処理が促進されることが知られている（犬→猫，医者→病院）．それでは，スポーツの知覚－反応実験において，参加者に防御的な文脈情報を呈示した後に，防御の選択反応を求めると，文脈情報はプライム刺激としてはたらき，反応の時間が短くなり正確性が高まるのであろうか．対人スポーツでは，選択反応の時間や正確性のわずかな相違がパフォーマンスの成否に大きな影響を与えるため，反応を促進あるいは阻害する要因を明確にすることに高い価値がある．本研究では，剣道の間合いの詰め引きから打突までの文脈を利用した．剣道では，自分が間合い詰めた後は打突する頻度が高くなり，相手が間合いを詰めてきた後は打突される頻度が高くなる．そこで，1）自分が間合いを詰める攻撃的な文脈情報か，2）相手が間合いを詰めてくる防御的な文脈情報を呈示した後に，相手が（1）面か（2）小手を空けたら打突し，相手が（3）面か（4）小手を打突してきたら防御する4選択の反応課題を実施した．参加者は動画をモニタ上で観察し，4つの選択肢に対してボタンを押して素早く正確に反応した．分析の結果，防御的な文脈情報の呈示後は攻撃よりも防御の反応が早くなった．また，攻撃的な文脈と比較して防御的な文脈情報の呈示後の方が防御の反応が早くなった．つまり，防御的な文脈情報は，防御に関わる脳部位を活性化させ選択反応を促進すると考えられる．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-13] フランカー課題における色の違いが選択的注意に与える影響

*坂部 崇政[1]、高井 秀明[2] (1. 京都教育大学、2. 日本体育大学)

フランカー課題は、選択的注意や抑制機能を測定する代表的な実験パラダイムである。フランカー課題では、中央の標的刺激と周辺の妨害刺激が同じ場合（一致試行）に比べて、異なる場合（不一致試）において反応時間が遅延することが知られている。スポーツ場面においても、不要な情報の処理はパフォーマンスの阻害要因となりうるが、その際にユニフォームや用具、コートなどの色の要素が情報処理に影響を与える可能性がある。そこで本研究では、フランカー課題における色の操作が選択的注意に与える影響について検討した。実験参加者は、体育学専攻の大学生10名であった。フランカー課題では、白色背景のディスプレイ中央に5つの記号刺激（「＜」または「＞」）が横一列に呈示された。色の操作では、すべて同じ色で表示される「黒一色条件」「赤一色条件」「青一色条件」、標的刺激が赤で妨害刺激が青の「標的赤条件」、標的刺激が青で妨害刺激が赤の「標的青条件」の5条件を設定した。課題の試行数は、各条件60試行の計300試行とし、終了後には刺激の視認性についてVASで記入させた。実験参加者の課題は、標的刺激が「＞」の場合は右ボタン、「＜」の場合は左ボタンを素早く押すことであった。その結果、視認性は標的刺激と妨害刺激の色が異なる2条件で高く、特に標的赤条件は赤一色および青一色条件よりも有意に高値を示した。一般的に白色背景に対しては、反対色である黒一色条件の視認性が高いと予想されるが、フランカー課題ではいかに妨害刺激に干渉されないかが重要であるため、標的刺激が強調されやすい標的赤条件の視認性が高まったものと推察される。同様に、標的赤条件および標的青条件の反応時間は、わずかではあるが他の条件よりも短く、前述の視認性が影響したといえる。これらの結果から、色操作による標的刺激の視覚的特異性が選択的注意を促進させる可能性が示された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-15] タイムプレッシャーの強度が精神的負担に及ぼす影響
スタンバーグ課題による検討

*大久保 瞳[1]、高井 秀明[1] (1. 日本体育大学)

競技者には時間的制約がある状況下で、最適な意思決定が求められる。とりわけ、タイムプレッシャー（TP）は、競技者の精神的負担を増大させ、パフォーマンス発揮を阻害する要因の一つとされている。しかしながら、TPと競技者の精神的負担に関する先行研究はあまり見受けられない。そこで本研究においては、TPの強度が精神的負担に及ぼす影響をスタンバーグ課題から検討した。実験参加者は、体育系のA大学に所属する学生23名（男性12名、女性11名）であった。課題にはTPの強度を操作したスタンバーグ課題を用いた。スタンバーグ課題では、3、5、7文字の大文字アルファベットからなる無意味な文字列を記憶し、その後に呈示される1文字の小文字のアルファベットが記憶した文字列に含まれていたか否かによって左右のボタンを押し分けるよう求めた。TPの強度は400、500、600、700、800 msとし、各条件64試行実施した。また、精神的負担を評価するために日本語版NASA－TLX（芳賀・水上、1996）を記入させた。その結果、フラストレーションの得点において、TPの強度が500、600、700、800 msでは7文字条件は3文字条件より有意に高い値を示したが、TPの強度が400 msでは有意な差は認められなかった。また、3文字条件におけるTPの強度が400 msは700、800 msより、5文字条件におけるTPの強度が400 msは600、700、800 msより有意に高い値を示したが、7文字条件では有意な差は認められなかった。以上のことから、TPの強度が高い場合には記憶負荷（文字数）による影響を受けないこと、そして、記憶負荷が高い場合にはTPの強度による影響を受けないことが示唆された。よって、TPの強度と記憶負荷の間には、一方の負荷が高まることで他方の負荷が抑制されることが明らかとなった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-17] 運動学習の“非一様地形”とその安定・発展を読み解く
筆跡図形の部分構造と軌道エントロピーの関係

*村上 宏樹[1]、山田 憲政[2] (1. 金城大学、2. 中京大学)

鏡映描写課題は、運動学習における視覚–運動変換の適応過程を検討する代表的課題であり、運動時間や誤差数などの従来指標に加え、近年ではエントロピー指標を用いた動作の複雑性・安定性の分析が注目されている。筆者らの先行研究（Murakami & Yamada, 2025）では、鏡映描写課題を12セグメントに分割し、セグメントごとの軌道のエントロピーを算出し、その変化を分析することで、学習過程における“つまずき”の分布と制御戦略の変化を可視化した。その結果、運動学習は全体的に一様に進むのではなく、局所的な困難を乗り越えながら部分的に安定・発展していく段階的プロセスであることが示唆された。本研究ではこの知見を発展させ、辺の数と長さを固定しつつ、角度構成を操作した複数の図形を用いて、運動方向や角度の違いがエントロピーに与える影響を定量的に検討する。また、各セグメントの方向ベクトルに基づく独自の難易度スコアを導入し、それとエントロピー値の変動との関係を分析する。本研究は、視覚–運動変換における運動困難性の空間的構造をエントロピー指標によって可視化し、運動学習が空間的、段階的に安定・発展していく過程であることを明らかにすることを目的とする。このような非一様な学習過程の理解は、これまでプラトー現象など時間的停滞として捉えられてきた運動学習の非線形性を、空間的構造の観点から補完・拡張するものであり、効果的な課題設計や個別化された指導法の構築に資する可能性がある。詳細な分析結果およびモデルの妥当性については、当日の発表にて報告する予定である。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-19] 文脈情報によるバイアスが側方へのステップ反応に及ぼす影響
左右の刺激呈示比率に着目して

*三枝 徹平[1]、上野 壮士朗[1]、近藤 克磨[1]、國部 雅大[2] (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学体育系)

常に状況が変化するスポーツ競技において、選手は多くの情報を処理しながら判断・行動している。中でも相手の動きを予測して判断する能力は重要であり、選手はプレー傾向などの文脈情報をもとに視覚情報を活用している。こうした情報は予測を助ける一方、過度なバイアスは判断精度の低下を招く可能性がある。しかし、実際の動作における文脈情報の影響は十分に検討されていない。そこで本研究では、文脈情報に基づく予測が反応動作に及ぼす影響を検討した。

実験は一般成人10名(平均年齢23.2, SD=2.0歳)を対象に行った。参加者は2台のWii Balance Boardに乗り、左右に呈示される光刺激に対して1歩ステップする課題に取り組んだ。刺激の呈示比率は25:75、50:50、75:25の3条件（各24試行）、0.2秒後に方向が切り替わるフェイントの有無による2ブロックからなる計6条件を設定した。フェイントありでは各ブロックの半数がフェイント試行であった。反応は片足の荷重が体重の1%未満になった時点とし、刺激前の平均荷重の120%以上を反応側脚に示した試行をDeceived Trialと定義した。荷重分配の非対称性はSI（Symmetry Index）で評価した。

結果として、反応時間はフェイントにより遅延した（p=.025）。正反応率はフェイント（p=.002）、25%側への呈示（p=.017）により低下し、特に25%側でのフェイント試行での低下が顕著であった（p=.012）。Deceived Trialの割合はフェイントで増加した（p=.007）。SIには有意な影響はなかった。

以上の結果から、予測に過度なバイアスがかかることはパフォーマンスの低下につながる可能性が示唆された。また、文脈情報はSIには影響を及ぼさなかった。バイアスが動作におけるどの部分に表出されるかについてさらなる検討が必要であると考えられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-21] 体育授業における原因帰属と自己調整学習との関係における自己効力感の調整変数としての機能

*須﨑 康臣[1]、久保 研二[2]、田中 輝海[3] (1. 島根大学、2. 広島大学、3. 駿河台大学)

本研究は，中学校体育授業における成功時と失敗時における原因帰属が自己調整学習方略の使用に及ぼす関係と，この関係性において自己効力感が調整変数として寄与する効果について検討することを目的とした．調査は，１つの中学校の１年生から3年生を対象に行い，調査協力が得られた423名を分析対象とした．調査内容は，体育授業における成功時と失敗時における原因帰属尺度，自己調整学習方略尺度，自己効力感尺度であった．原因帰属は，能力，努力，運，種目，先生，相手，調子の7つの原因に対して，成功時と失敗時にどの程度帰属するかについて回答を求めた．自己調整学習方略は，目標設定，動機づけ調整，試行錯誤，模倣，協同，自己省察の使用の頻度について回答を求めた．自己効力感は，体育授業における学習課題遂行の自信について回答を求めた．分析は，階層的重回帰分析を行い，成功時と失敗時における原因帰属，自己効力感，原因帰属と自己効力感の交互作用項を独立変数とし，従属変数は自己調整学習方略とした．なお，ステップ1では成功時と失敗時における原因帰属と自己効力感を投入し，ステップ2では原因帰属と自己効力感の交互作用項を投入した．分析の結果，交互作用が有意であったため，単純傾斜の検定を行った．その結果，自己効力感が低い生徒と高い生徒は，成功時の原因帰属が自己調整学習方略の使用を促すことが示された．また，自己効力感が低い生徒は，失敗時の原因帰属が自己調整学習方略の使用を抑制していた．これらのことから，成功時と失敗時の原因帰属が自己調整学習方略の使用に及ぼす関係に対して，自己効力感は調整変数としてこの関係に寄与することが確かめられた．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-23] 運動へのストレスコーピング、基本的心理欲求、今後の運動意欲の関係

通信制高校に在籍する生徒の好意的・忌避的態度に着目して

*田中 将也[1]、中須賀 巧[1] (1. 兵庫教育大学)

本研究では、通信制高校の生徒を対象に、運動に対するストレス対処行動、基本的心理欲求、今後の運動意欲の関係について検討することを目的とした。また生徒の運動に対する好意的・忌避的態度ごとにそれらの関係に違いがあるのかについても検討することとした。通信制高校に在籍する６５名を対象に質問紙調査を実施した。使用尺度は、質問紙調査には、ストレスコーピング（尾関、１９９３）および基本的心理欲求（西村・櫻井、２０１１）を通信制高校の生徒にとって理解しやすい表現に一部修正を加えたうえで用いた。また、今後の運動意欲を測定する項目（高校卒業後も自主的に運動やスポーツをしたいか）と運動への好意的・忌避的態度を群分けする項目（今の自分は運動・スポーツが好きか）も使用した。本研究の仮説モデルとして、独立変数にストレスコーピングの３下位尺度（問題焦点型、情動焦点型、回避・逃避型、）を、媒介変数に基本的心理欲求の３下位尺度（自律性、有能さ、関係性）を，そして従属変数に今後の運動意欲に関する項目を付置したモデルを設定した。まず、この仮説モデルに関して有効回答者４８名を用いて重回帰分析を行った。その結果、情動焦点型が基本的心理欲求の３下位尺度すべてに有意な正の影響を示した。さらに自律性と有能さは将来の運動意欲に正の影響を示した。続いて、運動に対する好意的態度群（好き・やや好きと回答した２２名）と忌避的態度群（嫌い・やや嫌いと回答した２６名）の群ごとに重回帰分析を実施した。その結果、好意的態度群は情動焦点型が関係性と有能さに有意な正の影響を示し、さらに有能さが将来の運動意欲に正の影響を示した。一方，忌避的態度群は回避・逃避型が関係性と有能さに有意な正の影響を示し、また自律性が将来の運動意欲に正の影響を示した。以上の結果は、通信制高校に在籍する生徒（好意的態度群と忌避的態度群）の一つの特徴として確認された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-25] 高校男子ラグビー選手における身体不満と出場機会が心理的パフォーマンスに対するセルフ・エフィカシーに及ぼす影響

*深見 柊真[1]、高井 秀明[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

ラグビーでは、身体的特徴が競技パフォーマンスを規定する1つの要因として考えられている（Sedeaud et al., 2012; Quarrie & Hopkins, 2007）。しかし、身体不満が心理的パフォーマンスに対するセルフ・エフィカシー（心理的パフォーマンスSE）に及ぼす影響については未だ検討されていない。本研究では、高校男子ラグビー選手を対象に、身体不満および出場機会との交互作用を含めた心理的パフォーマンスSEへの影響を検討した。身体不満の測定には、Body Image Matrix of Thinness and Muscularity–Male Bodies（Arkenau et al., 2020）の尺度を用いた。本尺度は、8×8の格子に配置された64体の3次元の男性の身体図から構成され、縦軸に筋、横軸に体脂肪を段階的に増加させた2次元の体型評価尺度である。研究対象者には自己像と理想像を選択させ、両者の差を身体不満得点として算出した。なお、回答内容に不備があった19名を除いた高校男子ラグビー選手220名（16.38±0.64歳）を分析対象者とした。心理的パフォーマンスSE尺度（荒井ほか、2007）を従属変数とし、筋・体脂肪不満、出場機会、およびその交互作用を独立変数としてロバスト回帰分析を行った。すべての独立変数は中心化し、交互作用が有意な場合は単純傾斜分析を実施した。その結果、回帰式は有意であり、出場機会の主効果が示された。また、筋不満と出場機会の有意な交互作用も認められた。単純傾斜分析により、非レギュラー群では筋不満得点が高いほど、心理的パフォーマンスSE得点が有意に低下する傾向が示されたが、レギュラー群では有意な関連がみられなかった。よって、競技機会が限られる選手には、筋不満への対策が心理的パフォーマンスSEの維持・向上に貢献できる可能性がある。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-27] 所属ステレオタイプと自己ベスト更新率の関係

*幾留 沙智[1]、渡邉 諒[1,2]、大塚 理瑚[3]、三島 未琴[3]、中本 浩揮[1] (1. 鹿屋体育大学、2. 日本学術振興会特別研究員 （ＰＤ）、3. 鹿屋体育大学大学院)

「女性は数学が苦手」というステレオタイプ (以下，STと略す) の喚起は，その後の数学の成績を低下させるという報告がある．スポーツにおいても「我々のチームは弱小である」といった様々なSTが存在するが，スポーツ固有のSTと競技成績との関係は不明である．この検討は，自己ベスト更新を促進又は抑制する心理的要因の解明という重要な意義を有するといえる．そこで本研究では，所属チームの優劣についてのSTが自己ベスト更新率に関係するかどうか検討することを目的とした．対象は，体育系大学に所属し，記録型種目を専門とする大学生競技者50名のうち後述する42名とした．測定項目は，潜在及び顕在ST，大学入学後の自己ベスト更新率の3つであった．潜在STの測定には，該当するキーワードを所属チーム―ライバルチーム，又は，優れた―劣った等に素早く振り分ける潜在連合テストを用いた．しかし，横断調査では，自己ベスト更新率が潜在STに影響した可能性を否定できない．そこで，大学入学時の所属チームの優劣について回答を求めるVASを用いて顕在STも測定した．自己ベスト更新以前の顕在STが負である (所属チームは劣っていたと顕在的に認識している) 者のみを対象とすることで，自己ベスト更新という事実が潜在STを正方向に歪めた可能性を出来る限り排除することを試みた．結果として，自己ベスト更新以前の顕在STが負の者のうち，潜在STが正である (所属チームは優れていると現在潜在的に認識している) 者は，負である (所属チームは劣っていると認識している) 者と比較して，平均自己ベスト更新率が有意に高い傾向が示された ($t(40) = 1.861$, $p = .070$, $d = .57$)．以上より，過去に負の顕在STを有していた者の潜在STが正方向に変容することが，自己ベスト更新の可能性を高める心理的要因である可能性が示唆された．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-29] 高校野球選手における心理的能力に関する特徴
チーム内地位及びチーム最高成績からの検討

*大石 達也[1]、高井 秀明[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

本研究の目的は、高校野球の男子選手における心理的能力に関する特徴をチーム内地位（レギュラー、準レギュラー、非レギュラー）と過去5年のチーム最高成績（全国大会出場、県大会ベスト８以上、県大会ベスト8未満）から検討することであった。調査対象者は高校の硬式野球部に所属する1・2年生の男子選手335名であった。なお、調査内容の回答に不備があった33名を除いて302名を分析対象者とした。調査対象者には、JISS競技心理検査（立谷ほか、2020）に回答させた。分析としてはチーム内地位、過去5年のチーム最高成績を独立変数、JISS競技心理検査の因子の得点を従属変数とした対応のない一要因の分散分析を行った。そして、有意な主効果がみられた場合は、TukeyのHSD法による多重比較を行った。その結果、レギュラー選手は非レギュラー選手より、自己コントロール（$p=.001$、$\eta^2=.04$）、集中力（$p=.03$、$\eta^2=.02$）、イメージ（$p=.001$、$\eta^2=.05$）、自信（$p<.001$、$\eta^2=.07$）、一貫性（$p<.001$、$\eta^2=.05$）、自己分析力（$p=.009$、$\eta^2=.03$）、客観性（$p<.001$、$\eta^2=.06$）の因子の得点が有意に高かった。また、全国大会出場校の選手は県大会ベスト8未満の選手より、集中力（$p=.02$、$\eta^2=.02$）、イメージ（$p=.001$、$\eta^2=.05$）、自信（$p<.001$、$\eta^2=.05$）、一貫性（$p<.001$、$\eta^2=.03$）、自己分析力（$p<.001$、$\eta^2=.05$）、客観性（$p=.002$、$\eta^2=.04$）、目標設定（$p<.001$、$\eta^2=.04$）、モチベーション（$p<.001$、$\eta^2=.14$）、生活管理（$p<.001$、$\eta^2=.07$）の因子の得点が有意に高かった。以上のことから、高校野球の男子選手の心理的能力はチーム内地位、過去5年のチーム最高成績によって異なることが明らかになった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-31] 個人の気質と熟考との関連に対する認知的柔軟性の媒介効果

*髙橋 由衣[1]、高井 秀明[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

ポジティブ思考が適応的で、ネガティブ思考が不適応的であるという見解は、万人には当てはまらない。この背景には、ネガティブ思考が成果に繋がる防衛的悲観主義（DP）という考え方がある。DPは、過去に良い成果を残しているにもかかわらず、未来の遂行場面に低い期待を持つ認知的方略と定義される（Norem, 2001）。DPの有効性は、失敗や成功の可能性を熟考することで積極的な対処行動が生まれる点にあるが、熟考がどのような要因によって促進されるかは未解明である。そこで本研究では、DPに影響を及ぼす気質と認知的柔軟性に着目する。行動抑制システム（BIS）が高い者はリスク回避のためにDPを利用し、そのDPの熟考が認知的柔軟性によって促進されるという仮説のもと、気質が認知的柔軟性を介して熟考に与える影響を明らかにすることを目的とする。さらに、他の認知的方略との比較を通して、熟考プロセスを多角的に理解することを目指す。調査対象者は、関東圏内の大学生410名であった。調査対象者には認知的方略尺度、BIS/BAS尺度日本語版、認知の柔軟性尺度日本語版に回答させた。なお、分析にはクラスター分析と媒介分析を用いた。その結果、DP群のBISにおいては、認知的柔軟性が計画に対する熟考への影響を完全媒介した（$\beta = .12, p < .01$）。方略的楽観主義（SO）群の行動活性化システム（BAS）においては、認知的柔軟性が成功に対する熟考への影響を部分媒介（$\beta = .05, p < .10$）、計画に対する熟考への影響を完全媒介した（$\beta = .05, p < .10$）。これらの結果は、個人の気質が直接熟考に繋がるだけではなく、認知的柔軟性を活用することで、建設的な熟考プロセスへと導くことを示唆する。つまり、認知的柔軟性は個人の気質と熟考を結びつける重要な媒介変数であり、DPやSOの熟考プロセスの解明に必要不可欠な要素であろう。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-33] スポーツドラマチック体験とレジリエンス要因の関連

*堤 愛美子[1]、杉山 佳生[1] (1. 九州大学大学院)

競技者にとってスポーツ自体がストレッサーとなることがあり、これはストレス耐性の個人差によるもの（門利ら，2021）である。ストレス耐性におけるレジリエンスを導くものはレジリエンス要因と呼ばれ（平野，2015）、人生に影響を与えるようなスポーツドラマチック体験（橋本，2005）をすることによって高められると考えられる。

本研究の目的はスポーツドラマチック体験とレジリエンス要因の関連を明らかにすることである。

大学生運動部活動所属者128名（男性104名、女性24名、平均年齢19.96歳、SD＝1.38歳）を分析対象とし、二次元レジリエンス要因尺度（BRS：平野，2010）、スポーツドラマチック体験尺度（IDES：橋本，2007）を用いてGoogle Formsで調査を実施した。

その結果、レジリエンス要因はIDESの下位尺度である「努力・練習への重要性の気づき」（r = .50）「技術向上への気づき」（r = .55）「対人トラブルによる自己反省」（r = .24）と有意な正の相関を示した（p < .01）。

「努力・練習への重要性の気づき」が内発的動機づけとして作用し（生方ら，2023）、レジリエンス要因につながると考えられる。「技術向上への気づき」は主に試合場面での「成功体験」（橋本，2022）を通じて自身の技術向上に気づくことで、レジリエンス要因の高まりにつながると考えられる。「対人トラブルによる自己反省」は、他者へサポートを求めながら自己や他者への理解を深め、対人トラブルというストレス状況を乗り越える（平野，2010）ことで、レジリエンス要因を高めることが考えられる。

横断調査のため、縦断研究によってスポーツドラマチック体験とレジリエンス要因の因果関係の検証が今後の課題である。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-35] 目標達成を目指す大学生アスリートにおける個人特性に応じた認知的方略選択の重要性

*大塚 理瑚[1]、幾留 沙智[2]、渡邉 諒[2,3]、中本 浩揮[2] (1. 鹿屋体育大学大学院、2. 鹿屋体育大学、3. 日本学術振興会特別研究員（PD）)

一般に，目標達成にはポジティブな姿勢が有効とされるが，悲観的な特性の者もそうすべきかについては疑問が残る．先行研究では，防衛的悲観主義（DP）の観点から楽観的な方略に加え悲観的な方略の有効性も示されており，DP方略採用者は楽観方略採用者と同程度の潜在的自尊心を示すとの報告もある．これは潜在的に楽観的な特性の者がDP方略を採用することの有効性を示唆するが，これまで特性と方略の両側面を同時に測定し，目標達成との関係を検討した研究は見当たらない．そこで本研究では，大学生競技者の目標達成に関連する特性（潜在・顕在）と方略の組合せを明らかにすることを目的とした．大学生競技者16名を対象に，潜在的な楽観・悲観を評価する潜在連合テスト，楽観・悲観性尺度，認知的方略尺度，及び昨シーズンの目標達成度の回答を得た．目標達成度は，成績，体力，技能の3側面について主観的達成度を0~100%のVASで評定させた．潜在連合テスト及び各尺度の結果より，各対象者の特性（楽観，悲観）及び認知的方略（DP，方略的楽観：SO，真の悲観：RP，非現実的楽観：UO）を分類し，平均目標達成度を比較した．結果として，顕在楽観者ではSO（67.51±17.70%）とDP（63.96±17.96%）の達成度が同程度であったのに対し，顕在悲観者ではDP（57.75±19.14%）がSO（74.41%）より達成度が低いことが示された．さらに，潜在悲観者はRP（41.67±8.33%）が他（DP: 75.70±6.22%，UO: 75.00%，SO: 61.34±16.30%）より達成度が低く，潜在楽観者はSO（80.21±5.79%）がDP（49.92±17.47%）より達成度が高いことが示された．以上より，潜在・顕在どちらの特性を考慮しても，悲観者は悲観方略（DP，RP）の採用に注意が必要である可能性が示唆された．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-37] スポーツ競技における失敗の価値観尺度の信頼性・妥当性の検討

*柴原 健太郎[1] (1. 北九州市立大学)

【諸言】スポーツ競技において，競技者は日々の練習や試合の中で様々な成功・失敗を繰り返し経験する（伊藤，2008）。特に失敗は試合の勝敗に関係することもあり，競技者にとって非常に重要な要素であると言える（遠山ほか，2013）。柴原ほか（2019）は，選手が失敗に対してどのような価値観を持っているかによって，その後の行動やパフォーマンスに大きな影響を及ぼす可能性があると述べており，スポーツ競技における失敗に対する価値観を測定する尺度の作成を試みている。【目的】本研究では，柴原ほか（2019）が作成したスポーツ版失敗観尺度の基準関連妥当性および再検査法による信頼性の検証を行うことした。【方法】対象者はA大学に所属する体育専攻学生758名（男性452名，女性306名；平均年齢20.7±0.8歳）であった。なお，1回目の調査に回答した100名（男性67名，女性33名）については2週間の時間的間隔を空けて再検査を実施した。調査内容は基本属性，スポーツ版失敗観尺度，STAI（特性不安），DIPCA（自信），対人過敏・自己優先尺度（評価への敏感さ）を用いた。【結果】再検査信頼性については，学習可能性（r=.58），プレーへの悪影響（r=.78），他者からの評価（r=.68），ネガティブ感情価（r=.75），失敗回避欲求（r=.79）であった。学習可能性は中程度であったものの，他の因子については一定の時間的安定性が認められた。一方，基準関連妥当性については，一部に理論的関連を支持する相関が見られたものの，全体としては弱い関連にとどまった。妥当性に関する詳細については当日発表する。【結論】本研究では，スポーツ版失敗観尺度の一部において妥当性および信頼性が確認された。そのため今後はさらなる精緻化と理論的枠組みとの整合性の検討が求められる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-39] 競技スポーツ領域における心理的安全性研究の今とこれから
スコーピング・レビュー

*松原 旭飛[1]、人羅 美帆[2]、高井 秀明[3] (1. 日本体育大学大学院、2. 医療法人横浜未来ヘルスケアシステム、3. 日本体育大学)

心理的安全性はアスリートの卓越性の追求と健康の維持・増進に不可欠な要因であると期待されているが、その研究知見は整理されていない。本研究の目的は、競技スポーツの領域における心理的安全性について検討した研究知見を体系的に整理し、今後の研究課題を特定することである。なお、本レビューは、PRISMA extension for Scoping Reviews（Tricco et al., 2018）にしたがって報告する。本レビューでは、主要な論文検索データベース（PubMed, SPORTDiscus, MEDLINE complete, ERIC, PsycINFO）を用いて査読付き国際学術誌に英語で掲載された一次研究を収集した。文献検索で得られた研究は適格基準および除外基準に照らしあわせ、最終的には27件の研究を抽出した。
本研究で抽出された研究は、競技スポーツに従事する（パラ）アスリートを対象としていたが（N=22）、コーチや医科学スタッフ、アスレティックデパートメントの従業員などを対象とした研究（N=5）も散見された。そして、心理的安全性の定義や測定ツールは混在していた。ゆえに、競技スポーツの特徴を反映した定義、ならびに信頼性と妥当性を有した測定ツールを開発することは喫緊の課題であるといえる。また、27件の研究のうち、量的研究が21件、質的研究が5件、Randomized Controlled Trialsが1件であった。競技スポーツの心理的安全性研究が萌芽期にある今、スポーツチームで心理的安全性が創発するプロセスを探る質的研究は有用と考えられる。さらに、量的研究のうち、チームレベル研究や縦断研究はそれぞれ1件であった。心理的安全性をチームレベルの現象として捉えたマルチレベル研究や経時的変化を検討する縦断研究を拡充することで、競技スポーツ固有の心理的安全性に関する理解はより一層深まるだろう。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-41] スポーツ競技者におけるライフスキルの構成概念の検討
体育会柔道部学生を対象として

*藤島 将太[1]、西田 順一[2] (1. 近畿大学大学院、2. 近畿大学)

青少年スポーツ競技者を対象にライフスキル（LS）を測定するため，わが国にて作成された心理尺度（島本他，2013；清水他，2018）が見られる．それらを用いた心理的有効性（山本・島本，2019；藤島，2024）の知見等が示されてきたが，回答者の校種が限定されるため青少年期のスポーツ実践による一貫したLSの習得を測るには限界がある．また，上述の尺度の構成概念のみでLSを包含して捉えられるかは不明である．そこで，Life Skills Scale for Sports（LSSS；Cronin & Allen，2017）に着目した．LSSSは上述のLS尺度とは異なる側面（「チームワーク」，「時間管理」等）を有し，信頼性・妥当性の備わった有効な心理尺度と認められる．以上より本研究では，LSSSの構成概念の重要度とその特徴を明らかにすることを目的とした．対象者は，関西地区の体育会柔道部学生174名（男性n=125）であった．調査内容は基本的属性に加えLSSSの構成概念の重要度についてVAS（0〜10.0点）により尋ねた．また，「大学生アスリート用LS評価尺度（島本他，2013）」のうち６因子24項目を尋ねた．LSSSの構成概念の重要度は，「チームワーク」ではM=9.01，また「時間管理」ではM=8.62を示した．また，「大学生アスリート用LS評価尺度」との関連の分析の結果，「チームワーク」ではr=.21〜.32，また，「時間管理」ではr=.17〜.36を示し有意な正の相関が認められた．以上より，従来のLS尺度とは弱い関連であるためLSSSの構成概念は固有である可能性が考えられる．これらから，青少年スポーツ競技者を対象としたLSSSの日本語版作成は重要な課題と思われ，2024年に原著者よりLSSSの日本語版作成の許諾を得た．今後は日本語版LSSSの作成を通じて更にLSの構成概念を検討する必要がある．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-43] 大学体育授業における主観的恩恵評価とライフスキル獲得との関係

*藪中 佑樹[1]、早川 琢也[2]、成相 美紀[2]、前田 奎[2]、田中 奏一[2]、高橋 啓悟[3]、金田 和輝[2]、銘苅 淳[4]、小俣 貴洋[2]、細野 裕希[2]、梶田 和宏[2]、新野 弘美[2]、濱中 良[2] (1. 龍谷大学経営学部、2. 京都先端科学大学健康医療学部、3. 徳島大学大学院社会産業理工学研究部、4. アルバモス大阪)

【背景】大学体育授業は、大学生がライフスキル（LS）を身につける重要な場である一方で、授業内でのどのような学びや気づきがLSの獲得に寄与するのかについては、十分に検討されていない。そこで本研究では、大学体育授業の主観的恩恵とLSとの関連を明らかにすることを目的とした。【方法】調査は2024年9月（第1週）および2025年1月（第15週）にかけて実施した。体育授業を受講しており、両調査に不備なく回答した大学生527名（平均年齢：19.4±0.9歳）を分析対象とした。調査内容は、第15週に体育授業の主観的恩恵評価尺度（西田ほか，2016）、第1、15週に日常生活スキル尺度（DLS、島本・石井，2006）を用いた。主観的恩恵評価尺度の各下位尺度を説明変数、第15週のDLSの各下位尺度を目的変数とし、共分散構造分析を行った。第1週のDLSの各下位尺度得点、性別、学年、受講種目、運動部活動所属の有無を統制変数とした。【結果】「運動スキル・練習方法の習得」から「リーダーシップ」（β=.13、p<.05）、「共同プレーの価値理解とコミュニケーション能力の向上」から「対人マナー」（β=.14、p<.05）、「ストレス対処とポジティブ感情の喚起」から「親和性」「前向きな思考」（順にβ=.26、.28、いずれもp<.01）、「体力・身体活動の増強」から「リーダーシップ」「計画性」「情報要約力」（順にβ=.12、.18、.14いずれもp<.05）に対して有意な正のパスが認められた。【考察】大学体育授業において、これらの主観的恩恵を実感できる授業がLS獲得に寄与することが示唆された。以上から、運動技能の上達や学生同士の交流、運動による爽快感、体力の増強に関する気づきや学びを促す授業展開がLS獲得にとって重要であると考えられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-45] 3歳から8歳児の身体活動と社会情動的スキルとの関連

身体活動の頻度、屋外活動時間及び仲間の人数

*松尾 安優子[1]、川田 裕次郎[1,2,4]、染谷 由希[1,2,6]、中村 絵美[3,6]、木藤 友規[1,2]、松井 公宏[2,5]、松永 美咲[6]、鈴木 宏哉[1,2,4,6] (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部、3. 順天堂大学保健医療学部、4. 順天堂大学スポーツ健康医科学研究所、5. 横浜市立大学附属病院、6. 順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構)

【背景と目的】社会情動的スキルとは、目標の達成、他者との協働、感情のコントロールなどに関するスキルである。社会情動的スキルの促進要因として身体活動が注目され、身体活動の量と社会情動的スキルの関連が報告されている。しかし、身体活動の質と社会情報的スキルの関連は明らかにされておらず、どのような身体活動が社会情動的スキルに関連するのかは不明である。そこで本研究は、子供の身体活動頻度、屋外での身体活動時間、身体活動時の仲間の人数と社会情動的スキルの関連を明らかにすることを目的とした。
【方法】3歳～8歳の子供を対象とし、彼らの保護者約4,630名から子供の個人属性、身体活動（身体活動頻度、屋外での身体活動時間、身体活動時の仲間の人数）、社会情動的スキルの回答を得た。社会情動的スキルの測定には、日本語版Strengths and Difficulties Questionnaire（SDQ）を用いた。ロジスティック回帰分析を用いて、交絡要因を調整した上で、身体活動頻度、屋外での身体活動時間、身体活動時の仲間の人数と社会情動的スキルとの関連を検討した。
【結果】子供の身体活動頻度、屋外での身体活動時間、身体活動時の仲間の人数いずれも、社会情動的スキルとの関連が示された。特に身体活動時の仲間の人数が多いほど、仲間関係問題を抱えることが少なく（OR = 0.110, 95% CI = 0.073–0.166）、向社会的行動を行う傾向が高いことが示された（OR = 0.225, 95% CI = 0.164–0.310）。
【結論】子供の身体活動頻度、屋外での身体活動時間、身体活動時の仲間の人数は社会情動的スキルに関連した。身体活動の時間のみならず、身体活動時の空間や仲間といった側面が子供の社会情動的スキルに重要な役割を担っている可能性がある。そのため、子供の社会情動的スキルの育成には身体活動の質的な面にも注目する必要がある。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-47] 陸上短距離選手のスタート前におけるルーティンのパターンと効果について

*鈴木 龍馬[1] (1. 新潟医療福祉大学)

短距離走は高い集中力と瞬発力が求められる競技であり、競技直前の緊張や不安がパフォーマンス低下の要因となる。こうした心理的状態を安定させる手段として、多くのアスリートが独自に取り入れているのが「ルーティン動作」である。国内におけるルーティンの効果や活用実態に関する定性的研究は限られている。本研究は、陸上競技の短距離選手がスタート前に行うルーティン動作に着目し、それが選手の心理状態および競技パフォーマンスに与える影響を明らかにすることを目的とした。新潟医療福祉大学陸上競技部に所属し、短距離種目を専門とする男子16名・女子16名、計32名の学生アスリートを対象に、ルーティン動作の実施状況とその心理的・身体的効果について調査を行った。Googleフォームによる自由記述式アンケートを実施し、加えて、ルーティンの効果を強く実感している選手2名と、ルーティンを行っていない選手2名にスタートルーティン表の記入と面談調査を行い、KJ法で質的分析を行った。その結果、32名中27名（約84%）が何らかのルーティン動作を実施しており、主な動作として「ジャンプ」「腿上げ」「背伸び」「視線固定」「セルフトーク」などが挙げられた。これらは「集中力の向上」「緊張の緩和」「モチベーション維持」などの心理的効果、ならびに「覚醒」「骨盤の意識」「筋緊張の調整」といった身体的効果を伴っていた。また、ルーティンの開始要因としては、トップ選手の模倣（田中・竹内, 2017）、顧問からの助言、成功体験の再現などが挙げられた。一方、ルーティンを行っていない選手は「何をして良いか分からない」「自然に決まった動作がない」などの理由を示し、準備行動の一貫性や心理的整合性に欠ける傾向が見られた。特に、セルフトークの活用によって集中力や自己制御力が高まることは、Hatzigeorgiadisら（2011）の報告とも一致する。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-49] 男性柔道指導者が指導の考え方を獲得していくプロセスに関する予備的検討

*柴田 大地[1]、高井 秀明[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

本研究の目的は、男性柔道指導者が指導の考え方を獲得していくプロセスについて予備的に検討することである。研究対象者は、公益社団法人全日本柔道連盟が認定する公認柔道指導者資格（A指導員）を保有し、柔道指導者として20年以上の指導歴を有し、主に高校生を対象とした男性柔道指導者1名（47歳）であった。言語データの収集は、指導の考え方を獲得していくプロセスについて半構造化インタビューによって行われた。その内容は、研究対象者の承諾を得てICレコーダーで録音され、逐語録が作成された。言語データの分析には、修正版Grounded Theory Approach（木下、2020）を用いた。その結果、13の概念と、2つのカテゴリーが生成された。以下には、概念が【】、カテゴリーが〈〉で表されるストーリーラインを示している。男性柔道指導者は、自身が選手であったころに【教わる立場でありながらも教えることに対して手ごたえを掴む】。そして、指導者から【人間性の面で真剣に叱責される】ことや【なぜ教えてくれないのだろうか】と指導者に疑問をもつ中で、〈受けた指導をきっかけに指導に対する考え方が芽生えはじめる〉。そして、男性柔道指導者は【受けた指導による気づきや疑問をもとにした指導】を実践し、指導者として歩みはじめる。その後は、指導の実践を通して【人間性の面の指導が定着せずに苦労する】。さらに、【話せば話すほど伝わらない】ことや【どこまで教えていいのだろうか】という苦慮する場面を経て〈指導の難しさと向き合う〉。そうした中で、男性柔道指導者は【他チームの取り組みを自チームの現状に応じて真似る】ことや、他者から【自己評価以上に高い評価を得て自信を深める】経験により、【指導におけるブレない軸を確立する】プロセスが示され、指導の考え方をより獲得していったことがうかがえる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-51] 「イップスの操作的定義」を基準とした野球競技におけるイップスの実態調査

*池田 和司[1]、渡邊 裕也[1]、甲斐 裕一[1] (1. 日本経済大学)

イップス（Yips）は「パフォーマンスを成功させるために求められる精密で細かい動きのスポーツに影響する心理―神経筋の動作障害」（Clarke et al., 2015）であり、我が国では野球競技での報告が多い（柄木田ほか，2021）。先行研究においても、大学野球選手107人のうち47%がイップスであると報告されており（青山ほか，2021）、イップスへの早急な対応が求められる。現場において、イップスのアセスメントツールの必要性が謳われている中、栗林ほか（2021）は「イップスの操作的定義」を開発しており、アスリートへの適切な治療や早期発見につながることが期待される。そこで本研究は、「イップスの操作的定義」に基づき、野球選手におけるイップス該当者の実態を明らかにすることを目的とする。調査対象者は、九州圏の四年制大学の硬式野球部に所属している大学生86名である。調査項目は、栗林ほか（2021）の「イップスの操作的定義」を用いており、A～G基準のすべてに当てはまったものをイップス有群、ひとつでも当てはまらないものをイップス無群とした。調査の結果、86名中6名がイップス有群に分類され、全体の6.98%あった。これは青山ほか（2021）や賀川・深江（2013）の結果よりも著しく低い値である。そのように至る理由として①「イップスの操作的定義」が厳格であるがゆえ、潜在的なイップス群が必要以上に排除されたから②本研究も含めてイップスの評価が調査対象者の主観に委ねられるから、以上2点が考えられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-53] 男子大学生ウエイトリフティング選手における心理的競技能力と競技不安の相関関係

*鶴田 幸大[1]、時田 晃佑[1]、中澤 史[2] (1. 法政大学大学院スポーツ健康学研究科、2. 法政大学)

【目的】男子大学生ウエイトリフティング（以下，WL）選手を対象に心理的競技能力と競技不安の相関関係を検討すること【対象と方法】全日本学生WL連盟に所属する男子選手44名（2〜4年生，平均年齢19.84±0.78歳）に対してフェイスシート，心理的競技能力診断検査（徳永・橋本，2000，以下，DIPCA.3），スポーツ特性-状態不安診断検査（徳永・橋本，2005，以下，TAIS.2&SAIS.2）を用いて調査を実施した。フェイスシートでは対象者の属性，DIPCA.3では5因子（競技意欲，精神の安定・集中，自信，作戦能力，協調性）と総点数，TAIS.2では5因子（動作の乱れの傾向，結果に対する不安傾向，身体面の緊張傾向，競技回避傾向，自信喪失傾向）と総点数，SAIS.2では4因子（情緒不安，勝敗への認知不安，身体的緊張，過緊張・恐れ）と総点数について確認した。DIPCA.3とTAIS.2＆SAIS.2の相関関係は統計ソフトHAD（清水，2016）で分析した。【結論】分析の結果，DIPCA.3の総得点とTAIS.2&SAIS.2の各総得点間に中程度の負の相関関係が確認された。また，協調性を除いたDIPCA.3の4因子とTAIS.2＆SAIS.2の複数の因子間に弱から強程度の負の相関関係が示された。特にDIPCA.3の精神の安定・集中の因子とTAIS.2＆SAIS.2の複数の因子間に中から強程度の負の相関関係が示されたことは，競技不安とパフォーマンスの関係を扱った福井ら（2014）や土屋・中澤（2021）の報告を支持する結果となり，WLの競技場面においても競技不安が精神の安定・集中に混乱を招き，実力発揮の阻害要因となっている可能性が示唆された。以上のことから，WL競技の心理的側面の重要性が窺え，競技不安を解消することで，選手の競技力向上に寄与する可能性が示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-55] 男子大学生における首尾一貫感覚と運動に関する意思決定バランスとの関連

*園部 豊[1]、平山 浩輔[1] (1. 帝京平成大学)

首尾一貫感覚（Sense of Coherence；以下SOC）と身体活動との関連において，SOCは運動セルフ・エフィカシーを媒介し、運動行動の変容ステージに肯定的な影響を与えることが分かってきている（清水ら，2019）。運動行動の変容ステージに影響を与える要素の一つに、運動に関する意思決定バランスがある。SOCが意思決定バランスに影響を与えることが明らかとなれば、定期的運動習慣獲得のための有益な知見となる。そこで本研究では、男子大学生を対象として、SOCと運動に関する意思決定バランスとの関連について検討することを目的とした。対象者は、男子大学生430名（平均18.55±1.56歳）であった。調査内容は日本語版SOC-29（Antonovsky，1987山崎・吉井監訳 2001）および運動に関する意思決定バランス尺度（岡ら，2003）とした。SOCの合計得点を用いて中央値を算出し、SOC低群とSOC高群に対象者を分け、分析を行った。初めにSOCの高低で意思決定バランス各因子に得点の違いがあるかを検討するために、対応のない*t*検定を行った。その結果、SOC高群は低群に比べ恩恵因子の得点が有意に高く、負担因子の得点が有意に低いことが分かった。次にSOCの高低それぞれにおいて、意思決定バランス2因子を従属変数、SOC3要素を独立変数とした強制投入法による重回帰分析を行った。その結果、恩恵因子へはSOC高低とも有意味感および処理可能感が正の影響を与えていた。負担因子へはSOC高群における有意味感のみが負の影響を与えていた。以上の結果から、SOCが高いことは運動実施に対する恩恵の評価が高くなり、負担の評価が低くなることが分かった。特に有意味感が恩恵や負担の評価に関連することが示された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-57] ダンスの創造的プロセスが不安および抑うつに及ぼす影響

即興創作ダンスと模倣ダンスの比較

*酒井 美鳥[1]、清河 幸子[2]、溝川 藍[1] (1. 名古屋大学、2. 東京大学)

ダンスをすることは不安や抑うつを低減することが示されているものの，その効果がどのようにして生み出されているのかは十分に明らかになっていない。本研究では，ダンスが心理的健康に寄与する要因のひとつとして，自分で動きを創造するという創造的プロセスに着目し，ダンスにおける創造的プロセスが不安および抑うつを低減するという仮説を検証した。
大学生109名がオンラインで実験に参加した。参加者はランダムに2群に分けられ，ウォーミングアップのダンス（共通）を行った後，創造的プロセスが含まれている即興創作ダンス（即興創作群），または創造的プロセスが含まれていない模倣ダンス（模倣群）のどちらかを約20分間，個別に行い，その前後で不安および抑うつ状態を測定する尺度に回答した。
その結果，両群ともに実施の前後で不安および抑うつが有意に低減したものの，ダンスの種類による改善効果に有意差は見られなかった。したがって，ダンスにおける創造的プロセスが不安および抑うつを低減するという仮説は支持されなかった。
結果について，参加者の創造的活動の経験の影響，ダンスに含まれる創造的プロセスの量とレベル，身体感覚の高まりの影響の３つの観点から考察した。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-59] 2型糖尿病患者の血糖管理と自己効力感がレジリエンスに与える影響

*西垣 景太[1] (1. 東海大学　健康学部)

国内の糖尿病患者数は552万人であり、そのうち2型糖尿病患者数は364万人とされている（厚生労働省2023）。治療においては、運動・食事・薬物療法のいずれもが必要とされ、患者自身による生活習慣の適正な管理が求められる。治療が長期にわたる中で、治療行動を継続する力や心理的なコントロール能力が治療行動の維持・変容を促す要因になると考えられる。レジリエンスは「精神的、感情的、行動的な柔軟性と外部および内部への要求への適応を通して、困難または困難な人生経験にうまく適応するための能力及びその結果」と定義され「精神的な回復力」とも表現される。そこで本研究は、2型糖尿病患者を対象に、レジリエンスの得点に影響する予測因子について、生理的指標及び運動など治療行動に対する自己効力感の得点から検討した。調査対象者は、大学病院及びクリニックにて外来通院薬物療法を受けている2型糖尿病患者のうち、研究参加に同意が得られた300名を対象とした。定期受診時に、レジリエンスおよび運動・食事・薬物療法に関する自己効力感、生活習慣の実態、血糖管理に関するアンケート調査を実施した。重回帰分析の結果、獲得的レジリエンス得点への正の予測因子として、「糖尿病に関する知識得点」「HbA1c値」「運動に関する自己効力感」、負の因子として「2型糖尿病罹病期間」が抽出された。また、資質的レジリエンスの得点の正の予測因子として、「食事に関する自己効力感」、「調査時の年齢」、「運動に関する自己効力感」、負の予測因子として「2型糖尿病罹病期間」が抽出された。これらの結果より、運動や食事の自己効力感が高いほど、獲得的・資質的レジリエンスの得点は高くなる傾向が認められた。一方で、糖尿病罹病期間が長いほどレジリエンスの得点は低くなる傾向がみられ、慢性疾患としての経過が心理的回復力に及ぼす負の影響が示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-61] アスリートにおける熱望・警戒イメージ尺度の作成

*相川 聖[1]、高井 秀明[2]、平山 浩輔[3]、三村 覚[2]、齋藤 雅英[2] (1. 関西学院大学、2. 日本体育大学、3. 帝京平成大学)

制御焦点理論（Higgins, 1997）では，促進焦点と防止焦点という2つの特性（制御焦点）から目標追求のプロセスにおける個人差が説明されている．さらに，制御焦点と方略が適合（制御適合）することで課題成績の向上が示されている（Higgins, 2000）．本研究では，アスリートの目標追求における方略としてイメージに着目し，アスリートの熱望・警戒イメージ尺度を作成することを目的とした．関東圏および関西圏の大学生のうち，大学の運動部または大学以外のクラブに所属し，競技力向上を目的としてスポーツを行っている大学生アスリート347名（男性198名，女性147名，回答しない2名，平均年齢19.8±1.0歳）を分析対象者とした．尺度の原案は，アスリートから自由記述によって収集した熱望・警戒イメージ（相川ほか，2024）から生成した28項目，Ouschan et al.（2007）やHall et al.（1998）を参考にして作成した30項目によって構成された．尖度・歪度による項目分析および探索的因子分析を行った結果，27項目が削除され，2因子31項目の解が示された．本研究では今後の尺度の利便性も考慮し，因子の項目の中から，イメージの5つの機能（Hall et al., 1998）ごとに最も因子負荷量の高い項目を選定した．選定した10項目に対して，再度探索的因子分析を行い，最終的な因子パターンを確認した．第1因子は熱望イメージ，第2因子は警戒イメージの項目で構成されていた．得られた2因子10項目の解に対して確認的因子分析を行い，モデルの適合度は許容範囲であることを確認した．また，尺度の十分な内的一貫性が示された．本研究によって，イメージの5つの機能を反映した熱望・警戒イメージ尺度が作成され，構成概念妥当性のうち，内容的な側面と構造的な側面，一般化可能性の側面で証拠が確認された．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-63] パリ2024大会におけるアスリートの精神的健康とSNS上の誹謗中傷との関連の検討

*本郷 由貴[1]、冨永 哲志[1]、大西 壮流[1]、立谷 泰久[1]、柄木田 健太[1] (1. ハイパフォーマンススポーツセンター　国立スポーツ科学センター)

近年、スポーツ界におけるSNS上の誹謗中傷は国際的に深刻な課題とされており、IOCはパリ五輪期間中に選手や関係者への誹謗中傷投稿が8500件を超えたと報告している（IOC, 2024）。こうした誹謗中傷やネガティブなコメントにさらされることは、アスリートのメンタルヘルスや競技パフォーマンスに影響を及ぼす可能性があるが、日本においてどの程度のアスリートが被害を受けているかは十分に明らかでない。本研究では、パリ2024オリンピック・パラリンピック競技大会期間中におけるアスリートのSNS利用に関連する誹謗中傷の実態と、精神的健康度および主観的実力発揮度との関連を明らかにすることを目的とした。調査は2024年10月～2025年1月、パリ2024大会に出場した日本人選手を対象に、Webアンケートを実施した。分析対象は123名（男性61名、女性62名、平均年齢28.70±8.39歳）であった。調査内容は、大会期間中のSNS利用、誹謗中傷に関する質問、Kessler心理的苦痛尺度（K10）（古川，2003）、および実力発揮度に関する項目であった。単純集計の結果、SNS上でネガティブなコメントやDMを受けた選手は全体の12%、そのうち1件以上の誹謗中傷を経験した選手は約4.1%であった。また、SNS上でネガティブなコメントやDMを受けた経験の有無と精神的健康度（K10）の関連についてMann-WhitneyのU検定を実施した結果、有意差は認められなかった（p=.066）が、効果量はr=0.168と小さくとも一定の影響が示唆された。さらに、精神的健康度は大会中・帰国後ともに約2割の選手がカットオフ値を超えていた。加えて、精神的健康度と主観的実力発揮度の間には有意な負の相関（ρ=−0.32, p<.001）が認められ、精神的に苦しいと感じる選手ほど、自分の実力を低く見積もる傾向がみられた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-65] デフアスリートへの心理的支援が心理的能力に及ぼす影響
JISS競技心理検査による検討

*前田 凌汰[1,2]、後藤 賢二[1]、根本 玲[1]、幸田 剣[1]、土屋 裕睦[2] (1. 和歌山県立医科大学 みらい医療推進センター げんき開発研究所、2. 大阪体育大学大学院)

【緒言】聴覚障害を有するアスリート（以下、デフアスリート）は、競技中の情報伝達の制約や社会的な誤解・偏見にさらされやすく、心理的負担が大きいとされる（Stewart & Ellis, 2005）。加えて、自己内省やメンタル面での自己調整についても適切な支援を受けにくい現状がある。このような背景から、デフアスリートに対する継続的かつ個別的な心理的支援の必要性が指摘されている（内田, 2016）。【方法】本研究では、プレッシャー下での実力発揮を目指すデフアスリート1名を対象とし、日本スポーツ心理学会認定スポーツメンタルトレーニング指導士による月1回の心理的支援を実施した。心理的変化の評価には、2か月に一度、JISS競技心理検査（J-PATEA；立谷ほか, 2020）を用いた。【結果】J-PATEAの結果から、総合得点および心理的スキルの向上がX＋8月以降に確認された。特に自己コントロールと自信は、X＋6月以降に高値を示した。また、支援前期の主観的変化は「意識」「理解」にとどまっていたが、後期には「思考のクセの把握」「改善」といったメタ認知的視点が見られるようになった。【考察】心理的スキルの変化は、一定期間の介入を経て効果が現れることが示され、特にメタ認知の形成が自己効力感や心理的成長に寄与する可能性が示唆された。本研究は、デフアスリートに対する心理的支援の有効性と、その実践的可能性を示す一例となる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-67] スポーツ指導者がコーチング場面で経験する心理的葛藤の質的検討
大阪府リーグ社会人サッカー監督を対象として

*筒井 香[1]、伊藤 瑞希[2] (1. 株式会社BorderLeSS、2. OsakaCitySC)

指導者、特に監督やヘッドコーチになれば意思決定をする場面も多く、勝敗の責任を負っている立場として非常にプレッシャーのかかるポジションであり、練習や試合、遠征、合宿と休日返上で現場に出て身体的に疲労するだけではなく、見えない心理的疲労も多くあると考えられる。そのためスポーツメンタルトレーニング指導士の心理サポートは、アスリートに限らず指導者に対してもニーズは高いと思われる。このニーズにより応えていくためには、指導者がコーチング場面で経験する心理的葛藤にどのようなものがあるのかを把握することが重要になると思われる。そこで本研究では社会人サッカーの監督を対象とし、新シーズンに向けたチーム作りの時期から、優勝・昇格をかけたリーグ戦中に経験する様々な心理的葛藤についてインタビュー調査を実施した。分析方法としては、一事例について詳細に検討することを目的とし、インタビューで得られた発話を質的データ分析法によって質的に分析することとした。その結果、指導者として選手の成長を支援し、全ての選手に試合出場機会を与えたい気持ちと、リーグ優勝・昇格のために試合に出場する選手、出場しない選手を選ばなければいけない現実との間で心理的葛藤を抱えていることや、社会人サッカーという働きながらサッカーをする環境で、トレーニングや試合を欠席する選手も出てくる中での選手選考の難しさに心理的葛藤を抱えていることが明らかになった。また、選手に関することに限らず、スタッフとのコミュニケーションやトレーニング環境に関する心理的葛藤も見られた。本研究の結果は、指導者を対象とした有効な心理サポートの在り方を考える際の貴重なデータになると考えられ、また競技レベルや年代など指導対象によって特有の心理的葛藤もあると想定されることから、事例研究を積み重ねる重要性も示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-69] 競技的身体性は描画に表れるか：描画判別課題による探索的研究
風景構成法を用いて

*伊藤 友記[1]、森 司朗[2] (1. 鹿屋体育大学大学院、2. 鹿屋体育大学)

スポーツ現場における競技者の心理的支援では、初期のアセスメントや経過に伴う心理的変化の把握を目的に、質問紙法や描画法（投映法）が活用されている。描画法は、言語化しにくい感情や無意識的側面を表現できる点で有効であり、なかでも風景構成法（Landscape Montage Technique: LMT）は、心理臨床領域で診断的・治療的な側面をもって広く用いられている。競技者は身体を通して自己を表現する存在であり、日常動作や姿勢、筋肉の使い方などにも無意識的な自己が投映される。とりわけ、競技者は競技特有の身体性に対する感受性が高く、同一競技に携わる者同士であれば、その身体性が描画にも共通して表れ、相互にそれを知覚できる可能性があると考えた。本研究では、大学生の野球選手、バスケットボール選手、および部活動未所属者（各10名）を対象に、それぞれの競技者が描いた絵を用いて一対比較法により判定課題を実施した。提示は、直感的判断（5秒間提示）と、思考的判断（無制限提示）に条件分けし、各判定後にはVASで確信度を評価させた。思考的判断では判定根拠も語らせた。結果、いずれの群も正答率はチャンスレベルを超えず、競技者であっても自身と同じ競技の描画を判別することは困難であった。また、競技者と非競技者間に有意な差も認められなかった。これは、描画に競技特有の特徴が明確に投映されるとは限らず、仮に投映されていても識別可能とは限らないことを示唆する。一方で、一部の描画および参加者において偶然以上の正答傾向が見られたため、今後は競技経験、身体感受性、内受容感覚、競技レベルといった個人要因の検討を予定している。本研究は、身体性に基づいた無意識的表現としての描画が、競技者の理解や心理支援においていかに機能しうるかを探るものであり、今後は個人要因や競技種目特性との関連について、さらに多角的な検討が求められる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-71] スポーツと人格形成に関する意識調査

体育専攻学生を対象に

*佐々木 史之[1] (1. 環太平洋大学)

人格の形成には、遺伝的要因や、養育や学校教育等による環境的要因があるといわれている。教育基本法で謳われている教育の目的は、人格の完成を目指すことが第一に掲げられており、学校教育の中で行われている体育・スポーツ活動においても人格形成に関わる要素がなければならない。よって、スポーツを行なう意義や価値を考えた時に、体力や技術の向上は勿論、心理的・人間的成長にも視点を置いて考えることが望ましい。

体育専攻学生は、多くの者が体育教員やスポーツ指導者を目指し、勉学に励んでいる。その学生らが、スポーツにおける人格形成についてどのような認識を持つかが、今後の指導に大きく影響されると考えられる。よって本調査は、体育専攻学生を対象に、スポーツにおける人格形成に関わる要素にはどのようなものがあるかを聞き、重要視している要素や考えられる様々な要素を明らかにすることを目的とした。

自由記述で得られた回答から、テキストマイニングによってキーワードを抽出し、分析した結果、重要視しているもので多かったのは、「協調性」、「忍耐力」、「克己心」、「コミュニケーション能力」等であることが示唆された。また、「礼儀」、「礼法」、「規律」、「スポーツマンシップ」といった要素や、「責任感」、「思いやり」、「自己肯定感」等の要素もみられた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-73] サッカーのPK戦における意思決定に関する質的研究

*大嶋 拓[1]、関矢 寛史[2] (1. 広島大学大学院、2. 広島大学)

サッカーのPenalty Kick（以下，PK）はプレッシャーがかかる場面であり，プレッシャー下での意思決定がPKのパフォーマンスに影響すると考えられているが，PKでの意思決定に関して調べた研究は限られている．そこで本研究はPK戦においてキッカーがどのような思考過程を経て意思決定を行っているかについて質的に調査することを目的とした．公式戦のPK戦でキッカーを務めたサッカー部所属の男子大学生5名を対象にPK戦時の映像を視聴させながら半構造化面接の形式でインタビュー調査を行った．PK戦を4段階に分け，6項目の基幹質問項目を尋ねた．
データ分析では，PK戦での思考過程を個別に検討するために調査対象者ごとに分析を行うSCATを用いた．調査の結果，PKを成功した4名がシュートコースに関する意思決定をPK戦開始前に行っており，事前にシュートコースを決定しておくことでPKへの集中や成功への自信が高まっていた．事前に決めたコースにシュートする戦略に関して，先行研究では正確なシュートとの関連から有効性が示されてきたが，本研究では集中力や自信の高まりとの関連性が示唆され，不安の増加による注意散漫を防ぐという点でも有効であると考えられる．一方，PKを失敗した1名は疲労による不安や自分の順番直前で自分のPKに対するプレッシャーの高まりを感じ，シュートコースの選択に迷いが生じていた．さらに，不安や迷いが助走開始直前まで継続したほか，キック動作への意識の増大もみられた．従来の「あがり」研究では注意散漫による注意資源の不足と自動化されたスキルの意識的処理のどちらが「あがり」を生じさせるかについて議論されてきたが，本研究では両者が同時に生じることでPKのパフォーマンスを低下させる可能性が示唆された．今後，注意資源の不足と意識的処理が同時に生じることで「あがり」が引き起こされることを実験的に検討する必要がある．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-75] ハンドボール競技における試合のよい“流れ”を引き寄せるオフェンスプレー

H大学女子チームの3年間の地方１部リーグ戦による事例研究

*板谷 厚[1]、上野 壮士朗[2]、能代 時矢[2]、高瀬 淳也[1] (1. 北海道教育大学、2. 筑波大学)

本研究は、多くのプレーヤーが関与し、手数をかけて得点できたプレーが試合のよい“流れ”を引き寄せるとの仮説を検証した。連続して得点した場面で自チームによい“流れ”が来ていると感じるプレーヤーが多いことから、連続得点の1点目（起点）か否かにオフェンスプレーのパス回数が影響するか検討した。大学女子ハンドボールチーム（地方1部、全国大会出場）の2022〜2024年度のリーグ戦全20試合を分析対象とした。試合動画を視聴し、攻守が切り替わるまでのパス回数、得点の可否、連続得点の起点か否か、得点状況（得点差）をそれぞれ記録した。得点してから次に得点するまでのパス回数を累積パス回数として算出した。パス回数、または累積パス回数が得点差と起点か否かに関係するかどうか検討するために、得点差7水準（-3、-2、-1、0、1、2、3）×起点2水準（起点か否か）による二要因分散分析モデルを、固定効果を得点差と連続得点の起点、変量効果を試合とする線型混合モデル（LMM）で分析した。累積パス回数のLMMは、得点差、および起点の主効果にのみ有意性を認め（順に$p = 0.002$、$p < 0.001$）、それぞれビハインド場面と起点で累積パス回数は多かった。この結果は、得点するまでに多くの手数をかけてきているオフェンスプレーが連続得点の契機になりやすいことを示し、本研究の仮説を支持した。パスを重ね攻撃の試行錯誤を繰り返すうちに、相手ディフェンスの隙を突く戦術が見出され、連続得点に繋がる突破口が開かれると推測される。また、行動選択において、ヒトはより労力を要する選択の結果をより肯定的に捉える傾向がある。多くのパスを費やしてもぎ取った得点は、チームを勇気づけ、連続得点を導く大胆な攻撃を引き出す可能性もある。したがって、多くの手数を費やし苦労して得点できたプレーが試合のよい“流れ”を引き寄せると結論づけられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-77] インセンティブが投球課題時のリスクテイキングに及ぼす影響と関連する心理特性の検討

*上野 壮士朗[1]、近藤 克磨[1]、三枝 徹平[1]、國部 雅大[2] (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学体育系)

【目的】本研究は、報酬獲得または損失回避といったインセンティブがリスクテイキングに与える影響と、関連する心理特性を明らかにすることを目的とした。【方法】対象者8名（平均23.8歳，SD=2.2）が下手投げでボールを20回投じ、床面に投影された得点フィールド上の落下位置に応じて得点を獲得・損失する課題を行った。得点フィールドは奥側が幅20 cm、手前が60 cm、高さ200 cmの台形であり、奥に投げられるほど得点は高い（もしくは減点が小さい）が、その分外れる可能性も高くなった。報酬条件では開始時の持ち点を0点とし、投球ごとに0〜10点が加算された。損失条件では持ち点を+200点とし、投球ごとに-10〜0点で減算された。混合条件では持ち点を0点とし、投球に応じて-10 〜＋10点で加算または減算された。実験前に日本語版The Movement-Specific Reinvestment Scale（MSRS, 川端・今中, 2019）とThe General Self-Efficacy Scale（GSES, 板野・東条, 1986）に回答してもらった。各対象者の条件ごとに全投球の平均座標位置を算出し、どれだけ奥に投げたかをDistance from Endline（DE）として評価した。【結果】分析の結果、報酬-損失-混合条件の順に有意にDEが減少し（$p < 0.001$）、手前を狙うことでリスクを回避した。また、MSRSの下位因子であるCMP（動作を意識的に制御する傾向）とDEの間に有意な相関がみられた（報酬条件：$r = -0.715$, $p = 0.046$、損失条件：$r = -0.767$, $p = 0.026$）。【考察】同価値の報酬獲得よりも損失回避を優先するヒトの傾向を再確認した。また、運動を制御しようとする潜在的な傾向が意思決定と関連している新たな可能性を示した。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b101-40] 体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-79] 視覚運動刺激が自己運動知覚に与える影響

傾斜が速度知覚に与える影響に関して

*森 司朗[1] (1. 鹿屋体育大学)

知覚と行為の対応関係が水平方向への速度知覚に与える影響を自転車競技、陸上競技、ボート競技、体操競技の４つの競技選手を対象に検討した結果、、アスリートが能動的に行う行為が環境から提供されるオプティカルフローによる視覚情報への依存の仕方が異なることが報告されている（鳥羽、2018）。本研究では、種目別で独自に感じる重力の影響に着目し、競技種目別で視覚情報からどのような自己運動情報を得ているのか明らかにするため、エルゴメーターに角度をつけ、３つの方向（水平、上昇、下降）で3つの競技種目（自転車競技、ボート競技、体操競技）に対して、ベクションの生起強度を測定した。方法としては、エルゴメーターの角度を水平方向、上昇方向と下降方向の３つの方向に設定し、前進あるいは後退を意味する映像を呈示した際に、 参加者は自身の身体が移動するような感覚が得られたタイミングでボタンを押して、ベクションが生起するまでの時間である潜時とベクションの感じている時間を表す累積持続時間を測定し、各試行終了後にはＶＡＳによって主観的強度を測定した。その結果、競技種目によって、3つの方向と進行方向でベクションの生起強度及び、VASに違いが認められた。このことは、種目別で独自に感じる重力の影響が異なっていることを示めしており、鳥羽（2018）が指摘する速度知覚に日常的に経験する行為とそれに伴う視覚情報の対応関係が視覚依存で速度を評価する過程である補償プロセス（Wallach et al。 1974)の働きに影響を与えることを示唆していると考えられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1102-111] バイオメカニクス（奇数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-01]

剣道競技における競技力と下肢筋力および筋力発生率(RFD)の関係性の解明

*西川 浩太郎[1]、鶴田 理[1]、桜井 伸二[2] (1. 中京大学 スポーツ科学研究科 、2. 中京大学 スポーツ科学部)

[05バ-ポ-03]

腹臥位でのチューブバンドを用いたYW運動による肩・肘障害予防

*森本 大雅[1] (1. 新潟大学)

[05バ-ポ-05]

速度変化を伴う移動視標に対するタイミングコントロール

*西面 智華[1]、藤原 素子[2] (1. 奈良女子大学大学院、2. 奈良女子大学)

[05バ-ポ-07]

ロコモ度テスト立ち上がりテストにおける片脚立ち上がり可否による立ち上がり動作の比較

*伊藤 知之[1] (1. 大阪大谷大学)

[05バ-ポ-09]

大学スポーツ選手における腰痛と脊柱運動の評価

*村井 楓子[1]、五十嵐 健太[1]、山田 洋[2,1] (1. 東海大学スポーツ医科学研究所、2. 東海大学)

[05バ-ポ-11]

マインドフルネストレーニングがダーツの投動作に与える影響

*渡辺 日向[1] (1. 新潟大学)

[05バ-ポ-13]

100mの加速局面における上肢の疾走動態

*中橋 侑敬[1] (1. 新潟大学大学院)

[05バ-ポ-15]

競泳スタートの入水時に生じる流体力定量化の試み

*山川 啓介[1]、工藤 重忠[1]、武田 理[2] (1. 筑波大学、2. 筑波大学大学院)

[05バ-ポ-17]

体操熟練者の運動学的特徴

下肢屈伸を伴う上肢内外回旋動作に着目して

*坂口 泰志郎[1]、岸 凌大[2]、須藤 惇[2]、三宅 良輔[2]、西山 哲成[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

[05バ-ポ-19]

eスポーツにおける感度と前腕動作に関する研究

シューティングゲームを対象として

*星宮 貴弥[1] (1. 新潟大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1102-111] バイオメカニクス（奇数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-01] 剣道競技における競技力と下肢筋力および筋力発生率(RFD)の関係性の解明

*西川 浩太郎[1]、鶴田 理[1]、桜井 伸二[2] (1. 中京大学 スポーツ科学研究科 、2. 中京大学 スポーツ科学部)

【背景】剣道競技では、正面打撃のパフォーマンス向上を目的とした研究が多く実施されている。Muraseら(2017)は、正面打撃時間を短縮させるために身体重心の平均速度を高めることや、踏み切り脚(左脚)の地面反力を大きくすることが重要であると報告している。また、剣道の踏み切り動作では、下肢3関節のトルク発揮の同期性を意識した「静から動」の動作を爆発的に行うことが重要であると報告されている(村瀬ら,2019)。これらのことから、正面打撃において下肢の筋力及びパワー発揮能力や筋力の立ち上がりの早さが重要であると言える。力の立ち上がりの早さを表す指標として、RFD（Rate of force development）がある。RFDは、単位時間あたりに発揮される筋力の変化率を算出した指標であり、競技力を示す重要な指標の一つである。しかし、剣道の競技力と下肢筋力およびRFDとの関係性は不明なままである。【目的】CON-TREXを用いて下肢3関節の筋力測定を行い、剣道の競技力と下肢筋力および筋力発生率(RFD)との関係性を明らかにする。【方法】対象者は剣道競技者31名(男子19名,女子12名)とした。CON-TREXを用いて、左足(踏み切り足)の下肢三関節の等尺性筋力を測定した。各関節における最大トルク、最大RFD、動作開始から各時点までの平均RFD(50ms,100ms,150ms,200ms,250ms)を算出した。競技力を示す指標は部内リーグ戦の結果とし、測定データとの関係性を調べるためにPearsonの積率相関係数を用いた。【結果・考察】女子競技者では股関節の最大トルクおよび250ms時点の平均RFDにおいて、有意な相関関係が見られた($p<0.05$)。男子競技者では有意な関係が見られず、男女の競技特性の違いが影響した可能性がある。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1102-111] バイオメカニクス（奇数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-03] 腹臥位でのチューブバンドを用いたYW運動による肩・肘障害予防

*森本 大雅[1] (1. 新潟大学)

近年の日本における野球では、怪我のリスク低減のためにより効果的なトレーニング方法の確立が重要視されている。野球障害には投球障害肩や野球肘のように肩・肘障害が多くみられ、これらは今後の競技が困難になるような障害を引き起こす可能性もある。また、学童野球に取り組んでいる子供たちの21.2%が野球肘障害になっていたと報告もあるため、初心者にもできるようなトレーニングでの肩・肘障害の予防・改善に対するアプローチの必要性がある。

先行研究によって肩・肘障害の予防・改善に僧帽筋下部の筋力トレーニングや関節可動域のあるトレーニングの有用性が示唆されていることなどから、実際の野球現場などではバットを用いたショルダープレスが取り入れられている。しかしこのトレーニングではバットでは持ち手が固定されており十分に可動域を発揮できない、肩関節下降時に僧帽筋の筋活動が低下するといったデメリットが考えられる。そこでチューブバンドの伸縮性と負荷を用いることで可動域と筋活動の両方を補い、更なる予防・改善効果が期待できるのではないかと考えた。これらからチューブバンドを取り入れたトレーニングと既存のものを比較しチューブバンドを用いることの有用性を明らかにすることを目的とした。

本研究では18歳以上24歳以下の男子計6名を対象とし、バットの代わりにタオルを用いた試技とチューブバンドを用いた試技を1試技ずつ行い、そのときの関節可動域と僧帽筋の筋活動を比較・検討した。

その結果、肩関節可動域と僧帽筋の筋活動に有意な差は見られなかった。要因としてチューブバンドの負荷が大きかったことによるフォームの崩れや他の筋による代償運動、肩甲上腕リズムの静止期などが考えられ、個人に合った負荷によるトレーニングなど更なる検討が必要である。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1102-111] バイオメカニクス（奇数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-05] 速度変化を伴う移動視標に対するタイミングコントロール

*西面 智華[1]、藤原 素子[2] (1. 奈良女子大学大学院、2. 奈良女子大学)

ゴール型球技では，移動している味方にタイミングよくパスを出す能力が重要である．しかしながら、常に自分が決定したタイミングでパスを出すことができるとは限らず，味方の速度変化に対応する，あるいはディフェンスの出現によって動作を停止・抑制することが必要な場面も多い．発表者らはこれまでに，実際のパス動作を用いて移動視標に対するタイミング一致課題を行い，昨年の本大会において報告した．しかしながら，パス動作は用いる関節の運動の自由度が高く，パスの軌道が一様でないことから，パスの成否に関わる要因の特定の困難さが課題となった．そこで本研究では，水平な台上を一定の軌道で移動する台車を用いて，移動視標に対するタイミング一致課題を行った．具体的には，視標の移動に合わせて肩関節水平屈曲，肘関節伸展および手指の伸展により1.7m前方の目標地点に向けて台車を押し出し，移動視標が終了地点に到達すると同時に台車を目標地点（視標の終了地点）に到達させることとした．移動視標の速度は，Fast（0.90m/s）とSlow（0.45m/s）の2種類を設けた．課題1（Normal課題）では，各速度（2条件）を定速条件とし，課題2（Changeable課題）では，課題1の2種類の定速条件に，SlowからFastおよびFastからSlowの加速／減速条件を加えた4条件を設けた．測定および分析は，各課題において，台車と移動視標のタイミング誤差時間，台車の移動時間，平均速度，ピーク速度を算出するとともに，右上肢の各関節角度変位、角速度、最大角速度、および各関節間の運動連鎖について分析する．さらに，右上肢4ヶ所（三角筋後部，上腕二頭筋，上腕三頭筋，指屈筋）から導出した筋活動について時間的・量的に解析する．これらの分析結果から，加速/減速条件における動作方略，また加速/減速条件の有無が定速条件に及ぼす影響について考察する．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1102-111] バイオメカニクス（奇数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-07] ロコモ度テスト立ち上がりテストにおける片脚立ち上がり可否による立ち上がり動作の比較

*伊藤 知之[1] (1. 大阪大谷大学)

【背景】ロコモ度テストは、運動器の障害により移動機能が低下した状態であるロコモティブシンドロームの進行度を評価するものである。その中の立ち上がりテストでは、40cm高の台から両脚で立ち上がるテストに始まり、成功すれば片脚での立ち上がりを行う。片脚で立ち上がれない場合、ロコモ度1（移動機能の低下が始まっている状態）と判定される。本研究では、片脚で立ち上がれる者（SS）と立ち上がれない者（SF）における動作の違いに着目し、動作改善の要素を明らかにすることを目的とした。【方法】被験者は地域健康クラブに参加した60歳以上の女性20名とした。測定はロコモ度テスト（立ち上がりテスト、2ステップテスト、ロコモ25）およびインピーダンス法による体組成測定を実施した。立ち上がり動作は側方から高速度カメラ（300fps）で撮影し、動作解析ソフト（FrameDias Ⅴ、Q'sfix社製）で分析した。【結果および考察】両脚立ち上がり時の重心位置において、SFはSSよりも早い段階で重心が前方に移動し、立ち上がりまでの間、より前方に位置する傾向を示した。重心高に関しては、SSは座面から離れる前から高い加速度で重心速度を上げ、その後も高い速度で重心高を上昇させる傾向がみられた。また、体幹および下肢関節の角度変化のタイミングにおいてもSSとSFで違いが確認され、同じ動作であっても立ち上がり方に差があることが示唆された。これらの違いに着目することで、動作改善への指導要素を見出せる可能性がある。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1102-111] バイオメカニクス（奇数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-09] 大学スポーツ選手における腰痛と脊柱運動の評価

*村井 楓子[1]、五十嵐 健太[1]、山田 洋[2,1] (1. 東海大学スポーツ医科学研究所、2. 東海大学)

腰痛は，スポーツ選手においても発症しやすく，選手生命を脅かす可能性のある疾患である．加えて，多くの腰痛の原因はマルチファクターであり，画像診断単独の検査のみでは異常が認められないケースが多い．そこで本研究では，バイオメカニクス的手法を用いて，”動き”の詳細な分析を行い，腰痛有訴者および予備群の機能的特徴を捉えることを目的とした．対象はT大学硬式野球部とし，事前に実施した質問紙調査の結果に基づき，腰痛有訴者，健常者の計12名を無作為に抽出した．上体の回旋を伴う立位体前屈動作を行わせ，体幹捻転角度，腰椎屈曲角度を算出した．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1102-111] バイオメカニクス（奇数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-11] マインドフルネストレーニングがダーツの投動作に与える影響

*渡辺 日向[1] (1. 新潟大学)

スポーツをはじめ、様々な状況におけるパフォーマンスの発揮には、身体だけでなく心理面のコントロールが重要であり、近年はマインドフルネス特性との関係性が注目されている。マインドフルネスとは、「今までの経験に評価や判断を加えることなく、その瞬間に、能動的に注意を向ける」という心のありようを意味し、これを高める実践はマインドフルネストレーニング（MFT）としてスポーツや医療などの分野で活用されている。MFTは感情調節や注意制御、自己認識の強化などが提案されている。MFTの効果を検証する研究では、アンケートを用いた評価と、ダーツやピッチング、ゴルフのパッティング課題などのパフォーマンス測定が多い。先行研究では、MFTがダーツ初心者の運動学習を促進することが示されたが動作への影響は十分に解明されていなかった。そこで本研究では、心理面が重要なダーツの投動作を対象に、MFTの有無による動作解析を行い、初心者のパフォーマンス向上とのダーツ投擲動作の関係性を明らかにすることを目的とした。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1102-111] バイオメカニクス（奇数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-13] 100mの加速局面における上肢の疾走動態

*中橋 侑敬[1] (1. 新潟大学大学院)

陸上競技100mにおいて高パフォーマンスを達成するには、高い疾走速度を獲得する必要があり、それはピッチ（歩数）とストライド（歩幅）の積で決定される。100mは加速局面、最高速度局面、減速局面の3つに分けられ、加速局面において、30m通過タイムと100mタイムの間に正の相関が報告されており、重要性が示されている。加速局面では下肢の動作が多く研究されているが、疾走動作には腕振りも関与する。腕振りは疾走速度やピッチ、ストライドに影響を与えるとされるが、加速局面での役割は十分に解明されていない。本研究は加速局面での腕振りの動作解析を行い、パフォーマンス向上への知見を提供することを目的とした。研究対象者は、大学陸上部に所属している男子短距離選手8名とした。試技は、100m走を実施した。その試技の0~30mを撮影出来るように10mごとにハイスピードカメラ(240fps)を1台ずつ走路に対して右側に設置し、撮影した。得られた映像をもとに、疾走速度、ピッチ、ストライドと2次元4点実長換算法によって、身体に貼付したマーカーから2次元座標値を算出した。得られた2次元座標値から、肩関節、肘関節、股関節の角度、角速度、角加速度を算出し、これらのキネマティクスデータの変化と疾走速度、ピッチ、ストライドの変化の関係性を分析した。その結果、腕振りのキネマティクスデータの中で、疾走速度、ピッチ、ストライドを向上させる可能性がある項目を明らかに出来なかった。この結果から、腕振りにおける角度、角速度、角加速度が100mのパフォーマンスを向上させる要因であるとはいえないことが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1102-111] バイオメカニクス（奇数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-15] 競泳スタートの入水時に生じる流体力定量化の試み

*山川 啓介[1]、工藤 重忠[1]、武田 理[2] (1. 筑波大学、2. 筑波大学大学院)

競泳競技では，スタートの入水時に泳者が受ける水の流体力によって大きな減速が生じるため，この流体力の大きさがスタートパフォーマンスを左右する指標となる．そこで本研究では，スタートの入水時に泳者が受ける水の流体力を定量化する新たな方法論を提案し，事例的に流体力の定量化を試みることを目的とした．実験には男子大学競泳選手1名が参加した．水中で対象者が受ける浮力を算出のために，3Dボディスキャンを用いてストリームライン姿勢時の身体形状データを収集した．その後，実験試技として，スタート台から全力で飛び込み，水中キックなしで10 mを通過する試技を行った．試技中の重心加速度は慣性センサ式モーションキャプチャシステムを用いて算出した．本研究では，泳者が受ける水の流体力を定量化するために，入水時の身体に関する運動方程式を立て，身体重量，身体重心加速度，身体の浸水部分に働く浮力の推定値を用いて身体に生じた正味の流体力を計算した．結果として，本研究の方法論で推定した流体力の合力は，身体が完全に入水するまで増加し，最大で774 Nに達した．この値は，先行研究でストリームライン姿勢時に計測された受動抵抗力（流速1.0―1.5 m/s）に対して8〜10倍大きい値であった．本研究において，流体力が最大に達した際の重心速合成度が約4.0 m/sであった．本研究とストリームライン姿勢の先行研究との速度の違いを踏まえると，泳者が受ける水の抵抗力（受動抵抗力）は速度の2乗に比例して増加することから，本研究の方法論で推定した流体力は概ね妥当な範囲であったと考えられた．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1102-111] バイオメカニクス（奇数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-17] 体操熟練者の運動学的特徴
下肢屈伸を伴う上肢内外回旋動作に着目して

*坂口 泰志郎[1]、岸 凌大[2]、須藤 惇[2]、三宅 良輔[2]、西山 哲成[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

【背景】単純に見える体操動作の中でも、熟練者の動作と非熟練者の動作は一見してわかる「違い」がある。上肢を回す運動や、下肢屈伸運動などの反復全身運動では、四肢の曲げ伸ばしの程度やそれらの協応性、タイミングの違いがその差となっていると考えられる。ラジオ体操などに代表される道具を用いないこの種の体操は学校や地域で広く用いられているが、体操熟練者の動作の特徴を運動学的に分析した基礎的研究は非常に少ない。この「違い」を運動学的に捉えることは、実際の指導における要点を明確にすると考えられる。【目的】下肢屈伸を伴う上肢内外回旋動作に着目し、熟練者の運動学的特徴を明らかにすることで、指導の要点を得ること。【方法】被験者は熟練者（体操部所属の男子大学生）9名と非熟練者（体操未経験者）8名とし、メトロノーム（60bpm）に合わせた下肢屈伸を伴う上肢内外回旋を行った。三次元動作解析システム（VICON MX40、Vicon社）を用いて200Hzで撮影し、上肢回旋角度、回旋角速度、上胴前傾角度、大腿、下腿、足部セグメント角度を算出した。【結果および考察】熟練者は非熟練者と比較して、上肢の振り降ろしおよび振り挙げ中盤にかけて、上肢回旋角速度が大きかった。また、熟練者の特徴として以下の3点がみとめられた。①しゃがみこみの直前に踵を浮かせ、伸び上がるような動作から、そのまましゃがむこと。②しゃがみこみの開始から遅れて上肢を振り降ろす、いわゆる「ため」があること。③しゃがみこみ中は体幹の前傾が小さく抑えられ、直立位に近い姿勢であること。これらの結果を用いた体操指導は一連の全身運動としての熟練につながると考えられた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1102-111] バイオメカニクス（奇数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-19] eスポーツにおける感度と前腕動作に関する研究

シューティングゲームを対象として

*星宮 貴弥[1] (1. 新潟大学)

eスポーツは、ゲームを使った対戦をスポーツ競技として捉えた際の名称である。eスポーツの技術力向上に関する先行研究では、手部動作の解析手法に関する研究や感度設定支援に関する研究が見られたが、それらを組み合わせたものは行われていなかった。そこで本研究では、シューティングゲーム初心者を対象とし、トラッキング動作における感度の違いが射撃スコアと前腕動作に与える影響を明らかにすることを目的とした。マウスを使用したゲームをしたことがない18歳以上の大学生・大学院生30人を対象者とし、ハイセンシ(HS)10名、ミドルセンシ(MS)10名、ローセンシ(LS)10名の3群の感度帯にグループ分けをした。試技はAimlabsという練習用ソフトを使用し、試技1分間の射撃スコアと前腕の身体骨特徴点、マウス先端の3次元位置座標値を計測し、3次元DLT解析を行った。射撃スコアは各群の平均値、標準偏差を算出し、前腕の骨特徴点及び、マウス先端の点からは、それぞれの座標値の変位と速度、角度を算出し、算出されたそれぞれの群の値に正規性・等分散性があるか確認した後、射撃スコアには一元配置分散分析、前腕動作にはKruskal Wallis検定を行い、有意差が見られた項目については事後検定を行った。射撃スコアの平均値と標準偏差、肘の変位の分散平均においてはHS・MS間、HS・LS間において有意な差が見られた。平均速度ではHS・MS間、HS・LS間で有意な差が見られ、中央値ではMS・LS間で有意な差が見られた。角度ではHS・LS間で分散平均に、HS・MS間、MS・LS間では分散中央値に有意な差が見られた。HSでは少ない前腕動作でターゲットを追いかけられることで安定したエイム動作が可能となり、平均スコアが高くなったと考えられる。今後はトラッキング動作以外の動作についても研究の余地があると考えられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育経営管理

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育経営管理

[3b1112-116] 体育経営管理／ポスター発表

[06経-ポ-01]

運動の意欲を金銭的に可視化する

*笹田 周作[1]、宗野 文俊[2] (1. 相模女子大学栄養科学部健康栄養学科、2. 相模女子大学学芸学部子ども教育学科)

[06経-ポ-02]

特定の地方自治体における公共施設の整備のあり方や現状
特に公共施設等総合管理計画に着目して

*永田 秀隆[1] (1. 仙台大学)

[06経-ポ-03]

2020年東京オリンピックにおけるインバウンド観光客の消費および旅行形態の予測 ― 支払意思額（WTP）の活用による

*JUNG HYUN YE[1] (1. 筑波大学)

[06経-ポ-04]

大学生アウトドアリーダーにおける活動から得られる恩恵の特徴

*松岡 咲綾[1]、中井 聖[2]、神野 周太郎[2]、佐藤 眞史[3] (1. 大阪電気通信大学大学院、2. 大阪電気通信大学、3. 特定非営利活動法人ナック)

[06経-ポ-05]

大学生の女子剣道部におけるチームワークに関する研究
高知県での地域貢献イベントの運営の事例をもとに

*大井 理緒[1]、柴山 慧[2]、浦 佑大[1]、岡田 大暉[1] (1. 環太平洋大学、2. 福山平成大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育経営管理

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育経営管理

[3b1112-116] 体育経営管理／ポスター発表

[06経-ポ-01] 運動の意欲を金銭的に可視化する

*笹田 周作[1]、宗野 文俊[2] (1. 相模女子大学栄養科学部健康栄養学科、2. 相模女子大学学芸学部子ども教育学科)

本研究は運動習慣獲得に必要な要因を明らかにすることを目的としている。今回の調査では運動習慣のない者が運動に至る金銭的価値観と運動習慣のある者が運動にかけている費用を調査した。2025年2〜3月にWebアンケートを用いて関東近郊にある学校法人の教職員527名を対象に実施した。アンケートは回答者の基本属性（年齢、身長、体重、性別、家族構成）および現在の運動習慣を調査した。運動習慣がない回答者からは、運動を1時間実施してもよいと思える報酬額を、運動習慣がある回答者からは過去1年間で運動にかけた費用を調査した。回答者の平均年齢およびBMIはそれぞれ44.7±12.5歳および20.7±3.0であった。性別比は女性63%、男性37%であった。「運動習慣あり」が31.4%（n=50）、「運動習慣なし」が68.6%（n=109）であった。「運動習慣なし」の回答に対し「好きな運動を比較的理想的な条件で、費用を必要とせず実施できる場合、現在の生活習慣の中で週に2回、1回30分以上（1週間当たり計60分）の運動をしてもよいと思える最低限必要な報酬額」を選択式で尋ねた。運動習慣なしの50.5%（n=55）が「0円（提示した条件であれば報酬不要）」と回答し、49.5%（n=54）は「500〜8000円」の選択肢、つまり報酬が必要と回答した。運動1時間に必要な報酬額の中央値は500円／時（年間26000円）であった。「運動習慣あり」の回答者に対し「過去1年間における運動に関連した支出額」を選択式で尋ねたところ、支出の中央値は47500円であった。年間支出「0円」は14%（7名）であった。本調査の集団において中央値を基準にすると、運動習慣のない者が運動に至り継続するには年間73500円程度の支出を超える運動への意欲が必要であると推察される。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育経営管理

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育経営管理

[3b1112-116] 体育経営管理／ポスター発表

[06経-ポ-02] 特定の地方自治体における公共施設の整備のあり方や現状
特に公共施設等総合管理計画に着目して

*永田 秀隆[1] (1. 仙台大学)

わが国の公共施設等の老朽化対策は喫緊の課題であり、中長期的な視点で統廃合、更新や長寿命化などの計画的な実施が求められる。国は2013年6月に閣議決定された「日本再興戦略―JAPAN is BACK―」に基づき、同年11月には「インフラ長寿命化基本計画」を策定した。2014年4月には公共施設等総合管理計画（以下総合管理計画）の策定が総務省から地方自治体に要請され、また総合管理計画に基づく個別施設計画の策定による財政負担の軽減・平準化が各自治体に求められた。これらの政策等の策定を踏まえ、髙橋（2019）は公共施設の維持管理や統廃合を各自治体はどう進めていくべきかについて課題を整理し今後の方向性について示唆した。斉藤ほか（2021）は各自治体の公共施設整備の変遷の差異に応じた縮減や平準化の視点における施設整備のあり方について、公共施設データベースを構築・分析し、統計解析により自治体を類型化し整理・可視化を行い類型毎に考察した。三浦・川﨑（2022）は、先行研究の知見を踏まえ総合管理計画策定済みの市町村を対象としたアンケート調査結果等に基づき分析し、総合管理計画策定要請後の地方自治体における公共施設のマネジメントについて独自の視点で明らかにした。一方総合管理計画の施設類型の中に「スポーツ・レクリエーション系施設」が含まれており、これがいわゆる公共スポーツ施設と同等と捉えられる。2018年にスポーツ庁が「スポーツ施設のストック適正化ガイドライン」を策定しており、これは個別スポーツ施設の安全性・持続性確保のための個別施設計画作成を契機とし、地域のスポーツ環境の持続的な提供を計画的に図るための指針・手引きとなっている。特にスポーツ施設に関心を寄せつつ、特定の自治体においてどのような方法等で施設整備が進められているか、また実際の施設整備の現状についての整理を目的とする基礎的な研究と位置付ける。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育経営管理

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育経営管理

[3b1112-116] 体育経営管理／ポスター発表

[06経-ポ-03] 2020年東京オリンピックにおけるインバウンド観光客の消費および旅行形態の予測 ― 支払意思額（WTP）の活用による

*JUNG HYUN YE[1] (1. 筑波大学)

オリンピックなどのメガスポーツイベントを主催する国は、国際的な名声を高めるとともに経済発展の機会を得ることができる。オリンピックを開催するという事実だけでも世界的な注目が集まり、オリンピック終了後においても開催国の観光産業に大きな影響を及ぼすことが期待される。しかし2020年東京オリンピックは、日本政府が多大な努力と予算を投じて開催準備を進め、オリンピック観光による経済効果が期待されていたにもかかわらず、新型コロナウイルス感染症の影響により日本政府および日本オリンピック委員会（JOC）は、国内観客のみならず、インバウンド観光客の受け入れも許可しなかった。本研究は、日本政府が2020年東京オリンピックにおいてインバウンド観光客の受け入れを許可したという仮定の下で、2020東京オリンピック観光に対するインバウンド観光客の支払意思額（Willingness to Pay：WTP）を調査し、それに基づいて当該イベントに伴う観光収入の推定を試みたものである。また、東京オリンピック観光を目的として訪日するインバウンド観光客の特性についても分析を行った。本研究では、条件付評価法（Contingent Valuation Method：CVM）の一手法であるWTPを用いた。CVMは、消費者が実際に商品やサービスを購入していない場合でも、市場に存在する財やサービスに対する効用（満足度）を推定することが可能であるため、本研究の目的に適した手法であると考えられる。本研究を通じて、2020年東京オリンピックにおけるインバウンド観光客のWTPに基づき、インバウンド観光客一人当たりのオリンピック観光に関する概算消費額およびスポーツに関連する旅行形態を分析することができる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育経営管理

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育経営管理

[3b1112-116] 体育経営管理／ポスター発表

[06経-ポ-04] 大学生アウトドアリーダーにおける活動から得られる恩恵の特徴

*松岡 咲綾[1]、中井 聖[2]、神野 周太郎[2]、佐藤 眞史[3] (1. 大阪電気通信大学大学院、2. 大阪電気通信大学、3. 特定非営利活動法人ナック)

自然体験施設でプログラム提供に携わる大学生アウトドアリーダーの中には、様々な理由から活動を半ばで断念するケースが散見され、今後の安全な活動の提供や施設の円滑な運営に支障を来すことが懸念される。本研究は、大学生アウトドアリーダーにとって活動継続に繋がることが想定される、活動の中で得られたことや活動してよかったと感じたこと（以下、活動から得られる恩恵）を調査し、全体的な特徴を理解しようとした。複数の自然体験施設を運営する団体Nに所属する大学生アウトドアリーダー86名を対象に、属性や活動状況、活動から得られる恩恵を問う質問紙調査を集合調査によって実施した。活動から得られる恩恵の自由記述回答は、短文に分解して重要と思われるものを抽出し、KJ法に倣ってカテゴリ化した。その結果、大学生アウトドアリーダーの活動から得られる恩恵は、「活動の知識やスキル」、「子どもから受ける恩恵」、「自己成長」、「将来のキャリアに必要な力」、「人間関係の広がり」の5つの大カテゴリに分類された。活動の知識やスキルには、各種のプログラムやリスクマネジメントの知識とスキル、子どもから受ける恩恵には、ともに活動する子どもとのやり取りから得られる喜びや笑顔、子どもの成長の実感が含まれ、これらはアウトドアリーダーの活動から直接的に享受される恩恵と考えられた。一方、自己成長には、コミュニケーションや対人関係、物事を進める力、リーダーシップの獲得、自分の考えの広がりや自己理解、将来のキャリアに必要な力には、子どもとの関わり方や教師に必要な力の習得、人間関係の広がりには、人との出会いと繋がり、仲間や友人の広がりが挙げられ、活動から副次的に得られる恩恵と考えられた。これら活動から得られる恩恵を感じられるような活動を提供するように配慮されれば、大学生アウトドアリーダーのより継続的な活動が望めると考えられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育経営管理

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育経営管理

[3b1112-116] 体育経営管理／ポスター発表

[06経-ポ-05] 大学生の女子剣道部におけるチームワークに関する研究

高知県での地域貢献イベントの運営の事例をもとに

*大井 理緒[1]、柴山 慧[2]、浦 佑大[1]、岡田 大暉[1] (1. 環太平洋大学、2. 福山平成大学)

一般的に、競技成績とチームワークには正の関連性があることが報告されており（阿江ら，2015）、そのような視点から、剣道の女子団体戦チームの上位大学はチームワークが高いと考えられるが、女子剣道のチームワークに関する研究は管見の限り見当たらない。

そこで、本研究では，大学の女子剣道部の学生が、子ども向け剣道体験イベントを企画・運営を通して、チームワークについてどのように認識したのか事例的に明らかにすることを目的とする。

具体的には、岡山県にあるK大学の女子剣道部が2024年7月6日に高知県で企画・運営した子ども向け剣道体験イベント後のアンケート調査について、チームワークを構成する要素のうち態度的要素に着目して、その結果を分析する。

イベント終了後にイベントに参加した学生を対象にチームワークに関するアンケート調査を行った。具体的な質問項目は、「チームの成長」と「チームの変化」について感じたかどうかの有無と具体的な内容を自由記述回答で求めるものであった。そして、自由記述回答については、AIテキストマイニング（ユーザーローカル社）を用いて、共起分析を行った。さらに、1年生13名と上級生（２年生から４年生）14名に分けて比較を行い、「チームの成長」と「チームの変化」の認識について、部への所属年数による違いを検討した。その結果、K大学の女子剣道部員は、イベントを通して、「チームの成長」と「チームの変化」について90%以上の学生が認識していることが明らかとなった。次に、チームワークを構成する行動的要素の凝集性、チーム効力感、相互信頼感、心理的安全性の全てを認識したことが推察される。また、1年生と上級生の比較では、1年生は主に心理的安全性が、上級生は主に凝集性について認識していることが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：保健

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／保健

[3b1117-123] 保健／ポスター発表

[10保-ポ-01]

定期健康診断および健康に対する学生の関心と知識

*星野 秀樹[1]、岡田 摩紀[1]、加藤 渡[2]、淺川 正堂[2]、寺田 恭子[3]、寺田 泰人[3]、菊池 理恵[4]、渡部 努[5]、藤巻 裕昌[6] (1. 愛知文教女子短期大学、2. 修文大学短期大学部、3. 桜花学園大学、4. 名古屋柳城短期大学、5. 岡崎女子短期大学、6. 名古屋女子大学短期大学部)

[10保-ポ-02]

ヘルスリテラシーと保健の知識，感情・価値・期待，活用との関連

*物部 博文[1]、小浜 明[2]、砂田 芽衣[3] (1. 横浜国立大学、2. 仙台大学、3. 赤坂台中学校)

[10保-ポ-03]

クロノタイプ夜型学生の生活習慣と気分および主観的睡眠評価の特徴

*大石 祥寛[1] (1. 帝塚山大学教育学部)

[10保-ポ-04]

輻射熱の有無が同等湿球黒球温度環境での歩行時の体温調節反応および温熱感覚におよぼす影響

*山下 直之[1]、永井 暉之[2]、和田 健太郎[2]、吉村 颯馬[2]、久米 雅[3] (1. 京都工芸繊維大学、2. 京都工芸繊維大学大学院、3. 京都文教短期大学)

[10保-ポ-05]

高校生を対象としたリスク診断アプリケーションによるリスク測定
ストレス・生活時間の傾向および性格との関連

*満下 健太[1]、安永 太地[2]、塩田 真吾[1] (1. 静岡大学、2. 早稲田大学)

[10保-ポ-06]

福岡県KDBシステムのレセプト件数・医療費の加齢変化および関連要因
福岡市・北九州市・筑豊地域の2022年度のデータから

*池田 孝博[1]、中原 雄一[2]、青柳 領 (1. 福岡県立大学、2. 久留米大学)

[10保-ポ-07]

キャンパス内のテントサウナを用いた積極的休養の効果

*高橋 珠実[1] (1. 東洋大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：保健

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／保健

[3b1117-123] 保健／ポスター発表

[10保-ポ-01] 定期健康診断および健康に対する学生の関心と知識

*星野 秀樹[1]、岡田 摩紀[1]、加藤 渡[2]、淺川 正堂[2]、寺田 恭子[3]、寺田 泰人[3]、菊池 理恵[4]、渡部 努[5]、藤巻 裕昌[6] (1. 愛知文教女子短期大学、2. 修文大学短期大学部、3. 桜花学園大学、4. 名古屋柳城短期大学、5. 岡崎女子短期大学、6. 名古屋女子大学短期大学部)

「目的」本研究の目的は、大学生を対象に学校保健安全法に基づき年１回実施されている定期健康診断に対する学生の意識や知識を調べることにより、学生自身の健康意識の向上および、大学で実施する健康教育に関する課題を検討することである。「方法」愛知県下の保育者養成系大学の2、3年生と同短期大学の2年生を対象に、Google Formsを利用して2024年6月にアンケート調査を行なった。アンケート調査の回答者数は365人(女子358人、男子7人）、平均年齢は19.8±1.2歳であった。
「結果および考察」自分の健康に非常に関心があると回答した学生は110人(30.1%）、少し関心がある学生は202人(55.3%)であった。定期健康診断の結果に大いに関心があると回答した学生は105人(28.8%）、異常値があった時には関心があると答えた学生は197人(54.0%)であった。反面、検査項目について異常の原因を理解しているかの問いには血圧、聴力、胸部レントゲン、尿検査において理解度が低い結果を示した。本調査の対象学生は大学での定期健康診断を１回ないし２回経験している学生である。今回の調査によって、自分の健康と健康診断の結果に対して強い関心を持っている学生が多く、異常値がない時でも検査結果について説明が欲しいと思っている学生が約３割いることなどが明らかになった。ところが、定期健康診断で検査される項目についての医学的な意味はほとんど理解できていない。すなわち定期健康診断で得られた自分の健康情報が十分には生かされておらず、自分の健康を守るための医学的な基礎知識や情報が不足していると推察できる。そのため大学は学内の定期健康診断に直接関わる部署だけでなく、健康科学やスポーツ、保健、健康関連の授業を担当する教員とも連携して、学生の健康意識を高め、必要な健康知識や情報を提供する必要があることが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：保健

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／保健

[3b1117-123] 保健／ポスター発表

[10保-ポ-02] ヘルスリテラシーと保健の知識，感情・価値・期待，活用との関連

*物部 博文[1]、小浜 明[2]、砂田 芽衣[3] (1. 横浜国立大学、2. 仙台大学、3. 赤坂台中学校)

目的：大学生を対象にヘルスリテラシーと保健の知識，感情・価値・期待，活用との関連について明らかにすることを目的とした。研究方法：2024年４月入学の大学１年生201名を対象に回答および合意の得られた185名（有効回答率92%）を分析対象とした。「保健」に関する問題（以下，知識問題，14項目），感情（3項目），価値（3項目），期待(5項目)，「保健」の生活への活用（以下，生活活用，3項目），山本らのヘルスリテラシー尺度等の項目を含む自記式質問紙調査をGoogle formsを用いて実施した。知識問題は，エイズの感染経路，インフルエンザの予防接種，予防3原則，教室の換気，新型コロナウイルスの感染力,手洗いの効果,マスクの効果,「かぜ」,心臓の位置,胸骨圧迫の部位,AEDの役割,乳歯と永久歯,排卵時期,喫煙のストレス軽減効果であり,（公社）日本学校保健会『保健教育推進委員会報告書』や『「授業書」方式による保健の授業』における問題等を引用または参考に作成した。「保健」に関する感情・価値・期待および生活活用については合計点を算出した。ヘルスリテラシー，知識問題，感情，価値，期待，生活活用の各得点間の相関関係（Peason相関係数）を求めた。結果と考察：各項目の平均値±標準偏差は，ヘルスリテラシー133.36±18.52，感情8.42±2.06，価値11.22±1.14，期待15.90±1.49，生活活用8.52±1.71，知識問題8.99±1.78であった。ヘルスリテラシー得点は，感情，価値，期待，生活活用と有意な正の相関関係を示したものの，知識問題とは有意な相関関係が認められなかった。知識問題と有意な相関関係が認められた項目は，生活活用のみであった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：保健

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／保健

[3b1117-123] 保健／ポスター発表

[10保-ポ-03] クロノタイプ夜型学生の生活習慣と気分および主観的睡眠評価の特徴

*大石 祥寛[1] (1. 帝塚山大学教育学部)

【目的】本研究の目的は、クロノタイプが夜型の学生の生活習慣と気分および主観的睡眠評価の特徴を明らかにすることであった。
【方法】A大学に在籍する学部1回生から4回生までのうち、研究協力の同意が得られた大学生216名を対象に質問紙調査を行った。質問紙調査は、2024年12月に実施した。質問紙は、朝型・夜型質問紙、健康度・生活習慣診断検査(DIHAL.2)、気分プロフィール検査(POMS2)に加えて、ピッツバーグ睡眠質問票および日本語版エプワース睡眠尺度質問票を用いた。朝型・夜型質問紙調査の結果、明らかな朝型0名、ほぼ朝型が8名（3.7%）、中間型学生が133名（61.6%）、ほぼ夜型が72名（33.3%）、明らかな夜型が3名（1.4%）であった。質問紙の各項目は、朝型の学生（ほぼ朝型）、中間型の学生、夜型の学生（ほぼ夜型・明らかな夜型）の3群に分けて比較した。
【結果および考察】DIHAL.2の結果、夜型学生は、精神的健康度において中間型学生および朝型学生より評価が低く、身体的健康度において中間型学生より評価が低かった。生活習慣では、食事の規則性と、睡眠の規則性および睡眠充足といった睡眠習慣関連因子において中間型学生および朝型学生より評価が低かった。POMS2の結果、夜型学生および中間型学生は、ネガティブな気分を総合的に表す得点において朝型学生に比べて高かった。主観的睡眠の評価の結果では、夜型学生は中間型学生および朝型学生より評価得点が低かった。また、日中の眠気は、クロノタイプ間による差はないものの、216名中113名が「悪い」と評価されており、本研究対象者全体としては日中の眠気が高い傾向にあった。これらの結果より、夜型学生の生活習慣と気分および主観的睡眠評価は、中間型学生または朝型学生のそれらより改善の余地が大きいものと考えられた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：保健

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／保健

[3b1117-123] 保健／ポスター発表

[10保-ポ-04] 輻射熱の有無が同等湿球黒球温度環境での歩行時の体温調節反応および温熱感覚におよぼす影響

*山下 直之[1]、永井 暉之[2]、和田 健太郎[2]、吉村 颯馬[2]、久米 雅[3] (1. 京都工芸繊維大学、2. 京都工芸繊維大学大学院、3. 京都文教短期大学)

歩行中に輻射熱に暴露された際の体温調節反応や温熱感覚に関する知見は限られている．そこで本研究では，輻射熱の有無が同等湿球黒球温度（WBGT）環境での歩行時の体温調節反応と温熱感覚におよぼす影響を検討することを目的とした．対象者は13名の若年男性であった．対象者の背部に輻射熱を照射する日射有条件と輻射熱無しの日射無条件ともにWBGTが約28℃になるように設定し，トレッドミル上を時速5 km/hで1時間歩行した．その間に直腸温，皮膚温，胸・背部の局所発汗量および前・後面の温熱感覚を測定した．さらに実験前後の体重変化から体重減少量を算出した．運動後の直腸温の変化率は2つの条件ともに約0.5℃上昇し，有意差はなかった($p = 0.29$)．平均皮膚温の変化率では日射有条件で1.8℃上昇したが，日射無条件では0.5℃の上昇であった ($p < 0.001$)．また，胸部発汗量に条件間に有意差はなかったが($p \geq 0.06$)，背部局所発汗量では日射有条件が日射無条件に比較して有意に多かった($p \leq 0.03$)．しかし，体重減少量については条件間に有意差はなかった($p = 0.46$)．また，背部の温熱感覚は日射有条件が日射無条件に比較して有意に暑いと感じていたが($p \leq 0.02$)，腹部の温熱感覚は条件間に有意差はなかった($p \geq 0.59$)．これらのことから，輻射熱暴露された部位の皮膚温が上昇することで発汗量も増大し，局所的により暑く感じるものの，他の部位ではその影響はないことが示唆された．本研究の結果から，WBGTが同等であっても輻射熱を受ける部位では皮膚温や局所発汗量が増加し，温熱感覚も悪化することが明らかとなった．したがって，輻射熱のある暑熱環境では温熱感覚の改善に輻射熱を受ける部位への暑熱対策の必要性が示唆された．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：保健

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／保健

[3b1117-123] 保健／ポスター発表

[10保-ポ-05] 高校生を対象としたリスク診断アプリケーションによるリスク測定
ストレス・生活時間の傾向および性格との関連

*満下 健太[1]、安永 太地[2]、塩田 真吾[1] (1. 静岡大学、2. 早稲田大学)

本研究では，学校における睡眠不足やストレス増加といった生活上のリスクの予測およびアラートシステム構築のため，高校生を対象としてリスク診断アプリケーションを通して測定した生活時間およびストレスの変動の傾向およびそれらの変動と性格特性との関連について報告する。高校生174名が短縮版Big Five尺度，生活調査(睡眠/勉強/家事/趣味/スクリーンタイムに費やす時間)およびストレス尺度(身体的反応，抑うつ，不機嫌，無気力)について約20日ごと4〜6時点で回答した。このうち，同じ4時点で回答のあった44名のデータについて，Big Five5因子を中央値で高低群に分け，ストレス尺度と生活時間のそれぞれについて群分けおよび時点を独立変数とした混合計画分散分析を行った。結果として，性格と時点の効果は全体的に多くはなかったものの，身体的反応において誠実性と，抑うつにおいて外交性と時点との交互作用が見られた。単純主効果を調べたところ，身体的反応における誠実性×時点の結果については，誠実性高群で2波と3波の間にかけてやや上昇する傾向があった。また，抑うつにおける外交性×時点の結果については，外交性低群では4時点でほぼ変化していない一方で高群ではやや上下する傾向があった。これらの結果は，全体で見ると性格がストレスの変動に大きく影響はしていないが部分的には影響し，一定のパターンが潜在する可能性を示している。その他の結果に関しては当日までの進捗までで報告する。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：保健

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／保健

[3b1117-123] 保健／ポスター発表

[10保-ポ-06] 福岡県KDBシステムのレセプト件数・医療費の加齢変化および関連要因

福岡市・北九州市・筑豊地域の2022年度のデータから

*池田 孝博[1]、中原 雄一[2]、青柳 領 (1. 福岡県立大学、2. 久留米大学)

近年、国民健康保険団体連合会の保険者情報（KDBシステム）を利活用した研究が行われている。本研究では、福岡県KDBシステムのレセプト情報に基づいて、レセプト件数および医療費の加齢変化と関連要因について明らかにすることを目的とする。2022年4月から翌年3月までの、福岡市、北九州市および筑豊地域における疾病別医療費（大分類）のレセプト情報から、23種類の疾患について、性別、年齢ごと（0〜74歳）、入院・外来別（入外区分）に集計された計20,700件のデータを抽出した。そのうち本研究では、疾病レセプト件数（件数）、総保険点数（点数：医療費の指標）の情報に注目した。件数および点数をそれぞれ従属変数、3つの地域を共変量とし、独立変数を性別（男性:0）、入外区分（入院:0）、疾患（その他:0）、年齢（0歳:0）のダミー変数に設定した重回帰分析を行った。さらに、得られた各年齢の標準化偏回帰係数の変化点（屈曲点）について検討した結果、件数では62.1歳、点数は62.7歳から著しく上昇していることが示された。また、独立変数（アイテム）の偏相関係数を算出した結果、年齢（件数0.361,点数0.499）に次いで高値を示したのは、疾患（件数0.265,点数0.368）で、入外区分（件数0.245,点数0.045）、性別（件数0.039,点数0.008）の関連は小さかった。そこで、疾患の内容（カテゴリー）を検討した結果、件数ついては、「内分泌、栄養及び代謝疾患（0.145）」「循環器系の疾患（0.132）「筋骨格系および結合組織の疾患（0.097）」が、点数においては、「新生物＜腫瘍＞（0.238）」「循環器系の疾患（0.175）「筋骨格系および結合組織の疾患（0.121）」「精神および行動の障害（0.118）」「内分泌、栄養及び代謝疾患（0.117）」の関連が相対的に大きいことが示された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：保健

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／保健

[3b1117-123] 保健／ポスター発表

[10保-ポ-07] キャンパス内のテントサウナを用いた積極的休養の効果

*高橋 珠実[1] (1. 東洋大学)

【背景・目的】　積極的休養は、活動により老廃物の除去や新陳代謝の向上を促すことで心身の活力を養う休養方法であり、生理的休養の一つ、運動型として分類されている。その積極的休養を取り入れた研究では、気分や健康関連QOL等の向上が報告されている。本研究では積極的休養の方法として、キャンパス内でテントサウナを用いたサウナ浴を実施し、そのキャンパス内テントサウナ浴が一般成人およびアスリートの睡眠、ストレス、免疫機能、および気分に与える影響を検討した。【方法】　被験者は、一般成人3名（女性２名、男性１名）、女子学生アスリート９名の計12名であった。サウナ浴実験は、東洋大学 朝霞キャンパスにて行った。サウナ浴にはテント式のサウナ（HONMA社製 HSS-560SP）を用いて行った。測定調査項目は①客観的睡眠評価（活動量計MTN-220・221)、②ストレス・免疫機能測定(唾液中コルチゾールおよびsIgA)、③ストレス度・疲労度調査(VAS法)、④サウナ中の心拍数測定(SmartBand7)、および⑥感想であった。【結果・考察】　客観的睡眠評価の結果について、コントロール３日間（コントロール）とサウナ浴後（サウナ実施日を含む）３日間の平均で比較を行ったところ、有意差はみられなかった。しかし、コントロールの睡眠効率が最も低い被験者の結果に注目すると、サウナ浴後の値に大きな変化がみられ、サウナ浴により、睡眠の質が大きく改善したことが示唆された。また、免疫機能指標として用いた唾液中sIgAのサウナ浴前後の比較においては有意差がみられなかったが、ストレス指標となるコルチゾールのサウナ浴前後の比較においては有意差がみられ、サウナ浴後の値が有意に低下した。この結果および被験者の感想から、キャンパス内テントサウナがストレス低減に与える効果が大きいことが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：運動生理学

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／運動生理学

[3b1124-128] 運動生理学（奇数演題）／ポスター発表

[04生-ポ-01]

膝関節伸展屈曲時の膝関節角度が筋力発揮に与える影響

新たに開発したゴニオメーターを用いて

*石川 芽生子[1]、森本 拓実[2]、廣田 音奏[3]、成田 泰崇[4]、小谷 恭子[5]、河鰭 一彦[1] (1. 関西学院大学、2. 早稲田大学　、3. 大阪産業大学　、4. 国士舘大学、5. 帝塚山学院大学)

[04生-ポ-03]

事前の軽負荷運動が伸張性運動後の筋損傷および動脈スティフネス及ぼす影響

*橋本 佑斗[1,2]、江崎 一希[3] (1. 明治安田健康開発財団, 健康増進支援センター、2. 日本体育大学, 体育研究所、3. 日本体育大学大学院)

[04生-ポ-05]

暑熱下運動中におけるペルチェ素子による頸部冷却の有用性の検討

*内藤 貴司[1] (1. 北海学園大学)

[04生-ポ-07]

月経周期が持久性運動時の血中I-FABPに及ぼす影響

*松田 知華[1]、山田 満月[2]、鰐渕 めぐみ[3]、山瀬 花[3]、須永 美歌子[3] (1. 名古屋大学、2. 和光大学、3. 日本体育大学)

[04生-ポ-09]

有酸素運動および食事・栄養指導介入が女子大学生の糖化マーカーに及ぼす影響

*中島 早苗[1]、山田 直子[2] (1. 共立女子短期大学、2. 文教大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：運動生理学

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／運動生理学

[3b1124-128] 運動生理学（奇数演題）／ポスター発表

[04生-ポ-01] 膝関節伸展屈曲時の膝関節角度が筋力発揮に与える影響
新たに開発したゴニオメーターを用いて

*石川 芽生子[1]、森本 拓実[2]、廣田 音奏[3]、成田 泰崇[4]、小谷 恭子[5]、河鰭 一彦[1] (1. 関西学院大学、2. 早稲田大学　、3. 大阪産業大学　、4. 国士舘大学、5. 帝塚山学院大学)

加齢や運動不足により全身の筋力が低下することは多くの研究により明らかとなっている。さらに加齢による筋量の減少率が最も大きいのは下肢筋力であると報告されている。このことからこれまで下肢筋力に着目した研究は多く行われている。一方でこれまで下肢筋力を測定する際に多く用いられている膝関節伸展屈曲動作における最大随意筋力の測定はアイソメトリック、コンセントリック、エキセントリックをそれぞれ分けて実施している。それぞれの測定を分けて行うことで、被験者の姿勢が測定ごとに変化してしまうことや筋力と筋活動を併せて検討する場合、電極貼付位置のズレによる測定誤差が多くの研究で課題として挙がっていた。そこでこれらの課題を踏まえ、アイソメトリック、コンセントリック、エキセントリックの測定を連続的に行うための多用途筋力計を開発し検証を行った。全ての測定において変動係数が10%前後であったため測定誤差が小さいことを示す指標であると考えられたが、膝関節伸展屈曲測定時の膝関節角度を考慮せず行ったため、関節の角度によって筋力発揮に違いが見られるのではないかという課題が新たに浮かんだ。そこで今回、膝関節伸展屈曲の筋力測定時にモニターに映し出された波形により膝関節角度がリアルタイムで確認することを可能としたゴニオメーターを新たに開発した。開発したゴニオメーターを膝関節に装着し、膝関節伸展屈曲時の筋力を測定することで被験者の膝関節角度を同定し測定することが可能となった。そこで本研究は多用途筋力計を用いた下肢筋力測定時に膝関節の角度を計測し膝関節角度が伸張・短縮・等尺性筋力発揮に与える影響について検討した。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：運動生理学

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／運動生理学

[3b1124-128] 運動生理学（奇数演題）／ポスター発表

[04生-ポ-03] 事前の軽負荷運動が伸張性運動後の筋損傷および動脈スティフネス及ぼす影響

*橋本 佑斗[1,2]、江崎 一希[3] (1. 明治安田健康開発財団, 健康増進支援センター、2. 日本体育大学, 体育研究所、3. 日本体育大学大学院)

【背景】高強度の伸張性運動は筋肥大や筋力向上に効果的であるが、運動後には著しい筋損傷と動脈スティフネスの増加が惹起される。一方、伸張性運動を行う前に軽い負荷の運動を行うことで、伸張性運動後の筋損傷は抑制される。本研究では、事前に行う軽負荷運動が伸張性動後の筋損傷だけでなく動脈スティフネスの増加を抑制するか検討した。【方法】対象は運動習慣のない若年男性とし、高強度伸張性レジスタンス運動のみ（ECC）群、事前の軽負荷伸張性レジスタンス運動実施（PEC）群、事前の軽負荷等尺性レジスタンス運動実施（PIS）群にランダムに分けた。すべての運動は10回6セットのアームカールとし、左右交互に実施した。高強度伸張性レジスタンス運動（HER）は最大挙上重量（1RM）の80%重量に設定したダンベルを用いて運動を実施した。PEC群およびPIS群は、HERの48時間前にそれぞれ伸張性および等尺性1RMの10%重量に設定したダンベルを用いて運動を実施した。筋損傷の指標は、肘屈曲最大等尺性筋力（MVC）を評価した。動脈スティフネスの指標である脈波伝播速度（PWV）は、中心（hbPWV）および全身（baPWV）を評価した。測定は運動前からHER 48時間後まで行った。【結果】HER前の各測定項目に群間差はなかった。ECC群とPIS群において、HER後のMVCは運動前と比較して運動直後から48時間後まで有意に低下した。一方、PEC群のMVCは運動前と比較して運動直後のみ有意に低下した。ECC群のbaPWVは運動前と比較してHER直後と48時間後に有意に増加し、hbPWVは運動前と比較して運動48時間後に有意に増加した。一方、PEC群とPIS群のPWVはHER前後で変化しなかった。【結論】事前の軽負荷伸張性運動は高強度伸張性運動による筋損傷と動脈スティフネス増加を抑制することが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：運動生理学

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／運動生理学

[3b1124-128] 運動生理学（奇数演題）／ポスター発表

[04生-ポ-05] 暑熱下運動中におけるペルチェ素子による頸部冷却の有用性の検討

*内藤 貴司[1] (1. 北海学園大学)

本研究は、暑熱環境下における運動中のペルチェ素子を用いたネッククーラー（頸部冷却）の生理学的および主観的感覚への影響を検討することを目的とした。健常男性8名を対象に、①頸部冷却なし（CON試行）と②頸部冷却あり（COOL試行）のランダム化比較試験を実施し、自転車エルゴメーターによる45分間の運動を行った。運動中の直腸温、鼓膜温、平均皮膚温、心拍数、温熱感覚、温熱不快感、主観的運動強度、全身反応時間を評価した。結果として、COOL試行では頸部の皮膚温が運動開始5分後以降で有意に低下したが、直腸温や鼓膜温、心拍数には有意な差が認められなかった。一方、温熱感覚は運動開始から20分目まで有意に改善されたが、それ以降の差はなかった。温熱不快感や主観的運動強度、全身反応時間にも有意な差は認められなかった。これらの結果から、ペルチェ素子による頸部冷却は短時間の温熱感覚改善には有効であるものの、深部体温の抑制には限界があることが示唆された。暑熱障害の予防には、より広範囲の身体冷却を組み合わせる必要があると考えられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：運動生理学

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／運動生理学

[3b1124-128] 運動生理学（奇数演題）／ポスター発表

[04生-ポ-07] 月経周期が持久性運動時の血中I-FABPに及ぼす影響

*松田 知華[1]、山田 満月[2]、鰐渕 めぐみ[3]、山瀬 花[3]、須永 美歌子[3] (1. 名古屋大学、2. 和光大学、3. 日本体育大学)

【背景】持久性運動は、消化管傷害マーカーである腸型脂肪酸結合蛋白(I-FABP)を増加させることが報告されている。I-FABPと性差に関しては、これまで検討されてきたが、女性は月経周期を有している。月経周期に伴い、エストロゲンやプロゲステロンが約1ヶ月の周期で大きく増減するため、その影響を考慮する必要がある。しかし、月経周期に伴うこれらのホルモン動態が、運動時のI-FABPの変化に及ぼす影響については明らかとなっていない。【目的】月経周期が持久性運動時の血中I-FABPに及ぼす影響について検討した。【方法】健康な女性11名(年齢：20.4±0.6歳、月経周期：29.9±0.6日)を対象とした。卵胞期前期(E-FP)、卵胞期後期(L-FP)、黄体期(LP)にそれぞれ最大作業負荷容量の70%強度で60分間の自転車運動を実施した。運動前、運動終了直後、運動終了60分後に採血を行い、エストラジオール、プロゲステロン、I-FABP、コルチゾールを測定した。【結果】血清エストラジオールは、運動前、運動終了直後、運動終了60分後において、E-FPに比べてL-FPおよびLPで有意に高値を示した($p<0.01$)。血清プロゲステロンは、運動前、運動終了直後、運動終了60分後において、E-FPおよびL-FPに比べてLPで有意に高値を示した($p<0.01$)。血清I-FABPおよび血漿コルチゾールは、運動前、運動終了直後、運動終了60分後において、各フェーズ間に有意な差はみられなかった(血清I-FABP ：$p=0.38$、血漿コルチゾール：$p=0.07$)。また、各フェーズおよび各測定ポイントにおける血清エストラジオールや血清プロゲステロンと血清I-FABPは、有意な相関関係がみられなかった。【結論】月経周期は、持久性運動時における血中I-FABPに影響を及ぼさないことが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：運動生理学

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／運動生理学

[3b1124-128] 運動生理学（奇数演題）／ポスター発表

[04生-ポ-09] 有酸素運動および食事・栄養指導介入が女子大学生の糖化マーカーに及ぼす影響

*中島 早苗[1]、山田 直子[2] (1. 共立女子短期大学、2. 文教大学)

【背景】皮膚に沈着するAdvance Glycation End-Products(AGEs)は、加齢とともに蓄積し、若年層においても高値を示す者が確認されている。不適切な生活習慣によりその蓄積が助長・加速されることが懸念されるが、若年女性を対象とした介入研究は限られている。【目的】運動習慣のない女子大学生を対象に、有酸素運動または食事・栄養指導介入を行い、糖化マーカー（皮膚AGEs、血中HbA1c）に変化を検討した。【方法】被験者は週2回30分の有酸素運動を行う群(30ex群)、週1回60分の有酸素運動を行う群(60ex群)、毎日の食事記録と週１回のフィードバックを受ける食事・栄養指導実施群（Nu群）、および非介入の対象群（C群）に分けた。測定項目は皮膚AGEs、空腹時血糖、HbA1c、体組成、食物摂取頻度調査などとし、介入前、5週間後・10週間後・介入終了からおよそ3ヶ月後の4時点で評価した。【結果】HbA1cは、30ex群で6.8%→5.1%、60ex群で6.5%→4.7%、Nu群で7.3%→5.0%といずれも有意に低下した（$p<0.05$）。一方、対象群では変化がみられなかった。皮膚AGEsは30ex群で−12.3、60ex群で−6.4と改善傾向が認められたが、Nu群およびC群では有意な変化はみられなかった。【考察】運動介入は女子大学生の糖化マーカー改善に有効である可能性が示された。特にHbA1cは全介入群で改善がみられた。一方、皮膚AGEは短期間では変化しにくい指標であるが、運動によって一定の低下が確認された。しかしこの点においては、皮膚の状態や発汗などによる外部要因に影響される可能性もあり、今後さらに検討が必要である。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-01]

各種スポーツ施設における暑さ指数の系統誤差に関する研究

*高橋 和文[1]、金 興烈[2]、稲嶋 修一郎[3] (1. 金城学院大学、2. 南山大学、3. 愛知県立大学)

[08測-ポ-02]

規定テンポステップテストのテンポの検討

*青木 宏樹[1]、出村 慎一[2]、長澤 吉則[3]、浮田 咲子[4]、永山 亮一[5]、藤谷 かおる[2] (1. 福井工業高等専門学校、2. 金沢大学、3. 京都薬科大学、4. 関東学院大学、5. 北陸学院大学)

[08測-ポ-03]

演題取り下げ

[08測-ポ-04]

幼児における子ども口コモ判定と跳躍距離及び平均台歩行時間の関係

*浮田 咲子[1]、出村 慎一[2]、佐藤 敏郎[3]、青木 宏樹[4] (1. 関東学院大学　教育学部、2. 金沢大学大学院自然科学研究科 、3. 新潟医療福祉大学、4. 福井工業高等専門学校)

[08測-ポ-05]

非認知能力の高低群における体力・運動能力の関係
年長児を対象として

*横谷 智久[1]、杉浦 宏季[1]、山次 俊介[2]、山田 孝禎[2] (1. 福井工業大学　スポーツ健康科学部、2. 福井大学)

[08測-ポ-06]

幼児期における腸内細菌叢の経年変化
３年間の縦断的調査から

*小栗 和雄[1] (1. 岐阜聖徳学園大学 教育学部)

[08測-ポ-07]

幼児の体力・運動能力の現状と年次推移把握のための資料提供システムの完成度

*村瀬 智彦[1] (1. 愛知大学)

[08測-ポ-08]

小・中学生における体力合計点と根気得点（Grit）の相対年齢効果

*神舘 盛充[1,2]、森戸 剛史[3] (1. 日本健康・運動データ総合研究所、2. Pestalozzi Technology株式会社、3. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

[08測-ポ-09]

中学生および大学生野球選手における身体的要素とスイング速度の関係

*大城 勝生[1]、今若 太郎[2]、畑島 一翔[1]、田中 重陽[1] (1. 国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科、2. 上智大学基盤教育センター)

[08測-ポ-10]

高校野球選手におけるバット速度に及ぼす除脂肪量指数の影響

*山田 健二[1]、大野 貴弘[1]、竹島 弘晃[3]、須藤 明治[2] (1. 国士舘大学体育学部体育研究所、2. 国士舘大学体育学部、3. 株式会社Noble Action)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

[08測-ポ-11]
高校野球における体づくりへの選手の意識の違い
*須藤 明治[1]、大野 貴弘[2]、山田 健二[2]、竹島 弘晃[3] (1. 国士舘大学体育学部、2. 国士舘大学体育研究所、3. 株式会社Noble Action)

[08測-ポ-12]
肩関節可動域が野球投手の投球速度に及ぼす影響
*長谷川 伸[1] (1. 九州共立大学)

[08測-ポ-13]
野球選手におけるスクワットのパワー発揮特性とスイング速度の関係
*齋藤 大成[1]、田邉 凱聖[1]、畑島 一翔[1]、田中 重陽[1] (1. 国士舘大学大学院)

[08測-ポ-14]
野球内野手におけるショートバウンド捕球の動作特性
*森 崇信[1]、大田 穂[2] (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学)

[08測-ポ-15]
ストレートのタイプからみた投手へのアプローチ評価
*大野 貴弘[2]、山田 健二[2]、竹島 弘晃[1]、須藤 明治[3] (1. 株式会社Noble Action、2. 国士舘大学体育学部体育研究所、3. 国士舘大学体育学部)

[08測-ポ-16]
大学野球選手における投球障害との関連性に着目した肩甲骨偏位の縦断的検討
*百武 晃希[1]、藤井 雅文[2]、前田 明[2] (1. 鹿屋体育大学大学院、2. 鹿屋体育大学)

[08測-ポ-17]
盗塁を意識した走塁条件下における走動作特徴と下肢形態との関係
*久野 峻幸[1]、西本 浩章[1]、野上 展子[2] (1. 神戸医療未来大学、2. 大阪成蹊大学)

[08測-ポ-18]
大学男子ソフトボール選手のパワー発揮特性とスイング速度の関係
*田邉 凱聖[1]、齋藤 大成[1]、畑島 一翔[1]、秋葉 茂季[1]、田中 重陽[1] (1. 国士舘大学大学院)

[08測-ポ-19]
実業団女子ソフトボールにおける期待得点値を最大化するラインナップの選定
*中村 陽南[1]、廣津 信義[2]、大田 穂[3] (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学健康データサイエンス学部、3. 順天堂大学スポーツ健康科学部)

[08測-ポ-20]
カーリング競技におけるストーン速度の違いと動作特性の個人差
*小林 秀紹[1] (1. 札幌国際大学)

[08測-ポ-21]
様々な状況に応じた女子ラクロスのパスの正確性の検討
*富岡 咲紀[1]、勝見 康平[1]、来田 宣幸[1]、幸田 仁志[1] (1. 京都工芸繊維大学)

[08測-ポ-22]
関東大学サッカーリーグ戦における競技成績決定構造の特徴
*大石 健二[1,2]、矢野 晴之介[1]、小中 英嗣[2] (1. 日本体育大学、2. 名城大学)

[08測-ポ-23]
キンボールスポーツのプレー動作と運動強度・運動量の関係性の検討

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

*西口 治佳[1] (1. 太成学院大学)

[08測-ポ-24]

新体操における演技構成立案の方法について

*小澤 来瞳[1]、山田 健二[2]、須藤 明治[3] (1. 国士舘大学大学院、2. 国士舘大学体育学部体育研究所、3. 国士舘大学体育学部)

[08測-ポ-25]

トランポリン競技の国際審判員における出来栄えの採点傾向
審判階級間の比較

*河野 由[1]、實宝 希祥[2]、窪 康之[3]、横澤 俊治[3] (1. 大東文化大学、2. 九州共立大学、3. 国立スポーツ科学センター)

[08測-ポ-26]

大学運動選手における浮き趾の有無による足趾筋力、ファンクショナルリーチ、体格、及び身体組成の比較

*佐藤 敏郎[1]、出村 慎一[2]、青木 宏樹[3] (1. 新潟医療福祉大学、2. 金沢大学、3. 福井工業高等専門学校)

[08測-ポ-27]

座位姿勢における動的関節制御能力と足底圧様式の評価および足趾把持力との関連

*坂口 雄介[1]、尾山 裕介[2]、村山 敏夫[3] (1. 北陸大学、2. 桐蔭横浜大学、3. 新潟大学)

[08測-ポ-28]

若年者における支持基底面変動器具上での重心動揺変数の信頼性、及び前後と左右受動的バランス能力の性差及び方向差

*長澤 吉則[1]、出村 慎一[2]、青木 宏樹[3]、永山 亮一[4] (1. 京都薬科大学基礎科学系健康科学分野、2. 金沢大学、3. 福井工業高等専門学校、4. 北陸学院大学)

[08測-ポ-29]

高齢者における支持基底面積を基準とした有効支持基底面積の割合の性差

*杉浦 宏季[1]、山次 俊介[2]、山田 孝禎[2]、横谷 智久[1]、武 可[3] (1. 福井工業大学、2. 福井大学、3. 福井工業大学大学院)

[08測-ポ-30]

対側肢の力発揮がグレーディング能力に及ぼす影響

*速水 達也[1]、廣野 準一[1] (1. 信州大学)

[08測-ポ-31]

インソール型歩容センサーを利用した地域高齢者に対する健康・見守り支援の試み
利用者が感じる効果における男女の認識の違い

*佐藤 進[1] (1. 金沢工業大学)

[08測-ポ-32]

踏み出し戦略に着目した「転倒誘発装置」の検討
平衡能力と移動能力に焦点を当てて

*檜皮 貴子[1]、井上 咲子[2]、加藤 玲[3] (1. 新潟大学、2. 新潟大学大学院、3. 東京藝術大学)

[08測-ポ-33]

体力テストによる客観データと問診による主観データから見た転倒リスクに対する加齢の影響

*加藤 貴英[1]、早坂 太一[1]、近藤 雅哉[1]、川越 隆[2]、大須賀 洋祐[3] (1. 豊田工業高等専門学校、2. 愛知医科大学、3. 国立長寿医療研究センター)

[08測-ポ-34]

地域在住高齢者における肩関節の水平屈曲および水平伸展筋力とフレイル進行度との関連

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

*中谷 敏昭[1]、灘本 雅一[2]、金子 竜大[3] (1. 天理大学、2. 桃山学院大学、3. 京都先端科学大学)

[08測-ポ-35]

高齢者の体力を評価する質問項目の選定

*坂井 智明[1]、石原 一成[2] (1. 名古屋学院大学スポーツ健康学部、2. 福井県立大学)

[08測-ポ-36]

高齢者の反応ステップテストにおける敏捷性・平衡性と身体・認知機能との関連

*尾山 裕介[1]、坂口 雄介[2]、村山 敏夫[3] (1. 桐蔭横浜大学、2. 北陸大学、3. 新潟大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-01] 各種スポーツ施設における暑さ指数の系統誤差に関する研究

*高橋 和文[1]、金 興烈[2]、稲嶋 修一郎[3] (1. 金城学院大学、2. 南山大学、3. 愛知県立大学)

熱中症の予防には、環境温度を適切に評価する必要がある。日本では熱中症警戒アラートとして、暑さ指数（Wet Bulb Globe Temperature：以下WBGT）に基づいた注意喚起が行われている。WBGTは、スポーツや教育現場でも活用されているが、これまでスポーツ施設で観測されるWBGTと環境省が発信するWBGTの系統誤差については十分に報告がなされていない。本研究の目的は、芝生グラウンドと屋内プールのWBGTと環境省が発信するWBGTの系統誤差を調査することである。各スポーツ施設と環境省のWBGTとの系統誤差は、ブランド‐アルトマン分析により評価した。固定誤差は、対応のあるt検定を用いて各施設のWBGTと環境省のWBGTの測定値の差の信頼区間に「０」を含まない場合を固定誤差ありと判断した。比例誤差は、単回帰分析を用いて、回帰式に有意性があると判断した場合に比例誤差ありと判断した。有意水準は５％とした。結果、芝生グラウンドと環境省、屋内プールと環境省のいずれの関係においても、固定誤差と比例誤差に有意性が認められた。屋内プールは、施設そのものの温熱性能により、大きな固定誤差が認められた。他方で芝生グラウンドにおける固定誤差は、相対的にも絶対的にも小さく、影響は少ないものの、観測手法の違いも含めて、その理由を今後の研究で検討すべきである。また、正の比例誤差が有意なことから、WBGTが高くなるほど、芝生グラウンドと屋内プールのいずれにおいても熱中症警戒アラートよりも高くなることが想定され、これら施設での観測が求められる。K.Takahashi et. al.（2023）は、環境省のWBGTを活用してスポーツ施設のWBGTを予測する手法を提案しており、これらの系統誤差を考慮することで、WBGTの推定精度を高めることが期待される。本研究はJSPS科研費JP24K14570の助成を受けている

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-02] 規定テンポステップテストのテンポの検討

*青木 宏樹[1]、出村 慎一[2]、長澤 吉則[3]、浮田 咲子[4]、永山 亮一[5]、藤谷 かおる[2] (1. 福井工業高等専門学校、2. 金沢大学、3. 京都薬科大学、4. 関東学院大学、5. 北陸学院大学)

規定テンポステップテストは、種々のテンポが可能である。テンポにより関与する能力が異なるが、集中力や疲労の観点から適切なテンポを選択する必要があろう。本研究の目的は、規定テンポステップテストの適切なテンポを検討することであった。対象者は児童50名(男児25名、女児25名)で、彼らに測定器上で4種(40bpm、60bpm、90bpm、及び120bpm)のテンポに合わせて40秒間その場ステップすることを指示し、ステップ中の重心動揺を測定した。各テンポについて3試行実施し、最小値を代表値とした。評価変数として、単位時間軌跡長(①)、矩形面積(②)、平均位置X(③)とY(④)、及び標準偏差X(⑤)とY(⑥)を選択した。各変数におけるテンポ間差は対応のある1要因分散分析により、近接テンポ間の関係はピアソンの相関係数により検討した。各変数においてテンポ間に差がある、また、テンポ間の関係が低い場合は、両テンポに関与する能力が異なると判断される。1要因分散分析の結果、③を除いた変数において有意な主効果が認められ、①において120bpm、90bpm、60bpm、40bpmの順に、②及び⑥において40bpm及び60bpmが90bpm及び120bpmよりも、90bpmが120bpmよりも、④及び⑤において90bpmがその他のbpmよりも小さかった。また、①、②及び⑥において40bpmと60bpm間、60bpmと90bpm間、90bpmと120bpm間にそれぞれ有意な高い相関が認められ、④及び⑤において40bpmと60bpm間に有意な相関が認められたが、前者は低く後者は高かった。以上の結果から、児童対象の規定テンポステップテストの場合、120bpmと40bpmあるいは60bpmテンポの選択が適切と判断された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-04] 幼児における子ども口コモ判定と跳躍距離及び平均台歩行時間の関係

*浮田 咲子[1]、出村 慎一[2]、佐藤 敏郎[3]、青木 宏樹[4] (1. 関東学院大学　教育学部、2. 金沢大学大学院自然科学研究科 、3. 新潟医療福祉大学、4. 福井工業高等専門学校)

【背景】子どもの運動器機能不全(ロコモーティブシンドローム(ロコモ))の兆候を捉えるために子ども口コモ判定(口コモの疑いの有無)が利用されることがある。しかし、子ども口コモ判定と運動パフォーマンスの関係はこれまで詳細に検討されていない。【目的】幼児を対象に、子ども口コモ判定と跳躍距離及び平均台歩行時間の関係を検討する。【方法】対象者は健康な幼児49名(男児24名、女児25名)であった。口コモ判定のため、対象者に肩拳上、片足5秒立ち、体前屈、及びしゃがみ込みの４項目からなる口コモ度テストを実施し、それぞれ成就有無を確認し、その後、立ち幅跳び距離と平均台歩行時間を測定した。口コモ度テストの4項目とも成就可能な場合、口コモ疑い無し(無)群(25名)、1項目でも成就不可能な場合、口コモの疑いが有り (有)群(24名)と判定した。【結果】対応のないt検定の結果、両群の平均値間に、立ち幅跳び距離は有意差が認められなかったが、平均台歩行時間は有意差が認められ、無群が有群より短かった。口コモ無群は有群に比べ、立ち幅跳には差がないが平均台歩行は優れると判断される。【結論】子ども口コモ判定によるロコモ疑いの無い群は有り群より平均台歩行時間が短い。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-05] 非認知能力の高低群における体力・運動能力の関係

年長児を対象として

*横谷 智久[1]、杉浦 宏季[1]、山次 俊介[2]、山田 孝禎[2] (1. 福井工業大学　スポーツ健康科学部、2. 福井大学)

近年、国際的にも忍耐力や自己制御、自尊心といった社会的情動的スキルや、いわゆる非認知能力といったものを幼児期に身に付けることが大人になってからの生活に大きな差を生じさせるという研究が散見される。これらは、幼児教育における非認知能力の育成の重要性を示している。しかし、これまでに非認知能力の高低差において、体力・運動能力にどのような関係があるかについての研究は見当たらない。本研究の目的は、幼児の非認知能力の高低群における体力・運動能力の関係を明らかにすることであった。被験者は石川県加賀市W子ども園に通う年長児22名（男児11名、女児11名）を対象とした。測定種目は、身長、体重、ローレル指数、足趾筋力、握力、長座体前屈、立幅跳び、25m走、ボール投げおよび非認知能力（8項目）を調査した。非認知能力合計得点の平均値を算出し、平均値よりも高い得点を高群、低い得点を低群と分類した。そして上述した測定種目について高群、低群の被験者を対象として、平均値の差の検定（t-検定）を実施した。本研究の結果、足趾筋力、ボール投げの特定の運動能力において非認知能力と関連する可能性が示唆された。一方、その他の体力・運動能力と非認知能力においては有意な差が認められなかったことから、非認知能力と体力・運動能力の関係は一部の要素に限定される可能性がある。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-06] 幼児期における腸内細菌叢の経年変化
３年間の縦断的調査から

*小栗 和雄[1] (1. 岐阜聖徳学園大学 教育学部)

2025年5月に大腸ガンの原因の5割が腸内細菌の働きにある可能性が報告された。腸内細菌叢の組成バランスが乱れる、すなわちdysbiosisに陥ると、ガンだけでなく、肥満、アレルギー、皮膚疾患、婦人科疾患、精神疾患など多くの疾病につながる。この組成の変動因子は、食事・運動・睡眠などの生活習慣、ストレス、加齢が報告されており、健全な腸内環境を維持するためには、これらの因子の影響を理解する必要がある。加齢因子は、腸内は胎内の無菌状態から出生後に細菌が増殖し、3〜5歳で成人と同様の状態になるものと考えられている。しかし、小児期の腸内細菌叢の経年変化は、日本人小児から得られた知見は極めて少ない。そこで、本研究では、幼児を対象に腸内細菌叢の組成を3年間分析し、その経年変化を検討することを目的とした。幼児34名（男児15名、女児19名）を対象に、年少、年中、年長の各々12月に、体格と腸内細菌叢の測定、および運動習慣に関するアンケート調査を行った。糞便を採便容器にて収集し、細菌16SrRNAを標的とした定量的RT-PCR法による次世代シーケンサーを用いたメタゲノム解析を株式会社サイキンソーに委託した。門レベルの組成、保有菌の種類数や多様性指標、属レベルの各菌は、年少・年中・年長の間に有意差は認められなかった。年少・年中・年長の間において、保有菌の種類数や多様性指標、門レベルの組成は有意で強い相関関係が認められたが、Bifidobacterium、Lactobacillus、Blautia、Roseburia、Prevotella、Veillonellaは有意な相関関係が認められなかった。したがって、幼児期の腸内細菌叢は、門レベルでは経年的に大きく変化しない一方、属レベルでは変化がみられることが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-07] 幼児の体力・運動能力の現状と年次推移把握のための資料提供システムの完成度

*村瀬 智彦[1] (1. 愛知大学)

幼児期は体力や運動能力を測定する機会が少なく、また平均値などを示した評価資料の公表や更新の機会も限られている。そのため、幼児の体力・運動能力の現状や年次推移の把握は容易ではない。このような状況から、測定と評価の普及促進を目的として、研究機関と保育現場との連携による支援システムの構築の検討が続けられてきた。このシステムはコロナ禍においても機能し、さらに研究機関と保育現場との地理的距離に関係なく支援が可能であることも確認されている。本研究の目的は、幼児の体力・運動能力の現状と年次推移把握のための資料提供システムである測定と評価支援システムの完成度を明らかにすることであった。調査対象は、測定と評価支援に参加した愛知県、岐阜県、沖縄県の合計17保育現場における保育者81名であった。支援全体および構成する各支援別の完成度などを質問紙により調査した。主な結果として、支援全体の完成度は91.0%（完成を100%とした場合）であった。完成度が高い理由には、園独自で測定用具・器具を揃えるのは難しく、また評価結果についても支援してもらえることなどの記述が確認された。一方、完成度が低い理由には、測定を実施するのが時間的に難しいなどの記述が確認された。測定と評価支援を構成する各支援別の完成度は、測定講習会開催93.2%、測定用具・器具貸し出し95.4%、測定補助95.2%、個人評価資料作成97.0%、園別評価資料作成96.5%、基準値などの全体評価資料作成96.9%であった。その他、支援全体の必要性に関しては86.5%（必要を100%とした場合）であった。本調査結果から、支援の在り方に改善を重ねながら構築された現在の測定と評価支援システムの完成度は高い水準に到達していることが確認された。今後は、全国各地における保育現場での本支援システムを利用した測定と評価の実施の普及促進が期待される。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-08] 小・中学生における体力合計点と根気得点（Grit）の相対年齢効果

*神舘 盛充[1,2]、森戸 剛史[3] (1. 日本健康・運動データ総合研究所、2. Pestalozzi Technology株式会社、3. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

<背景・目的>競技スポーツでは、同学年内の出生月による月齢差がパフォーマンスに影響する相対年齢効果（RAE）が広く報告されている。一方、Gritの下位尺度である根気得点に関するRAEの研究はない。本研究では、小・中学生における体力合計点および根気得点にRAEが存在するかを検討した。<方法>2024年度にX市立小・中学校に在籍する小学1年生から中学3年生までの児童・生徒で、新体力テストの体力合計点が算出されている者、かつ解析に使用するアンケートに回答した5,505名（男子2,770名、女子2,735名）を対象とした。各学年・性別ごとに、出生月を1Q（4月～6月生）～4Q（1月～3月生）の4群に分類し、体力合計点および根気得点に関し、一元配置分散分析により群間差を検討し、有意差が認められた場合はTukeyのHSD法による多重比較検定を実施した。<結果>体力合計点は男子では小学4年生を除く各学年および中学2年生でいずれかの出生月群間で有意差を認めた。いずれの学年も1Q群が高い得点を獲得していた。（例：小学6年生、1Q：60.43点、2Q：59.93点、3Q：55.40点、4Q：55.20点）女子では小学1年生、小学3年生、小学6年生および中学1年生で有意差を認めた。男子同様いずれの学年も1Q群が高い得点を獲得していた。（例：小学6年生、1Q：59.56点、2Q：59.13点、3Q：58.24点、4Q：54.20点）根気得点は小学4年生女子の3Qvs4Q間のみ有意差を認めた。（小学4年生女子、1Q：3.06点、2Q：3.14点、3Q：3.16点、4Q：2.89点）<結論>体力合計点には学年横断的にRAEが確認された一方、根気得点でのRAEは限定的であった。身体的発達指標と非認知能力指標ではRAEの影響の現れ方が異なる可能性が示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-09] 中学生および大学生野球選手における身体的要素とスイング速度の関係

*大城 勝生[1]、今若 太郎[2]、畑島 一翔[1]、田中 重陽[1] (1. 国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科、2. 上智大学基盤教育センター)

野球の打撃に関する先行研究によれば、スイング速度には身体的要素が関係していることが明らかにされている。一方で、先行研究は大学生や社会人などの成人野球選手を対象としたものが多い。身体の形態や様々な運動能力が著しく変化する発育期において競技特有のパフォーマンスに関係する体力要素を向上させることは重要である。また、発育期の野球選手におけるスイング速度に影響を与える身体的要素は成人野球選手と異なる可能性が考えられる。本研究では中学生および大学生野球選手を対象として、スイング速度と身体的要素との関係について比較検討することを目的とした。対象者は中学生野球選手42名（JG）と大学生野球選手101名（CG）とした。形態項目として身長、体重、除脂肪量を、体力項目として、握力、背筋力、垂直跳跳躍高、リバウンドジャンプ指数、直線走タイムを、打撃パフォーマンスの指標としてスイング速度をそれぞれ計測した。各測定項目とスイング速度との関係性について検討するためにピアソンの積率相関係数を算出した。また、スイング速度に対する身体的要素の寄与率を調べるためにスイング速度を従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。JGとCGのいずれもスイング速度と身長、体重、除脂肪量および左右の握力との間に有意な相関関係が認められた。さらにJGのみ、年齢、背筋力、垂直跳跳躍高および直線走タイムとスイング速度の間に有意な相関関係が認められた。重回帰分析の結果、JGとCGともに説明変数として除脂肪量と垂直跳跳躍高が選択され、それぞれの寄与率はJGが72.5%、CGが43.5%を示した。以上の結果から、JGとCGではスイング速度と有意な相関関係にある体力項目が異なること、また、JGのスイング速度に対する身体的要素の寄与率はCGよりも高いことが明らかとなった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-10] 高校野球選手におけるバット速度に及ぼす除脂肪量指数の影響

*山田 健二[1]、大野 貴弘[1]、竹島 弘晃[3]、須藤 明治[2] (1. 国士舘大学体育学部体育研究所、2. 国士舘大学体育学部、3. 株式会社Noble Action)

スポーツにおいて、技術を支える体力が重要であることは周知されている。野球においても、パフォーマンスに重要な筋肉量を向上させていくことが体づくりにとって重要とされている。しかしながら、選手や指導者において、トレーニングや食事などについての知識を向上させることは大きな課題であり、体づくりへの悩みを抱える選手も多い。また、技術練習の重視などによる運動量の増加によって、体重や筋肉量増加など体づくりが思うように進まないことでの出力不足により野球技術の向上に結び付かないケースも少なくない。本研究では、高校野球選手の体組成データを取得し、その中でも近年注目されている除脂肪量指数を算出し、ラプソード、ブラストモーション（ミズノ社製）から得られるヒッティングデータをもとに、体組成とヒッティング能力との関係について明らかにし、現場へのアドバイスにつながる知見を得ることを目的とした。体組成は、TANITA社製の体組成計を用いて、体重、筋肉量、体脂肪率を測定した。また、BMIと体脂肪率をもとに除脂肪量指数を算出した。ヒッティング測定では、置きTを用いて、各選手7球ずつ試技を行った。採用試技は、打球角度15°前後のライナーの打球とし、打球速度の速い試技を採用した。ラプソードより打球速度、打球角度、飛距離を採用し、ブラストモーションよりバット速度、パワーを採用した。その結果、打球速度およびバット速度におけるスイング能力と除脂肪量指数との間にも有意な正の相関関係が認められた。また、1次式より得られる除脂肪量指数の数値より、目標とする打球速度へのアプローチへとつながることから、技術練習に加えて、トレーニングなどで体づくりをする重要性について明らかになり、ラプソードに加え体組成についても評価することが重要であると考えられた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-11] 高校野球における体づくりへの選手の意識の違い

*須藤 明治[1]、大野 貴弘[2]、山田 健二[2]、竹島 弘晃[3] (1. 国士舘大学体育学部、2. 国士舘大学体育研究所、3. 株式会社Noble Action)

野球において、体重、筋肉量などの値が、パフォーマンスの影響を及ぼすことは多くの研究によって明らかにされている。また、トレーニング方法や食事法などについても研究され、多くの知見が得られている。しかしながら、実際の現場で選手へとヒアリングをすると、体づくりへの有益な情報があるにもかかわらず、最新の研究成果への理解度や関心度は低く、指導者の考え、トレーナーのレベルなどによって、取り組みが大きく異なっているのが現状である。そこで、本研究では、高校野球選手の体組成について、強豪校と地区大会出場レベルの学校を比較し、食事やトレーニングなどの体づくりへの悩みにおける選手の実際の声についても併せて調査することで、体づくりへの意識について明らかにすることを目的とした。なお本研究の強豪校の定義として、春や夏大会予選で甲子園出場経験やベスト4以上の成績のある高校を対象とした。体組成の測定は、TANITA社製の体組成計を用いて、体重、筋肉量、体脂肪率を測定した。また、BMIと体脂肪率をもとに除脂肪量指数を算出した。体づくりへの意識の調査については測定時の質疑の際に選手の悩みなどについて口頭にて調査を行った。その結果、BMI、筋肉量、除脂肪量指数において、強豪校の方が高い値を示した。また、意識調査では、競技レベルに関係なく、ストレッチや柔軟性についての悩みは多く、それに伴って自主的に行わないという選手も多くみられた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-12] 肩関節可動域が野球投手の投球速度に及ぼす影響

*長谷川 伸[1] (1. 九州共立大学)

投球動作中において、肩の外旋可動域を制限すると投球速度が低下することから、肩への弾性エネルギーの蓄積と再利用が高い投球パフォーマンス発揮には重要とされている。野球投手の肩関節可動域特性として、投球側における外旋可動域の増大が多く報告されており、これは高速度の投球を行うための適応である可能性が考えられる。本研究では、大学生野球投手21名を対象に、肩関節回旋可動域（外旋可動域、内旋可動域、総可動域）および上腕骨頭後捻角の影響を補正した補正回旋可動域（補正外旋可動域、補正内旋可動域）を測定し、これらの指標と投球速度との関係について検討を行った。投球側では非投球側に比べ外旋可動域が大きく、内旋可動域が小さかったが、総可動域には差が見られなかった。また、これらの肩関節可動域の指標に加えて、上腕骨頭後捻角を測定して算出した補正外旋可動域、補正内旋可動域、さらに身長、体重、除脂肪量、指極、胸囲などの形態的指標と投球速度の関係について検討したところ、外旋可動域、補正外旋可動域、身長、体重、除脂肪量、胸囲が投球速度と有意な相関関係を示した。これらの変数を用いたステップワイズ法による重回帰分析では、説明変数として除脂肪量のみが採用された。これらの結果から、関節外旋可動域の大きさが投球速度を決定する要因の一つであり、骨形状の影響を除外した補正外旋可動域においても投球速度との相関が示されたことから筋や腱の柔軟性が投球速度に寄与している可能性が示唆された。一方で、本研究において投球速度に最も大きな影響を与える要因は除脂肪量であり、肩関節外旋可動域は決定的に重要な要因ではないと考えられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-13] 野球選手におけるスクワットのパワー発揮特性とスイング速度の関係

*齋藤 大成[1]、田邉 凱聖[1]、畑島 一翔[1]、田中 重陽[1] (1. 国士舘大学大学院)

野球の打撃においてスイング速度を高めることは、より鋭い打球を放つために必要な要素である。打撃能力の向上に必要な体力的要素を考慮すると、下肢の大きなパワー発揮能力を高めることの重要性が伺える。しかしながら、野球のスイング速度とスクワット(SQ)の関係について検討した研究では、最大挙上重量(1RM)を指標としているものは多くみられるが、異なる負荷におけるパワー発揮特性を評価した研究は少ない。そこで本研究では、下肢パワーの発揮特性について分析しスイング速度との関係を明らかにすることを目的とした。被験者は大学準硬式野球部に所属する野手26名とした。体重及び除脂肪体重は身体組成測定装置を用いて測定した。ティースタンドにボールを置いた状態で全力による打撃を行わせ、Blast Baseballによりスイング速度を計測した。SQはGym Awareを用いて40（L-L）,60(M-L),80(H-L)%1RMの３つの負荷(L)における最大努力での挙上速度(V)を計測した。挙上速度と負荷重量により各試技のパワーを算出した。また、負荷の増大に伴う挙上速度の変化の指標はL-V回帰直線の傾きとして評価した。除脂肪体重及びSQの１RMとスイング速度はそれぞれ有意な正の相関関係が認められ、この結果は先行研究を支持するものであった。各負荷でのパワーはいずれもスイング速度と有意な正の相関関係が認められ、M-L(r=0.537)が最も高い相関係数を示した。L-V関係における回帰直線の傾きとスイング速度の間には有意な負の相関関係が認められた。以上の結果から、高いスイング速度を獲得するためには、下肢パワー発揮能力が重要であることが明らかとなった。また、高負荷を伴うSQトレーニングにおいて挙上速度を減少させずに高いパワーを発揮することの重要性が示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-14] 野球内野手におけるショートバウンド捕球の動作特性

*森 崇信[1]、大田 穂[2] (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学)

野球における内野守備は、試合の勝敗を左右する重要な技術であり、熟練内野手はイレギュラーバウンドを避けるため、規則的なバウンドとの差が小さいショートバウンドでの捕球を目指す傾向がある。ショートバウンド捕球は「バウンドを合わせる」感覚が求められるため、打球の質を素早く見極め、適切な位置へ移動する判断力と予測力が必要である。また、捕球時に怖さを感じる選手も多いバウンドであるため、技術的にも心理的にも難易度が高い技術である。しかし、ショートバウンド捕球の技能を習得するための具体的な知見や方法論は十分に蓄積されていないのが現状である。

そこで本研究では、熟練者と未熟練者のショートバウンド捕球における動作を比較することによって、予測や判断、動作のタイミングを明らかにすることを目的とした。

対象者は、野球競技経験を有する男性内野手（以下、熟練者）と、野球またはソフトボールの競技経験のない男性（以下、未熟練者）とした。対象者から10m離れた位置でボールを投げ出し、2バウンドと3バウンドでのショートバウンド捕球を行った。試技数は、捕球成功試技が各バウンドで5試技となるまで行った。捕球の成否に加え、ハイスピードカメラ（240fps、Sony社製）によって試技中の対象者を撮影し、捕球に至るまでの一連の動作を評価した。また、対象者には視線計測器（以下、EMR-10、nac社製）を装着させ、試技中の視線行動についても評価した。

分析の結果、熟練者では、2バウンドおよび3バウンドのいずれの試技においても、捕球時のグラブの高さ（cm）と捕球位置と最終バウンド地点までの距離（cm）との間に強い正の相関が認められた。これらの結果より、熟練者はボールの最終バウンド位置との距離に応じて、グラブの高さを適切に調整しながら正確な捕球につなげていることが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-15] ストレートのタイプからみた投手へのアプローチ評価

*大野 貴弘[2]、山田 健二[2]、竹島 弘晃[1]、須藤 明治[3] (1. 株式会社Noble Action、2. 国士舘大学体育学部体育研究所、3. 国士舘大学体育学部)

近年、野球において、ホークアイやラプソードなどのトラッキングシステムを用いた機器の導入によって、ピッチング技術が大きく向上してきている。ピッチングにおいてフォームの違いなどにより、速球いわゆるストレートの球速や回転数、回転軸は大きく異なってくる。また、ストレートと言っても握りやリリースの角度などによっても、シュート系やスライダー系などの回転軸が異なる個人差も大きい球種であり、その球質により変化球の得意不得意などにも影響してくると考えられる。本研究では、ラプソードを用いて、ストレートの縦と横の変化量から球質を評価する方法について、先行研究を参考に実際に選手へフィードバックを行った事例について発表する。ストレートの変化量において、伸び系や標準系、垂れ系など9タイプに分類される中、本発表では各タイプの特徴的な選手を抽出し解説する。タイプの分類について投手にヒアリングをしながら継続的に評価することで、縦の変化量が37cm以下、38~46cm、47cm以上の3タイプ、横の変化量が14cm以下、15~25cm、26cm以上の3タイプ、縦と横の組み合わせで9タイプとして分類する。各タイプにおける禿頭的な選手の抽出には、高校野球選手の投手を対象に、各選手にストレートを含む持ち球を各5球投球し、球速や回転数、変化量などを参考に、総合的に評価を行った。投球後にストレートや変化球についての回転軸や投げやすさなどについてヒアリングを行った。タイプの解説、評価方法、選手へのフィードバックの効果等について、発表の際に解説する。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-16] 大学野球選手における投球障害との関連性に着目した肩甲骨偏位の縦断的検討

*百武 晃希[1]、藤井 雅文[2]、前田 明[2] (1. 鹿屋体育大学大学院、2. 鹿屋体育大学)

投球側肩甲骨の外転偏位と下方回旋偏位は投球障害の発生要因の１つとされており、現場でも投球障害を抱える選手はこれらの肩甲骨偏位が著明であることを経験する。しかし、野球選手における肩甲骨偏位の実態について検討した報告は少ない。また、肩関節機能は経時的に変化することが報告されており、肩甲骨偏位も同様に縦断的にみる必要があると考えられる。そこで本研究では、大学野球選手におけるプレシーズンとインシーズンとの間に肩甲骨偏位の変化はみられるのか、投球障害の有無によって肩甲骨偏位に違いはみられるのかを明らかにすることを目的とした。対象は大学野球選手56名（投手17名、野手39名）をとし、プレシーズン（2025年2月）とインシーズン（同年5月）の2回にわたり測定を実施した。測定方法は、座位にて上肢を自然下垂させた状態で行った。測定項目は、胸椎棘突起から肩甲骨上角の距離および胸椎棘突起から肩甲骨下角の距離の２項目とした。その結果、プレシーズンにおいては、投球側肩甲骨下角（10.30±0.9cm）は非投球側（10.55±1.0cm）と比較して有意に内転位に位置していた（p<.05）。インシーズンにおいても同様に投球側肩甲骨下角（10.24±1.1cm）は非投球側（10.89±1.0cm）と比較して有意に内転位に位置していた（0<0.001）。一方で、肩甲骨上角はプレシーズン・インシーズンともに投球側と非投球側との間に有意差は認められなかった。また、投球障害を有する投球障害群と有さない非投球障害群との比較では、いずれの項目においても有意差は認められなかった。これらの結果から、大学野球選手の肩甲骨偏位の実態として、下方回旋偏位を示すものの、外転偏位は認められないこと。さらに、肩甲骨偏位だけで投球障害を説明するのは難しく、併せて関節機能などの多様なデータを継続して測定する必要があると考えられた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-17] 盗塁を意識した走塁条件下における走動作特徴と下肢形態との関係

*久野 峻幸[1]、西本 浩章[1]、野上 展子[2] (1. 神戸医療未来大学、2. 大阪成蹊大学)

【はじめに】野球における盗塁は、試合の流れを左右する重要なプレーであり、塁上での判断力に加え、スプリント能力と素早いスタート、さらにはスライディングといった一連の動作が必要とされる。従来の研究では、30m直線疾走などを用いてスプリント能力を評価されることが多いが、これらは盗塁における実際の動作を十分に反映しているとは言い難い。盗塁ではリード動作から始まり、相手の動作を見て反応し、加速、走行、そして最終的なスライディングという流れが一般的である。したがって、盗塁動作を明らかにするためには、盗塁に特有な状況を再現した上での走塁中の分析が重要であると考えられる。そこで、本研究では、盗塁を意識させた実戦に近い条件下での走塁パフォーマンスの特徴を明らかにすることを目的とし、今後の走塁指導に活かす知見を提供する。加え、走塁中の動作指標と身体的特徴が動作に与える影響についても検討した。【方法】男子選手10名（18.8±0.6歳, 175.2±5.5cm, 74.4±8.2kg）を対象とした。各選手に対し、①リード動作およびスライディングを含む盗塁を意識した一塁から二塁への走塁（盗塁条件）、②塁間距離27.431mでの通常直線疾走、③30m直線疾走（いずれもスタンディングスタート）の３条件にて実施させた。各走塁は右側方からハイスピードカメラ（GC-YJ40）を用いて撮影し、映像解析によりストライド、ピッチ、疾走速度を算出した。また体組成は体組成計（DF860）を用いて算出し、膝蓋腱の長さ、横断面積は超音波画像診断装置にて測定した。【結果】盗塁条件では、通常条件（27.431m、30m）と比較して有意に高い疾走速度（$p<0.05$）が確認された。また、盗塁条件における平均ストライドと膝蓋腱の横断面積との間には有意な負の相関関係（r　-0.732, $p<0.05$）が認められた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-18] 大学男子ソフトボール選手のパワー発揮特性とスイング速度の関係

*田邉 凱聖[1]、齋藤 大成[1]、畑島 一翔[1]、秋葉 茂季[1]、田中 重陽[1] (1. 国士舘大学大学院)

先行研究において、野球のスイング速度と除脂肪体重やベンチプレス及びスクワットの1RMとの間に相関関係が認められており、全身の筋量及び筋力はスイング速度に影響を与える要因であることが報告されている。しかし、打者のスイング動作は下肢で始動し、上肢にかけて動作の速度が高まるといった特徴を有することから、上肢と下肢で求められる力発揮の特性は異なることが予想される。個人の力発揮の特性を評価する方法として負荷と速度の関係(L-V関係)から推定最大速度や最大筋力を評価する方法が用いられているが、スイング速度との関係を検討したものは報告されていない。本研究では、大学男子ソフトボール選手おけるベンチプレス(BP)とスクワット(SQ)のパワー発揮特性とスイング速度(BSV)との関係を検討することを目的とした。被験者は、大学男子ソフトボール選手20名とした。BP及びSQの最大パワー(PP）の測定は、3つの異なる負荷における最大努力での挙上速度からパワーを算出し、負荷とパワーの関係を二次回帰することでPPを推定した。また、L-V関係から負荷軸切片(L_0)、速度軸切片(V_0)と1RMを推定した。その結果、BPの1RMとBSVには有意な相関関係は認められなかったが、SQの1RMとBSVに有意な正の相関関係が認められた($p<0.05$)。また、BP及びSQのPPとBSVに有意な正の相関関係が認められた($p<0.05$)。L-V関係について検討した結果、BPではV_0とBSVに有意な正の相関関係が認められた($p<0.05$)のに対して、SQではL_0とBSVに有意な正の相関関係が認められた($p<0.05$)。以上の結果から、大学男子ソフトボール選手におけるパワー発揮特性がスイング速度に及ぼす影響として、BPでは速度の要素、SQでは負荷の要素が重要である可能性が示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-19] 実業団女子ソフトボールにおける期待得点値を最大化するラインナップの選定

*中村 陽南[1]、廣津 信義[2]、大田 穂[3] (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学健康データサイエンス学部、3. 順天堂大学スポーツ健康科学部)

野球におけるデータの活用は、米大リーグでセイバーメトリクスが1970年代に提唱されて以来、広まった。この中で、試合の得点に影響を与える要因の一つである打順についても検討されている。ソフトボールは、野球と同じベースボール型競技であるが、塁間や投球間が野球より短く、野球よりも点が入りづらいといった特徴があり、野球とは求められる技術や打者の特性も異なる。
ソフトボールにおいても、ゲーム分析や打順に関していくつかの研究がなされているが、打順の最適化という視点から最適なラインナップの検討は十分ではない。特に、ソフトボールでは野球よりも得点することが難しいため、期待得点値を最大化するラインナップを検討することが重要である。
本研究では、D’Esopo and Lefkowitzモデルによる同一打者が繰り返し打席に立ったときの1イニングでの期待得点値を評価指標とした「スコアリング・インデックス（SI）」、ならびにSIをラインナップの評価に拡張した「ラインナップとしてのSI(SIL)」に基づいて、最適ラインナップを検討する。
対象は、ソフトボールの日本女子トップリーグであるJD.LEAGUEに所属している選手とした。国際大会である2024年W杯に出場した日本代表選手のシーズン中の成績からSIを算出した結果、1番高い者で2.014、低い者が0.358であった。日本のトップ選手であり、所属チームでは主力を務める選手の中でも期待得点値には大きな差があることが分かった。走者の進塁規則についてもD’Esopo and Lefkowitzモデルではなく、JD.LEAGUEの試合映像から、実際のソフトボール競技に即した進塁規則を見出すためのデータ収集を行った。発表では、新たな進塁規則を提案するとともに、最適ラインナップについて検討した結果を報告する。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-20] カーリング競技におけるストーン速度の違いと動作特性の個人差

*小林 秀紹[1] (1. 札幌国際大学)

本研究はカーリング競技のデリバリー動作におけるキネマティックス変量に対して各種機械学習を適用し，ストーン速度の違いによって動作が異なるか，また個人差があるかどうかについて検討することを目的とした．対象は全国大会上位入賞レベルの女子カーリング選手10名であった．氷上にてマーカーレスモーションキャプチャシステムを利用し，動作のキネマティクスデータを取得した．選手はドローおよびテイクウエイトの2種類の速度によるデリバリーを行った．解析は選手個々における２種類のストーン速度間の各関節角度の近似性について検討した．動作の時系列データとして動的時間伸縮法（DTW）を用いたクラスタリングの代替えとして，ユークリッド距離ベースの階層クラスタリング（Ward法）を適用した．次に，全変量を用いて，ストーン速度の識別を試みた．ロジスティック回帰、ニューラルネットワーク、ランダムフォレストとの比較から，サポートベクターマシン（SVM）の識別力が最も高かった．　SVMによる分類は全変量の場合，速度変量を中心とする第１主成分においてトップウエイトとドローウエイトの識別が容易であった．一方，足首と膝の加速度を中心とする第2主成分においては明確な識別は困難であった．ストーン速度の判別に有効な関節角度を検討した結果，識別力の高い部位は仙骨-水平面角度，足関節角度であった．関節角度についてクラスター分析を行った結果，３つのクラスターに分類され，選手の動作特性の系統が窺えた．本研究ではカーリング競技のデリバリーフォームにおいて，動作の個人特性を抽出するために，分布に従わないデータ駆動型の機械学習による解析を行った．その結果，ストーン速度の調整は仙骨-水平面および足関節の貢献が認められるとともに，同様な動作クラスターにあっても，個人に特有な動作範囲が存在し，個別のフィードバックに利用可能と考えられる．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-21] 様々な状況に応じた女子ラクロスのパスの正確性の検討

*富岡 咲紀[1]、勝見 康平[1]、来田 宣幸[1]、幸田 仁志[1] (1. 京都工芸繊維大学)

【緒言】ラクロスにおいて、パスは得点のために必須のスキルであり、「パスの正確性」は試合展開を左右する。競技場面では、状況に応じて様々な速度でパスを行う必要があるが、その際にパスの正確性がどのように変化するのかは十分に検討されていない。そこで本研究では、異なる状況下におけるコントロール精度を測定し、ラクロスにおけるパスの正確性の特性を明らかにすることを目的とした。【方法】対象者はラクロス歴のある女子大学生22人とした。対象者にスティックを用いて、ラクロスボールを11m先の目標に向けて3つの条件で合計30球投球させた。条件は「アップでの落ち着いたパス」「試合で緊迫した状況での速いパス」「最大速度を目指す全力スイングの投球」の3つとした。ビデオカメラで対象者の後方から撮影し、ボールが的に到達したときの2次元座標を求めるとともに、目標とボール到達地点との距離を算出した。【結果および考察】目標からの直線距離に関して、条件に有意な主効果がみられた（p < .001）。アップ条件（32.7 ± 10.7 cm）は他の2条件より有意に距離が小さく、試合条件（38.5 ± 13.0 cm）は全力条件（52.6 ± 15.9 cm）より有意に距離が小さかった。さらに、条件と座標軸（x軸・y軸）を要因とした二要因分散分析では、交互作用は有意でなく（p = .391）、条件（p < .001）、軸（p = .020）のいずれも有意な主効果がみられた。条件と楕円の軸（長軸・短軸）の二要因分散分析では、有意な交互作用がみられ（p < .001）、単純主効果検定の結果、長軸においてはアップ条件（70.9 ± 22.3 cm）は試合条件（83.8 ± 24.1 cm）より有意に短く、試合条件は全力条件（106.2 ± 37.8 cm）より有意に短かった。一方、短軸については条件間に有意な差は認められなかった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-22] 関東大学サッカーリーグ戦における競技成績決定構造の特徴

*大石 健二[1,2]、矢野 晴之介[1]、小中 英嗣[2] (1. 日本体育大学、2. 名城大学)

サッカーや野球をはじめとする多くのスポーツでは，大会方式に従い勝点や勝率によって競技成績(順位)が決定される．大学サッカーにおいては，日本一を決める大会として総理大臣杯総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント(PMC)と全日本大学サッカー選手権大会(選手権)があるが，異なる大会方式を採用している．2024年度よりPMCは，普及と強化の機会創出を目的に32大学によるトーナメント方式を採用している．一方の選手権は，強化を目的に28大学による予選と決勝リーグにトーナメント戦を組み合わせた方式を採用している．さらに，PMCおよび選手権への出場大学を決める地域連盟のひとつである関東大学サッカー連盟では，2023年度より3部制に移行し，各大学が年間に22試合を実施し勝点の合計が多いチームを上位とするリーグ戦方式を採用している．このように、大学サッカーにおいては複数の大会方式が併存しており，競技成績決定方法も多様化している．

勝点の合計で競うリーグ戦においては，特定の対戦相手に敗北しても敗北相手よりもリーグ順位は上位となる場合もある．そこで，本研究は，関東大学サッカーリーグ戦(男子)を対象に，競技成績の決定要因である勝点と勝率や得失点割合の関連から，各ディビジョンの特徴と年度ごとの特徴について明らかにすることを目的とした．

分析対象試合は，分析には，一般社団法人関東大学サッカー連盟オフィシャルサイトにて公開されている試合結果データを用いた．

関東大学サッカー1部リーグ戦における2013年度から2024年度までの12年間における年度別勝点と勝率との間には，相関係数0.962-0.996が検出された．また，勝点と得失点割合の間には，相関係数0.761-0.952が検出された．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-23] キンボールスポーツのプレー動作と運動強度・運動量の関係性の検討

*西口 治佳[1] (1. 太成学院大学)

キンボールスポーツは教育現場などレクリエーションスポーツの教材として用いられつつある一方で、競技スポーツとしても実施されている。先行研究においては、子どもや中高年を対象としたキンボールスポーツの試合中の運動強度や運動量が明らかにされていが、競技スポーツとしてのキンボールスポーツに着目し、競技特性を検討した研究はあまりみられない。そこで本研究では、キンボールスポーツの練習中および試合中のプレー動作と運動強度及び運動量を測定し、キンボールスポーツの競技特性を明らかにすることを目的とした。

本研究の対象者は、キンボールスポーツのクラブチームに所属する競技歴10年以上の男性キンボール選手8名とした。実験1では、対象者にセット＆ホールド、ヒット、レシーブの練習を実施し、練習中の心拍数及び運動強度を測定した。実験2では、対象者を2チームに分け、7分×2の試合を実施し、試合中の心拍数及び運動強度、歩数、セット・ヒット・レシーブのプレー回数を測定した。

実験1において、心拍数と運動強度ともにレシーブ練習が他の2つの練習よりも有意に高い値を示した。実験2において、試合中の平均心拍数・平均運動強度・平均歩数とセット数・ヒット数・レシーブ数の相関関係を分析したところ、平均歩数とレシーブ数に強い正の相関が認められた。

本研究のレシーブの練習では、ヒットされたボールを全力で走ってレシーブする強度の高い動作を繰り返す方法を用いたため、レシーブ練習が他の2つの練習よりも心拍数及び運動強度が高かったと考えられる。また、レシーブ動作は他のプレー動作と比較して走る動作が多いため、その結果、試合中の歩数と正の相関がみられたと考えられる。

キンボールスポーツの基本となるプレー動作では、レシーブが最も運動強度が高い動作であることが示唆された。また、試合においてはレシーブ数が多いほど運動量が増加する可能性が示された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-24] 新体操における演技構成立案の方法について

*小澤 来瞳[1]、山田 健二[2]、須藤 明治[3] (1. 国士舘大学大学院、2. 国士舘大学体育学部体育研究所、3. 国士舘大学体育学部)

本研究では、選手と指導者が新体操における芸術の重要性をどのように認識しているのかを調査し、演技創作について具体的実施していることやそれぞれの工夫についてのアンケート調査を行うことで、現在の多くの演技の中にある芸術性への意識の存在を解明することを目的とした。新体操は、フープ、ボール、クラブ、リボン、ロープ（ロープはジュニアのみ）の5種類の手具を使い、身体と手具の技術的価値と作品構成の芸術的価値を評価する採点競技である。新体操は個人競技と団体競技の２つがあり、個人は１人で１分１５秒～３０秒、団体は５人で２分１５秒～３０秒で演技する。また、個人はフープ、ボール、クラブ、リボンの４種目総合で競い、団体は１手具による演技（５）と２手具による演技（３＋２）の総合で競う。新体操のルールは、オリンピック開催を区切りとして、４年に１度変更されるため、いち早く規則に対応し演技の難易度を高め、より洗礼された完成度の高い演技にしなければならない。近年は演技構成と芸術的パフォーマンスが評価される芸術が重視されている。２０２２年―２０２４年版新体操競技採点規則によるとD得点の高得点を目指すとともに、E、Aは減点法となっている。したがって、D得点の高得点を目指すともに、E、A得点の減点を可能な限り抑えることによって、高得点をとることができる。しかし、近年の試合では芸術得点の差が大きくは見られない。そのため、他の部分の得点が大きく順位に反映しているのが現状であると考える。そこで、芸術得点を伸ばし、さらに魅力的で人の心を引きつける演技にするためにはどのような工夫を行い、どのような過程で演技を行うかという点に着目し、得られた結果を元に研究と分析を行なった。その結果、現状では指導者が中心となって演技を作り上げていることが明らかとなった。しかし、選手本人も、ルールを理解し、演技構成に取り組む必要性を感じた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-25] トランポリン競技の国際審判員における出来栄えの採点傾向
審判階級間の比較

*河野 由[1]、實宝 希祥[2]、窪 康之[3]、横澤 俊治[3] (1. 大東文化大学、2. 九州共立大学、3. 国立スポーツ科学センター)

採点競技において、審判員が演技の出来栄えをどのように評価しているかを明らかにすることは、選手のパフォーマンスや審判技術の向上の重要な手掛かりとなる。本研究では、トランポリン競技の国際審判員の語りに基づき作成した17項目からなる出来栄えの採点に関する着眼点のリスト（減点理由リスト）を用いて、国際審判階級による採点傾向を把握することを目的とした。
国立スポーツ科学センター内のトランポリン練習場にて、日本選手権大会の出場経験のあるトランポリン選手11名（男性6名、女性5名）の演技を、トランポリンベッド側方からビデオカメラ（iPad Pro、1台、30fps）で撮影した。この映像を、国際審判有資格者14名（国際審判経験年数：1〜25年）に無作為に提示し、演技の出来栄えを採点してもらった。採点後、減点理由リストから減点した理由に該当する項目と、その項目で減点した点数も回答してもらった。審判員の階級を2つ（1〜3種：6名、4種：8名）に分け、減点理由リストの項目ごとに減点された点数を集計し、全ての減点の合計で除して、全体に占める各項目の減点率を算出した。減点率には母比率の差の検定を施し、階級間の採点の差異を比較した。
その結果、両階級に共通して「タックやパイク姿勢がコンパクトでない」と「90°まで姿勢が維持できていない」の2項目の減点率が総減点の60%以上を占めていた。母比率の差の検定の結果、階級間で差がみられたのは「腕が体側よりも前方・後方にある」、「肘が伸びていない」、「各姿勢になるタイミングが遅い」、「開きのタイミングが遅い」、「90°までに捻り終わっていない」、「90°まで姿勢が維持できていない」の6項目であった。
これらの結果から、トランポリン競技の国際審判員は、階級に関わらず出来栄え採点における主要な着眼点を共有しているものの、特定の項目では判断に差異が見られることが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-26] 大学運動選手における浮き趾の有無による足趾筋力、ファンクショナルリーチ、体格、及び身体組成の比較

*佐藤 敏郎[1]、出村 慎一[2]、青木 宏樹[3] (1. 新潟医療福祉大学、2. 金沢大学、3. 福井工業高等専門学校)

【背景】浮き趾は足趾機能の低下を招き、立位姿勢の不安定化や、歩行時の蹴り出し・重心移動の困難化の要因となる。また、浮き趾は歩行効率や転倒リスクにも関係する。優れた運動競技選手の中にも浮き趾を有する者が存在する。浮き趾が足趾筋力、ファンクショナルリーチ、体格、及び身体組成、さらには足部の痛みや怪我の既往に与える影響については殆ど研究されていない。【目的】本研究では運動部に所属する大学男子学生95名を対象に、浮き趾の有無による足趾筋力、ファンクショナルリーチ、体格、及び身体組成の差を比較するとともに、足の痛み、及び過去の足部の怪我の有無との関係について検討した。【方法】浮き趾の判定には足形状測定器を用いた。被験者が、身長計の尺柱に相当する垂直板に両踵をつけ背中に当てた安定背面接地立位姿勢（背中付立位姿勢）時の足底接地面を撮影した。浮き趾の有無と現在の足部痛、及び過去の足部外傷歴との関係は連関係数により検討した。また、浮き趾の有無群間の足趾筋力、ファンクショナルリーチ、体格、及び身体組成の差は、対応のないt検定により検討した。有意水準は5%とした。【結果及び考察】浮き趾は、右足で6.3%、左足で14.7%、左右いずれかに認められた者は15.8%であった。浮き趾有無群間の足趾筋力、ファンクショナルリーチ、体格、及び身体組成には有意差は認められなかった。また、浮き趾の有無と現在の足部痛、過去の足部外傷歴との間にも有意な関係は認められなかった。【まとめ】大学運動選手において浮き趾は約16%に認められた。浮き趾の有無は足趾筋力、動的平衡性、体格、及び身体組成、足部障害と関係がないと判断された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-27] 座位姿勢における動的関節制御能力と足底圧様式の評価および足趾把持力との関連

*坂口 雄介[1]、尾山 裕介[2]、村山 敏夫[3] (1. 北陸大学、2. 桐蔭横浜大学、3. 新潟大学)

足関節機能は歩行や立位保持に重要な役割を担っており、歩行能力の維持や転倒予防の観点から注目されている。特に、足関節の動的関節制御能力は、日常生活動作の安定性や運動パフォーマンスの向上に寄与すると考えられている。他方、その能力は自動車運転時のペダル操作の正確性や安全運転にも関連し、交通事故抑止の観点からも重要である。交通事故は人的・環境的・車両的要因が複合的に関与して発生すると言われ、我々は現在、人的要因による交通事故抑止に向けた研究を進めている。これまでにペダル操作時の筋活動解析から、特に前脛骨筋の活動がペダル操作に大きく関与することを確認した。このことを踏まえ、次のステップとして足関節の動的関節制御能力と、その安定性や巧緻性を評価する上で有用である足底圧様式に着目し、運転能力との関連を検討することが重要であると考えた。
そこで本研究では、座位姿勢でのトラッキング課題による動的関節制御能力とその際の足底圧様式を評価すること、さらにその能力と、運転能力との関連が報告されている足趾把持力との関連について明らかにすることを目的とした。
対象者は若年者15名とした。動的関節制御能力の測定として、ディジョックボードを用いたトラッキング課題を座位姿勢で実施し、目標角度に到達するまでの時間などを評価した。また、課題遂行中の足底圧様式はインソール型圧力センサーを用いて評価した。足趾把持力は足指筋力測定器を用いて測定した。
その結果、動的関節制御能力の成績が良好な対象者ほど、足関節の動きと連動してスムーズに荷重が移動する傾向が示された。また、動的関節制御能力の成績と足趾把持力との間にも関連が確認された。
これらの知見は、正確なペダル操作に求められる機能の理解に寄与する。今後は高齢者を対象とした測定・評価を行い、交通事故リスクとの関連について検討を進めていく。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-28] 若年者における支持基底面変動器具上での重心動揺変数の信頼性、及び前後と左右受動的バランス能力の性差及び方向差

*長澤 吉則[1]、出村 慎一[2]、青木 宏樹[3]、永山 亮一[4] (1. 京都薬科大学基礎科学系健康科学分野、2. 金沢大学、3. 福井工業高等専門学校、4. 北陸学院大学)

【背景】支持基底面が前後と左右に傾く場合、ヒトが両変動時に発揮する受動的バランス能力は異なると考えられるが、これまでほとんど明らかにされていない。【目的】本研究では前後あるいは左右下方にわずかに支持基底面が変動する不安定器具上での立位中の重心動揺変数の信頼性、及び両受動的バランス能力の性差及び方向差を検討する。【方法】若年者71名(男性48名：19.1±0.9歳、女性23名：19.1±1.1歳)を対象とした。彼らは、支持基底面変動(器具変動)上で接地検知板の端に接触しないように、安定立位姿勢を1分間維持することを指示された。測定器は対象者の立位中の重心動揺を測定できる。測定は前後と左右変動条件で1練習試行後、1分の休憩を挟み、2試行実施した。XとY軸軌跡長、総軌跡長、外周面積、及び矩形面積を評価変数(動揺変数)とした。試行間差は対応のあるt検定、信頼性は級内相関係数(ICC)より検討した。また、男女及び前後、左右変動の両要因の動揺変数の平均値の差は、一要因(変動)に対応のある二要因(要因1：性×要因2：変動)分散分析より検討した。【結果】前後器具変動時の総軌跡長及び外周面積、左右器具変動時のX軸軌跡長及び総軌跡長の試行平均値間に有意差が認められたが、効果量は0.2以下であった。ICCは前後及び左右器具変動とも0.7以上であった。2試行の平均値を代表値とした分散分析の結果、距離変数(XとY軸、及び総軌跡長)にのみ要因2(変動)の主効果に有意性が認められ、多重比較の結果、男女ともX軸軌跡長及び総軌跡長は、左右器具変動時が前後器具変動時より、Y軸軌跡長は前後器具変動時が左右器具変動時より高値であった。【結論】前後及び左右器具変動時の動揺変数の信頼性は高い。前後と左右器具変動時に発揮される受動的バランス能力に性差なく、両変動に対応する受動的バランス能力は異なる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-29] 高齢者における支持基底面積を基準とした有効支持基底面積の割合の性差

*杉浦 宏季[1]、山次 俊介[2]、山田 孝禎[2]、横谷 智久[1]、武 可[3] (1. 福井工業大学、2. 福井大学、3. 福井工業大学大学院)

各バランステストに共通することは、身体の質量中心の鉛直方向の投影点とほぼ一致する足圧中心位置（COP）を支持基底面（BOS）内に保持し続けることである。しかし、COPをBOSの外周まで移動させることはできず、実際はその内側に存在する有効支持基底面（LOS）の外周までしか移動できない。我々はバランス能力の新たな評価方法を提案するため、BOSに対するLOSの割合を評価するLPBテストを開発した。新たなテストを開発する上で性別の標準値を設定することは重要であり、さらには性差の検証も重要である。本研究の目的は、高齢者におけるLPBテストの性差を検証することとした。被験者は65歳以上の男性90名（79.1 ± 5.6歳）および女性190名（78.0 ± 6.2歳）とした。BOSの測定にはBodiTrak（Vista Medical Ltd.）を使用した。被験者には機器の中心に立ってもらい、足裏面積およびその間（足隔10 cm）の面積を測定し、総面積（BOS）を算出した。LOSの測定には重心軌跡測定器（竹井機器工業）を使用した。被験者には両足裏を浮かすことなく、COPを前後左右に移動してもらい、矩形面積（LOS）を算出した。その際、検者はCOPを中心から最も離れた位置で3秒程度保持できたことをパソコンの画面上で確認し、次の傾斜方向あるいは終了を指示した。重心軌跡測定器の上にBodiTrakを重ね、被験者は足裏接地部分を変えずに各動作をBOS、LOSの順に連続で1試行ずつ測定した。評価変数はLPBとした。解析には対応のないt検定を用い、統計的仮説検定の有意水準は5%に設定した。男性のLPBは38.8 ± 15.4%、女性のLPBは38.6 ± 16.8%であり、両平均値間に有意差は認められなかった（$t = 0.09$、$p > 0.05$）。以上、LPBテストに性差はないことが明らかにされた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-30] 対側肢の力発揮がグレーディング能力に及ぼす影響

*速水 達也[1]、廣野 準一[1] (1. 信州大学)

【はじめに】多段階に設定された目標力を正確に発揮する筋出力のグレーディング能力は、合目的な運動遂行や運動学習の効果に重要な役割を果たす。そのため、グレーディング能力の測定評価を実施する有用性は高いと考えれらる。ただし、実際の運動場面では、対側肢の力発揮が全く生じていない状況は考え難い。ヒトの力発揮において、非対称性の神経支配をしている部位に関しては互いに抑制性の神経機構があるが、対側肢の力発揮がどの程度グレーディング能力に影響を及ぼすかについては明らかにされていない。【目的】本研究では、対側肢の力発揮の程度が変化した場合にグレーディング能力がどの程度変化するか明らかにすることを目的とした。【方法】神経学的既往の無い18名を対象とした。運動課題は等尺性収縮による肘関節屈曲および伸展運動とした。条件は、非利き手での筋出力4段階（0% MVC、20% MVC、50% MVC、70% MVC）×利き手でのグレーディング3段階（30% MVC、50% MVC、70% MVC）の12条件とした。初めに非利き手および利き手の最大随意収縮力を測定し、各条件の目標力を算出した。次に、対象者の前方に設置したモニタに非利き手の目標力を表示し、対象者は非利き手の目標力に等尺性収縮力を合わせた状態で利き手側でのグレーディングを行った。利き手側の等尺性収縮力について、目標力と実際に発揮した力との誤差（恒常誤差）を算出した。【結果】肘関節屈曲運動および伸展運動ともに、非利き手の目標力が高い場合はグレーディングの正確性が低下することが明らかとなった。また、その傾向は利き手の目標力が低い場合に顕著に認められた。一方で、非利き手の目標力20%MVCにおいて利き手のグレーディングの正確性が高くなる可能性が示唆され、グレーディング能力の測定においては対側肢の力発揮の状態に留意する必要性が考えられた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-31] インソール型歩容センサーを利用した地域高齢者に対する健康・見守り支援の試み

利用者が感じる効果における男女の認識の違い

*佐藤 進[1] (1. 金沢工業大学)

本研究では、インソール型歩容センサーから得られた日常生活中の歩容情報をクラウドシステムを介して共有し、遠隔地で過ごす家族や知人間での健康・見守りを支援するシステムを試験的に構築した。日常生活中の歩容計測には、NEC製歩行センシングインソールA-RROWGを用いた。計測された歩容情報はクラウド上のデータサーバーに送信後、評価値に変換され、センサー利用者本人およびその情報を共有したい家族や知人に定期的にフィードバックされる。フィードバックには、LINEヤフー株式会社が提供するLINE Notifyサービスを利用した。データサーバーとLINE Notifyを連携させ、利用者が情報共有したい家族・知人と作成したLINEグループに歩容評価値を1日1回定時配信した。歩容評価値の算出には４日間のデータの移動平均を用いた。データが取得できない場合には、「まだデータがありません」の表示を配信した。利用者は日々の歩容情報をLINEグループ内で共有し、その配信をきっかけにLINE上で家族・知人と自由にコミュニケーションをとってもらった。本クラウドシステムの利用の効果に関するアンケートの結果において、女性は、スマートシューズや専用アプリの利用自体よりも、スコアを家族・知人間で共有することや、そこでのコミュニケーションの方が、自身の活動量や活動へのモチベーションの維持・増進に役立つと回答し、一方、男性は概ね、スマートシューズや専用アプリの利用およびスコアの共有が自身の活動量や活動へのモチベーションの維持・増進に役立つと回答した。また、本クラウドシステムを通じての歩行や歩容の情報配信による家族・知人間でのコミュニケーションや、遠隔地での見守りに対する効果については、男性の方がその効果に肯定的な回答が多かった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-32] 踏み出し戦略に着目した「転倒誘発装置」の検討
平衡能力と移動能力に焦点を当てて

*檜皮 貴子[1]、井上 咲子[2]、加藤 玲[3] (1. 新潟大学、2. 新潟大学大学院、3. 東京藝術大学)

転倒を回避する一つの方策は、身体重心を通る鉛直線が支持基底面から外れても、脚を踏み出し新たな支持基底面を作り、その中に再び身体重心を収めることである。そのため筆者らは、足元のボードを前方へ傾け、姿勢・バランスの乱れを意図的に作り出し、転倒を誘発する装置を開発した。この転倒誘発装置では、傾いたボードの先端が床に着いてから被験者の足裏がボードから離れるまでの反応時間（A）、ボードから離れた足が着地までにかかる時間（B）、AとBから算出される脚の踏み出し速度及び歩幅を測定できる。そこで本研究は、転倒誘発装置で得られる値及び転倒予防に関連する平衡能力と移動能力について転倒歴の有無で比較し、本装置の転倒リスク評価法としての有用性について検討することを目的とした。若年成人124名（20.8±1.9歳、男性52名、女性72名）を対象に転倒誘発装置での測定と足圧中心測定（開眼片脚立位・左右各30秒間）、開閉眼片脚立位時間（左右）、FR、TUGの測定と転倒歴を調査した。転倒群（28名）と非転倒群（96名）に分け、各値を比較した結果、本装置における「踏み出し距離」において、転倒群（76.6±16.6cm）は非転倒群（87.0±17.3cm）よりも有意に低値を示した（p=0.005）。加えて、開眼片脚立位時間（左）及び本装置における「踏み出し速度」において、転倒群は非転倒群よりも値が低い傾向を示した（p=0.066，p=0.068）。さらに、足圧中心測定（右）の総軌跡長と単位軌跡長は、転倒群が非転倒群よりも値が高い傾向を示した（p=0.057，p=0.057）。FR及びTUGでは、群間差は示されなかった。以上より、転倒誘発装置における「踏み出し距離」と「踏み出し速度」において転倒歴の有無による値の差が示されたため、FRやTUGでは評価できない転倒のリスクを本装置では評価できる可能性が示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-33] 体力テストによる客観データと問診による主観データから見た転倒リスクに対する加齢の影響

*加藤 貴英[1]、早坂 太一[1]、近藤 雅哉[1]、川越 隆[2]、大須賀 洋祐[3] (1. 豊田工業高等専門学校、2. 愛知医科大学、3. 国立長寿医療研究センター)

＜目的＞本研究では身体機能データおよび転倒に関する問診データを高齢者，中年者，若年者を対象に収集し，転倒リスクに対する加齢の影響について検討した．
＜方法＞参加者は高齢者10名（65±3歳），中年者10名（45±2歳），若年者12名（25±2歳）の計32名であった．転倒ハイリスク者の発見のための問診（鳥羽ら，日老医誌，2005）を実施した後，形態計測および安静時血圧，握力，開眼片脚立ち，5m歩行速度，Timed up and go test（TUG）を測定した．過去1年間における転倒群23名と非転倒群9名に群分けし，形態計測と身体機能データの比較は対応のないt検定を行った．また，転倒歴の有無および各質問項目の回答からクロス集計し，Fisherの直接法による確率を確認した．
＜結果＞過去1年間に転倒した割合は高齢者が60%，中年者が10%，若年者が17%で，転倒群（53±18歳）と非転倒群（40±15歳）の年齢比較は有意であった（t(30)=2.206, p=0.035, d=0.833）．身長，体重，体脂肪率等，形態計測項目に差はなかったが，転倒群において安静時収縮期血圧が有意に高く（t(30)=2.495, p=0.018, d=0.819），開眼片脚立ち時間が有意に短かった（t(30)=2.345, p=0.026, d=0.818）．
＜結論＞過去1年間の転倒経験率は体格に関係なく高齢になるほど高まり，転倒経験者は血圧が高く，バランス能力が衰えていた．本研究では，問診データとの有意な関係を示すには不十分であったため，今後の検証として追加実験を行う必要がある．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-34] 地域在住高齢者における肩関節の水平屈曲および水平伸展筋力とフレイル進行度との関連

*中谷 敏昭[1]、灘本 雅一[2]、金子 竜大[3] (1. 天理大学、2. 桃山学院大学、3. 京都先端科学大学)

本研究では，地域在住高齢者における肩関節の水平屈曲筋力（以下，肩押力）および水平伸展筋力（以下，肩引力）とFRL進行度との関連を検討した．対象者は，奈良県T市に在住する65～93歳の高齢男女185名（78.7±5.7歳）とした．肩押力および肩引力は，肩関節外転位において肩押引力アタッチメントを胸の前で保持し，立位姿勢にて水平面で前方および後方に力発揮させる等尺性筋力で測定した．FRLの判定は，基本チェックリストの回答を得点化し，25点中8点以上をFRL群，4～7点をプレフレイル（P-FRL）群，3点以下をロバスト（RBT）群と分類した．各群間の比較には一元配置分散分析を用い，有意な主効果が認められた場合にはTukey法よる多重比較を行った．肩押力および肩引力によるFRL判別のカットオフ値はReceiver Operating Characteristic（ROC）分析により算出し，最適値を決定した．有意水準は5%とした．肩押力はFRL群13.6±5.7 kgf，P-FRL群15.8±6.8 kgf，RBT群18.9±6.9 kgfであり，肩引力はそれぞれ11.2±4.7 kgf，12.0±4.0 kgf，14.3±4.6 kgfであった，いずれの筋力もRBT群と比較してFRL群およびP-FRL群において有意に低値を示した（$p<0.05$）．ROC分析の結果，FRL判別における肩押力と肩引力の曲線下面積は0.674および0.657で，Youden indexに基づくカットオフ値は，肩押力が12.2 kgf（感度79.6%・特異度50.0%），肩引力が11.2 kgf（感度69.3%・特異度60.0%）であった．以上のことから，地域在住高齢者における肩押力と肩引力は，RBT群と比較してFRL進行度と関連が認められるものの，P-FRL群とFRL群との間では明確な筋力差は認められなかった．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-35] 高齢者の体力を評価する質問項目の選定

*坂井 智明[1]、石原 一成[2] (1. 名古屋学院大学スポーツ健康学部、2. 福井県立大学)

【緒言】地域高齢者の介護予防に取り組む過程で、多くの高齢者が一次予防への参加を見送っていること、また自治体は高齢者の体力の実態を把握していないことが明らかになった。高齢者が集まる健康診断などで体力を評価するには質問紙法が有効であるが、その開発は進んでいない。そこで本研究では、高齢者の体力を評価するための質問項目の選定を目的とした。【方法】本研究の対象者は、運動教室への参加を希望した65歳から86歳までの高齢者83名（男性25名、女性58名、平均年齢76.1±4.3歳）であった。対象者は、新体力テスト実施要項（65歳～79歳対象）に基づき、握力、上体起こし、長座体前屈、開眼片足立ち、10m障害物歩行、6分間歩行を実施した。その後、項目別得点表を用いて各測定項目を10段階で評価した。体力測定に先立ち、対象者の日常生活活動を40問の質問紙にて確認した。【結果】全対象者のうち、過去に大きな病気を経験した者は22名、体力に自信がある者は5名、ほぼ毎日運動している者は11名であった。全員が実施可能と答えた質問項目は4項目、選択肢のいずれかの回答者が4名未満であった質問項目は20項目であった。残りの16項目について、回答者の体力との関係を検討した結果、上体起こし8項目、開眼片足立ち6項目、障害物歩行7項目、6分間歩行7項目で有意差が認められた。特に、階段昇降、姿勢の変化・保持、移動に関する質問項目において、体力との有意な関連が認められる傾向があった。一方、機器操作を中心とした7項目では、いずれの体力測定項目とも有意差は認められなかった。【結論】高齢者の体力と日常生活動作の関連を検討した結果、11の質問項目で高齢者の身体機能を確認できることが明らかになった。一方で、日常生活活動に関する回答の偏りが見られた質問項目については、その要因を明らかにするため、さらなる調査が必要である。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 13:10 ~ 14:10 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／測定評価

[3b1129-164] 測定評価／ポスター発表

[08測-ポ-36] 高齢者の反応ステップテストにおける敏捷性・平衡性と身体・認知機能との関連

*尾山 裕介[1]、坂口 雄介[2]、村山 敏夫[3] (1. 桐蔭横浜大学、2. 北陸大学、3. 新潟大学)

転倒回避動作には敏捷性や平衡性が必要であるものの、これらは単一の転倒関連体力のみで評価されることが多い。我々は敏捷性と平衡性の2つの観点から転倒回避能力を一連の動作で評価するテスト（以下、反応ステップテスト）を考案し、転倒歴や転倒不安といった転倒リスクが大きいほど反応ステップテストが低下していることを明らかしてきた。しかしながら、反応ステップテストとその関連要因については検討できていないため、本研究では反応ステップテストと身体・認知機能との関連性を検討した。被験者は高齢者56名（76.3±6.1歳）とした。反応ステップテストは圧力マットを敷いたステップ台上で立位姿勢をとり、光刺激後に素早く前方に1歩踏み出し、その後、10秒間の両脚立ち姿勢を保持した。評価変数は敏捷性を挙上時間（光刺激発生から片脚を挙上するまでの時間）、平衡性をCOP変数（単位時間軌跡長）とした。また、重心動揺計にステップ後5秒間について、1秒ごとに単位時間軌跡長を算出した。反応ステップテストは3試行の平均値を代表値とし、身体機能は握力、椅子立ち上がりテスト、Functional Reach Test（FRT）、2ステップテスト、認知機能はTrail Making Test Part-A（TMT-A）とPart-B（TMT-B）を測定した。重回帰分析の結果、挙上時間（敏捷性）と有意な関連のあった変数は認められなかった。一方、COP変数（平衡性）ではステップ後1〜2秒の単位時間軌跡長においてFRTおよびTMT-Bとの間に有意な関連が認められた。ステップ後1〜2秒は平衡性の再構築が求められる段階であり、FRTで評価される身体的バランス能力に加え、TMT-Bで評価される実行機能や注意制御能力も関与していると考えられる。したがって、反応ステップテストは多面的な転倒リスクの評価に有用な手法である可能性が示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-01]

高校陸上競技部における選手選考の現状と課題

*深見 英一郎[1]、岡田 悠佑[2] (1. 早稲田大学、2. 明治学院大学)

[09コ-ポ-03]

幼児における短距離走トレーニングとしての【7秒間走】の効果

*浦田 達也[1]、野方 円[2]、秋山 大祐[3]、小田 俊明[4] (1. 関西学院大学、2. 中部学院大学、3. 岡山商科大学、4. 順天堂大学)

[09コ-ポ-05]

即時フィードバックがリバウンドジャンプに及ぼす影響
女子跳躍競技者を対象とした検討

*中川 未加子[1] (1. 日本女子体育大学)

[09コ-ポ-07]

陸上競技の女子短距離選手を対象としたそうパフォーマンスの向上に向けた支援のあり方に関する事例的研究

*髙木 陽[1] (1. 日本体育大学大学院)

[09コ-ポ-09]

大学生駅伝選手における腸内環境の改善が鉄栄養状態へ及ぼす影響
選抜選手とその他の選手との比較

*渡邊 香緒里[1]、谷口 耕輔[1]、安達 瑞保[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

[09コ-ポ-11]

ランニングにおける反実仮想説明法を用いたトレーニングの個別最適化に対する可能性探索

*稲葉 龍一郎[1]、宮崎 陽輔[1]、平野 賢[1] (1. 株式会社アシックス)

[09コ-ポ-13]

学生コーチが抱く役割認識と困り感

*渡邊 裕也[1]、池田 和司[1]、冨田 剣太郎[1]、大井 理緒[2] (1. 日本経済大学、2. 環太平洋大学)

[09コ-ポ-15]

チアリーディングにおけるロンダート宙返りの動感に関する研究

*早田 剛[1]、藤原 悠太[1]、坂本 康輔[1] (1. 環太平洋大学)

[09コ-ポ-17]

運動学習における練習頻度の違いが技術習得と技術保持に及ぼす影響

*坂本 拓巳[1]、上田 真也[2] (1. 森ノ宮医療大学、2. 天理大学)

[09コ-ポ-19]

体操競技の跳馬における〈片外手片内手着手〉〈伸身ユルチェンコ3/1ひねり〉に関する発生分析

*橘 汐芽[1] (1. 筑波大学大学院)

[09コ-ポ-21]

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

指導用動作モデルを用いたピルエット動作指導に関する研究
フィードバックトレーニング効果について

*河鰭 真世[1]、堀内 健太郎[1]、津田 博子[1]、松本 真咲[1]、仲間 若菜[1]、阿江 通良[1] (1. 日本体育大学)

[09コ-ポ-23]
大学野球選手のバッティングにおける踏込み動作の実態と踏込み後の打撃動作との関係

*桑原 潤也[1]、藤井 雅文[2]、前田 明[2] (1. 鹿屋体育大学大学院、2. 鹿屋体育大学)

[09コ-ポ-25]
バスケットボールのドライブにおけるフェイントのキネマティクス的分析

*宮平 健介[1]、阿江 数通[2]、内山 治樹[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

[09コ-ポ-27]
疾走速度が高い女子ラグビー選手の加速局面におけるバイオメカニクス的特徴

*和田 直樹[1]、西山 哲成[1]、谷口 耕輔[1]、堀内 健太郎[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

[09コ-ポ-29]
国際レベルのレスリング選手を対象としたミッドサイプルにおける力学的指標の長期モニタリング
縦断的ケーススタディ

*小黒 喬史[1]、松本 慎吾[1]、関 星汰朗[1]、槇野 陽介[1]、月野 雄一[1]、橋本 瀬成[1]、林 嵩之[1]、松本 紘到[1]、黄 仁官[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

[09コ-ポ-31]
マルチサイクル構造のピリオダイゼーションにおける具体的展開

*青山 亜紀[1]、青山 清英[1] (1. 日本大学)

[09コ-ポ-33]
トレーニング経過に伴うベンチプレスでの最大筋力と最小速度閾値の変化

*砂川 力也[1,2]、平良 怜南[2] (1. 琉球大学、2. 琉球大学大学院地域共創研究科)

[09コ-ポ-35]
サッカーにおける新規間欠的持久力テスト(CHU-Test)の生理学的特性
大学生男子サッカー選手を対象にして

*上田 真也[1]、坂本 拓巳[2] (1. 天理大学、2. 森ノ宮医療大学大学院)

[09コ-ポ-37]
大学男子水球選手における水中でのフィールドテストとコーチ評価との関連性

*谷口 耕輔[1]、西山 哲成[1]、堀内 健太郎[1]、和田 直樹[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

[09コ-ポ-39]
エペ種目を専門とする男子大学フェンシング選手におけるコンディションに関する研究
コーチング現場の活用に向けて

*横川 汐音[1]、杉田 正明[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学体育学部)

[09コ-ポ-41]
バスケットボール競技のシュートの精度と遠投力の関係
大学男子バスケットボール選手を対象に

*中嶽 誠[1,2]、木藤 友規[1,2]、青木 和浩[1,2] (1. 順天堂大学スポーツ健康科学部、2. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科)

[09コ-ポ-43]
Do Go players have distinct playing styles? Analyzing player styles using an automatic image recognition system

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

Go players' playing styles

*Lung Hung Chen[1], Tsai-Cheng Wu[2] (1. National Taiwan Sport University, Taiwan, 2. National Tsing Hua University, Taiwan)

[09コ-ポ-45]

バレーボールの自チームの攻撃時助走経路が相手ブロックに与える影響

*宮内 健嗣[1]、串阪 達哉[1]、宮地 弘太朗[1] (1. 大阪体育大学)

[09コ-ポ-47]

日本フロアボール選手権大会男子競技におけるチームスタッツの一考察

*浅井 泰詞[1]、鈴木 タケル[2,3]、北 徹朗[4] (1. 高千穂大学　人間科学部、2. 武蔵野美術大学大学院、3. 日本プロゴルフ協会、4. 武蔵野美術大学)

[09コ-ポ-49]

JRTLとJRLOの得点状況の比較

*山本 巧[1] (1. 防衛大学校)

[09コ-ポ-51]

ハンドボール競技におけるゲームの流れに関する認識

対戦した両チームの選手を対象としたインタビュー調査

*小俣 貴洋[1]、河田 浩貴[2] (1. 京都先端科学大学　健康医療学部、2. 順天堂大学　健康スポーツ学部)

[09コ-ポ-53]

卓球とバドミントンの授業が大学生のスポーツに対する態度と継続意欲に与える影響

*宮﨑 孝一郎[1]、和久井 健吾[1]、牛山 幸彦[1] (1. 新潟大学)

[09コ-ポ-55]

日本体育大学のアスリートにおけるメンタルヘルスの特徴と対応策の検討

NASSを利用したアスリートを対象に

*折茂 紗英[1]、中川 あい[2]、高井 秀明[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学、2. 東京都公立学校スクールカウンセラー)

[09コ-ポ-57]

大学運動部活動における組織文化の変容に関する事例研究

指導者の取り組みに着目して

*矢野 広明[1]、伊藤 雅充[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

[09コ-ポ-59]

NASS（Nittaidai Athlete Support System）の取り組みにおける成果と課題

*杉田 正明[1]、谷口 耕輔[1]、渡邊 香緒里[1]、和田 直樹[1]、堀内 健太郎[1]、中川 あい[1]、西山 哲成[1] (1. 日本体育大学)

[09コ-ポ-61]

大学スポーツ選手のコミュニケーション能力と種目特性・性・役職経験・競技レベルとの関連

*井藤 英俊[1]、青柳 領、坂口 英章[2] (1. 九州医療科学大学、2. 日本経済大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-01] 高校陸上競技部における選手選考の現状と課題

*深見 英一郎[1]、岡田 悠佑[2] (1. 早稲田大学、2. 明治学院大学)

スポーツ選手にとってオリンピック・パラリンピックは最高の舞台であり，この舞台への出場権を得た者は多くの名誉や賞賛が与えられる一方で，落選した者はそれらを手にすることができない。選手にとってそれは天国と地獄ほどの差を生む残酷なイベントである。また，代表選手に選ばれることは単に大会に出場できるだけでなく選手のそれまでの壮絶な努力が報われる時であり，それは選手並びに選手を取り巻くすべての関係者のその後の人生にも多大な影響を及ぼす。日本陸上競技連盟は、オリンピック代表選手を選考する際、まず強化委員会で選考原案を作成し、それを基に関係者だけでなく外部有識者を加えたメンバーで構成した選考委員会で選考案を策定し、それを理事会で承認するというプロセスを設けている。このような選考過程は、選考の公平性、透明性を担保するための仕組みであり、何より選外となった選手とその関係者が選考手続きに疑念を抱くことなく選考結果に納得してもらうための仕組みを整えている(麻場・平野, 2019)。
本研究では、高校陸上競技部の指導者を対象に自校の選手選考方法についての調査を実施することで、高校陸上競技部における選手選考の現状と課題を明らかにしたい。トップレベルの競技スポーツとは異なり、教育活動の一環として営まれる運動部活動における選手選考は、単に記録を持つ選手、勝てる選手という基準だけで選手を選考していないのではないだろうか。また、選手選考に対する考え方は、指導者や部員、保護者等の立場やチーム状況等によって様々に異なることが予想される。たとえば、大会で勝利することを最優先すれば選手の競技力が最も重視されるが、教育面を考慮すれば人間的にも他の生徒の模範となる選手が望ましい。果たして、高校陸上競技部において実際にはどのような選手選考が行われているのか、指導者が考える選手選考の現状と課題について明らかにする。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-03] 幼児における短距離走トレーニングとしての【7秒間走】の効果

*浦田 達也[1]、野方 円[2]、秋山 大祐[3]、小田 俊明[4] (1. 関西学院大学、2. 中部学院大学、3. 岡山商科大学、4. 順天堂大学)

小学生児童を対象とした7秒間走の効果を調べた研究では、練習実施後の走速度改善が報告されている。幼児に対しても7秒間走を実施すると走速度改善に寄与できると考えられるが、検討した研究は見当たらない。そこで本研究は、幼児に対する7秒間走の効果を調べることを目的とした。本研究の対象者は、O保育園に通う3歳児から５歳児の計17名とした。対象者の身体的特徴は、身長：99.5±4.4㎝、体重：15.4±1.5kg、およびBMI：15.6±1.3(kg/m^2)であった。対象者に週２日の７秒間走を２回実施させ、３か月12週間のトレーニング期間前後で、25m走の測定を行なった。25m走測定の際に、走る方向の右側からデジタルビデオカメラを走路中間地点に設置し、パンニング撮影で幼児の疾走動作を撮影した（120 fps）。2.5m毎の通過タイムを算出するために、走路左右端に2.5m毎にミニコーンを設置した。得られた映像を基に、（1）スタートからゴールまでの2.5m毎の疾走速度、ストライドおよびピッチ、（2）最高疾走速度および、最高疾走速度時のストライド・ピッチ、（3）1サイクルのセグメント角度・角速度（体幹および脚全体）、（4）1サイクルの関節角度・角速度（股関節、膝関節、足関節および肩関節）を算出した。2.5m毎の疾走速度、ストライド、およびピッチに有意な交互作用（トレーニング前後×疾走距離）は認められなかった。最高疾走速度および最高疾走速度時のストライド・ピッチに有意な差は認められなかった。1サイクルのセグメント角度および関節角度にトレーニング前後で有意な差は認められたが、セグメント角速度および関節角速度に有意な差は認められなかった。以上のことから、幼児に対するトレーニングとしての７秒間走は効果が低かったことから、最高疾走速度を高めるためには、走る時間を短くするなどの工夫が必要であると考えられた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-05] 即時フィードバックがリバウンドジャンプに及ぼす影響
女子跳躍競技者を対象とした検討

*中川 未加子[1] (1. 日本女子体育大学)

陸上競技の跳躍競技者は練習や競技中、跳躍ごとに自身の試技を確認し次の跳躍に向けて動作を修正しながらより良いパフォーマンス発揮を目指している。そのためには、跳躍動作に対する主観的現象と客観的現象との照合が効果的であるとされ（村木、1992）、さらにその差異を認識し、修正・実行する能力が競技力向上に重要であると考えられる。そこで本研究は、5回連続リバウンドジャンプ（5RJ）を用いて、跳躍に関する即時フィードバックの有無が5RJの跳躍パフォーマンスに与える影響を検討することを目的とした。対象は大学陸上競技部所属の女子跳躍競技者18名および実業団所属の女子跳躍競技者4名とし、同一被験者に対してフィードバックあり条件およびなし条件を実施。測定にはマットスイッチを用いた。試技は各条件につき1名あたり3回、試技間休息は最大3分とした。フィードバック内容は、RJ指数、跳躍高、滞空時間、さらに矢状面から撮影した映像を含み、フィードバック条件では各跳躍直後にそれらを被験者に提示した。本研究は、即時フィードバックが5RJの跳躍動作に及ぼす影響、および即時フィードバック情報を競技者がいかに解釈し、動作に反映させているかを明らかにすることが期待される。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-07] 陸上競技の女子短距離選手を対象としたそうパフォーマンスの向上に向けた支援のあり方に関する事例的研究

*髙木 陽[1] (1. 日本体育大学大学院)

スポーツパフォーマンスは、体力、技術力、戦術力、外的諸条件、心的能力、基礎的諸条件などの様々な要因が複雑に絡み合いながら構成しており、スポーツパフォーマンスの向上にはこれらを複合的にみていく必要があります。そしてこれらの要素はコンディションとして評価され、ある目的に向けて望ましい状態に整えることがアスリートにおけるコンディショニングと報告されており、コンディションを良い状態に整えることでハイパフォーマンスを発揮することができると考えられています。しかし、身体的なコンディションや精神的なコンディションは選手の形態や体力的要因によって変化が生じるものであります。よって個人の変化を縦断的に比較検討し、日々のトレーニングの内容、試合時の走データを分析することでスポーツパフォーマンスの向上の要因を探ることができると考えられる。また個人の変動を縦断的に比較検討し、事例的に研究することで競技力の向上に向けた支援の在り方に関する視点を提示することができると考えられます。陸上競技の女子短距離選手を対象とし、日々のトレーニング、コンディション、スプリントトレーニングマシンを用いたトレーニングでの走動作の意識の変化、試合時の走データを分析することで競技力の向上の支援のあり方について事例的に研究することを目的とします。対象者は短距離走を専門とする社会人女性競技者であり、学生時代はトップレベルの競技成績で活躍した選手であるが、大学卒業後は怪我により競技成績が振るわない状況が続いている。競技成績を向上させるために現在トレーニングに取り組んでいる状況であることから、現在は競技成績の向上を目指してトレーニングに取り組んでいます。　分析項目は、日々のトレーニングの内容、トレーニング前後でのコンディション、試合時のコンディション、スプリントトレーニングマシン前後の走動作、試合時の走データを収集し分析を行います。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-09] 大学生駅伝選手における腸内環境の改善が鉄栄養状態へ及ぼす影響
選抜選手とその他の選手との比較

*渡邊 香緒里[1]、谷口 耕輔[1]、安達 瑞保[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

腸内環境が改善することで鉄代謝の抑制を防ぎ、鉄栄養状態の改善へ繋がる可能性がある．大学生駅伝選手に対し腸内環境を整える食事内容への介入により、腸内環境の改善が鉄栄養状態へ及ぼす影響を検討することを目的とした． 大学生男子駅伝ブロックに所属する選手13名を対象に、2024年4月から2025年1月を調査期間とし、血液検査、腸内細菌叢検査、食物摂取頻度調査を2〜3か月に1回の頻度で計4回実施した．得られた検査結果を基に個別に栄養指導を行い、寮で提供される食事に腸内環境を整える食材を取り入れ、栄養セミナーにて選手の知識レベルを高め行動変容へ繋げるアプローチを行った．本発表では箱根駅伝本選の選抜選手（5名）と非選抜選手（8名）を比較し腸内細菌叢および鉄栄養状態に関する群間の差異を検討する．選抜選手と非選抜選手の平均で1回目と4回目の結果を比較すると、腸内細菌叢検査はビフィズス菌と酪酸産生菌の増加率がそれぞれ326%と159%、258%と150%であり、特に選抜選手での増加が顕著であった．一方、機能性下痢（IBS）スコアの増加率は選抜選手で減少（64%）、非選抜選手は増加（482%）を示した．食物摂取頻度調査は、水溶性食物繊維と鉄の摂取量増加率は全選手減少、ヨーグルト摂取頻度の増加率は183%，107%であり、全員が2回目以降はビフィズス菌入りの製品を摂取していた．血液検査は鉄栄養状態に変化は認められなかった．食事介入により有用菌は特に選抜選手での改善が顕著であったことがIBSスコアに影響を及ぼしたと考えられる．一方、夏合宿や実習などにより食環境が不安定となった時期（2・3回目調査）は、腸内環境の一時的な悪化がみられ、これが鉄栄養状態に変化が見られなかった要因の一つである可能性が考えられる．今後はより長期的介入での腸内環境の長期的安定化による鉄栄養状態への影響を改めて検討する必要がある．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-11] ランニングにおける反実仮想説明法を用いたトレーニングの個別最適化に対する可能性探索

*稲葉 龍一郎[1]、宮崎 陽輔[1]、平野 賢[1] (1. 株式会社アシックス)

近年、アプリケーションやデバイスの普及により、ランナーは自身のランニング特徴（ペース、心拍数、ストライド長など）を容易に計測・蓄積できるようになった。特に、競技レベル向上を目指すランナーには、蓄積されたデータから個人の特性を踏まえた具体的かつ実行可能なトレーニング提案が不可欠である。しかし、従来の方法は一般向けの画一的なものや経験則に基づいたコーチングが多く、ランナーそれぞれに最適化された提案をするのは未だ困難な点が多い。このような課題に対し、因果推論分野における反実仮想説明法は、具体的な行動改善策を提示する手法として金融や医療分野で活用されつつあり、個別最適化された行動提案の可能性が広がっている。そこで、本研究では競技力向上に重要なトレーニング方法の個別最適化への知見を得るための第一歩として、練習の質(練習メニュー)と量(走行距離、走行回数)という基本要素に着目し、反実仮想説明法を用いることで目標達成のために必要な変更内容を個人にとって受け入れやすい形で提案する方法を確立することを目的とした。具体的には、DiCEを用いて、目標とするフルマラソンタイムの達成に必要な練習の質と量の組み合わせである大量の反実仮想説明(「もしこのように練習を変えていれば目標達成できた」という提案)を生成した。本研究では、各個人での受け入れやすさと期待される練習効果のバランスが最適な反実仮想説明を抽出するために、生成された各反実仮想説明において、個人の嗜好に基づいた変更のしやすさを示す「変更優先度」、現状からの「変更量」、提案により見込まれる「目標達成確率の変化量」の3要素を定量化した。さらに、これらを統合したスコア関数を用いることで、各個人にとって最適な反実仮想説明を提案するアルゴリズムを構築した。本発表では、5名程度のランナーを対象とした実証実験の結果から、提案手法の妥当性を報告する。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-13] 学生コーチが抱く役割認識と困り感

*渡邊 裕也[1]、池田 和司[1]、冨田 剣太郎[1]、大井 理緒[2] (1. 日本経済大学、2. 環太平洋大学)

コーチング学において、競技現場での指導実践を担う「学生コーチ」に焦点を当てた研究は少ない。学生コーチは、競技者としての出場機会が限られる選手が転向するケースが多く、転向動機に内在するネガティブな感情やモチベーションの低下が課題となることも少なくない。また、多くのチームにおいて学生コーチの役割は明確に定義されておらず、本人の経験やチーム内の暗黙知に委ねられている実態がある。結果として、学生コーチは自らの存在意義や職責の曖昧さに戸惑いを抱えながら活動している可能性がある。こうした背景を踏まえ、本研究では大学運動部における学生コーチを対象に、彼らがどのような役割認識を持ち、どのような困り感を抱えているのかを明らかにすることを目的とした。これにより、学生コーチに対する適切なコーチング支援の在り方を検討する一助としたい。
大学運動部に所属する現役の学生コーチ2名を対象とし、学生コーチとして活動する上での役割認識や、困り感に関する内容を問う半構造化インタビューを実施した。得られた結果はSCAT（大谷，2008）により質的に分析した。また分析で得られた構成概念を抽出し、KJ法（川喜田, 1967）にて分類分けして整理することで、学生コーチが持っている役割認識や、抱いている困り感について明確化した。これらの分析には、コーチング学やスポーツ心理学の専門家を中心とした5名の研究者が携わった。調査結果の詳細については、当日の発表を参照されたい。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-15] チアリーディングにおけるロンダート宙返りの動感に関する研究

*早田 剛[1]、藤原 悠太[1]、坂本 康輔[1] (1. 環太平洋大学)

【緒言】チアリーディングは応援活動から発展した競技である。しかしタンブリング技術、特にロンダート宙返りの指導法に関する研究は見当たらない。金子(2005)は、運動を遂行している人が知覚しうる全ての感覚から構成されている意識を「動感」と呼んでいる。チアリーディングにおける熟練者と非熟練者を対象に、ロンダート宙返りの動感に関する分析を行うことで、技術習得過程の特徴を捉えることができると考えられる。
【目的】大学チアリーディング選手を対象に、熟練度とロンダート宙返りにおける動感を明らかにする、効果的な指導法を検討することとした。
【方法】対象はK大学チアリーディング部女子部員17名（年齢19.2±1.2歳）とし、熟練度に基づきA・Bの2チームに分けた。Googleフォームを用いたアンケート調査を用い、ロンダート宙返りにおける動感を回答させた。
【結果】ロンダート宙返りにおける熟練度による相違がみられ、熟練度の高いAチームは「ロンダートで足を入れ込む」、「ロンダートのスピードを速く走る」の意見が多かった。一方、非熟練者のBチームでは「腕を上に上げきる」や「ロンダートでしっかり手を押す」の意見が多かった。
【考察】　熟練者（Aチーム）は宙返りの推進力となる下肢動作や助走速度を意識するのに対し、非熟練者（Bチーム）は身体を高くあげるための上肢動作を意識する傾向が示された。これは意識するタイミングの差、すなわち熟練者は宙返りの「準備段階」を、非熟練者は宙返り前の「ロンダート段階」を意識していると考察した。この意識の差異は、技の力学的原理の理解度に起因すると考えた。本結果より、熟練度に応じた指導の着眼点の違いを明らかにし、動作原理の理解を促す指導の重要性が推察された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-17] 運動学習における練習頻度の違いが技術習得と技術保持に及ぼす影響

*坂本 拓巳[1]、上田 真也[2] (1. 森ノ宮医療大学、2. 天理大学)

【背景及び目的】運動学習において，学習者がモデルを観察し模倣することは基本的な学習方法であり有効性は示されている．よって，体育の授業やスポーツ現場の運動学習においても，指導者の見本を観察し模倣する観察学習が取り入れられている．運動学習においてスキルを獲得する際は，「技術習得」と「技術保持」が重要である．以上のようなスキルを獲得する際の効果的な練習頻度を明らかにすることは，教育やスポーツ現場における指導法確立の一助になり得る．そこで本研究では，運動学習における練習頻度の違いが技術習得と技術保持に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした．【方法】大学生42名を対象とした．週に1回15分間練習する群（週1G）23名と，週に3回各5分間練習する群（週3G）19名に振り分けた．運動課題は，カスケードを採用した．カスケードの動作を正面から撮影した見本動画を観察しながら，運動学習を行った．両群とも練習を4週間行い，その後練習をしない4週間の期間を経て，1ヶ月後に最終テストを行った．【結果】達成回数について，二元配置分散分析の結果，有意な交互作用は認められなかった（$F=1.49$，$p=0.21$）．群間差における主効果については有意な差が認められた（$F=13.30$，$p<0.001$）．Bonferroni法による多重比較検定の結果，週3Gの3週目（$F=7.14$，$p<0.01$）と4週目（$F=10.44$，$p<0.01$）は週1Gと比較して有意に高値を示した．また，週1G の4週目と1ヶ月後は，有意な差は認められなかった（$F=0.34$，$p=0.56$）．さらに，週3G の4週目と1ヶ月後は，有意な差は認められなかった（$F=0.88$，$p=0.35$）．【結論】観察学習を取り入れた運動学習において，練習頻度の違いは技術習得に影響をもたらすが，技術保持には影響をもたらさないことが示唆された．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-19] 体操競技の跳馬における〈片外手片内手着手〉〈伸身ユルチェンコ3/1ひねり〉に関する発生分析

*橘 汐芽[1] (1. 筑波大学大学院)

本研究は、体操競技の跳馬における高難度技〈後転とび後方伸身宙返り3/1ひねり（以下、〈伸身ユルチェンコ3/1ひねり〉とする。）〉の習得過程に関して、発生運動学における「発生分析」（渡辺, 2015, p.4）を行ったものである。〈伸身ユルチェンコ3/1ひねり〉は跳馬に対して後ろ向きに踏切りを行い、〈後転とび〉で着手した後に〈後方伸身宙返り〉を行いながら〈後方3/1ひねり〉を行う、高難度の跳躍技である。しかし、この技を競技会で実施する選手は極めて少ない。さらに、映像資料から本技の着手方法として、〈内手着手〉〈外手着手〉〈片外手片内手着手〉の3種類の方法が映像資料によって確認されているが、このうち〈片外手片内手着手〉で成功させた選手は1名のみである。このことから、本研究では〈片外手片内手着手〉の方法で〈伸身ユルチェンコ3/1ひねり〉を習得し、その過程で得られたコツ情報を提示することを目的とした。
そのために本研究では、既に発表者がなじみのあった〈内手着手〉および〈外手着手〉の動感意識が基に、〈片外手片内手着手〉〈伸身ユルチェンコ3/1ひねり〉の習得過程における様相変化とコツ発生のプロセスについて詳細に記述した。また、特に習得の転機となった事柄に対して、コツの意味構造分析を行った。
発表者の習得過程において特に転機となったのは、「肘が曲がる着手位置をねらう」という〈内手着手〉のねらい方を応用した際に、両腕で鋭く突き放すことが可能になった事柄であった。このコツの意味は、着手時に左右の腕が別々の機能を果たし、身体のねじりが生しさせ、両腕を機能させて突き放すことができるようになることだとわかった。

引用・参考文献
渡辺良夫（2015）個別運動学と一般運動学の架橋性, 伝承15：1-26.

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-21] 指導用動作モデルを用いたピルエット動作指導に関する研究
フィードバックトレーニング効果について

*河鰭 真世[1]、堀内 健太郎[1]、津田 博子[1]、松本 真咲[1]、仲間 若菜[1]、阿江 通良[1] (1. 日本体育大学)

本研究は，指導用動作モデルを用いたフィードバックトレーニングを実施し，動作の改善過程における変化と主観的意識の関連を検討することで動作習得およびダンス指導の基礎的知見を得ることを目的とした．対象者は，N大学ダンス部に所属する女性ダンサー5名（身長：1.57±0.04m，体重：52.5±4.5kg，年齢：20.6±0.9歳，経験年数：11.8±3.5年）であった．国内外のバレエ団でソリスト以上に所属する女性クラシックバレエダンサー11名の平均動作を指導用モデルとして反映させたアプリ（Loop Traning App, TOPPAN株式会社製）を用いて5回のフィードバックトレーニング実験を行った．トレーニング期間は，主観的意識調査のためにアンケートも同時に実施した．フィードバックトレーニング実験の前後にはpirouette en deor (以下,ピルエット)を実施し，対象者の動作を光学式動作解析データ収集カメラ12台（ArqusA5, Qualisys, 250 Hz）とマーカーレスカメラ（Miqus, Qualisys, 250Hz）を用いてデータを取得した．得られた３次元座標データから身体各部の方向角と回転中の安定性の指標として身体の傾斜角度を算出した．フィードバックトレーニング前後の動作の特徴においては，角運動量生成に重要とされる準備局面において，指導モデルと比較し大きなばらつきがみられた．そこで，準備局面に焦点を当て指導モデルを用いたフィードバックトレーニングを実施した結果，トレーニング後には身体傾斜角度の減少がみられた．特に，トレーニング前は指導モデルと比較し身体傾斜角度が大きく，変動も大きい傾向がみられた．しかしトレーニング後では，準備局面を指導モデルに近づけることにより身体傾斜角度が減少し，回転数の増加や回転動作の安定性が向上したダンサーがみられた．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-23] 大学野球選手のバッティングにおける踏込み動作の実態と踏込み後の打撃動作との関係

*桑原 潤也[1]、藤井 雅文[2]、前田 明[2] (1. 鹿屋体育大学大学院、2. 鹿屋体育大学)

野球の打撃動作において、踏込み動作はタイミングの調整やエネルギーの獲得といった観点から極めて重要な役割を果たす。ステップの幅や方向、さらには予備動作としての足部の挙上方法などには選手個々の意図や感覚が反映されるため、選手の個性が顕著に表れる要素の一つであるといえる。本研究では、大学野球選手におけるバッティング時の踏込み動作の実態を明らかにし、その後の打撃動作要素との関係性を検討することを目的とした。対象は2021年から2024年にかけてK大学硬式野球部に所属した野手75名とし、ティースタンド上のボールをセンター方向へ最大努力で打撃するティーバッティングを実施した。光学式モーションキャプチャシステムおよびフォースプレート一体型バッターボックスを用いて試技中の動作を計測した。分析項目として、踏込み動作の幅や方向、予備動作である足部挙上高とスイング速度、身体重心位置の三次元変位、地面反力、力積等との関係性を検討した。その結果、ステップ幅は下肢長に対して38.5%～54.8%の範囲、ステップ方向（右打席から左打席に向かう方向の着地点）は軸足位置に対して−0.26cm～0.09cmの範囲、足部挙上高は17.8cm～59.1cmの範囲で個人差が見られた。一方で、ステップ幅の大きい選手はスイング速度が高く、前頭部の三次元変位が大きい傾向にあった。また、足部の挙上高の大きい選手は、身体重心位置の三次元変位が大きかった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-25] バスケットボールのドライブにおけるフェイントのキネマティクス的分析

*宮平 健介[1]、阿江 数通[2]、内山 治樹[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

本研究は、バスケットボールのドライブにおけるボールを横に振るフェイントをキネマティクス的に分析し、ドライブ成功につながる動作とその要因を明らかにすることで指導に役立つ知見を得ることを目的とした。関東大学男子バスケットボール1部リーグ所属選手20名を対象に、１対１の攻防戦をマーカーレスおよびマーカーベースモーションキャプチャーシステム（Qualysis社製、120fps）を用いて撮影した。オフェンスの身体25点、ボール1点の三次元座標値を抽出後、身体重心位置、ボール位置、体幹の前後傾角度、両肩および両腰水平回転角度を算出し、成功試技と失敗試技を比較した。その結果、ボールをフェイント方向から進行方向へ切り返す局面（42%-50%）で、体幹の前後傾角度は成功試技37.6±5.03°から40.6±4.40°、失敗試技42.2±6.42°から45.7±7.31°と成功試技が有意に小さかった（$p<0.05$）。また、ボールの振り幅は成功試技21.1±0.12cm、失敗試技30.7±0.13cmと成功試技が有意に小さかった（$p<0.05$）。加えて、両肩と両腰の水平回転角度差は、成功試技6.27±3.28°、失敗試技10.75±4.65°と有意に小さく（$p<0.05$）、踏み出し1歩目付近（61%）では、成功試技21.50±8.04°、失敗試技16.00±6.64°と成功試技が有意に大きい値を示した（$p<0.05$）。フェイントは、動きが大きくなるほど身体のバランスを崩しやすく、次の動きが遅れるため小さな動きで相手を大きく動かす技術が望ましいことから（吉井、1986）ボールを横に振るときは、ボールの振り幅や体幹の前傾、捻転差を小さく抑えて身体をフェイント方向に向け、その後の逆方向への踏み出しで肩を進行方向に大きくひねって切り返す動作が、ドライブの成功につながることが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-27] 疾走速度が高い女子ラグビー選手の加速局面におけるバイオメカニクス的特徴

*和田 直樹[1]、西山 哲成[1]、谷口 耕輔[1]、堀内 健太郎[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

ラグビー選手においては短距離での加速が重要とされることから、本研究は50mスプリント走の加速局面（0-20m）でのバイオメカニクス変数を比較することにより、加速能力の向上に資する所見を得ることを目的とした。大学ラグビー部に所属する女子選手16名を対象に50mスプリント走を実施し、光電管（エスアンドシー社製）を用いて10m毎の区間タイムを計測した。また、疾走動作を被験者の左側方からビデオカメラ（SONY社製、撮影速度120fps）で撮影し、動作解析ソフト（DKH社製）を用いて各身体部位をデジタイズすることで0-20m区間のスプリント変数（疾走速度、ピッチ、身長比ステップ長）および0-10m区間の離地時の関節およびセグメント角度を算出した。これらの変数をスプリントタイムで区分した上位群と下位群でマン・ホイットニーのU検定（有意水準5%未満）を用いて比較した。その結果、上位群は3サイクル目（5、6歩目）以降の疾走速度が下位群と比較して有意に高かったことから、加速局面では4歩目までに大きな加速を獲得することが重要であると考えられる。また、下位群と比較して上位群は10mまでのピッチ、それ以降の身長比ステップ長の増加が大きかったが、ピッチと身長比ステップ長には群間の有意差はみられなかった。加えて、本研究では0-10m区間での歩数がどの被験者もおおよそ8歩程度であったことから、0m地点に近い1サイクル目（1、2歩目）と10m地点に近い4サイクル目（7、8歩目）における離地時の体幹および下肢関節角度を比較した結果、両サイクルともに上位群は遊脚の膝関節角度が有意に小さかった。以上の結果から、女子ラグビー選手の短距離スプリントにおいては加速局面前半で離地時の遊脚膝関節屈曲を維持しながら疾走速度を高める必要があると考えられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-29] 国際レベルのレスリング選手を対象としたミッドサイプルにおける力学的指標の長期モニタリング

縦断的ケーススタディ

*小黒 喬史[1]、松本 慎吾[1]、関 星汰朗[1]、槇野 陽介[1]、月野 雄一[1]、橋本 瀬成[1]、林 嵩之[1]、松本 紘到[1]、黄 仁官[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

レスリング競技において様々な負荷の大きさに対して短時間で大きな力を発揮することは重要な体力要素であると言える。そこで本研究では、世界選手権での入賞経験を有するレスリング選手1名（21歳、男子フリースタイル、競技歴19年、レジスタンストレーニング歴9年）に対してミッドサイハイプル（MTHP）を用いて、力学的指標をモニタリングすることを目的とした。測定は2023年10月～2024年10月の期間に実施したレジスタンストレーニングセッション時に実施された。MTHPは膝関節軽度屈曲位となるようにセーフティバーを設置し、その上に置いたバーベルを下肢伸展動作によってできるだけ素早く持ち上げる動作とした。慣性センサーのOUTPUT v2（OUTPUT Sports社）を用いて測定1回あたり3負荷条件（軽負荷・中程度負荷・高負荷）を各3試技ずつ行い、各負荷で最も高いピーク速度を採用した。得られたピーク速度から回帰分析を行い、推定最大ピークパワー（EMPP）、理論上の最大筋力（F_0）、最大速度（V_0）を導出した。これらの指標に対して、Smallest Worthwhile Change（SWC）を算出し、長期的な推移の評価対象とした。また測定期間をa)ベースライン、b)準備期 I 、c)試合期、d)準備期 II に区分し、ベースラインと比較した。結果、EMPP・F_0・V_0は期間ごとに異なる変動パターンを示し、EMPPは試合期後の一時的な低下や準備期 II での回復傾向が観察された。さらに試合期、準備期 II でのパワー向上を目的としたストレングスプログラムを経てF_0が低下しV_0が向上する、所謂速度型の力-速度プロファイルへと変化したことが観察された。したがってMTHPによって導き出されるこれらの指標はレスリング選手の日々のコンディションや身体プロファイルを反映し得るモニタリングツールとして有用である可能性がある。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-31] マルチサイクル構造のピリオダイゼーションにおける具体的展開

*青山 亜紀[1]、青山 清英[1] (1. 日本大学)

トレーニング計画の立案には様々な理論的知識が必要となるが、その中において基盤理論としての位置づけにあるトレーニングピリオダイゼーション理論は、その発祥から現在に至るまで様々に発展を遂げてきた。このように、現代の競技スポーツにおいては複数のピリオダイゼーション理論が展開されているが、プラトーノフによる「マルチサイクル構造のピリオダイゼーション」は、一見すると複数の試合ごとに短期的なサイクルによって競技力を形成する「ブロック・ピリオダイゼーション」と同様の方法論であるように捉えられている可能性があげられる。しかし「マルチサイクル構造のピリオダイゼーション」は、マトヴェイエフによるピリオダイゼーション理論をベースに、シーズン中に出場する試合数の増加という現代の競技スポーツにおける現状（要求）に適応するように構築されたものであり、「ブロック・ピリオダイゼーション」とは理論形成における主要概念が大きく異なりその重要性は高いと言える。しかしながら、これまでの研究においてはこの理論の特徴が示されたものに留まり、実際にどのようなトレーニング計画が立案されているのかという具体的な展開についてはほとんど示されてこなかった現状にある。本研究では、プラトーノフが提唱しているマルチサイクル構造のピリオダイゼーションに基づくトレーニング計画のモデルを分析し、その構造を明らかにすることを目的とした。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-33] トレーニング経過に伴うベンチプレスでの最大筋力と最小速度閾値の変化

*砂川 力也[1,2]、平良 怜南[2] (1. 琉球大学、2. 琉球大学大学院地域共創研究科)

本研究は、ベンチプレスを用いたトレーニングが最大筋力および最小速度閾値（MVT）の変化に及ぼす影響について検討することを目的とした。レジスタンストレーニング経験の有無を問わず大学の健康運動系科目を履修する健常な男子大学生16名を対象とした。対象者は、ベンチプレス、スクワットおよびデッドリフトのトレーニングを週1回の頻度で6週間行った。トレーニング初期は主観的強度の10RMを基準に3セット行い、トレーニングの経過に伴って重量とセット数を任意で漸増させた。ベンチプレスの最大挙上重量（1RM）の測定は、1セット目に20kgの重量で行い、2セット目以降は、前試技の平均速度と対象者の主観的運動強度を参考に2.5―20kgの範囲で漸増させ挙上に成功した試技を1RMとした。その際の平均速度をMVTと定義した。試技は8セット以内で終了するように重量を調整し、適切なセット間休息を設けた。これらの測定は、バーベル中央部に固定された慣性計測センサー（PUSH2.0, PUSH, Canada）により挙上局面の平均速度を計測した。測定で記録された1RMを対象者の体重で除して体重比を算出した。これらは、トレーニング開始前（T-1）、トレーニング中期（T-2）、トレーニング後（T-3）に測定した。その結果、トレーニング期間を通じて1RMの相対強度（%1RM）とMVTとの間には非常に強い負の相関関係（T-1：r=-0.958、T-2：r=-0.968、T-3：r=-0.972）が示された。また、トレーニング経過に伴いベンチプレスの1RMおよび体重比が有意に増大した。加えて、ベンチプレスのMVTは変化は認められなかった。以上より、ベンチプレスの%1RMと平均速度との関係は極めて安定することが示唆された。さらに、トレーニング経過によって変動する筋力向上に対してMVTの変動は小さいことが明らかとなった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-35] サッカーにおける新規間欠的持久力テスト(CHU-Test)の生理学的特性

大学生男子サッカー選手を対象にして

*上田 真也[1]、坂本 拓巳[2] (1. 天理大学、2. 森ノ宮医療大学大学院)

【背景および目的】最近，サッカーの試合中における間欠的持久力テストとして，CHU-Testが中馬により提案された(Chuman et al. 2022)．CHU-Testは，段階的に速くなるビープ音に合わせてサッカーピッチのペナルティエリアを2往復し(16.5 m×4))，その2往復ランニングを10秒間の休息を挟みながら疲労困憊まで繰り返すテストである．CHU-Testパフォーマンスは，サッカーの試合で行われた高強度ランニングでの移動距離や高強度加減速を反映することが報告されている．本研究では，CHU-Testパフォーマンスの生理学的特性について示すことで，従来のサッカーにおける間欠的持久力テストとの違いを明確にし，CHU-Testのフィールドテストとしての応用可能性を見出すことを目的とした．【対象】大学生男子サッカー選手21名を対象に，最大酸素摂取量，Yo-Yo IR test，CHU-Testの3項目を1週間の間隔を空けてランダムに行った．また，Yo-Yo IR testとCHU-Testの終了直後には，血中乳酸値を測定し，各テスト中は常時，心拍数を記録した．【結果】CHU-Testは，最大酸素摂取量(P=0.006, r=0.581)およびYo-Yo IR test(P=0.017, r=0.514)と中程度の相関関係を示した．また，CHU-Test終了後の血中乳酸値は，Yo-Yo IR testに比べて有意(P<0.05, d=2.56)に低値を示した．さらに，CHU-Test中の最高心拍数は，Yo-Yo IR testに比べて有意(P=0.001, d=5.22)に低値を示した．【結論】CHU-Testは，Yo-Yo IR testと中程度の相関関係にとどまり，異なる生理学的特性を有することから，従来の持久系指標と異なるパフォーマンスを反映している可能性が示唆された．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-37] 大学男子水球選手における水中でのフィールドテストとコーチ評価との関連性

*谷口 耕輔[1]、西山 哲成[1]、堀内 健太郎[1]、和田 直樹[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

水球競技は1チーム7名のプレーヤーがプール内に設置された縦30m×横20mのフィールドにおいて得点を競い合う球技であり、水中でのスプリントや方向転換、持久的能力など、多様な体力要素が要求される。日本体育大学では、学生アスリートの競技力向上を目的とした日体大アスリートサポートシステムがあり、水球競技選手に対しても体力要素の把握を目的としたフィットネスチェックを実施してきた。従来は自転車エルゴメーターを用いた最大酸素摂取量の評価等を行っていたが、測定結果とコーチによる選手評価との間に乖離がみられたことから、より水球競技に特化したテストバッテリーの必要性が示唆された。そこで本研究では、指導現場において重要視されているパフォーマンス要素に基づいて、競技特性に即したフィールドテストを考案し、大学男子水球選手の体力プロファイルとコーチによる主観的評価との関連性を検討した。対象は、国内トップレベルの大学男子水球選手20名とし、水中15mスプリント、水中反復スイム（5m×3往復）、水中ジャンプ、水中間欠的持久力測定を実施した。同時期にチームコーチ2名による各選手のスプリント能力、俊敏性、持久力についてVAS法で評価を行った。コーチ間の信頼性は級内相関係数（ICC）により中程度（ICC=0.479～0.699）と確認されたため、2名の平均値を解析に用いた。フィールドテスト結果とVAS評価との相関分析の結果、持久力指標である最終泳速度とコーチ評価との間に有意な正の相関関係が認められた（r=0.610、p<0.01）。一方、スプリント能力および俊敏性に関しては有意な相関関係は認められなかった。　競技現場で評価されるスプリントや俊敏性は、泳力や方向転換能力だけでなく、知覚・認知的側面を含む複合的な要素に基づいている可能性が示唆される。今後は、競技特性をより反映した実践的な評価法の開発が求められる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-39] エペ種目を専門とする男子大学フェンシング選手におけるコンディションに関する研究

コーチング現場の活用に向けて

*横川 汐音[1]、杉田 正明[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学体育学部)

フェンシング競技は，ポイントを獲得するための動作の1つとしてアタック（以下：ファント）が主に行われる．ファントの動作は構えの姿勢からバウンド後に行われることが多いため，ストレッチショートニングサイクルメカニズムを用いる可能性が高く，より良いファントを行うためには，ファント遂行時の高い力の立ち上がり率を有していることや大きなパワーを発揮する能力が求められる．また，フェンシング競技はオープンスキルであることや大学生選手は特に戦術の展開を指導することが求められることから，実践的な練習に多くの時間を割く必要がある．実際に，フェンシング競技では実践的な練習が多く行われており，それによる怪我が課題となっており，練習量およびコンディションに関するモニタリング手法の開発が今後の課題となっている．以上のことから本研究は，大学男子フェンシング選手の主観的および客観的な指標を用いてコンディションを把握し，コーチング現場の活用方法を検討することを目的とした．対象は，A大学フェンシング部に所属しエペ種目を専攻している男子４名とした．方法は，起床時に視覚的アナログスケール（以下：VAS）の記入，練習前にジャンプおよび握力測定，練習中に心拍数および運動時間の測定，練習後にVASの記入，ジャンプおよび握力測定を行った．練習前後に行うジャンプ測定は，腰に手を当てた状態でのカウンタームーブメントジャンプ（CMJ）およびリバウンドジャンプ（RJ）の２種類のジャンプを行った．結果は，CMJの跳躍高およびRJのパワーにおいて試合時に最高値は出なかったものの，２名はCMJの跳躍高の１週間ごとの平均値において，試合が行われる週で最も高い値となった．一方でRJは，試合が行われる週で最も高い値を示した者はいなかった．結果の詳細や考察については学会当日に発表する．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-41] バスケットボール競技のシュートの精度と遠投力の関係

大学男子バスケットボール選手を対象に

*中嶽 誠[1,2]、木藤 友規[1,2]、青木 和浩[1,2] (1. 順天堂大学スポーツ健康科学部、2. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科)

バスケットボールでは、ボールを遠くへ投げられる選手ほどシュートの精度が高いのだろうか。運動課題において速度と精度との間にはトレードオフの関係がある（Fitts, 1954）というフィッツの法則が知られているが、発揮筋力が大きくなるに伴って生体信号に加わる信号依存ノイズが大きくなる（Harris & Wolpert, 1998; Jones et al., 2002）ことが、その原因の一つと考えられている。フィッツの法則がバスケットボールのシュート動作でも成り立つのであれば、同じ距離からシュートする場合には、遠投力が高い選手ほど弱い力で投げることができるので信号依存ノイズは小さくなるために精度が増すであろう。この仮説を検証するために大学男子バスケットボール選手22名が本研究に参加した。参加者は、2種類の投げ方（ワンハンド、ボースハンド）で遠投を行った（遠投距離を記録した）後、3段階の距離（1.25m、4.22m、6.75m）からシュートを実施した。また、慣れている投げ方であるワンハンドシュートで、0.61kgから1.50kgまでの4種類の重さのボールを用いたシュート実験にも参加した。その結果、慣れているワンハンドの投げ方の方が遠投距離は長く、シュート成功確率も高かった。このとき、遠投能力が高い選手でシュート成功確率が高かった。また、ボール重量が増すにつれてシュート成功確率は有意に減少した。これらの結果は、より弱い力で投げられることがシュートの精度を高めることを意味する。本研究の知見は、シュート成功確率を高めるためには、シュート技術を高めるための反復練習だけでなく、遠投力に着目した指導も有効であることを示唆する。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-43] Do Go players have distinct playing styles? Analyzing player styles using an automatic image recognition system

Go players' playing styles

*Lung Hung Chen[1], Tsai-Cheng Wu[2] (1. National Taiwan Sport University, Taiwan, 2. National Tsing Hua University, Taiwan)

Purpose: This study aims to develop a system capable of automatically recognizing and analyzing online Go matches to evaluate players' playing styles. Methods: The research team selected publicly available match videos from YouTube as the data source and developed an image recognition module. First, web scraping techniques and the YouTube API were employed to obtain the videos, and OpenCV was used to convert these videos into individual image frames. Subsequently, the board information was extracted, and Go stones were recognized using DETR and ViT models. The board information across different time sequences was then linked and integrated to achieve a coherent record of each match. The extracted data was classified and processed by the research team, who developed a metric to categorize playing styles into three distinct types. Results: The research team randomly selected approximately six images from each video for manual review to verify accuracy. A stringent accuracy formula was applied to evaluate the correctness of the image recognition module. Based on the validation results, the recognition module achieved an accuracy rate of 82.56%. Furthermore, the calculated metric was applied to the data of players Xu Haohong, Wang Yuanjun, and Lin Junyan to determine their respective playing styles. The results indicated that players Xu Haohong and Lin Junyan belong to the steady style, while Wang Yuanjun belongs to the defensive style. Conclusion: Although there is room for improvement in the overall functionality of the system, The research team successfully developed an automated method for extracting and recognizing Go board information from match videos and proposed a set of metrics to infer players' styles based on the extracted data.

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-45] バレーボールの自チームの攻撃時助走経路が相手ブロックに与える影響

*宮内 健嗣[1]、串阪 達哉[1]、宮地 弘太朗[1] (1. 大阪体育大学)

＜背景・目的＞バレーボールは昨今、攻撃の面で大きく発展しており、高速化複雑化が進んでいる（根本ら，2004）。それに対応するようにブロックの技術も進歩しており、アタックとブロックの間で駆け引きが行われている。その駆け引きの中で、攻撃側が選択するものの一つにコンビネーション攻撃がある。コンビネーション攻撃の重要性については過去にも数多く語られてきた(吉田ら，2018、松井ら，2008)が、その多くは攻撃種類の組み合わせに関するものであった。しかし、ブロッカーは相手アタッカーの事前の動きからも情報を得ており、攻撃の予測を行っている(五十嵐ら，2018）。つまり助走のスタート位置や方向がブロックへ影響を与えるのではないかと考える。また、それを分析することで相手ブロックを惑わす可能性が高いコンビネーション攻撃を見つけ出し、現場で活用できる知見となるのではないかと考える。本研究では、攻撃時のコンビネーションパターンに加え、助走経路について調査を行い、相手ブロッカーの反応を比較することでより効果的なコンビネーション攻撃を調査することを目的とした。　＜方法＞　対象試合：RIGAVILCUP2025年度　春季リーグ戦　８チーム　28試合　101セット（2025年4月12日－5月4日）とした。 分析項目及び分析方法：対象試技：サーブレシーブが成功した一本目のアタック局面分析項目：助走経路（5パターン）・コンビ種類（速攻５パターン、サイド5パターン）・セッター位置・ブロック参加人数・攻撃パターン（5パターン）の５項目分析方法：ビデオカメラ（Panasonic社製）を用いて後方より試合映像を撮影し、後日映像を閲覧しながら、各試技を自作の記録用紙に記録し、試技の各項目に対する評価を行った。統計処理：２群間をカイニ乗検定を用い有意水準は5%とした ＜結果・考察＞　　当日発表する

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-47] 日本フロアボール選手権大会男子競技におけるチームスタッツの一考察

*浅井 泰詞[1]、鈴木 タケル[2,3]、北 徹朗[4] (1. 高千穂大学　人間科学部、2. 武蔵野美術大学大学院、3. 日本プロゴルフ協会、4. 武蔵野美術大学)

フロアボールは北欧発祥の屋内で行われるホッケー型のスポーツである。近年、ゴール型の球技において多くのゲーム分析が行われており、同じゴール型球技であるフロアボールにおいても競技力向上のための分析が重要となってくる。そこで本研究では、日本フロアボール選手権大会での得点傾向やチームスタッツを分析し、今後の研究の基礎データを得ることを目的とした。日本フロアボール選手権大会の男子8試合を分析対象とし、各ピリオドの得点、シュート数、キーパーセーブ率、ペナルティ数を算出した。ペナルティ数について、本研究においては2分間の退場であるベンチペナルティをペナルティ数とした。その結果、8試合の合計得点は65点であった。勝利チームの平均得点は、第1ピリオドが1.6±0.92点、第2ピリオドが2.0±1.41点、第3ピリオドが1.6±1.19点であった。敗北チームの平均得点は、第1ピリオドが1.5±0.53点、第2ピリオドが0.8±0.89点、第3ピリオドが0.6±0.742点であり、第2ピリオドと第3ピリオドでは勝利チームの平均得点が高い傾向が見られた。合計シュート数は338本であった。勝利チームのキーパーセーブ率は86.1±4.04%、敗北チームは74.2±8.58%であり、勝利チームのキーパーセーブ率が有意に高い値を示した。シュート数では勝利チームが21.0±5.63本、敗北チームが21.3±6.80本と有意な差異は示されず、キーパーセーブ率が勝利に大きく影響を与えていることが示唆された。ペナルティ数は合計で19回あり、勝利チームのペナルティ数は7回、敗北チームのペナルティ数は12回であった。ペナルティ中の得点は6点あり、僅か2分間での得点率が68.4%であることから、試合中のペナルティ数が重要である可能性が示唆された。今後は調査試合数を増やし、さらなる分析を行う必要がある。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-49] JRTLとJRLOの得点状況の比較

*山本 巧[1] (1. 防衛大学校)

2022年社会人リーグであるジャパンラグビートップリーグ（以下JRTL）に替わり、ジャパンラグビーリーグワン（以下JRLO）が発足した。JRLOは「日本ラグビーの世界への飛躍」をミッションとし、日本ラグビーの競技力向上の基盤として位置づいている。ホームアンドアウェイの対戦形式を採用し、また、勝敗のみならずゲーム内容を考慮して順位を決定している。国内最高峰のリーグであるJRTLからJRLOへ移行に伴うゲーム様相の変容を明らかにすることは、日本ラグビーの強化状況を知る上での手掛かりになると考えられる。ラグビーのゲームの目的は、相手より多くの得点をあげることである。そして試合終了時の得点差により勝敗は決定される。それゆえ、得点は、ラグビーの競技力を示すKey performance Index として位置付けられている。また、得点は時間経過とともに変化し、観客の関心を試合に集中させる試合様相を示す指標でもある。JRLOに限らず多くの国内外のリーグでは、勝敗のみならず、ゲーム内容をリーグ順位に反映するようボーナスポイント制度を導入している。ボーナスポイントは、得点差と獲得トライ数の差に対して付与される。前者は競り合った試合展開を、後者は得点方法の１つであるトライの出現を期待するものであり、言い換えれば、接戦とトライは、ゲームの魅力化の大きな要因ととらえることができる。本研究では、JRTL からJRLOへの変容を得点の視点から検討することを目的とした。2021年度JRTL及び2023年度JRLOディビジョン１第１節の84試合を分析対象とした。JRTL及びJRLO公式記録から得点内訳、得点経過、反則数、カード数を収集し、得点内容と接戦状況について比較した。検討の結果、２リーグ間の得点内容について差はなかった。詳細については当日発表する。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-51] ハンドボール競技におけるゲームの流れに関する認識
対戦した両チームの選手を対象としたインタビュー調査

*小俣 貴洋[1]、河田 浩貴[2] (1. 京都先端科学大学　健康医療学部、2. 順天堂大学　健康スポーツ学部)

コーチやプレーヤーは，ゲーム中に流れが傾きそうな気配を敏感に感じとる「気配体感能力」（金子，2002）や感じ取った気配に対してどのような対応をするべきかといった「状況把握能力」が求められる（藤本・中村，2016）．しかしゲームの流れは，自チーム内の協調や相手チームとの競合という関係性の上に成り立っている（横山・山本，2010）ため，非常に複雑で客観的な理解が難しい．そこで対戦した両チームの選手から聞き取りを行い，同一のゲームの流れについて複数の立場から多面的に検討する必要がある．本研究では，対象試合に出場したプレーヤーにゲームの流れについて語ってもらい，個別の語りから得られた共通点をもとにゲームの流れに関する認識構造に関する仮説を生成することを目的とした．具体的な方法は，20◯◯年度〇〇地方学生ハンドボールリーグ1部-2部入替戦，X大学対Y大学（前半15-17，後半19-14，合計34-31でX大学が勝利）を対象試合として，試合に中心選手として出場していたプレーヤー２名に調査協力を依頼した．対象試合の映像を観察してもらいながら「ゲームの流れ」がどのように移り変わったのかを横軸を時間，縦軸を形勢評価とする評価シートに描画してもらった．描画したグラフと映像をもとに，ゲームの流れについてインタビューを行った．その結果，プレー結果（得点と失点）によって流れの認識は左右されること，特定の文脈（タイムアウトの後，点差が残りの分数を上回る時など）におけるプレー結果は重視，または軽視されること，個人の流れの認識は感情，言動，その後の流れの認識に影響を与え，それらがチーム全体に影響を与える可能性があること，流れの認識とプレー結果に「ズレ」を感じることなどが明らかとなった．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-53] 卓球とバドミントンの授業が大学生のスポーツに対する態度と継続意欲に与える影響

*宮﨑 孝一郎[1]、和久井 健吾[1]、牛山 幸彦[1] (1. 新潟大学)

大学生の運動習慣の希薄化が指摘される中、大学におけるスポーツ実技の授業は、運動技能の習得や身体的健康の維持・促進といった従来の目的に加えて、運動に対する態度や価値観を肯定的に再構成するという教育的役割を新たに担っている。とくに現代の大学生の多くが、過去の体育経験や自己評価に基づく「運動が苦手」、「人前でやるのが恥ずかしい」といった心理的障壁を抱えていることが報告されており、こうした認知や感情的要因をいかに低減し、自ら進んで身体活動に関わる契機を与えるかは、大学教育における重要な課題のひとつである。このような課題に対して大学の実技授業は、運動の成功体験、仲間とともに取り組む協働性などを通じて、学生が「またやりたい」「続けてみたい」と思えるような態度への変容を促す可能性を有している。本研究では、卓球およびバドミントンを題材とした大学教養スポーツ科目の実技に着目し、これを受講する大学生を対象として、スポーツに対する態度および生涯にわたる運動継続意欲がどのように形成・変容していくのかを多角的に明らかにすることを目的とする。本研究では、量的・質的データを同時に収集・分析し、結果を照合・統合する収束型並列設計に基づく混合研究法を採用する。対象は2025年度前期にN大学で「健康スポーツ科学実習Ⅰ」を受講している1年次学生約320名であり、授業最終回に36項目のリッカート尺度質問紙と3項目の自由記述からなる調査を実施する。量的データについては記述統計と探索的因子分析を行い、運動態度、生涯スポーツ意識、授業体験の下位因子を抽出した上で、相関分析・回帰分析・構造方程式モデリングを通じて、各要因間の関連性と心理構造を検討する。質的データはSCAT法により分析し、主観的気づきや意味づけの内容をカテゴリ化する。量的構造と語りの一致や乖離を通じて、大学体育授業の教育的意義を多面的に考察する。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-55] 日本体育大学のアスリートにおけるメンタルヘルスの特徴と対応策の検討

NASSを利用したアスリートを対象に

*折茂 紗英[1]、中川 あい[2]、高井 秀明[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学、2. 東京都公立学校スクールカウンセラー)

日本体育大学アスリートサポートシステム（以下、NASS）では、同大学に関係するアスリートに対して、医・科学的な観点から包括的なサポートを行っている。その中でも心理サポート部門では、年々支援対象者数や相談対応件数が増加しており、アスリートの心理的支援に対する需要の高まりと重要性がうかがえる。相談内容には、精神的に重篤な問題を抱えるケースもあり、迅速な現状の把握と的確な介入が必要とされる。本研究では、本学に関係するアスリートのストレス状態を把握するため、職業性ストレス簡易調査票をアスリート向けに改編したものを用い、NASSを利用している学生を対象とし、Formsによる質問紙調査を実施した。得られた回答のうち、不備を除いた516名（男性235名、女性281名、平均年齢20.37±1.53歳）を分析対象とした。回答により「心身のストレス反応」が31点以上の者を高ストレスA群、「競技のストレス要因」と「周囲のサポート」の合計が48点以上かつ「心身のストレス反応」が23点以上の者を高ストレスB群、それ以外を低ストレス群と分類した。その結果、高ストレスA群は73名（14.1%）、高ストレスB群は54名（10.5%）、低ストレス群は389名（75.4%）であり、全体の約3割が高ストレス状態であった。さらに、性別や競技種目、競技生活における満足度との関連についてカイ二乗検定を実施した結果、女性やチーム競技を実施するアスリート、オープンスキルの競技を実施するアスリート、競技生活への満足度が低いアスリートでは、有意に高ストレス者の割合が高かった。これらの結果から、大学生アスリートのメンタルヘルスは実施する競技環境と密接に関連していることが明らかとなった。今後は、上記の結果を考慮し、心理支援者はアスリートの競技特性や環境を考慮したサポートを提供することが望まれる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-57] 大学運動部活動における組織文化の変容に関する事例研究
指導者の取り組みに着目して

*矢野 広明[1]、伊藤 雅充[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

本研究は、大学運動部における組織文化の「慣行」レベルの変容に指導者の取り組みがどう作用するかを明らかにすることを目的とした。ある大学運動部を事例に、ホフステードらによって開発された組織文化診断モデル「マルチフォーカスモデル」（MFM）（Hofstede, 2011）を用いたプレ・ポスト診断と、指導者への定期的ヒアリングを組み合わせた混合研究デザインを採用した。MFMは、組織文化の表層的で観察可能、かつマネジメントによって変化させやすい側面である「慣行」を、「組織の効率性」や「外部の受入」といった6つの独立した次元から多角的に測定する質問紙である。指導者はプレ診断結果に基づき、学生リーダーへのメンタリングと全部員参加による「本音の対話」という介入を行った。
その結果、MFMの6次元の1つである「D5:外部の受入」のスコアが変化した。これは無秩序な開放性から目標達成に焦点化された建設的対話への質的転換を示唆した。また、リーダーシップ受容度においては、部員が認識する現在の指導者のリーダーシップスタイルに変化が見られると共に、理想とするスタイルへの期待が一層高まる傾向が確認された。組織文化の同質性にも変化が生じ、認識の多様性が増したことが示された。
これらの結果から、指導者の意図的な介入が、チームをいわゆる「仲良しクラブ」の状態から、目標達成に向けて建設的な対話を行い、多様な意見を許容する、よりバランスの取れた組織文化へと移行させつつある可能性が示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-59] NASS（Nittaidai Athlete Support System）の取り組みにおける成果と課題

*杉田 正明[1]、谷口 耕輔[1]、渡邊 香緒里[1]、和田 直樹[1]、堀内 健太郎[1]、中川 あい[1]、西山 哲成[1] (1. 日本体育大学)

日本体育大学では、東京2020に向けた日体大の選手強化の中心的役割を果たす重要な組織として2017年4月にアスレティックデパートメント（AD）が発足した。その取り組みを推進する内部組織が「ハイパフォーマンスセンター」、「コーチングエクセレンスセンター」、「スポーツ・トレーニングセンター」、「アスレティックトレーニングセンター」であり、４センターが連携し包括的にアスリートの資質の涵養と競技力向上の支援を行っている。ハイパフォーマンスセンター（HPC）では、その名の通りアスリートの競技力向上に特化する組織であり、日体大アスリートサポートシステム（NASS）を2017年度から本格運用してきている。NASSは、本学学生を対象に競技力向上を目的とした本学独自の学生アスリート支援システムであり、医・科学サポート（6部門）、コーチングサポートの7部門から構成されている。４センターが連携し、また HPC 兼任教員、各部門を構成する教員、助教、協力メンバーらオール日体大体制による組織的な医・科学サポート活動は、HPCの中心事業であり、競技レベルに応じて様々なサポートを展開している。そこで、本研究は東京2020大会後、パリ2024大会後にNASSのサポートを受けている選手、指導者に対して、アンケート調査を実施し、NASSの取り組みに関する評価と課題を把握し、今後のNASSをさらに発展させるための方向性について検討を行うこととした。その結果、NASSのサポートは本学アスリートの競技力向上や意識向上に大きく貢献していること、質の高い持続可能なサポートの更なる充実には、支える人材の育成、NASSの効果的な活用を促すためのきめ細かなフォローアップ、JISSとの有機的な連携が課題であることが明らかとなった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1165-195] コーチング学（奇数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-61] 大学スポーツ選手のコミュニケーション能力と種目特性・性・役職経験・競技レベルとの関連

*井藤 英俊[1]、青柳 領、坂口 英章[2] (1. 九州医療科学大学、2. 日本経済大学)

【緒言】
スポーツを行う時，チーム種目ではメンバーと戦術を共有し，協力する必要があり，キャプテンなどチーム内での役割を果たすためにも部員とのコミュニケーションは重要である．また，よいコミュニケーションは個人やチームの士気を高め，結果として好成績を生むことが考えられる．しかし，その様相には性差も考えられる．そこで，本研究は大学スポーツ選手のコミュニケーション能力と種目特性，性，役職経験，競技レベルとの関連について検討する．
【方法】
F県内の大学で定期的にスポーツを行う139名を対象に，自身のコミュニケーション能力に関するアンケートを実施した．評価項目は「聴く力」「観察する力」「感じる力」「質問する力」「伝える力」の5領域で，各5項目ずつ計25項目について「そう思う」から「そう思わない」までを5段階に評価してもらった．あわせて種目特性，性，役職経験，競技レベルについても調査し，両社の関連を相関比により分析した．
【結果】
「性」では「聴く力」で1項目，「観察する力」で3項目，「感じる力」で2項目に有意差が見られ，いずれも女子の方が男子よりもコミュニケーション能力が高かった．「役職経験」では「聴く力」で1項目，「観察する力」で1項目，「感じる力」で3項目，「質問する力」で1項目，「伝える力」で1項目と，広範囲な下位領域で有意差が見られ，いずれも役職経験者が高いコミュニケーション能力を示した．また，「競技レベル」では「聴く力」で1項目，「感じる力」で1項目に有意差が見られ，競技レベルの高い者の方が高いコミュニケーション能力を示した．しかし，個人競技か集団競技かを区別した「種目特性」では，有意な違いはどの項目にも見られなかった．つまり，役職経験者は多様なコミュニケーション能力を有し，女子や競技水準の高い者は特定の領域で高いコミュニケーション能力を有していた．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／アダプテッド・スポーツ科学

[3b1196-203] アダプテッド・スポーツ科学／ポスター発表

[13ア-ポ-01]

高齢者の主観的健康及び幸福感に及ぼすアダプテット・スポーツの影響に関する研究

*坪内 怜[1]、河野 喬[1] (1. 広島文化学園大学)

[13ア-ポ-02]

健口体操指導者による指導活動の心理的変化について

熟練指導者による体操教室指導に着目して

*島崎 百恵[1] (1. 東海大学国際文化学部)

[13ア-ポ-03]

肢体不自由児者の運動指導の合理的配慮検討における簡便な知能検査の活用

レーブン色彩マトリックス検査活用の有効性について

*松浦 孝明[1] (1. 国士舘大学文学部)

[13ア-ポ-04]

パラ陸上（低身長症）男子やり投における投てき動作の質的分析

世界トップ選手と日本トップ選手との比較

*山手 勇一[1]、山下 直紀[1]、阿江 通良[2]、内山 治樹[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

[13ア-ポ-05]

健常者のボッチャのエイミング能力と距離の調整方略の検討

*宮崎 彰吾[1]、木村 駿介[1]、藁科 侑希[1] (1. 静岡産業大学スポーツ科学部)

[13ア-ポ-06]

特別な教育的支援が必要な児童生徒の保健体育授業を実践する教員の信念と経験

特別支援学級教員を対象に

*笹本 剛太[1]、内田 匡輔[2]、吉岡 尚美[2]、保坂 凜[1] (1. 東海大学大学院体育学研究科、2. 東海大学体育学部)

[13ア-ポ-07]

日本における小学生から大学生を対象にしたゴールボールの教育実践研究に関するシステマティックレビュー

*濱中 良[1]、宇野 直士[2]、小俣 貴洋[1]、金田 和輝[1] (1. 京都先端科学大学、2. 山陽小野田市立山口東京理科大学)

[13ア-ポ-08]

交流型クライミング体験の意味の探求

参加者を対象としたインタビューから

*中道 莉央[1]、伊藤 相[2]、林 綾子[1] (1. びわこ成蹊スポーツ大学、2. 東京外国語大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／アダプテッド・スポーツ科学

[3b1196-203] アダプテッド・スポーツ科学／ポスター発表

[13ア-ポ-01] 高齢者の主観的健康及び幸福感に及ぼすアダプテット・スポーツの影響に関する研究

*坪内 怜[1]、河野 喬[1] (1. 広島文化学園大学)

本研究では、高齢者の意向に沿ったアダプテッド・スポーツを実施することが、高齢者の主観的健康及び幸福感にどのような影響を及ぼすのかを明らかにするため、その第一段階として、対象者にインタビュー調査を行い分析した。対象者として、地域在住高齢者（65歳以上）に、研究目的、方法、協力が任意であることを口頭及び書面によって伝え、同意書に署名が得られた対象者のみ実施した。基本情報（年齢、性別、既往歴、運動スポーツ習慣など）、主観的健康、幸福感（協調的幸福感尺度：IHS）をアンケート調査したうえで、インタビューを半構造化インタビュー及びフォーカスグループインタビュー法で行った。質問内容は、「現在の体調、健康状態」、「健康のために何をされていますか」、「気をつけていることは何ですか」、「どんな時に幸せを感じますか」、「運動・スポーツは好きですか」、「どんなことがしてみたいですか」であった。インタビュー音声を保存し、テキスト化してSCAT法で分析した。協力を得た高齢者グループは、Aグループ（73歳・70歳のご夫婦）、Bグループ（78歳女性・74歳男性・73歳女性の敬老会の友人）、Cグループ（68歳男性・65歳女性・70歳女性の健康体操参加者）であった。分析の結果、高齢者が運動・スポーツや地域活動に従事する背景、運動・スポーツを提供する際に留意すべき点等について知見が得られた。詳細は、学会にて報告予定である。これらの結果を分析し、高齢者向けのアダプテッド・スポーツの企画・運営に反映し、実施前後の変化を検討することにしている。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／アダプテッド・スポーツ科学

[3b1196-203] アダプテッド・スポーツ科学／ポスター発表

[13ア-ポ-02] 健口体操指導者による指導活動の心理的変化について
熟練指導者による体操教室指導に着目して

*島崎 百恵[1] (1. 東海大学国際文化学部)

超高齢化社会を迎えたわが国において人々の加齢に伴う筋力低下や咀嚼・嚥下機能の低下を未然に防ぐことは、高齢者の健康寿命の延伸や介護予防の推進に直結する問題である。そのため、近年では高齢者の全身的な健康維持をねらいとした体操教室が市町村行政をはじめ、医療・介護福祉施設等で実施されている。しかしながら、口腔機能向上を含む専門的かつ実践的トレーニングプログラムを指導できる指導者は多くない。今後、さらに健口体操教室を普及させていくためには、担い手を育成することが必要である。そこで、健口体操教室の指導活動を継続して10年以上実施している60代から70代の熟練指導者5名を対象として、健口体操の指導における指導活動の心理的効果の関係性について着目し、検討することを目的とした。本研究では、対象とする熟練指導者に対して健口体操の指導活動による心理的変化を把握するために、実際の健口体操教室の指導前と指導後に気分の変化がどのように得られたか感情プロフィール検査（POMS）を用いて測定し、評価した。本研究結果から、健口体操教室の指導前・後の気分の変化については「緊張・不安」や「活気・活力」、「友好」等の項目が変化し、指導者たちにおいてポジティブな気分変化がみられた。健口体操教室を実施している指導者らにとっても、他者の健康づくりに寄与するだけでなく、指導者自身の心理的変化に影響を与えていることが示唆された。今後も、さらなる指導者の普及や増員に向けて考察を継続していきたいと考えている。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／アダプテッド・スポーツ科学

[3b1196-203] アダプテッド・スポーツ科学／ポスター発表

[13ア-ポ-03] 肢体不自由児者の運動指導の合理的配慮検討における簡便な知能検査の活用

レーブン色彩マトリックス検査活用の有効性について

*松浦 孝明[1] (1. 国士舘大学文学部)

肢体不自由児者は、上肢の運動機能障害が比較的軽度の者も球技等の運動に困難さを有するケースが多い。この運動の困難さは上肢の機能障害が主な要因と考えられるが、機能障害だけでなく認知特性がその要因となることが報告されている。本研究は肢体不自由者を対象として、簡便な知能検査であるレーブン色彩マトリックス検査（以下、RCPM検査）を実施するとともに、検査時の眼球運動を分析することで視覚認知の特徴を明らかにし、運動指導における合理的配慮の参考資料としてRCPM検査の有効性について検討することを目的とした。対象者は脳性まひのある成人男性3名（以下、脳性まひ群）と比較対照として障害のない成人男性3名（以下、対照群）であり、それぞれの年齢は22～36歳、最終学歴は大学卒業であった。
RCPMの得点は、脳性まひ群が25点、31点、35点、対照群は3名ともに35点であった。脳性まひ群の25点、31点は障害のない小学生を対象とした先行研究と比較すると小学校2、3年生の結果と同様であり、対照群に比較して低かった。形態や空間把握の困難さなど視覚認知の課題が推察される。また、検査に要した時間は脳性まひ群が300秒、600秒、265秒、対照群は179秒、200秒、205秒であった。RCPM検査は回答の速さを求める検査ではないが、脳性まひ群は対照群に比して1.3倍から3倍程度の時間を要した。RCPM検査中の眼球運動では、対照群が上方の模様を一度確認した後、下方の6つの選択肢を一度見て回答したが、脳性まひ群は上方の模様を確認した後、下方の選択肢と上方の模様を繰り返して見る特徴が認められ、この特徴がRCPM検査に時間を要する要因と思われた。以上の結果から、RPCM検査は視覚認知の特徴を把握する有効なデータとして用いることができ、運動指導時の適切な合理的配慮を検討するための参考資料として有効であると考えられた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／アダプテッド・スポーツ科学

[3b1196-203] アダプテッド・スポーツ科学／ポスター発表

[13ア-ポ-04] パラ陸上（低身長症）男子やり投における投てき動作の質的分析
世界トップ選手と日本トップ選手との比較

*山手 勇一[1]、山下 直紀[1]、阿江 通良[2]、内山 治樹[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

日本の低身長症・やり投選手が世界で活躍するためには、世界トップレベルの選手の投てき動作の現状を把握し、日本選手の競技力向上に役立つ知見を得ることが重要であると考えられる。そこで、本研究は、パラ陸上（低身長症）男子やり投選手において世界トップレベルの投てき動作を分析し、その特徴を明らかにするとともに、日本選手の競技力向上を目的とした技術的課題を明らかにすることを目的とした。対象者は、2024年5月に開催された神戸2024世界パラ陸上競技選手権大会において、男子やり投（F41：低身長症クラス）に出場した10名のうち、日本トップ選手1名（自己ベスト記録：33.80m）と世界トップ選手3名（世界記録保持者を含む上位3名）の4名とした。投てき動作を分析するために、1台のビデオカメラ（AX-700、SONY社製）をやりの助走路の右側方に設置して撮影した。また、日本パラ陸上競技連盟より提供していただいた日本選手の後方からの試技の映像も本研究の分析に使用した。撮影した映像から、Frame-DIAS VI（Q’sfix社製）を用いて分解写真を作成した。対象者4名の全6試技のうち、最も良い記録であった試技を分析試技とした。また、投てき動作のうち最後の右足接地から左足接地までを準備局面、左足接地からリリースまでを投てき局面とした。世界トップ選手のうち、1位の選手を選手A、2位の選手を選手B、3位の選手を選手Cとし、結果は、選手Aは48.94m（世界新記録）、選手Bは47.92m、選手Cは42.82m、日本トップ選手は34.58m（日本新記録）であった。日本選手は世界トップ選手の動作と比べ、右足接地時では右肘がより屈曲していること、左脚を前に引き出すタイミングが遅れていること、左足接地時では左膝がより屈曲していたこと、リリース時では体幹の前傾がより小さく、体幹が左側屈していたことが明らかとなった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／アダプテッド・スポーツ科学

[3b1196-203] アダプテッド・スポーツ科学／ポスター発表

[13ア-ポ-05] 健常者のボッチャのエイミング能力と距離の調整方略の検討

*宮崎 彰吾[1]、木村 駿介[1]、藁科 侑希[1] (1. 静岡産業大学スポーツ科学部)

本研究はパラスポーツであるボッチャにおける健常者のターゲットへのエイミング能力について検討することを目的とした。被験者はボッチャの経験がない健常男性20名であった。被験者は椅子の座位姿勢からボールを投球した。その際、ターゲットを3mと6mを設定して、各距離条件で5回投球した。投げられたボールの停止位置をその投球の距離として、距離の平均値および標準偏差と、ターゲットとなる各距離に対する絶対誤差と恒常誤差を算出した。また、各距離条件で5回の投球の距離の変化を検討した。その結果、各距離条件における投球回数ごとの距離の平均値は両距離条件で変化はなかった。誤差については、3mの距離条件では、絶対誤差は0.31±0.13mで恒常誤差は0.03±0.10mであり、6mの条件では絶対誤差は0.67±0.18mで恒常誤差は-0.08±0.28mであった。ターゲットとなる距離が遠くなると、絶対誤差は増大したが恒常誤差は変わらなかった。各被験者の5回の投球回数において、前の投球の距離がターゲットより短かった場合は次の投球の距離は増大して、一方前の投球の距離がターゲットより長かった場合は次の投球の距離は減少していた。つまり、前投球の結果が次の投球の結果に影響を与えていることになる。これは、運動学習における外在的フィードバックが行われ、KR（Knowledge of Result）から、次の運動（出力）の調整を行っていると考えられた。この調整の要因としては、リリース時のボールの速度ベクトルとボールの高さが考えられるため、これらの要因に対する各被験者のターゲットへのエイミング能力と距離の調整方略について検討する。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／アダプテッド・スポーツ科学

[3b1196-203] アダプテッド・スポーツ科学／ポスター発表

[13ア-ポ-06] 特別な教育的支援が必要な児童生徒の保健体育授業を実践する教員の信念と経験

特別支援学級教員を対象に

*笹本 剛太[1]、内田 匡輔[2]、吉岡 尚美[2]、保坂 凜[1] (1. 東海大学大学院体育学研究科、2. 東海大学体育学部)

【目的】直近10年間で義務教育段階において特別支援教育を受ける児童生徒数は倍増し、通常の学級でも学習面や行動面で著しい困難を示す児童生徒が一定数在籍している（文部科学省, 2022 , 2023）こと等から、すべての学校段階でインクルーシブな教育の実践が求められている。教育実践や授業での意思決定には、その教員の信念が強い影響を与えるとされ（Pajares,1992）、特に体育授業のような実践的・対人的な場面での影響力は顕著であろう。朝倉ら（2010）は体育教師の信念について、自身の過去の経験や現場での協働・相互作用を通じて形成・強化されるものであり、教師の実践行為を規定する重要な要素であることを示唆している。多様な個々のニーズにあわせながら、保健体育授業を実践する教員の信念を明らかにすることは、インクルーシブな体育授業の実現に向けた教員のあり方や学びを示すことが出来ると考える。そこで本研究では、特別な教育的支援が必要な児童生徒の保健体育授業を実践する教員の信念と、その信念がどのような経験から形成・強化されたのかを明らかにすることを目的とする。【方法】関東地方のA市立B中学校に勤務するC教諭を対象にエスノグラフィーを参考に調査を実施した。C教諭はD大学体育学部を卒業後すぐに教職に就き、25年の教職経験を持つ40代の女性教諭である。現在は、特別支援学級主任を担当している。2025年1月から3月にかけてC教諭の授業の様子や指導場面における言葉がけ等をフィールドノートに記述、累積するとともに、授業外などでの自然な語りを抽出した。また、信念を形成・強化した個人の経験を記述するために半構造化面接を実施し、ライフヒストリー分析を行った。本学会では、得られたデータをもとに、対象教諭の教育実践や意思決定に影響する信念とそれを形成・強化してきた経験について分析した結果を報告する。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／アダプテッド・スポーツ科学

[3b1196-203] アダプテッド・スポーツ科学／ポスター発表

[13ア-ポ-07] 日本における小学生から大学生を対象にしたゴールボールの教育実践研究に関するシステマティックレビュー

*濱中 良[1]、宇野 直士[2]、小俣 貴洋[1]、金田 和輝[1] (1. 京都先端科学大学、2. 山陽小野田市立山口東京理科大学)

【背景】近年、小学生から大学生を対象とするゴールボールの教育実践研究が増加しているが、これらは個別報告にとどまり、教育段階別に実践方法や教育的成果の傾向を整理した研究はほとんどない。特に、どのような実践が行われ、どのような学びが得られているのかを俯瞰的に明らかにすることは、今後の授業設計やカリキュラム開発に有用である。そこで本研究では、日本におけるゴールボールの教育実践に関する文献をシステマティックレビューにより整理し、教育段階ごとの実践方法と教育的成果の傾向を明らかにすることを目的とした。教育的成果の評価はKirkpatrickモデルに基づき、学習者の反応・学習・行動・結果の観点から分析した。
【方法】2025年3月時点で、CiNii、IRDB、J-STAGE、Google Scholar、その他情報源から文献検索を行い、310件の文献を収集した。重複を除いた275件をスクリーニングし、ゴールボールの教育的実践を含む12件をレビュー対象とした。抽出項目は、目的、対象者、実技回数、方法、結果、Kirkpatrickレベルとした。
【結果】対象年代別では小学生対象が4件で最多、実技回数では1回の実践が5件と最も多かった。特に小学生を対象とした1回限りの授業が多く、体験的な位置づけられている傾向が示された。Kirkpatrickレベルでは、レベル1が4件、レベル2が9件であり、レベル3および4に該当する研究は確認されなかった。
【考察】ゴールボールの教育実践は、学習者の反応（怖さ・楽しさなど）の変容や学習の成果（新たな身体感覚への気づき・障害観・スポーツ観など）に焦点が当てられていた。一方、行動変容や社会的影響まで踏み込んだ実証研究は見られなかった。今後は、学びの拡張性を高める継続的な実践や多面的な教育効果の検証が課題である。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／アダプテッド・スポーツ科学

[3b1196-203] アダプテッド・スポーツ科学／ポスター発表

[13ア-ポ-08] 交流型クライミング体験の意味の探求
参加者を対象としたインタビューから

*中道 莉央[1]、伊藤 相[2]、林 綾子[1] (1. びわこ成蹊スポーツ大学、2. 東京外国語大学)

NPO法人モンキーマジックが主催する交流型クライミングイベントは、障害の有無にかかわらず、参加者がともにクライミングを楽しむ活動として全国20の地域で展開されている。本研究の目的は、ここに集う多様な人びとがその体験の意味をどのように捉えているのかを明らかにすることである。混合研究法を参考に、①クライミングの魅力、②居場所感、②障害や生きづらさに対する感じ方の変化などに関するアンケート（有効回答210名）において、③に変化があったと回答した8名（肢体不自由3名、視覚障害2名、障害なし3名）を対象にその具体的内容を聞き取る半構造化インタビュー（60分程度）を行った。アンケートでは「クライミングを通して、多様な人びとがそれぞれのやり方でそれぞれの難易度の課題に取り組むという体験を共有できること」が明らかになっていたが、これに加え、「あきらめどころは自分で決める」という体験が「できないことも自分が主体者となって責任を取る」経験へと変わることで、リスクを冒す権利の獲得や障害の意味合いの変化につながり、日常生活における意思表明などにも影響を与えていることが示唆された。また、アンケートの「個人として『課題達成に向かう楽しさ』因子が生きづらさの軽減に有意な影響を与えていること」について、壁の支えなどにより自分の意思で自由に動き、自分の特性に合わせて自分のペースで自分の課題と向き合うこと、これを他者に見守られながら行うというクライミング体験は、「できた／できない」といった結果（Doing）のみに捉われることなく、「ここまで挑戦したわたし」という存在（Being）を再認識する経験につながっていることが示唆された。このことは、「『ありのままの自分らしさ』と『内なる自分とのつながり』因子が障害についての感じ方の変化に有意な影響を及ぼしたこと」にも説明を与える視座として確認された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-01]

ティームティーチングの活用によるカーリング授業展開

カーリング競技経験者の教員を活用した単元構成

*侘美 俊輔[1]、水嶋 星陽[2] (1. 育英館大学、2. 北海道教育大学附属旭川中学校)

[11教-ポ-02]

大学講義授業における社会人基礎力ルーブリックによるリフレクションの効果

*平工 志穂[1]、藤田 恵理[2]、滝 聖子[3]、小林 勝法[4] (1. 東京女子大学、2. 帝京大学、3. 香川大学、4. 文教大学)

[11教-ポ-03]

女子大学生における大学体育実技種目の選好

*中原 雄一[1]、池田 孝博[2] (1. 久留米大学　人間健康学部、2. 福岡県立大学　人間社会学部)

[11教-ポ-04]

アダプテーション・ゲーム実践による社会的スキルへの影響

中学校におけるバレーボール単元での実践

*村瀬 浩二[1]、梅澤 秋久[2]、田中 克実[3]、田島 亜也奈[4,5] (1. 和歌山大学、2. 横浜国立大学、3. 東海学院大学、4. 西濃高等特別支援学校、5. 兵庫教育大学大学院特別支援教育専攻障害科学コース)

[11教-ポ-05]

肩甲骨操作に着目した倒立練習法の効果検証

*熊谷 慎太郎[1] (1. 岐阜聖徳学園大学)

[11教-ポ-06]

保健体育科におけるウォーキングアメリカンフットボールの授業構想

女子高校生を対象として

*苫米地 里香[1]、鈴木 優太[2]、近藤 雄大[3]、崎田 嘉寛[4] (1. 札幌国際大学、2. 北海道大学アメリカンフットボール部、3. 津山工業高等専門学校、4. 北海道大学)

[11教-ポ-07]

小学生を対象とした側方倒立回転の指導プログラムに関する研究

*黒田 栄彦[1] (1. 北翔大学大学院　生涯スポーツ学研究科)

[11教-ポ-08]

体育の学習指導論の変遷に関する研究

2016年以降の学習指導論に着目して

*成家 篤史[1]、石塚 諭[2]、阿部 隆行[3] (1. 帝京大学、2. 宇都宮大学、3. 玉川大学)

[11教-ポ-09]

高等学校体育におけるサッカーの実践報告

エコロジカル・アプローチを活用した授業デザイン

*枝村 隼人[1]、梅澤 秋久[2] (1. 横浜国立大学教育学研究科、2. 横浜国立大学)

[11教-ポ-10]

水泳領域における「心得」の指導内容の検討(第2報)

現行（2017告示）及び前（2008告示）学習指導要領における英訳版を手掛かりにして

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

*稲垣 良介[1] (1. 岐阜聖徳学園大学)

[11教-ポ-11]

体育授業が女子専門学校生の運動に関する意識と気分の変化に及ぼす影響
学生の運動有能感とポジティブ感情尺度に着目して

*岡崎 祐介[1]、石立 克己[1]、陳 昱龍[1] (1. 至誠館大学)

[11教-ポ-12]

ベースボール型ゲームにおける走塁先行アプローチの試み

*石塚 諭[1]、土田 了輔[2] (1. 宇都宮大学、2. 上越教育大学)

[11教-ポ-13]

球技学習におけるルールに関連する諸概念

*山崎 竜誠[1]、鈴木 理[2]、伊佐野 龍司[2] (1. 日本大学人文科学研究所、2. 日本大学)

[11教-ポ-14]

大学体育授業における運動種目の違いがライフスキル獲得に及ぼす影響

*田中 奏一[1]、小俣 貴洋[1]、金子 竜大[1]、成相 美紀[1]、前田 奎[1]、藪中 佑樹[2]、細野 裕希[1]、新野 弘美[1]、高橋 啓悟[3]、濱中 良[1]、杉山 敬[1]、鷹野 都[1]、銘苅 淳[4] (1. 京都先端科学大学、2. 龍谷大学、3. 徳島大学大学院、4. アルバモス大阪)

[11教-ポ-15]

倒立の学習に重点を置いたマット運動の授業進行に伴う成功の見通しと技の習熟度の変化
接転技群後転グループを対象として

*松長 大祐[1]、中井 聖[1]、神野 周太郎[1] (1. 大阪電気通信大学)

[11教-ポ-16]

平均台運動における運動アナロゴンの開発に関する研究

*齋藤 卓[1] (1. 筑波大学)

[11教-ポ-17]

ベースボール型球技の技術的特質に関する研究
時間構造に着目して

*岡崎 太郎[1]、佐藤 亮平[3]、竹田 唯史[2] (1. 北翔大学大学院、2. 北翔大学、3. 宮城教育大学)

[11教-ポ-18]

体育授業におけるペア・グループ編成に伴う学習者の抵抗感の実態と要因（第2報）

*大坪 俊矢[1] (1. 崇城大学)

[11教-ポ-19]

そりを用いたレジスト走および推進方向からチューブを用いて引っ張るアシスト走を用いた中学校における走運動授業は生徒の意欲を高める

*松村 昌紀[1]、直井 清貴[2]、繁田 進[3]、伊藤 信之[4]、森山 進一郎[3] (1. 東京学芸大学大学院、2. 東京学芸大学附属小金井中学校、3. 東京学芸大学、4. 横浜国立大学)

[11教-ポ-20]

性格特性と体育授業における言語的・非言語的コミュニケーションとの関係

*河合 甫[1]、中島 寿宏[2] (1. 北海道教育大学教職大学院、2. 北海道教育大学札幌校)

[11教-ポ-21]

工業高等専門学校学生によるバレーボール映像教材作成と活用サイクル構築の試み

*髙津 浩彰[1]、勝野 太介[2] (1. 豊田工業高等専門学校、2. 岐阜工業高等専門学校)

[11教-ポ-22]

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ダンス学習における音楽リズムと身体リズムが学習者に与える心理的・身体的反応

*小島 理永[1] (1. 神戸女子大学)

[11教-ポ-23]

中学3年生を対象とした知識構成型ジグソー法とMI理論を活用したバレーボールの授業の開発と検証

*小林 永佑[1]、石切山 大[1]、大多和 秀樹[1] (1. 常葉大学大学院学校教育研究科)

[11教-ポ-24]

保健体育科教員の生徒指導担当における役割認識変容プロセス
チーム学校における新たな役割の模索

*岡田 大暉[1]、齋藤 祐一[1] (1. 鳴門教育大学大学院)

[11教-ポ-25]

高等教育における「体育史」授業教材の一提案
学生の体育・スポーツ経験の教材化

*石立 克己[1]、近藤 雄大[2]、舩場 大資[3] (1. 学校法人菅原学園至誠館大学、2. 津山工業高等専門学校、3. 山口学芸大学)

[11教-ポ-26]

小学校教育実習の授業実践を通した実習生の学びに関する事例的研究
2回の授業協議会の談話分析を中心に

*江藤 真生子[1]、三田 沙織[2] (1. 琉球大学、2. 國學院大學)

[11教-ポ-27]

初心者を対象とした陸上競技「背面跳び」の指導展開における学習課題

*近藤 雅哉[1]、上原 三十三[2] (1. 豊田工業高等専門学校、2. 愛知教育大学)

[11教-ポ-28]

新任体育教師における運動観察内容の変容過程

*篠﨑 明彦[1]、伊佐野 龍司[2]、鈴木 理[2] (1. 日本大学学院文学研究科教育学専攻（体育学）、2. 日本大学大学院)

[11教-ポ-29]

跳び箱運動における恐怖心の要因に関する研究
開脚跳びとかかえ込み跳びに着目して

*坂本 康輔[1]、浦 佑大[1] (1. 環太平洋大学)

[11教-ポ-30]

駅伝要素を取り入れた長距離走授業の有効性に関する研究

*柴田 一輝[1]、大越 正大[2] (1. 東海大学大学院体育学研究科、2. 東海大学体育学部)

[11教-ポ-31]

試験委員の言説からみる「文検」體操科
戦前日本の体育教師養成の実態

*栗原 武志[1] (1. 熊本学園大学)

[11教-ポ-32]

体育科教育において質的研究手法がもつ可能性に関する一考察

*佐藤 亮平[1]、岡崎 太郎[3]、近藤 雄一郎[2] (1. 宮城教育大学、2. 福井大学、3. 北翔大学大学院)

[11教-ポ-33]

日本の水泳指導に関する研究動向と課題の検討

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

*豊田 郁豪[1,2]、橋本 翔[4]、森山 進一郎[3] (1. 桃山学院大学、2. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、3. 東京学芸大学、4. 明法中学・高等学校)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-01] ティームティーチングの活用によるカーリング授業展開

カーリング競技経験者の教員を活用した単元構成

*侘美 俊輔[1]、水嶋 星陽[2] (1. 育英館大学、2. 北海道教育大学附属旭川中学校)

我が国では、現行の学習指導要領において「主体的、対話的で深い学び」の重要性が謳われている。このような状況を鑑み、筆者らは2021年以降、北海道稚内市において「通年型カーリング場」のオープンを契機として、市内各学校で段階的に導入が始まった「カーリング授業」に注目してきた。稚内市のような地方都市では、カーリング競技者、「コーチ」資格の保有者らの多くが、昼間は本業に従事している。そのためカーリング授業指導のマンパワーが慢性的に不足しており、カーリング未経験である保健体育科教員が授業を担当することも少なくない。

そこで、本稿における問いは、「カーリング授業を実施する際、『カーリング指導が未経験である学校の先生』は、どのように授業を展開すれば良いのだろうか」というものである。本稿ではカーリング授業の新たな実践の１つとして、A中学校のZ先生（カーリング競技経験者）を活用した「ティームティーチングによるカーリング授業」に注目し、生徒へのアンケート調査や、Z先生、保健体育科のX先生へのインタビュー調査を試みた。本稿の目的は、カーリング競技経験者による授業のメリットや今後の課題などを総括し、カーリング授業における「主体的、対話的で深い学び」に向けた可能性の検討することである。

その結果、第1に「保健体育科の先生ができること、苦手なこと」、「カーリング経験教員や協会員のできること、苦手なこと」の「線引き」を行い、できること、苦手なことを相互に補完し合った授業づくり、指導方法の確立が求められる。第2に、第１の点が上手くいった場合には、A中学校における「ティームティーチング」によるカーリング授業の実践のように、生徒への教育効果、先生の負担軽減につながり、教師、生徒双方にとって充実したカーリング授業，単元構成となることが期待される。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-02] 大学講義授業における社会人基礎力ルーブリックによるリフレクションの効果

*平工 志穂[1]、藤田 恵理[2]、滝 聖子[3]、小林 勝法[4] (1. 東京女子大学、2. 帝京大学、3. 香川大学、4. 文教大学)

社会人基礎力は、職場や地域社会で多様な人々とともに仕事をするうえで必要な基礎的な能力であり、前に踏み出す力（アクション）、考え抜く力（シンキング）、チームで働く力（チームワーク）の3つの能力と、それを細分化した12の能力要素（主体性、働きかける力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）から構成される。社会人基礎力は大学生にしっかりと身に着けてもらいたい能力であり、その手法の開発は急務である。筆者らは大学授業での実施を念頭に社会人基礎力ルーブリックを開発し、座学による大学講義授業でリフレクションすることによる能力の向上について介入調査を実施した。リフレクション実施授業、非実施授業共に、8週間のリフレクション授業期間の直前直後の授業において、NPO法人日本インターンシップ推進協議会が提供している社会人基礎力評価シートを参照した質問紙（36項目）に5段階評価で回答を求め、社会人基礎力を評価した。社会人基礎力の3つの能力、12の能力要素について、リフレクションの有無、調査時期について2要因分散分析を実施した結果、講義授業においては有意な交互作用がみられなかった。この結果について、昨年度発表した大学体育実技授業における結果との比較の観点も含めて考察を行いたい。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-03] 女子大学生における大学体育実技種目の選好

*中原 雄一[1]、池田 孝博[2] (1. 久留米大学　人間健康学部、2. 福岡県立大学　人間社会学部)

【目的】大学体育における実技科目は、半期15回の授業を、1種目ないし2種目などを実施する、種目特化型の授業を行っているところもあれば、3種目以上実施している（複数種目型）大学も存在する。特に、大規模校では種目特化型が多く、学生が任意に種目を選択して受講することが多い。一方、小規模校では複数種目型が多く、教員が選択した種目を行い、学生の種目の希望は反映されないことがほとんどであると考えられる。そのため、複数種目型においては種目構成が重要になると思われるが、種目構成について検討した研究は見当たらない。そこで、本研究では、女子大学生を対象に種目選好を明らかにすることを目的とした。
【方法】大学で複数種目型の一般体育実技を履修している女子大学生を対象に、年間を通して行った実技8種目のうち「一番楽しかった種目」と「一番嫌だった種目」、また「授業で行ってみたかった種目（10種目）」について後期の最終授業でアンケート調査を行った。
【結果】有効回答数217名のうち、「一番楽しかった種目」で最も人数が多かった種目はバドミントン59名（27.2%）、次いでレクリエーション37名（17.1%）、バスケットボール30名（13.8%）の順であった。一方、「一番嫌だった種目」では水中運動が104名（47.9%）と最も多く、次いで、特にない41名（18.9%）、フライングディスク20名（9.2%）であった。また、「授業で行ってみたかった種目（複数回答可）」では、卓球が90名（41.5%）と最も多く、バレーボール87名（40.1%）、テニス52名（24.0%）という順番であった。
【結論】バドミントンや卓球、テニスといったラケットスポーツの選好傾向が高いことが示された。一方、水中運動の選好傾向は低かったが、その要因として授業前後の準備が影響していることが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-04] アダプテーション・ゲーム実践による社会的スキルへの影響
中学校におけるバレーボール単元での実践

*村瀬 浩二[1]、梅澤 秋久[2]、田中 克実[3]、田島 亜也奈[4,5] (1. 和歌山大学、2. 横浜国立大学、3. 東海学院大学、4. 西濃高等特別支援学校、5. 兵庫教育大学大学院特別支援教育専攻障害科学コース)

本研究は、中学校体育科におけるアダプテーション・ゲームの実践において、社会的スキルへの影響を検証し、アダプテーション・ゲームにおける要求・交渉過程が汎用的能力に与える影響を検証することを目的とする。
中学校4クラス140名を対象にバレーボール単元を実践し、アダプテーション・ゲームを導入した。その、単元前後にKiSS18(菊池，2007)を実施した。 社会的スキルについて　社会的スキルのうち、高度なスキルと攻撃に変わるスキルに有意な向上が認められた($p<0.05$)。高度なスキルは、助けを求める、指示を与える、謝るといった問題解決場面での対処方法に関わるスキルである。本実践では合理的配慮の考え方を導入し、アダプテーションを使用したい生徒が自ら要求することを促進した。このことが、この因子に反映されたと解釈できる。また、攻撃に変わるスキル因子も有意に向上していた($p<0.001$)。この因子は、他人を助ける、和解する、自分をコントロールするといった内容によって構成される。つまり、相手に対して支援を意味するスキルであり、アダプテーション・ゲームにおける合理的配慮として求められたことに対する対応が反映されたと言える。つまり、アダプテーション・ゲームにおける要求・交渉の過程がこれらのスキルを促進したと言えよう。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-05] 肩甲骨操作に着目した倒立練習法の効果検証

*熊谷 慎太郎[1] (1. 岐阜聖徳学園大学)

＜目的＞本研究は、マット運動の倒立の姿勢改善および主観的運動感覚の改善を目指し、肩甲骨の動きに着目した段階的なドリルを実施することによる効果を明らかにすることを目的とした。＜方法＞中学生17名（男子：9名、女子：8名）を分析の対象とした。器械運動の授業（全7回）の冒頭約5分間を利用し、“ものさし”を用いた段階的なドリルを行わせた。初回と最終回の授業で、正面支持姿勢を保持した被験者を研究者が倒立位まで幇助し、その様子をデジタルビデオカメラで記録した。被験者には初回と最終回ともに幇助倒立試技後に、倒立時の主観的運動感覚に関するアンケート調査を実施した。ドリルの効果を検証するため、幇助倒立時の肩角度および腰角度変化について幇助開始から倒立位到達までを100%に規格化し、10%毎にWilcoxonの符号付き順位検定を用いてpre-post比較を行った。さらに、倒立時の主観的運動感覚について授業の初回と最終回とで比較した。＜結果と考察＞幇助倒立の姿勢について、肩角度に関してはドリル実施前後で有意な差は認められなかった。一方で、腰角度に関しては、ドリル実施前と比較してドリル実施後に有意な減少が認められた。なお、倒立位到達時の腰角度はドリル実施前後とも180°を超えた過伸展姿勢であったが、ドリル実施後は180°からの逸脱角度が有意に減少し($p = 0.002$)、腰部の過伸展が改善されたことが示唆された。また、主観的運動感覚に関するアンケート調査について、初回アンケート時に倒立に恐怖心があると回答した7名のうち4名は最終回において恐怖心が緩和した。なお、“ものさし”を用いた練習方法については、17名のうち11名が「言葉のみの指導より分かりやすい」と回答した。以上より、外的焦点を用いて肩甲骨の動きを意識づける練習方法は、倒立の姿勢を改善することに有効であることが示唆される。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-06] 保健体育科におけるウォーキングアメリカンフットボールの授業構想

女子高校生を対象として

*苫米地 里香[1]、鈴木 優太[2]、近藤 雄大[3]、崎田 嘉寛[4] (1. 札幌国際大学、2. 北海道大学アメリカンフットボール部、3. 津山工業高等専門学校、4. 北海道大学)

日本の学校体育においては、アメリカンフットボール（以下、アメフト）の教材化に際して、フラッグフットボールが採用され、主として戦術的思考力を育成する教材開発と効果の検証がなされてきた（岡出ら、2007；宗野、2013；玉腰、2018）。しかし、アメフトの特徴は、1プレーが約10秒程度の連続しないセットプレーであり、各ポジションの選手がいかに役割を遂行できるかが重要（松元ら、1996）であるため、フラッグフットボールとは異なる教材化の可能性を追求することも必要である（宗野、2012）。本研究では、ウォーキングサッカーが、体力や技能レベルを問わず、戦術性の体現や仲間との協働が可能であるとの指摘（高宮ら、2022、2023）に教材化の着眼点があると仮説的に考えた。そこで、本研究の目的は、保健体育科におけるウォーキングアメリカンフットボールの学習内容を構想し、その効果について女子高校生を対象とした授業で検討することである。

授業は、A高等学校第3学年女子25名を対象に、全4回（2024年7-11月、各60分）、3名のTT（アメフト部所属の男子学生含む）で実施した。単元目標は、①基本的な用語や競技性の理解、基本技術の習得、②自他の技能の把握と他者への伝達、③合意形成に貢献しようする態度と協同、である。学習内容は、プレイエリアをマス目に区切り、歩く方向と歩数を定めたアサイメントに従って、5対5のゲームができるよう段階的に設定した。

授業の効果は、①事前イメージ調査、②授業前後の技術・知識テスト、③授業後の学習カード記述内容（3設問・自由記述）から検討した。この結果、「歩く」という制限が、アメフトに対する負のイメージを軽減し、パスを中心とした戦術的理解を促したと判断された。また、作戦に関する話し合いを通じて、自身の役割とチームとしての連携が認識され、競技の魅力や楽しさを実感したと考えられた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-07] 小学生を対象とした側方倒立回転の指導プログラムに関する研究

*黒田 栄彦[1] (1. 北翔大学大学院　生涯スポーツ学研究科)

子どもにとって、マット運動における倒立回転技（ハンドスプリングやバク転、側方倒立回転）は憧れの技である。小学校教員として指導してきた経験から、前転や後転のような接転技よりも、倒立回転技ができるようになりたいという思い、その技ができた時の喜びは大きい。小学生という実態から、比較的習得しやすい側方倒立回転（以下、側転）を目標として指導をするものの、倒立回転技となるために必要な「腰が上がり両腕で体を支持した側転」ができるようになる子は、いつも学級のほんの一部であった。そこで、先行研究を通してこれまであった側転の指導法の調査、分類に取り組んだ。すると、森井(2017)が大学生を対象に実施した「倒立から背中側に倒れる動きを活用した指導法」に、これまでの筆者の側転指導法の課題、そしてその課題を克服する可能性を見出すことができた。しかし、この森井の指導法は大学生を対象としたものである。そのため、筆者はこの森井の指導法を小学生に適応できる指導内容、方法、順序について明らかにしたいと考えた。そこで、本研究では小学生を対象とした側転の指導プログラムの検証をすることを目的とする。対象は、筆者の勤務校に在籍する小学４年生の児童28名（男子14名、女子14名）とした。指導プログラムは筆者が作成したが、実際の指導は同僚教員（男性、教員歴14年、36歳）とした。指導時間は、１日45分で７日間実施した。指導目標は、「腰が上がり両腕で体を支持した側転」ができること。「かえるの足打ち」を中核教材とし、「山越え側転」「倒立位～背面落ち」「倒立位～½ひねり腹落ち」「倒立位～½ひねり腹落ち足着地」を、主要教材として側転の指導を行った。指導の結果、指導前の達成者３名（達成率10%）に対し、指導後は、達成者22名（達成率82%）となった。６名の未達成者は「倒立位～½ひねり腹落ち」において、倒立の状態を保持できなかった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-08] 体育の学習指導論の変遷に関する研究
2016年以降の学習指導論に着目して

*成家 篤史[1]、石塚 諭[2]、阿部 隆行[3] (1. 帝京大学、2. 宇都宮大学、3. 玉川大学)

成家・鈴木（2017）は戦後から2015年までの文献研究から体育の学習指導論は6期に分かれていることを明らかにしている。第1期は（1948年頃～1957年頃）学習者の話し合いを大切にし、そこから学習内容を生み出そうとした。第2期（1958年頃～1970年頃）では、学習者の話し合いを技能習得に向けさせ、確実な技能定着という視点から学習内容を生み出そうとした。第3期（1971年頃～1978年頃）から第4期（1979年頃～1999年頃）にかけては、一人一人の能力や興味に応じた活動が尊重され、その過程に学習内容を生み出そうとした。第5期（2000年頃～2010年頃）では、基礎・基本を習得したうえで、一人一人の能力や興味に応じたり、学習者同士が関わったりする中で学習内容を生み出そうとした。第6期（2011年頃以降）では、運動のおもしろさと学習内容を一体として学び、他者との関わりや運動の文脈との関係性を重視して学習内容を生み出そうとした。この研究では体育の専門誌に掲載されている論文を内容ごとに分類し、その掲載頻度を数値化することで学習指導論の傾向を整理した。他方、中央教育審議会答申（2021）では急激に変化する時代として「Society5.0時代」、「予測困難な時代」、「社会全体のデジタル化・オンライン化、DX加速の必要性」という3つの社会背景を述べている。このような社会において子どもたちに育むべき資質・能力として「自分のよさや可能性を認識」、「あらゆる他者を価値のある存在として尊重」、「多様な人々と協働」を挙げている。このような社会背景に対応するためには、成家・鈴木（2017）の研究で位置づけた体育の学習指導論の第6期以降の傾向を整理することが有益であると考える。そこで、本研究では第6期である2016年以降の体育の学習指導論を分析し、今後の体育についての考察を深めていく。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-09] 高等学校体育におけるサッカーの実践報告
エコロジカル・アプローチを活用した授業デザイン

*枝村 隼人[1]、梅澤 秋久[2] (1. 横浜国立大学教育学研究科、2. 横浜国立大学)

伝統的な体育科教育においては、目標―達成―評価型のカリキュラム（佐藤，2010）が用いられている。画一的で測定可能な技能獲得を目的とするタスク分解と反復を通じた教育方法である（梅澤，2024）。近年、学習者の主体的な意思決定を促し、状況と文脈の中で学ぶという現代の社会構成主義的学習観に依拠したエコロジカル・アプローチが注目されている。エコロジカル・アプローチとは、教師が手取り足取り運動そのものを教えるのではなく、制約のある学習環境から運動を学ばせる教育方法である。本研究では高等学校体育授業において、エコロジカル・アプローチを活用した実践を報告する。通常のサッカー競技から、人数やコートの広さ、ゴールの数を変更させたゲーム(スモールサイドゲーム)を授業内で実践した。具体的には、ピッチサイズは縦25m×横30mとし、ゴールをそれぞれ3つ用意した。中央にはパス通過で得点とするゴール、両サイドにはドリブル通過で得点とするゴールを設定した。シュートで得点を競い合うゲームではなく、サッカーの競技特性である突破場面を得点とすることで、協働的に突破する価値を高めた。アウト・オブ・プレー後の再開方法はキックインとすることで、インプレ―と同様の関わりへと繋げられるようにした。分析内容は、単元の初めから終盤へのゲームの様相、すなわち、①チーム内におけるパスの本数の変化、②個人個人のパスを受けた回数、③攻撃における戦術の多様化、④毎時間の振り返りを通した学習者のテーマに対する意識などを分析し、エコロジカル・アプローチの有効性を検証した。　③の結果を例にあげると、攻撃面におけるポジショニングの広がりやサイド攻撃の増加、味方と相手の位置を認識した上でのパス等が認められた。④の単元後の振り返りを共起ネットワーク分析した結果、「周りをみる重要性」や「全員がゲームに参加できる実感」というカテゴリーが創出された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-10] 水泳領域における「心得」の指導内容の検討(第2報)
現行（2017告示）及び前（2008告示）学習指導要領における英訳版を手掛かりにして

*稲垣 良介[1] (1. 岐阜聖徳学園大学)

水泳運動系における「心得」は、水泳授業の有無に関わらず、すべての学校で実施する内容である。本研究の究極的な目的は、授業を設計する際の基盤となる「心得」の内容を明らかにすることである。前報では、現行学習指導要領における「心得」の特徴を明らかにした。本報告は、「心得」の英訳版に着目した。2017年告示学習指導要領の英訳版(仮訳)では、「心得」は小学校（4箇所）及び中学校（3箇所）ともにすべて「manners」で統一している。また、「manners」に対照する日本語の語句は、小学校では「心得」（4箇所）だけである。一方、中学校では「心得」（3箇所）以外に、「マナー」（5箇所）にも対照している。2008年告示学習指導要領の英訳版(仮訳)では、「心得」は小学校「rules」（4箇所）、中学校「knowledge」（3箇所）を用いて学校段階別に対照している。また、小学校英語版の「rules」に対照する日本語句は19箇所あり、「心得」（4箇所）以外に「きまり」（8箇所）、「規則」（3箇所）、「約束」（2箇所）、「ルール」（2箇所）がみられる。中学校では、「knowledge」に対照する日本語の語句は6箇所あり、「心得」（3箇所）以外に「知識」（3箇所）がみられる。また、「心得（知識）」（knowledge）は、「マナー」（manners）及び「ルール」（rules）とそれぞれ明確に区別している。このように、「心得」の英語版の訳語をみると、それらは、完全に一致した語句と対照されているわけでなく、学校段階、公示時期によって違いがみられる。「心得」は、その概念が多義であるという性質をもち、この多義性こそが最大の特徴である。このことは、「心得」の限界というよりも、可能性を示すものと考えられる。「心得」は、知識や理念を行動と架橋する語句でもあり、内容を無限に解釈する余地を生むことも特徴である。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-11] 体育授業が女子専門学校生の運動に関する意識と気分の変化に及ぼす影響

学生の運動有能感とポジティブ感情尺度に着目して

*岡崎 祐介[1]、石立 克己[1]、陳 昱龍[1] (1. 至誠館大学)

第3期スポーツ基本計画（令和4年度～令和8年度）では、「成人の週1回以上のスポーツ実施率が70%になること」を目標としている。スポーツ庁の令和5年度体力・運動能力調査結果をみると、男子と比べて女子のスポーツ実施率が低い傾向にあることが報告されている。杉浦ら（2011）は、女子学生の運動経験と現在の運動習慣および健康認識との関連を分析しており、調査対象者は体力や運動の必要性を認知しているが運動習慣がある者は少なかったと述べている。他方、専門学校生については、運動やスポーツに関連する学校でない限り就学期間やカリキュラムの関係で日常的に運動習慣を確立することは難しい状況にあると考えられる。そこで本研究は、専門学校の体育授業における女子学生の運動有能感や運動好嫌度、気分状態の変化について調査し、学生の運動およびスポーツに対する意識や専門学校における体育授業の重要性と課題について検討することを目的とした。対象者は2024年度の体育授業受講者54名と2025年度受講者46名の100名であり、授業への欠席および測定値や回答に不備のなかった者を分析対象とした。授業はそれぞれ8回（1回90分）で計画し、いずれも隔週2回ずつ（約2か月）実施した。授業内容は球技（ネット型）のミニテニスを行った。調査内容は独自に考案した学生の基本的属性を問う項目のほか、体育授業を実施することが対象者の運動への意識や日頃の活動意欲に与える影響を検討するため、運動有能感（岡沢ら,1996）と達成動機測定尺度（堀野ら,1991）を参考に調査票を作成し、1回目の授業前と4回目の授業後に測定した。さらに体育授業による対象者の気分の変化を調査するため、毎回の授業前後にポジティブ感情尺度（橋本ら,2011）を測定し、授業後には取組の姿勢や気づき等の自己評価を自由記述により把握した。なお、分析した結果については当日発表を行う。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-12] ベースボール型ゲームにおける走塁先行アプローチの試み

*石塚 諭[1]、土田 了輔[2] (1. 宇都宮大学、2. 上越教育大学)

鈴木ら（2003）によると、小学校のベースボール型ゲームは、打撃（一次ゲーム）と走塁（二次ゲーム）の二重構造を持つと見立てることができる。しかし、従来の実践は打撃方法（一次ゲーム）の修正等に傾注され、走塁（二次ゲーム）との接続や学習過程に検討の余地があると考えられる。そこで本研究グループは、伝承遊びを援用し、学習者の意識変容に着目することで「二次ゲーム先行導入」という独自の学習プロセスの開発と有効性の検証に取り組んできた。

研究1では、公立A小学校3年生に対して、伝承遊び「ろくむし」を走塁ゲームに見立て、走塁課題から先に学び、その過程で打撃課題を取り入れる展開に基づき実践した。児童が記入した振り返り記述の内容は、打者、走者、守備者の各局面に関して14場面を想定したカテゴリーをベースボール型用に試作し分析した。その結果、打撃導入後の児童の振り返り記述から走塁に関する記述の割合が一気に打撃に移行するなど、打撃導入による走塁への関心低下という課題を特定した。研究2では、研究1の実践に走塁機会を増やすため、塁を1つ追加し実践を行った。その結果、打撃課題導入後も児童の走塁に対する意識が持続する傾向が明確に示された。さらに研究3では、児童の振り返り記述に加え、参与観察による事例も収集した。その結果、児童が打撃・守備・走塁の三局面に対する認識を、単元を通じてバランス良く深める様子を捉えることができた。

本研究では、これらの実践研究から得られた成果と課題を整理し、「二次ゲーム先行導入」という学習プロセスの有効性を提案する。具体的には、二次ゲームから先に学ぶことで、学習者の走塁への関心を持続させることができ、ゲームの構造的理解を促す上で有効であると考えられる。また、一次ゲームで用いる「打撃」概念を捉え直すことができるなど、今後のカリキュラム開発や指導法改善に新たな視点を加えることができる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-13] 球技学習におけるルールに関連する諸概念

*山崎 竜誠[1]、鈴木 理[2]、伊佐野 龍司[2] (1. 日本大学人文科学研究所、2. 日本大学)

学習指導要領（文部科学省、2018）における「〜型」表記に象徴されるように、球技領域においては類縁的種目に通底する内容の理解が重要である。しかし近年の球技授業実践の多くは、ゲームのプレイ条件を浮き立たせ学習者の戦術的気づきを導く（グリフィンほか、1999）ためにルールを運用しており、種目特有の内容のみを理解させるに留まっているように見受けられる。そこで本研究は、球技領域における指導内容の習得に向けて、ルールがいかなる機能を果たし得るのかを検討することを目的とした。これに関して、すでに山崎（2023）は、球技学習においてルールが〈課題〉（指導内容）と〈課題解決方法〉を構成する機能を包括的に捉えている。しかし、ルールが機能する諸概念すなわち〈課題〉、〈課題解決方法〉、「現実のゲーム文脈」について、その概念間の関連にまで議論が及んでいなかった。そこで本研究は、ルールの機能とその機能に関連する諸概念を整理し体系的に提示することで、論理的妥当性を裏付けることを企図した。具体的には、多木（1995）とゲーム構造論（例えば 鈴木、2018）が共に記号論的見地に立脚すること、また川谷（2005；2013）がルールの機能を「ゲームの本質を構成する／他のゲームとの差異を構成する」と説明していることに着眼し、ゲーム構造を形づくるルールの「両義的な機能」を精緻に記述するに至った。また、ルールが現実のゲーム情況に適用される際には、その機能が「文脈依存性」を帯びる（松宮、2022）ことを明確に位置づけることで、ルールがゲーム構造を構成する位相と、ゲーム情況において学習者に対して機能し、プレイに影響を与える位相とを明確に区別した。一連の議論により、球技学習におけるルールとそれに関連する諸概念との連関が精緻になり、ルール運用の際の有用な参照枠組みが浮き彫りとなった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-14] 大学体育授業における運動種目の違いがライフスキル獲得に及ぼす影響

*田中 奏一[1]、小俣 貴洋[1]、金子 竜大[1]、成相 美紀[1]、前田 奎[1]、藪中 佑樹[2]、細野 裕希[1]、新野 弘美[1]、高橋 啓悟[3]、濱中 良[1]、杉山 敬[1]、鷹野 都[1]、銘苅 淳[4] (1. 京都先端科学大学、2. 龍谷大学、3. 徳島大学大学院、4. アルバモス大阪)

【目的】
本研究の目的は、大学体育授業における運動種目の違いが、受講生のライフスキル（以下、LS）獲得に及ぼす影響を明らかにすることである。
【方法】
対象は、A大学の必修の大学体育授業（種目は選択制）を履修した学生1,051名とし、2024年度秋学期の授業開始前および全15回の授業終了後に、パネル調査を実施した。分析対象は、2回の調査に有効回答した545名であった。LSの測定には、日常生活スキル尺度（島本・石井，2006）を用い、種目ごとの受講前後差について二要因分散分析を行った。
【結果】
LS全体および複数の下位項目において、時間の主効果が有意であり、受講後の得点は受講前に比べて有意に高かった（$p < .05$）。その中でも「リーダーシップ」（$\eta_p^2 = .097$）の効果量が最も大きく、次いで「個人的スキル」（$\eta_p^2 = .068$）、「情報要約力」（$\eta_p^2 = .066$）の順であった。また、種目による主効果もLS全体および個人的スキルなど一部の下位項目で有意に認められ（$p < .05$）、サッカーやバスケットボール受講者は、テニスやニュースポーツ受講者に比べてLS得点が高い傾向を示した。なお、全ての項目において受講前後×種目の交互作用は有意ではなかった。
【考察】
大学体育授業がLSの獲得に寄与することは、既存研究（島本・石井，2009；杉山ほか，2006）でも指摘されているが、本研究では、種目に関わらずその有効性が示唆された。授業前の時点でLSに差が認められることは、これまでも報告されているが（東海林ほか，2012）、本研究においては、受講者が選択した種目によってLS得点に差が認められた点が注目される。必修科目として受講者により種目選択が行われるA大学のような体制においては、LSの水準に応じた個別最適な授業展開の参考として、選択種目を手がかりとすることは有効であると考えられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-15] 倒立の学習に重点を置いたマット運動の授業進行に伴う成功の見通しと技の習熟度の変化

接転技群後転グループを対象として

*松長 大祐[1]、中井 聖[1]、神野 周太郎[1] (1. 大阪電気通信大学)

倒立の学習に重点を置いたマット運動の授業において、授業進行につれて学習者が技を成功できるという見通しをどのように形成し、各技がどのように習熟されていくのかを接転技群の後転グループの技に焦点を当て検討した。
器械運動を受講する大学生67名を対象に、マット運動の11の技の体得を目指す6回の授業を展開した。毎回の授業終了後、調査対象者は各技をどの程度得意と感じるか（得意不得意度）を5件法で評価してもらった。
1回目と２回目の授業の各技の得意不得意度の合計得点は同等であり、学習導入前の得点はこれまでの経験に基づくその技の成功の見通し、学習導入後の得点はその技の習熟度と解釈された。倒立の得点は、授業進行につれて段階的に高くなった。基本技の後転では、学習導入前後で得点は同等で、成功の見通しと習熟度は概ね一致し、授業進行に伴って得点は大きく増加しなかった。発展技の開脚後転および伸膝後転では、1回目から2回目にかけて得点が低下し、学習によって成功の見通しが低下する場合があること、学習導入前よりも学習導入後の得点が高く、成功の見通しに対して技の習熟が上振れする場合があることが分かった。後転倒立では、授業進行に伴って段階的に得点が高くなる傾向が見られ、倒立の習熟と相まって成功の見通しが高くなったことが実際の技の習熟に繋がった可能性がある。
以上のことから、倒立の学習が後転グループの発展技の各技に必要となる、頭を抜く際の腰の開きや手の押し、高い位置に腰を運ぶ技術の習得に繋がり、各技の習熟に一定の効果を与えた可能性がある。一方、腰の開きと手の押しの同調のタイミングの難しさが影響して各技の習熟が進まなかったと考えられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-16] 平均台運動における運動アナロゴンの開発に関する研究

*齋藤 卓[1] (1. 筑波大学)

学校体育における器械運動は、児童・生徒の基礎的な身体能力を高めるだけでなく、自己表現や他者との協働、そして困難に挑む姿勢を育むうえで重要な役割を果たしている。中でも平均台運動は、バランス感覚や空間認知力を養うとともに、不安や恐怖を乗り越える経験を通じて、自分の力を信じて行動する力を育てることができる運動である。しかしながら、平均台運動は技術的な難しさや安全面への配慮が求められるため、学校現場では指導が難しい種目の一つとされている。特に小学校・中学校の段階では、児童・生徒の発達に応じた段階的な指導が必要とされるが、平均台運動に特化した体系的な指導法は未だ十分に確立されていないのが現状である。そのため、多くの授業では平均台の活用が限定的となり、技能の習得や運動への関心を十分に引き出せていないケースも見受けられる。本研究では、小・中学校における平均台運動の効果的な指導法を開発することを目的とする。具体的には、発達段階に応じた技の選定、安全性を確保した練習環境の整備、児童・生徒の意欲を高める指導言語や教材の工夫などに焦点を当てる。また、現場教員へのアンケート調査や授業実践を通じて、実践的かつ再現性のある指導モデルの構築を目指す。本研究の成果は、学校体育における平均台運動の指導の質を高め、児童・生徒が主体的に運動に取り組む姿勢を育むとともに、教員の指導力向上や授業の充実にも寄与することが期待される。付記：本研究はJSPS科研費23K10736の補助を受けて行われた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-17] ベースボール型球技の技術的特質に関する研究
時間構造に着目して

*岡崎 太郎[1]、佐藤 亮平[3]、竹田 唯史[2] (1. 北翔大学大学院、2. 北翔大学、3. 宮城教育大学)

2008年に学習指導要領が改訂されて以降、ベースボール型は球技領域に位置づけられ、バット操作・走塁・守備を通じた攻防の指導が求められている（文部科学省、2017）。また近藤ら（2021）によれば、ベースボール型球技の授業実践は徐々に蓄積されつつあるとされる。一方で、ベースボール型そのものについて問いかけるような議論は活発に行われていない。その中でも特に本研究が着目する視点は近藤ら（2021）が示すように「種目固有の面白さや楽しさといった『技術的特質』については十分に検討されていない」という点である（近藤ら、2021）。そこで、本研究ではベースボール型球技における「技術的特質」について提起することを研究目的とする。研究方法は、近藤ら（2021）を補助線とし、ベースボール型球技の面白さや楽しさについて言及している先行研究および指導書を検討する。その後、スポーツの時間構造について『球技のコーチング学』（2019）を参照し、「時間」という概念を考慮したベースボール型球技の「技術的特質」について提起する。近藤ら（2021）は、「静的ターゲットの争奪とその阻止」、「打者と野手間におけるヒット空間の創出とその阻止」、「走者（出塁者）と野手間における塁（ベース）という静的ターゲット及び走者という動的ターゲットの創出とその阻止」と「技術的特質」を規定しているが、ここには「時間」が読み取れない。本研究では「打撃目的時間として打撃は打者走者・走者の移動時間の延長を、走塁目的時間として走塁は打撃によって創出された時間の中で次の塁までの移動時間の短縮を、守備目的時間として守備は打撃目的時間の短縮および走塁目的時間の延長と打球までの移動時間および捕球から送球が完了するまでの時間の短縮を競技目的とする」ことが、ベースボール型球技の「技術的特質」の根幹部であると提起した。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-18] 体育授業におけるペア・グループ編成に伴う学習者の抵抗感の実態と要因（第2報）

*大坪 俊矢[1] (1. 崇城大学)

グループ学習の形態をとる体育授業において、グループ編成は授業の成否や学習成果に影響を及ぼす重要な要素である。また、体育授業では、いじめが多く発生していた場面は「グループを作る時」であったことが報告されており、体育嫌いを減らすためにはグループ編成のあり方を検討する必要があることも指摘されている。このような背景から、グループの作り方に着目した研究の必要性はこれまでにも指摘されてきた。しかし、現在でもグループ編成に関する研究の蓄積は乏しく、特に学習者を対象とした報告は少ないことが現状である。本研究では、体育の学習者がペア・グループ作りの場面で抱く不安や緊張を「ペア・グループ作りに対する『抵抗感』」と定義し、学習者が抵抗感を抱く状況の実態を明らかにすることを目的としてアンケート調査を行った。第1報では、学習者が直接関与しない編成方法が学習者の抵抗感を軽減できる可能性があることを報告した。第2報である本報告では、抵抗感を抱いた理由、過去に嫌悪感を覚えた編成方法など、学習者が抵抗感を抱く要因について報告する。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-19] そりを用いたレジスト走および推進方向からチューブを用いて引っ張るアシスト走を用いた中学校における走運動授業は生徒の意欲を高める

*松村 昌紀[1]、直井 清貴[2]、繁田 進[3]、伊藤 信之[4]、森山 進一郎[3] (1. 東京学芸大学大学院、2. 東京学芸大学附属小金井中学校、3. 東京学芸大学、4. 横浜国立大学)

【背景・目的】推進方向と逆側から負荷を課すレジスト走や、推進方向から走者を曳くアシスト走は、牽引走と呼ばれ、能力の向上を目的として陸上競技を中心に実施されてきている。近年、走運動の授業における児童や生徒の疾走能力改善の為の研究は散見されるものの、牽引走を用いた授業研究は稀有である。そこで、本研究では、そりを用いたレジスト走およびゴムチューブを用いたアシスト走を取入れた授業を実施して生徒から得られた所感を明らかにし、牽引走の体育授業への適用可能性を検討することを目的とした。【方法】都内K中学校の2年生66名を対象に、牽引走を導入した短距離走の授業が実施された。対象とした授業は１回あたり50分間とし7単位時間実施され、生徒は5〜6人1組となるようグループ分けされた。加えて、レジスト走およびアシスト走のそれぞれについて、楽しさや効果を問う調査や振り返りが行われ、テキストマイニングにより分析された。【結果】「レジスト走」「アシスト走」「どちらでもない」「どちらにもあてはまる」の4条件間における関連性を検討するために、クロス集計およびカイ二乗検定が行われた。その結果、4条件間には有意な関連が認められ（$\chi^2(9) = 1128.61, p < .001$）、残差分析の結果、アシスト走は楽しい一方で体への負担感が有意に小さく、レジスト走は体への負担感が有意に大きかった。【結論】レジスト走とアシスト走によって得られる所感は異なるものの、牽引走を用いた授業は生徒の意欲を高めることが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-20] 性格特性と体育授業における言語的・非言語的コミュニケーションとの関係

*河合 甫[1]、中島 寿宏[2] (1. 北海道教育大学教職大学院、2. 北海道教育大学札幌校)

【背景と目的】
近年、個人の性格特性がコミュニケーションに及ぼす影響は、心理学や教育学の分野で注目されている。中でも、ビッグファイブの一因子である外向性は、他者との関わり方や集団内での振る舞い方に大きな影響を与えるとされている（福井，2015）。外向的な人は一般に会話を好み、社交的かつ活発であるという特徴をもち、外向的な人の社交的かつ活発な性格は、心理的安全性の醸成とも深く関係している（山口他，2025）。本研究では、外向性を中心とした性格特性と、体育授業における言語的コミュニケーションおよび非言語的コミュニケーションとの関係を明らかにすることを目的とする。
【方法】
札幌市内の中学生36名（男子18名・女子18名）で、授業はダンス単元を対象とし、2025年2月から3月にかけてデータを収集した。活動中の生徒間の言語的・非言語的コミュニケーションについては、対面検知データ解析システム（日立製作所）を用いて測定を実施した。性格特性については、日本語版Ten Item Personality Inventory（TIPI-J；小塩他，2012）を用い、Google フォームにてオンラインで調査を実施し、生徒は授業後に各自の端末から回答した。
【結果と考察】
分析の結果、外向性の高い生徒は、授業での非言語的コミュニケーションの時間が長い傾向を示した。これは、先行研究で示されている外向的な生徒が相手の反応を敏感に察知し、それに応じた適切な非言語的応答を行っている（Jensen、2016；Hutzら、2015）という結果と一致し、外向性が単なる発話量の多さだけでなく、対人関係を築くための適応的なコミュニケーションに関連している可能性を示唆する。本研究の結果は、外向性が単なる発話量の多さだけでなく、対人関係を築くための柔軟かつ適応的なコミュニケーション能力と関連している可能性を示唆している。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-21] 工業高等専門学校学生によるバレーボール映像教材作成と活用サイクル構築の試み

*髙津 浩彰[1]、勝野 太介[2] (1. 豊田工業高等専門学校、2. 岐阜工業高等専門学校)

【目的】工業高等専門学校（以下：工業高専）の学生は、入学後にPCの利用が早期に認められるためその操作スキルが高い。その能力を活用し、授業での学習や部活動での練習に必要な映像教材を自主的に作成し、改善まで至る教材PDCAサイクル（教材の作成→利用→評価→改善サイクル）の構築が可能であると考える。本研究では、高専学生がバレーボールの映像教材を作成し授業で活用することを試みる。また、教材PDCAサイクルの構築の可能性について検討する。【方法】対象学生は工業高専の2年生210名である。活用した映像教材は、アンダーハンドサーブ、オーバーハンドパス、アンダーハンドパス、スパイクについてである。研究1では映像教材（アンダーハンドサーブ、オーバーハンドパス、アンダーハンドパス）を教員が作成し授業で使用した。研究2では前述の教員作成の映像教材を学生に提示し、映像教材（スパイク）を工業高専学生が作成し授業で使用した。研究１・２ともにバレーボールを専門とする工業高専学生を教材モデルとした。研究2のスパイクについてはバレーボール競技経験のある学生に作成を依頼した。映像教材を授業前に視聴し授業を行い、授業後にその教材の評価と改善点についてアンケート調査を行った。評価については４段階（良い・どちらかというと良い・どちらかというと良くない・良くない）で評価した。改善点については自由記述で回答を得た。【結果と考察】映像教材について多くの学生の評価が肯定的（良い・どちらかというと良い）であった。今後の映像教材作成の参考となる改善点についての意見が多く得られた。さらなる教材の作成と改善を繰り返すPDCAサイクルのシステムの構築の可能性が示された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-22] ダンス学習における音楽リズムと身体リズムが学習者に与える心理的・身体的反応

*小島 理永[1] (1. 神戸女子大学)

現代的なリズムのダンスの導入から15年以上が経過した。しかし、このダンスの指導方法や「リズムの乗り」については、未だ議論が続いている。そこで本研究では、ダンスに用いられる音楽リズムとダンスの動き自体がもつ身体リズムとの関係性を明らかにすることを目的とした。そのため、音楽を聞いて動きたくなる快感情「ノリ」（Etani et al., 2018）に着目し、高等学校のリズム系ダンス授業にて、両リズムが学習者に与える影響を検討した。授業では、全国ダンス・表現運動授業研究会による「ケンパー・グッパーからヒップホップへ」（原田，2017，pp.96-97）を参考に、足ジャンケン（グー、パー、チョキ）を組み合わせたヒップホップの「縦ノリ」のダンスを班で創作し発表した。研究方法として、ケンパーによるダンス習得および創作・発表時において、リズム音の有無による2条件（身体リズムのみの「無音条件」と音楽リズムが流れる「リズム音条件」）で実施した。そして、授業終了時に「ノリ」や気分、踊りやすさなどに関するアンケート調査を行った。順序効果を考慮し生徒66名を対象に比較した結果、「自分のダンスがつくれた」という項目では、リズム音条件の方が無音条件に比べ有意に高い評価を示した。さらに、二次元気分尺度（坂入ほか，2009）を用いた気分調査の結果、リズム音条件では活性度と快適度が無音条件に比べ有意に高い値を示した。一方、「リズムがとれた」「体を動かしたい」「楽しく踊れた」といった評価には有意な差が認められなかった。これらの結果から、音楽リズムはダンス中の気分の活性化や快適さに加え、「自分のダンスがつくれた」といった創造的な動きを引き出す要因として働くことが示唆され、音楽リズムを取り入れた授業の有用性が明らかとなった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-23] 中学3年生を対象とした知識構成型ジグソー法とMI理論を活用したバレーボールの授業の開発と検証

*小林 永佑[1]、石切山 大[1]、大多和 秀樹[1] (1. 常葉大学大学院学校教育研究科)

これまでの体育の授業では、運動能力に基づくグループ編成とそのグループでの活動が一般的であったが、それにより生徒間の技能格差が顕在化し、他者との比較が容易となることで、運動意欲を低下させる要因となっていた（春日2017）。また、体育の授業におけるグループ活動の手法の1つである知識構成型ジグソー法は、協働による学びを通して概念的理解を深めることを目的としており、グループ学習を基盤に置きながらも、その編成方法についての言及はほとんどなされていない。そこで本研究では、中学校体育のバレーボールにおける知識構成型ジグソー法の授業において、グループ構成にMI（多重知能）理論を取り入れ、身体的・運動的知能以外の多様な得意分野に着目したグルーピングを行う授業を開発した。中学校体育のバレーボールの授業に知識構成型ジグソー法を採用する理由として、バレーボールがスパイカーやセッターなどの明確な役割分担があるスポーツであり、知識構成型ジグソー法における「エキスパート活動（役割に特化した学習）」と対応すると考えられる。また、バレーボールの攻防やポジショニングには「なぜこの動きが必要か」を理解する必要があり、知識構成型ジグソー法で求められる「知識の再構成」や「説明による内面化」が戦術理解を深めるのに有効だと考えられるためである。　本研究で開発した授業を静岡県内の公立中学校3年生に対して授業実践を行い、授業の効果検証としてアンケート調査（5件法）と統計解析による分析を行った。これまでの体育授業（事前）と本研究の授業（事後）で、生徒の変容を調べるため、*t*検定による分析を行った。その結果、「グループの仲間と同じ理解を持つように説明をし合っていた。」の項目について、事前と事後のアンケートの平均値の差において有意差が認められた（t=2.38, p<.01）。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-24] 保健体育科教員の生徒指導担当における役割認識変容プロセス
チーム学校における新たな役割の模索

*岡田 大暉[1]、齋藤 祐一[1] (1. 鳴門教育大学大学院)

令和4年改訂の生徒指導提要では「児童生徒が、社会の中で自分らしく生きることができる存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動」としての生徒指導が期待されている。同時に教員の働き方改革も基本方針に含まれ、チーム学校による生徒指導体制の構築が推進されている。

しかし先行研究では、保健体育科教員（以下、保体教員）が生徒指導で中心的役割を担う傾向が指摘されてきた。木村ら（1991）は高校で4割以上の保体教員が生徒指導を担当していることを示している。

保体教員が生徒指導を引き受ける背景には、学校側の要望により「したくないがしなければならないもの（杉本, 1988）」として捉えていることや、本意ではない配属や他校務分掌への不安から生徒指導担当を選択せざるを得ない状況（石村・山西, 2007）がある。このように、保体教員の生徒指導に対する役割意識は、周囲からの期待という外的要因と環境的要因が絡み合って形成されている。また門屋ら（2016）は、生徒指導や部活動指導により保体教員が学校内での立場を確保していると推察しており、表面上は主体的な関与に見えても実態は異なる可能性がある。

チーム学校による生徒指導体制の確立には、これまでの経緯を踏まえつつ学校組織を再構築する必要がある。現行の学習指導要領でも「学習指導と関連付けながら（文部科学省, 2018）」生徒指導を展開する必要性が指摘されており、保体教員には従来の経験と教科の専門性を活かした新たな生徒指導の実践が期待される。しかし、生徒指導を担当する保体教員自身の役割認識や実践における葛藤、キャリア形成過程での内面的変容は十分に解明されていない。

そこで本研究では、長期にわたり生徒指導を担当してきた保体教員のライフストーリーを事例的に分析し、チーム学校時代における保体教員の生徒指導への関わり方の再構築に向けた示唆を得ることを目的とする。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-25] 高等教育における「体育史」授業教材の一提案

学生の体育・スポーツ経験の教材化

*石立 克己[1]、近藤 雄大[2]、舩場 大資[3] (1. 学校法人菅原学園至誠館大学、2. 津山工業高等専門学校、3. 山口学芸大学)

2008年以降の学習指導要領で「体育理論」が必修化され、「体育・スポーツの歴史的発展」が中学校、高等学校の授業に導入された。しかしながら、教育現場での実施率や研究の蓄積は乏しい状況にあると指摘されており（吉田，2024）、今後、生徒の主体的な学びを促す体育理論の授業が求められている（香西ほか，2020）。この課題に対し、本研究では、まず教員免許取得希望者に「体育史」への理解を深めてもらう必要があると考える。そこで、中等教育における「体育理論」授業と高等教育における「体育史」授業との接続を図るために、教員免許取得希望者が有する体育・スポーツ経験を反映した教員養成課程での「体育史」教材を開発することを本研究の目的とする。

具体的には、「体育史」授業を受講する教員免許取得希望者（2024年度21名）を対象に、①「体育理論」の学習経験について質問紙調査を実施し、②「体育史」授業の内容を踏まえ、自身の部活動や競技経験について振り返るよう課題を出した。これらのデータをもとに、体罰（3件）、勝利至上主義（5件）、遊戯性（11件）、ジェンダー（3件）、アスレティシズム（21件）、自治（3件）、公平性（1件）といった体育史的トピックと自身のスポーツ経験との接点を学生が見出していることをテキストマイニングおよび質的分析により抽出した。また、学生のスポーツ経験と体育・スポーツ史研究の知見が、「体育史」授業の中でどのように接続されるのかを分析した。

この結果、①学生自身による体育史的アプローチを通したスポーツ経験の相対化、②「体育理論」や「体育史」授業の自分ごと化を両立しえる授業教材を構成できることが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-26] 小学校教育実習の授業実践を通した実習生の学びに関する事例的研究

2回の授業協議会の談話分析を中心に

*江藤 真生子[1]、三田 沙織[2] (1. 琉球大学、2. 國學院大學)

【目的】小学校教育実習の授業実践後の協議会における談話を分析し，実習生の学びを実証的に明らかにすることを目的とした。【方法】対象は，教員養成系大学教育学部附属小学校で実施された教育実習で，指導教員とその学級に配属された実習生4名（2回の協議会に参加），他学級配属で1回目と2回目のそれぞれの協議会のみに参加し発表した3名であった。体育授業は2回実施され，2回目の体育授業は学年の代表として行われた研究授業であった。各授業後の協議会の発言と実習記録簿の記述をデータとして収集した。協議会では，先行研究による実習生の課題（教授行為や教具に関する内容が多く児童の学習に関する内容は少ない傾向にあること）を鑑み，学習者に焦点を当てる「8つの問い」（コルト・ハーヘン，2010）の視点を用いて指導教員が運営を行った。協議会における発言は，内容のまとまりごとに発話として坂本（2010）の分類カテゴリー（授業の表象，推論，問題の表象，可能性の想定，代案，その他）に分類した。【結果と考察】協議会はいずれも授業者が自評する場面1，観察者がそれぞれ所感を述べる場面2，実施された授業の課題に対して協議する場面3に分けられ，2回目の協議会のみにグループ協議の発表と質疑応答の場面4がみられた。総じて，実習生は他者の発話や問いかけをもとに問題の表象に気づいたり，推論や代案を思考したりしていたと考えられた。また，2回目の授業者は，1回目の協議会における他者や自身の問題や推論を自身の授業に反映させ実践した。2回目の協議会で他者の問題や推論をもとに思考し，子どもの運動の楽しみ方に違いがあることの理解に繋がったと考えられた。なお，分析の詳細については当日ポスターにて報告を行う。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-27] 初心者を対象とした陸上競技「背面跳び」の指導展開における学習課題

*近藤 雅哉[1]、上原 三十三[2] (1. 豊田工業高等専門学校、2. 愛知教育大学)

走高跳における「はさみ跳び」から「背面跳び」への学習段階の移行は、自然発生的に起こる事例が示されている（後藤ら,1996）。一方で、「背面跳び」へとメタモルフォーゼができない例も少なくない。「背面跳び」の技術習得に初めて取り組む段階では、何をどのように身につけるべきなのだろうか。「背面跳び」の発生に至るまで跳躍形態を概観すると、「イースタン･カット･オフ」、「ウエスタン・ロール」、「ベリーロール」、「背面跳び」の順に出現している（岡尾,2022）。発展わざは、その前段階において獲得されたわざが動感素材にされて新たに構成される。このことから運動形態の系統発生は、指導の方法論的順序の組立て方のヒントになるが、系統発生順に学習順序を配列すれば解決される訳ではない。次の発展形態の課題達成へ橋渡しするために必要なコツ･カン（金子,2002）としての運動技術が明らかにされる必要があろう。本研究の目的は、走高跳における「背面跳び」の技術習得に初めて取り組む段階でみられる学習のつまずきの原因を運動技術の視点から明らかにすることにある。先ず、「背面跳び」の跳躍技術を文献記述から調査した。ここでは、効果的な踏切動作の特徴として次の5点が確認された。①助走から踏切動作への移行局面において上体を内傾させること、②踏切動作においてバーの方向へ上体を倒れ込まないようにすること、③踏切動作における「跳ね返し」、④踏切動作における「振り上げ脚の振り上げ動作」と「上体の引き上げ動作」の同調、⑤「上体の引き上げ操作」における「ねじり動作」（北谷,2009）。発生的現象学の「脱構築」を通した動感観察によって踏切動作の中核となる動きを抽出し、踏切動作の後半では「ねじり動作」が不可欠であることが確認された。そして「背面跳び」の学習初期に特徴的なつまずき事例は、「ねじり動作」の動感志向に課題があることが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-28] 新任体育教師における運動観察内容の変容過程

*篠﨑 明彦[1]、伊佐野 龍司[2]、鈴木 理[2] (1. 日本大学学院文学研究科教育学専攻（体育学）、2. 日本大学大学院)

体育授業において教師は，「明確な指導性」（高橋，2010）を発揮することが求められているため，その育成が養成課程から体系的に取り組まれている．その際，教師の運動指導を支える運動観察能力の育成にも焦点化され，養成段階における知見も蓄積されている（佐藤，2001：中村，2010）．一方，運動観察能力は長年にわたる激しい意図的訓練の中でしか獲得することはできないと指摘（マイネル，1960）されながらも，教師として着任以降の研究には課題が残されており，教師自身の自己研鑽に委ねられているのが現状である．とりわけ，熟達化の素地となる新任体育教師の運動観察力の育成に焦点を当てることは，現状の課題解決と共に採用後の研修やOJTなどの専門性向上の観点からも喫緊に取り組むべき事項と位置づけられる．そこで本研究は，新任体育教師の運動観察内容の変容過程を記述し，解釈することを目的とした．本研究では，「自らの身体感覚や思考，感情等の記述」（沖潮，2013）するオートエスのグラフィの手法を採用し，新任教師である筆頭筆者が中学校体育授業における生徒の所定の運動を継続的に観察した際の内観を記述した．なお，実践にあたっては所属長に承認を得た上で，実施した．単元当初，新任教師は自身の運動経験から生徒の運動の図形的諸徴表を捉えていることを自覚し，運動共感に基づく観察・修正を試みたが，生徒が運動感覚的に了解するには至らなかった．そのため，教師自身の運動感覚に依拠した観察態度を保留したところ，運動の遂行に伴う生徒の情念を捉えるに至った．しかしながら，生徒が運動に抱く情念が情況により流動的であることから，その情念の現れに応じて自らの観察を変奏させる必要性が立ち現れていた．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-29] 跳び箱運動における恐怖心の要因に関する研究
開脚跳びとかかえ込み跳びに着目して

*坂本 康輔[1]、浦 佑大[1] (1. 環太平洋大学)

【背景】
器械運動は「できる・できない」が明確な領域であるため、恐怖心により苦手意識を持つ児童生徒も少なくない。恐怖心とは、自己の存在が脅かされる可能性を漠然と予測し、不安を感じる状態であり、求められる動作が遂行困難になることもある。中でも跳び箱運動は、助走から踏切、着手、着地まで多様な動作を含むため、恐怖心を抱きやすい種目と考えられる。恐怖心は運動制御を妨げ、怪我の要因にもなるとされており、安全配慮や教材開発に関する研究は多くある一方で、恐怖心の背景に焦点を当てた研究は少ない。
【目的】
跳び箱運動において、恐怖心を抱く局面や背景を明らかにし、恐怖心軽減に向けた具体的な指導方法を検討することを目的とした。
【方法】
2024年度「器械運動Ⅰ（基礎）」履修者197名に対し、開脚跳び・かかえ込み跳びに関する恐怖心の有無をGoogle Formにて調査した。恐怖心があると回答した122名に対し、恐怖を感じる局面とその理由を自由記述形式で尋ね、テキストマイニングツールで分析した。
【結果】
恐怖心を感じる局面は、踏切（32.0%）、第1空中局面（28.7%）、着手（18.9%）の順に多かった。共起語分析では「跳び箱」「足」「怪我」「落ちる」「引っかかる」「跳ぶ」などの語が頻出した。
【考察】
踏切直前から着手にかけて恐怖心が強まることで、動作の中止が困難となり怪我リスクが高まる可能性が示唆された。跳び箱の形状や失敗・怪我への予測イメージが恐怖心の要因であることが明らかとなった。今後は踏切前後に分けた段階的な指導や、空中感覚とアナロゴン獲得を促す練習が恐怖心軽減に有効であると考えられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-30] 駅伝要素を取り入れた長距離走授業の有効性に関する研究

*柴田 一輝[1]、大越 正大[2] (1. 東海大学大学院体育学研究科、2. 東海大学体育学部)

【背景と目的】長距離走授業は「苦しい」「疲れる」といった忌避感から、運動意欲を高めにくい種目である。よって長距離走授業に関連する研究では、意欲や記録向上に焦点を当てたものが多く、学習指導要領が示す「競争の楽しさを味わうこと」に着目した研究は少ない。意欲を高め競争の楽しさを味わう工夫として「駅伝」形式の授業を行う例が見られる。本研究では、中学校の長距離走授業に駅伝要素（リレー形式、作戦立案、団体戦と個人戦）を取り入れている学校に着目し、この要素により、生徒の態度や長距離走授業に対する価値観にどのような変化がもたらされるかを明らかにする。【方法】対象とする授業は、中学校第1学年の長距離走で、授業の前半（第1〜3回）は個々の記録向上を目的とした一般的な形式、後半（第4〜6回）は駅伝形式で実施された。生徒には、小磯ら（2018）が作成した長距離走の態度に関する質問紙調査（5因子31項目）を前半と後半の授業後に実施し、各因子得点の変化を確認した。さらに、学習カードに記述された感想をテキストマイニングの手法を用い、共起ネットワーク図を作成して長距離走に対する捉え方や価値観等の質的な変化について検討した。【結果】態度に関する調査では、後半に「不快」の因子が高まり、中でも「その場限りの仲間にすぎない」、「自分勝手な行動がむき出しになる」の項目で高まりが見られた。一方、感想文の分析では、前半は「ペース」「タイム」など個人記録や挑戦に関する語が多く、後半では「応援」「楽しい」「協力」など、集団的・協働的要素やポジティブな感情と捉えられる語が新たに出現し、生徒の長距離走授業に対する捉え方の変容が見られた。その他、記録の上位・下位、苦手意識の高・低による比較・分析等、詳細は当日に報告する。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-31] 試験委員の言説からみる「文検」體操科
戦前日本の体育教師養成の実態

*栗原 武志[1] (1. 熊本学園大学)

「文検」とは、「文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験」の略称のことであり、日本の戦前の教育、教員養成の一つの流れを形成した制度である。本研究は、未だ詳細な分析が行われていない一科目として、「文検」體操科が残されており、その実態を解明するための一連の研究である。近年、古川修（2016）によって『「文検體操科」の研究』が公刊されたものの、その研究範囲は埼玉県内に限定されており、「文検」體操科全体の体系的な理解には至っていない。

　これまで、2023年に同志社大学において開催された日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会にて「『文検』研究に見る教師教育のあり方に関する一考察－『文検』體操科の研究課題整理に焦点づけてー」を発表した。また、2024年には、ソウル大学において開催されたEast Asian Alliance of Sport Pedagogy Conference 12thにて、Analysis of “Bunken” Physical Education Selection Examinees－Based on Successful Examinee Experience Reports Published in “Bunken” Preparation Magazines－を発表し、一定の知見を提示した。

　本研究では、「文検」受験用雑誌に掲載された試験委員の言説より、「文検」體操科を体育学研究（試験委員の大学という場における研究）の視点から明らかにすることを試みた。具体的には、「文検」體操科試験委員の確定や学問内容について考察を進め、近代日本における体育科教育の発展の根底にある「文検」體操科の実像に迫った。（本研究はJSPS科研費21K11539の助成を受けたものである。）

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-32] 体育科教育において質的研究手法がもつ可能性に関する一考察

*佐藤 亮平[1]、岡崎 太郎[3]、近藤 雄一郎[2] (1. 宮城教育大学、2. 福井大学、3. 北翔大学大学院)

教育実践を研究する学問としての体育科教育学は、その学問的関係性を親科学として教育学との血縁的関係、体育学と婚姻的関係があるとされる（高橋、2010）。そして、その独自性については体育の教科内容（スポーツ文化）の指導・学習、体育の学習環境（グラウンド、体育館、プールなど）、体育を学ぶ個人や集団（興味・関心、運動発達、学習形態など）といった条件下で「授業（単元）計画を立て、実践し、そのなかから一般に妥当するような方法上の原理を究明する研究」であるとされる。それゆえ、体育科教育学は「基礎科学」を基礎とした「実践科学」であるとされる。このような立ち位置をとって体育科教育学は独自の知識を生産してきた。ただし、これまでに『体育科教育学研究』に掲載された研究は定量的データを用いられた研究が主流となっている（岡崎ら、2025）。こうした現実に対し、質的研究の有効性について示している研究もある（岩田ら、2022）。そこで、本研究では、体育科教育学研究に掲載されている質的研究手法を用いた研究を対象に、その手法が照らし出す研究対象が量的研究とどのように異なるか、について明らかにすることを目的とする。研究方法は体育科教育学研究において参与観察的手法を用いた研究として掲載されている成家・青木（2023）、成家ら（2013）、伊佐野ら（2011）の研究方法について整理する。その上で、これらの研究が明らかにした対象について考察する。その結果、質的研究の手法が用いられることによって、学校の中で、学年のなかで、クラスのなかで、授業のなかで、という各レベルで生起する出来事に対して、教師は、子どもは、という視点から、その実態を記述することを通じて、現場の教師が育んできた実践知の再発見、既存の知見の再解釈、を可能にすると考えられた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 14:40 ~ 15:40 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育科教育学

[3b1204-236] 体育科教育学／ポスター発表

[11教-ポ-33] 日本の水泳指導に関する研究動向と課題の検討

*豊田 郁豪[1,2]、橋本 翔[4]、森山 進一郎[3] (1. 桃山学院大学、2. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、3. 東京学芸大学、4. 明法中学・高等学校)

【背景】水泳の授業は、水中で自己の安全を確保できる能力を向上させることを目的に行われている。その中で教員は専門的な知識の不足により、水泳授業に対する不安を抱えている。多くの教員は授業課題に対して文献を利用し、解決方法を学んでいるため、水泳指導に関する研究を整理することは、教員の資質能力向上に資する重要な資料作成や水泳指導の課題抽出につながるだろう。【目的】本研究は、水泳指導に関する文献を整理することで、日本の水泳教育に関する研究課題を明らかにすることを目的とした。【方法】論文は、CiNiiを用いて、期間を1945年から2025年、検索語を「水泳」および「指導」に定め検索し、閲覧可能な「学術雑誌論文および紀要論文」を抽出し、142件の論文を対象とした。その後、対象となる論文のタイトルとキーワードに含まれる単語の出現頻度や単語間の関連性を明らかにするため、テキストマイニングツール（ユーザーローカル社）を用いて分析を行った。【結果】アイテムタイプは15件の学術雑誌論文と127件の紀要論文に分けられた。水泳指導に関する研究は授業関連の文献が多いが、その大半は調査や検討に留まっていた。また、研究の多くは技能向上を目指したものが多く、文部科学省によって目指される学力の三要素の向上を目指した研究は不足していた。【結論】日本の水泳指導に関する研究は、主に授業検討や児童生徒の技能向上に焦点化されていたが、知識・技能、思考力・判断力・表現力等および主体的に学習に取り組む態度を指す学力の三要素は互いに関連しているため、今後は三要素を統合的に捉えた研究が必要である。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 14:00 ~ 15:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1237-245] バイオメカニクス（偶数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-02]

パンチスローで用いるメディシンボールの質量の違いが体幹回旋運動に関わる動力学的変数に与える影響

*石川 慎二[1]、北村 瑞望[1]、大塚 光雄[1] (1. 日本体育大学)

[05バ-ポ-04]

漸増負荷ペダリング運動中の筋電図周波数様相の変化

*和久井 健吾[1]、牛山 幸彦[1] (1. 新潟大学)

[05バ-ポ-06]

ウォーキング時の香り呈示が歩容・時間知覚・生理的反応に与える影響

レモン香料とペパーミント香料のケーススタディ

*遠藤 慎也[1]、吉川 叡史[2]、伊藤 兼敏[3]、高橋 芳梨[3]、西垣 景太[1,2] (1. 東海大学 健康学部、2. 東海大学大学院 健康学研究科、3. 高砂香料工業株式会社 研究開発本部)

[05バ-ポ-08]

各種腕振り動作の違いが地面反力の大きさに及ぼす影響の定量化

*藤谷 瑠菜[1]、田内 健二[2] (1. 中京大学スポーツ科学研究科、2. 中京大学スポーツ科学部)

[05バ-ポ-10]

バスケットボールスリーポイントシュートにおける力学的エネルギーの有効性

*奥山 幹太[1] (1. 新潟大学)

[05バ-ポ-12]

サッカーのキック動作によるボール速度に対する疾走速度の割合における男女差の検討

*服部 あおい[1]、田内 健二[1]、大家 利之[1] (1. 中京大学)

[05バ-ポ-14]

走幅跳におけるテイクオフゾーンの導入が助走、踏み切り動作に与える影響

*木戸 陽介[1]、北村 瑞望[1]、小林 史明[1]、大塚 光雄[1] (1. 日本体育大学)

[05バ-ポ-16]

柔道「内股」を身体合成重心の鉛直方向変位からみる

*池田 希[1]、西尾 悠介[2]、宮崎 誠司[3] (1. いけだ接骨院、2. 日本体育大学大学院、3. 東海大学)

[05バ-ポ-18]

トランポリン競技の後方伸身2回宙返り3回捻り動作における踏切局面中の角運動量が滞空時間に及ぼす影響

*岸 凌大[1]、山口 雄大[1]、和田 直樹[1]、山崎 博和[1]、西山 哲成[1] (1. 日本体育大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 14:00 ~ 15:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1237-245] バイオメカニクス（偶数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-02] パンチスローで用いるメディシンボールの質量の違いが体幹回旋運動に関わる動力学的変数に与える影響

*石川 慎二[1]、北村 瑞望[1]、大塚 光雄[1] (1. 日本体育大学)

メディシンボールを用いたトレーニングは、回旋系スポーツにおいて全身のパワー発揮を高めるために広く利用されており、比較的軽量な負荷を使用し、爆発的かつ動作特異的に実施されている。投動作中の体幹回旋運動は投球速度を決定する重要な要素である。そのため、メディシンボールを用いたパンチスローは、近年、野球をはじめとする回旋系スポーツで広く取り入れられている。そこで、本研究では、パンチスローで用いるメディンボールトレーニングの質量の違いが体幹回旋運動に関わる動力学的パラメータに与える影響を明らかにすることを目的とした。本研究の被験者は、男子大学野球選手3名であった。測定試技は、1kg、3kg、および5kgのメディシンボールを用いたパンチスローとし、それぞれ3試技実施するよう指示した。赤外線ハイスピードカメラ7台、フォースプレート2台、および加速度センサ1台を使用し、パンチスローを行う際の身体部分の座標位置、左右足に加わる床反力およびメディシンボールの加速度を測定した。その結果、3名の1kg試技のメディシンボールの水平パワーピーク値は797W、608Wおよび381Wであり（値は被験者#1、2、3の順。以下、同様）、3kg試技の931W、758Wおよび704W、5kg試技の788W、958Wおよび1072Wと比べて、高い訳ではないことが明らかとなった。一方、1kg試技における体幹の正の内旋ピークパワーは646W、436Wおよび392Wであり、3kg試技の568W、334Wおよび332W、5kg試技の418W、296Wおよび274Wと比べて、高かった。これは、体幹内旋パワーの最大化を目的としたパワートレーニングは、より軽いメディシンボールの使用が効果的である可能性を示唆するものである。しかし、本研究のサンプルサイズは小さいことから、今後の課題として、被験者数を増やした上での解釈が必要である。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 14:00 ~ 15:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1237-245] バイオメカニクス（偶数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-04] 漸増負荷ペダリング運動中の筋電図周波数様相の変化

*和久井 健吾[1]、牛山 幸彦[1] (1. 新潟大学)

【背景・目的】乳酸性作業閾値（LT）や換気性作業閾値（VT）は，個々人の有酸素性作業能力を評価する指標として有用な情報をもたらす一方で，その測定は侵襲性や経済的な問題で被験者または験者に負担がかかる．こうした問題の解決を主な目的として，表面筋電図（EMG）を用いた代替指標に関する研究が行われ，漸増負荷運動中のLTやVTに相当する運動強度において，筋電位が急増する時点（筋電図閾値：EMGT）が存在すると報告されている．運動強度の増加に伴う筋線維タイプ動員割合の変化により筋電位の非線形増加が生じると考えられているが，EMGTの発生機序は明らかにされていないのが現状である．本研究では，動的運動時の筋電図周波数解析に適するとされるウェーブレット変換を用いて漸増負荷運動時の筋線維タイプ動員割合の変化を調査することで，EMGT発生機序の解明に資する知見を得ることを目的とする．【方法】健康な男子大学生および大学院生を対象に，漸増負荷ペダリング運動を実施し，運動中の右大腿直筋（RF）及び外側広筋（VL）の表面筋電位を測定した．得られた筋電図にフィルタ処理を施した後，ウェーブレット変換を用いて周波数帯域ごとのスペクトルパワーを算出し，全周波数帯域におけるスペクトルパワーの総和に対する割合を求めた．運動強度間における変化から筋線維動員割合の動態を検討した．【結果・考察】運動強度の増加に伴い，低周波域のスペクトルパワーの割合が徐々に増加し，中～高周波域のスペクトルパワーの割合が徐々に低下する傾向が見られた．これは運動強度増加に伴うタイプⅠ線維動員割合の増加を示唆する．サイズの原理に基づきタイプⅡ線維の追加動員が生じることによりEMGTが出現するという先行研究の見解と異なり，筋疲労によるタイプⅡ線維の出力低下を補填するためのタイプⅠ線維の活発な追加動員が筋電位急増の要因である可能性が考えられる．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 14:00 ~ 15:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1237-245] バイオメカニクス（偶数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-06] ウォーキング時の香り呈示が歩容・時間知覚・生理的反応に与える影響

レモン香料とペパーミント香料のケーススタディ

*遠藤 慎也[1]、吉川 叡史[2]、伊藤 兼敏[3]、高橋 芳梨[3]、西垣 景太[1,2] (1. 東海大学 健康学部、2. 東海大学大学院 健康学研究科、3. 高砂香料工業株式会社 研究開発本部)

本研究では、レモンおよびペパーミント香料が歩容、時間知覚、主観的評価および生理応答に与える影響を検討した。被験者は健康な大学生10名（男女各5名、平均年齢21.0歳）とし、無香（コントロール）、レモン香料、ペパーミント香料の3条件にてランダム化クロスオーバー試験を実施した。香料は高砂香料工業株式会社より提供され、各香料を0.2g賦香した綿球をフェイスシールドに貼付し、運動前から運動終了30分後まで着用させた。運動は20分間の自由歩行とし、歩行速度は「息が弾む程度」となるよう被験者が任意に設定し、3条件間で同等の歩行速度が確保されるよう試技を繰り返した。各条件の運動前、運動開始後5、10、15、20分、運動終了後5、15、30分において、香りの強さ（VAS）、主観的運動強度、心拍数、血中乳酸濃度、唾液アミラーゼを測定した。時間知覚については、運動前と運動開始後15分にて、被験者に任意で60秒間をカウントさせ、60秒が経過したと感じた時点で口頭にて申告させた。加えて、5分おきに歩行中の動作を30秒間撮影し、歩行分析ソフトを用いてストライド長、足部の着地・離地角度を算出した。統計解析は時系列変化に対する分散分析および各条件下での相関分析を行った。

その結果、全ての項目において時系列の変化に条件間の差異は認められなかった。各項目の関連性を検討するため条件別に相関分析を行った結果、レモン条件においてのみ運動前と運動中の時間知覚の差と運動終了時の心拍数との間に有意な正の相関が認められた（r = .78）。このことから、ウォーキング時のレモン香料呈示条件下では、心拍数が低いほど、より時間知覚は短縮され、実際の時間との誤差を縮小した可能性が考えられた。本研究の結果より、ウォーキング時の嗅覚刺激は歩容には影響しないが、時間知覚や生理的応答に影響を及ぼすクロスモーダル効果の可能性が示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 14:00 ~ 15:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1237-245] バイオメカニクス（偶数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-08] 各種腕振り動作の違いが地面反力の大きさに及ぼす影響の定量化

*藤谷 瑠菜[1]、田内 健二[2] (1. 中京大学スポーツ科学研究科、2. 中京大学スポーツ科学部)

【緒言】腕振りは，歩行や走行中の姿勢安定性やエネルギー効率の向上に寄与することが報告されており（Ferraris et al., 2022），地面反力にも影響を及ぼす可能性がある．特に，脚のスイング動作が股関節に反力を生じさせ，骨盤を介して支持脚に力を伝えることが指摘されている（豊嶋ら, 2015）．これに類似した，身体の末端部をスイングさせる動作，すなわち腕振り動作は，運動中に発揮される地面反力の増大に貢献している可能性が考えられる．しかし，腕振りの様式や速度の違いが地面反力に与える影響についての定量的検討はなされていない．そこで本研究では，異なる腕振り動作および腕振り速度が鉛直方向の地面反力に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした．
【方法】健常者20名を対象に，4種類の腕振り動作（肘関節屈曲位・伸展位×両腕同時・交互）を，それぞれ4段階のスイング速度（80, 100, 120, 140回/分）で行わせた．被験者は地面反力計上で立位姿勢のまま各条件10スイングを2試技実施し，光学式三次元動作分析装置（250Hz），フォースプレート（1000Hz）により計測を行った．地面反力波形が安定した後の6スイングを抽出し，体重あたりの最大鉛直地面反力（N/kg）およびその時点の肩関節角速度（deg/s）を算出した．
【結果】体重あたりの鉛直地面力は，スイング速度が増加するに伴って有意に増加し，肘関節屈曲位よりも伸展位，両腕交互スイングよりも両腕同時スイングが，それぞれ高値を示す結果となった．詳細については，ポスター発表当日に報告する．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 14:00 ~ 15:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1237-245] バイオメカニクス（偶数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-10] バスケットボールスリーポイントシュートにおける力学的エネルギーの有効性

*奥山 幹太[1] (1. 新潟大学)

バスケットボールはバスケットリングにボールを入れて点数を争うという競技の特性上、正確で成功確率の高いシュート動作が重要である。なかでも、３Pシュートは現代のバスケットボールで多用される傾向にあり、「成功確率を高めることはゲームの勝率に大きな影響を及ぼす」という研究もなされている（八板ら、2007）。

　バスケットボールにおいて、中野らはシュート距離と力学的エネルギーの関係性を分析した。その結果、2Pシュートから3Pシュートへと距離が大きくなるにつれて力学的エネルギーが大きくなるということが示唆された（中野ら、2018）。しかし、シュートの成功率と力学的エネルギーとの関係についての先行研究は筆者が探した限り見られなかった。そのためバスケットボールの３Pシュートにおいて、力学的エネルギーの利用の仕方とシュート成功確率が関係しているのではないかと考えた。そこで本研究では、３Pシュートの成功確率に結び付く要因を明らかにするため、力学的エネルギーの利用という観点で３Pシュートフォームを評価した。研究対象者は、N大学男子バスケットボール部とした。事前に３Pシューティングの計測を行い、高い順から5名を熟練者群（skilled group）、低い順から5名を未熟練者群（un-skilled group）とし比較を行った。結果として、熟練者群は前腕部における力学的エネルギーの増大が未熟練者群に比べて大きいことが明らかになった。このことから、前腕部のはたらきがシュートの成功率に関わっている可能性が示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 14:00 ~ 15:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1237-245] バイオメカニクス（偶数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-12] サッカーのキック動作によるボール速度に対する疾走速度の割合における男女差の検討

*服部 あおい[1]、田内 健二[1]、大家 利之[1] (1. 中京大学)

【緒言】
　女子サッカーが男子と比較して「スピード感に欠ける」とされる要因の一つに，ボール速度や選手の移動速度の違いが挙げられる．これらは，筋力や疾走能力の性差に加え，男女で同一のボール規格を使用していることも影響していると考えられる．つまり，女子選手は相対的に重いボールを扱うため，キックによるボール速度が低下し，それに合わせて移動速度も抑えられている可能性がある．そこで本研究では，キック動作によるボール速度に対する疾走速度の割合を男女間で比較し，女子選手の移動速度がボール速度に影響を受けているか否かを検討することを目的とした．
【方法】
　対象者は大学生の女子21名,男子22名とし，実験試技としてスタンディングスタートからの30m全力疾走（30m走），5m先の小ゴールへ最大努力でのインサイドキック，および５m先の中ゴールへ最大努力でのインステップキックを行わせた．ボールは日本サッカー協会公認5号球（molten社製，430g）を使用した．30m走は，疾走時間から平均疾走速度を，各キック動作は映像分析によってボール速度をそれぞれ算出し，速度比を算出した．
【結果】
　30m平均疾走速度，および各キック動作によるボール速度は，女子選手が男子選手と比較して有意に低値を示した．また，ボール速度に対する疾走速度の割合は，男女間に有意差は認められなかった．詳細については，ポスター発表当日に報告する．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 14:00 ~ 15:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1237-245] バイオメカニクス（偶数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-14] 走幅跳におけるテイクオフゾーンの導入が助走、踏み切り動作に与える影響

*木戸 陽介[1]、北村 瑞望[1]、小林 史明[1]、大塚 光雄[1] (1. 日本体育大学)

走幅跳の現行のルール（以下，現行ルール）では，踏み切り線を超えた無効試技をする選手が多い背景から，近年，決められた区間であればどこで踏み切っても有効試技となるテイクオフゾーンを設ける新しいルールがワールドアスレティクスにて検討されている．本研究の目的は，走幅跳においてテイクオフゾーンを導入したルール（以下，検討ルール）が，助走、踏み切り動作に与える影響を明らかにすることであった．被験者は，走幅跳または三段跳を専門種目とする男子大学生10名であった．測定試技は，現行のルール下，検討ルール下での走幅跳をそれぞれ3回ずつ実施した．検討ルールでは，従来の踏み切り板を中心に前後1.25m（全長2.5m）のテイクオフゾーンを設け，被験者に対してそのゾーン内であればどこで踏み切ってもよいと指示し，踏み切り足のつま先位置から着地点までの有効跳躍距離を跳躍パフォーマンスとして評価した．各ルール下で最も有効跳躍距離が高かった試技を動作分析の対象とした．2台のハイスピードカメラを用いて助走の後半局面、踏み切り局面を撮影し，OpenPoseで身体部分の座標位置を取得し，MATLABにて動作解析を行った．その結果，検討ルール下での有効跳躍距離（6.41±0.28m）と現行ルール下での値（6.43± 0.22m）との間で有意な差はないことが明らかとなった．一方，検討ルール下での助走最後の一歩のストライド長（2.19± 0.17m）は，従来ルール下での値（2.08± 0.20m）よりも有意に長かった．しかし，検討ルール下での最大助走速度， 踏み切り離地時の重心水平速度， 踏み切り角度と現行ルール下での値との間で有意な差はみられなかった．本研究の成果は，今後の走り幅跳のルール改正に向けた科学的資料として有用であり，特に無効試技を減少するという点で，検討ルールを導入する意義が期待された.

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 14:00 ~ 15:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1237-245] バイオメカニクス（偶数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-16] 柔道「内股」を身体合成重心の鉛直方向変位からみる

*池田 希[1]、西尾 悠介[2]、宮崎 誠司[3] (1. いけだ接骨院、2. 日本体育大学大学院、3. 東海大学)

【背景】現代柔道において多様な選手が使用している内股であるが、体幹部の前傾と片脚立ちになるという技術特性ゆえ、非常に高度な技術であると考えられる。本研究では内股指導への一助を目的に、柔道熟練者がどのような重心で技を施しているのか、内股の身体合成重心（以下、COGとする）の測定から動作の特徴について検討した。
【対象および方法】対象は柔道経験10年以上の柔道熟練者8名とし、試技は柔道の「内股」の投込を受が静止した状態から行った。また、軽量級群と重量級群に分けて受の相手を選択した。被験者に計測用の反射マーカーを46 点貼付し、光学式赤外線カメラ10台で撮影を行い、光学式モーションキャプチャシステムを用いて記録した。カメラのシャッタースピードは1/500sec、フレームレートは250fpsとした。分析範囲は刈脚離地から受身接地までとし、試技全体を100%に規格化した。撮影から得られたデータより、被験者全員のCOG中央値および標準偏差を算出し検討を行った。
【結果および考察】COG経時的変化ではまず上昇しその後下降、最後に上昇という動作をなしていた。相手から離れた位置から、一歩目の刈脚接地に向けて上体を起こす動作で上昇、その後二歩目の軸脚着地から体幹部の前傾という動作によって下降し、その後刈脚を上げるという跳ね上げ動作によって、相手を投げる際に上昇していると考えられる。内股が大腿背面で相手を跳ね上げて投げるということを前提として、刈脚を大きく上げることで相手を投げることを可能としていることがわかる。しかし体幹部の前傾と片脚立ちで刈脚を大きく上げるという跳ね上げのフォームは、近年問題視されているような頭突っ込み（Head Dive）に繋がる形でもある。刈脚を上げた際の体幹部と軸脚のバランスを鍛えることが、内股の安全指導と技術発達に繋がると考えられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 14:00 ~ 15:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／バイオメカニクス

[3b1237-245] バイオメカニクス（偶数演題）／ポスター発表

[05バ-ポ-18] トランポリン競技の後方伸身2回宙返り3回捻り動作における踏切局面中の角運動量が滞空時間に及ぼす影響

*岸 凌大[1]、山口 雄大[1]、和田 直樹[1]、山崎 博和[1]、西山 哲成[1] (1. 日本体育大学)

トランポリン競技においてTスコア（演技中の滞空時間得点）はトータルスコアと高い相関を示す。さらに滞空時間が長いことは高難度の技の実施や演技の見栄えにも影響することが報告されており、重要なパフォーマンス要素である。滞空時間は一般に離地速度の大きさによって決まり、これは踏切中に得られるトランポリンベッドの垂直反力力積（以下：力積）に比例する。また、空中での宙返りや捻りに必要な角運動量は踏切中に発生させる必要がある。本研究では、後方伸身2回宙返り3回捻り動作を対象に、踏切中の角運動量と離地速度に強く影響する力積との関係を調べた。国内トップレベルの男子トランポリン競技選手8名を対象とし、3次元モーションキャプチャ（Arqus 5, Qualisys社）を用いて動作を解析した。得られた3次元座標データを用いて、身体重心の離地速度、力積、および全身の角運動量（宙返り、側方回転、捻り）を算出した。Spearmanの順位相関係数を用いて各変数間の相関関係を調べた。離地速度（8.1±0.3m/s）と力積（8.2±0.3Ns）の間に有意な正の相関（ρ=1.000）が認められた。一方で、力積と宙返り角運動量（踏切中：381.0±18.1 kgm^2/s、着地時：258.2±19.0kgm^2/s、離地時：379.8±18.4 kgm^2/s）、および捻り角運動量（離地時：35.5±16.9 kgm^2/s）との間にはいずれも有意な負の相関が認められた（ρ=-0.810、p=0.015；ρ=-0.738、p=0.037；ρ=-0.905、p=0.002；ρ=-0.714、p=0.047）。踏切中の力積が大きいほど離地速度が高まり滞空時間は長くなるが、角運動量の発生が大きい場合には力積が小さくなり、滞空時間を減少させると考えられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：運動生理学

2025年8月29日(金) 14:00 ~ 15:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／運動生理学

[3b1246-250] 運動生理学（偶数演題）／ポスター発表

[04生-ポ-02]

Effects of Injury of College Athletes on Training Participation Motivation and Exercise Commitment in the COVID-19 Situation

*KO GIHYUN[1]、LEE JOONHEE[1]、OH CHAEYUN[1]、JANG DEOKJIN[1] (1. Kyung Hee Univ.)

[04生-ポ-04]

スパルタンレースに参加する選手の体力の検討

*吉村 真美[1]、瀧本 未来[2] (1. 豊田工業大学、2. 鈴鹿医療科学大学)

[04生-ポ-06]

鍛錬者と非鍛錬者における上肢ウェイトトレーニング後の筋痛の強度の比較

*李 忠林[1]、山田 孝禎[2]、武 可[3] (1. 井岡山大学、2. 福井大学、3. 福井工業大学)

[04生-ポ-08]

空気圧による加圧・減圧の繰り返しが下肢コンディショニングに及ぼす影響

*新井 彩[1]、笹壁 和佳奈[2]、福岡 義之[1] (1. 同志社大学、2. ミューラージャパン株式会社)

[04生-ポ-10]

運動誘発性筋損傷後のアイシングが卵胞期女性の炎症反応に与える影響

*舟喜 晶子[1]、須永 美歌子[2] (1. 帝京科学大学、2. 日本体育大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：運動生理学

2025年8月29日(金) 14:00 ~ 15:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／運動生理学

[3b1246-250] 運動生理学（偶数演題）／ポスター発表

[04生-ポ-02] Effects of Injury of College Athletes on Training Participation Motivation and Exercise Commitment in the COVID-19 Situation

*KO GIHYUN[1]、LEE JOONHEE[1]、OH CHAEYUN[1]、JANG DEOKJIN[1] (1. Kyung Hee Univ.)

Purpose: The purpose of this study is to analyze injury-related psychological factors, participation motivation, and exercise commitment according to demographic characteristics to examine the association between those variables on the effects of injury occurrence.
Method: The participants were selected collegiate athletes registered in 2021 Korea Sports Council and 266 college athletes nationwide were participated in this study using purposive sampling among nonprobability sampling methods. A total of 336 surveys were distributed and 307 surveys were retrieved. The final 266 participants were used for the actual analysis with the exclusion of 41 copies without any injury experience. For data processing, the following results were obtained as a result of analysis using frequency analysis, validity and reliability, factor analysis for verification, Mann-Whitney Tests, t-test, one-way ANOVA, correlation analysis, and multiple regression analysis.
Result: First, there were significant differences in grade, sports event, time of injury, training time om injury psychology, training participation motivation, and exercise immersion. Second, it was found that it had significant effects on the intrinsic motivation of training participation, exercise lethargy, extrinsic motivation, and differences on leadership avoidance and exercise lethargy. Third, it was found that anxiety and worry had a significant effect on cognitive immersion on behavior immersion. Fourth, it was found that extrinsic motivation had significant effects on cognitive and behavioral commitment of exercise commitment.
Conclusion: Combining the above results, it was found that the injury-related psychology of collegiate athletes had significant effects on training participation motivation and exercise commitment.
Key words: COVID-19, Injury Psychology, Sport Injury, Training Participation Motivation, Exercise Commitment.

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：運動生理学

2025年8月29日(金) 14:00 ~ 15:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／運動生理学

[3b1246-250] 運動生理学（偶数演題）／ポスター発表

[04生-ポ-04] スパルタンレースに参加する選手の体力の検討

*吉村 真美[1]、瀧本 未来[2] (1. 豊田工業大学、2. 鈴鹿医療科学大学)

スパルタンレースは世界40か国・年間170レースが開催されている世界最大級の障害物レースと言われている。開催場所によっては障害物をクリアするだけでなく坂を上ったり下ったりしないといけないため全身の筋力や持久力も必要となってくる。そこで本研究はスパルタンレース新潟大会に出場する一般男性の体力について検討した。被験者はスパルタンレース新潟大会のビーストに出場した男性9名とした。身体組成は身長、体重、体脂肪量、筋肉量、BMIの測定を行った。筋力は等速性脚筋力計を用いて異なる2つの角速度で左右の肩関節、肘関節、股関節、膝関節、足関節の伸展・屈曲を測定した。最大無酸素パワーはそれぞれ異なる3つの負荷で5〜10秒間全力で腕クランキングテストおよび脚ペダリングテストを行った。30秒パワーはそれぞれ1つの負荷で30秒間の腕クランキングおよび脚ペダリングを全力で行わせた。ジャンプは腕振りあり（CMJA）と腕振りなしのカウンタームーブメントジャンプ（CMJ）を測定した。また20mシャトルラン、5分間バーピーも測定し、レース後には各被験者の障害物の成功数を記録した。結果として身長は172.9±4.8cm、体重は63.9±7.1kg、BMIは21.4±2.3、体脂肪率は14.3±4.1%、筋肉量は51.9±5.3kgであった。CMJAは46.2±7.1cm、CMJは39.7±7.0cm、5分間バーピーは71±9回、20mシャトルランは109±13回であった。筋力、腕および脚の最大パワー、30秒パワーの結果はポスターに記載している。大会では壁を越えたり、重い物を持って運んだりするような障害物もあり、特に雲梯のようにぶら下がって移動する障害物の成功率が低いことから自重系種目を強化することがより多くの障害物の成功に関する重要な要素の1つと考えられる。今後は障害物の成功数と体力の関係についても検討を行う。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：運動生理学

2025年8月29日(金) 14:00 ~ 15:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／運動生理学

[3b1246-250] 運動生理学（偶数演題）／ポスター発表

[04生-ポ-06] 鍛錬者と非鍛錬者における上肢ウェイトトレーニング後の筋痛の強度の比較

*李 忠林[1]、山田 孝禎[2]、武 可[3] (1. 井岡山大学、2. 福井大学、3. 福井工業大学)

【背景】筋痛は、トレーニングの持続性と効率的な成果を得る上で重要な要素である。非鍛錬者は筋痛に対処できず、トレーニングから離脱するケースが報告されている。【目的】本研究では，上肢ウェイトトレーニング後の筋痛の強度における鍛錬者と非鍛錬者の比較を行うことを目的とした．【方法】健康な男子学生10名のうち，途中で離脱した1名を除く9人を非鍛錬者群とし，週5日以上普段からトレーニングを実施している男子学生10名を鍛錬者群として実験を行った．全対象者の利き手側の上腕二頭筋群に対し以下の手順にて運動負荷条件を実施した．まず，被験者の最大挙上重量（1 RM ）を測定し，1 RM の85%に相当する重量のダンベルを肘屈曲位から肘伸展位までコンセントレーション・カールを実施した．1セットあたりの目標レップ数は6回とし，最大6セット実施した．ただし，途中で継続が困難になった場合は，可能な限り実施できた最大限のセット数までとした．セット間の休息時間の長さは3分間に設定した．【結果】運動直後から96時間後までの上腕二頭筋の筋痛の程度は意な交互作用が認められた．多重比較検定の結果，運動直後の筋痛の程度は，鍛錬群と非鍛錬群の間に有意差が認められ，鍛錬群の方が痛みは大きかった．また，鍛錬群の筋痛の程度は，96時間後が運動直後および24時間後，48時間後よりも有意に低下し，運動直後にピークに達したのに対し，非鍛錬者条件の筋痛の程度は，24時間後～72時間後が運動直後よりも有意に高く，96時間後は24時間後および48時間後よりも有意に低かった．【結論】上肢ウェイトトレーニング後，運動直後の急性的な筋痛の強度は，鍛錬者が非鍛錬者よりも高い．一方，24 時間後のDOMSの強度は、鍛錬者の方が非鍛錬者よりも低いと判断した．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：運動生理学

2025年8月29日(金) 14:00 ~ 15:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／運動生理学

[3b1246-250] 運動生理学（偶数演題）／ポスター発表

[04生-ポ-08] 空気圧による加圧・減圧の繰り返しが下肢コンディショニングに及ぼす影響

*新井 彩[1]、笹壁 和佳奈[2]、福岡 義之[1] (1. 同志社大学、2. ミューラージャパン株式会社)

本研究では空気を用いて筋に圧力をかけるコンディショニング装置を用いて，下肢および臀部・腰部の筋群における血流改善や柔軟性等に与える影響を検証し，アスリートのセルフコンディショニングや一般的な日常生活上のコンディショニングとして空気圧を用いた方法を検討するための基礎的知見を得ることを目的とした．被験者は，競技的・特異的なスポーツトレーニングを日常的に行っていない健常成人女性９名とし，実験時に下肢に怪我等による痛みがない者を選定した．実験に用いた空気圧装置（Recovery Care REVIVE，ミューラー社製）は下肢全体を覆い，足部－下腿－大腿と順に空気圧が高まり，全チャンバーに空気が入り全体が設定圧（最低血圧＋10mmHgに設定）に達すると圧力が一気に低下するサイクルが繰り返されるものであった．本研究では仰臥位にて30分間の試技を行い，試技中は近赤外線分光法（NIRS）を用いて下腿筋内酸素動態および5分毎の血圧および脈拍を測定した．試技の前後に，下腿・大腿の周径，体温およびサーモグラフィーの測定，柔軟性測定を行った．　試技の前後で，大腿部の周径は，大腿長の50%位置において有意に周径が減少したが，25%および75%の起始・停止部に近い部位では変化は観察されなかった．下腿部では，腓腹筋筋腹およびヒラメ筋筋腹で，有意に周径が減少した．また，長座体前屈および仰臥位での股関節伸展角度を用いた柔軟性のスコアは向上したが，足関節背屈には変化は見られなかった．試技中の下腿筋内の酸素飽和度（STO2）は，圧力が上がるにつれて緩やかに低下し，リリース直後に一気に上昇する様子が繰り返し観察された．本学会大会では，これらの時系列データを中心に詳細な変化ついて発表する．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：運動生理学

2025年8月29日(金) 14:00 ~ 15:00 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／運動生理学

[3b1246-250] 運動生理学（偶数演題）／ポスター発表

[04生-ポ-10] 運動誘発性筋損傷後のアイシングが卵胞期女性の炎症反応に与える影響

*舟喜 晶子[1]、須永 美歌子[2] (1. 帝京科学大学、2. 日本体育大学)

【背景】月経周期は運動誘発性筋損傷後の炎症反応に影響を与え、我々はエストラジオール(E2)およびプロゲステロン(P4)濃度が低い卵胞期は黄体期と比較し、伸張性運動後の好中球数の変化率が高いことを明らかにした(Funaki A et al. 2022)。一般に炎症を抑制するための対策としてアイシングが用いられているが、月経周期に伴うコンデションの変化に対する効果は明らかになっていない。【目的】卵胞期の女性における運動誘発性筋損傷後のアイシングが炎症反応に与える影響について明らかにすることを目的とした。【方法】運動習慣のない卵胞期の女性16名を対象とし、非利き腕上腕屈筋群の伸張性運動を6回×10セット行った。運動終了後、15℃(冷却群8名)または室温(25℃: 対照群8名)のPhase change material(PCM)を上腕前面の皮膚に3時間当てた。皮膚温を運動前、運動直後、運動45分、1時間半、2時間15分、3時間、4時間、48時間、96時間後に測定した。運動前、運動4、48、96時間後に採血を行い、運動前の血清E2、P4濃度および運動前、運動4、48、96時間後の血清クレアチンキナーゼ(CK)活性、白血球数、白血球像を測定した。【結果】皮膚温は両群とも運動前と比べ運動直後に増加し、アイシング中(運動45分から3時間後まで)の平均皮膚温は対照群(33.8±0.5℃)と比較し冷却群(22.1±0.9℃)で低値を示した($p<0.05$)。運動前の血清E2およびP4濃度は両群間に差は認められなかった。CK活性は両群とも運動前と比較し運動96時間後に増加した($p<0.05$)。好中球数は冷却群において運動4時間から48時間後に低下した($p<0.05$)。【結論】15℃のPCMによるアイシングは卵胞期の女性における運動誘発性筋損傷48時間後の好中球数を減少させる可能性が示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-02]

女子陸上長距離種目の指導者に向けたコーチング法の検討

女子長距離選手の月経状態に着目して

*黒川 光[1]、杉田 正明[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学　体育学部)

[09コ-ポ-04]

トレーニング日誌の記述情報と心拍変動による自律神経コンディションとの関係

陸上競技女子七種競技者を対象として

*伊藤 明子[1,2]、木越 清信[3] (1. 株式会社セレスポ、2. 筑波大学大学院 人間総合科学学術院、3. 筑波大学)

[09コ-ポ-06]

女子投てき競技における競技力向上に寄与する体力特性の探索的検討

*中西 啄真[1]、佐藤 大典[2]、熊﨑 敏真[3] (1. 大阪体育大学、2. 大阪体育大学スポーツ科学センター、3. 大阪体育大学スポーツ科学部)

[09コ-ポ-08]

女子円盤投選手の円盤初速を高める動作の指導法の検討

*山下 直紀[1]、杉田 正明[2] (1. 日本体育大学大学院体育学研究科、2. 日本体育大学　体育学部)

[09コ-ポ-10]

陸上競技400m走におけるアスリートのタイプを考慮した最適なペース配分の究明とコーチングモデルの構築

*山元 康平[1] (1. 福井工業大学)

[09コ-ポ-12]

パラスポーツコーチの成長に関する体系化への試み

*橋口 泰一[1]、伊藤 雅充[2]、伊佐野 龍司[1]、大嶽 真人[1] (1. 日本大学、2. 日本体育大学)

[09コ-ポ-14]

保守的コーチングからの脱却プロセス

大学部活動若手指導者のコーチングのゆらぎ

*東海林 祐子[1]、加藤 亮介[2]、藤本 元[2]、會田 宏[2] (1. 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科、2. 筑波大学 体育系)

[09コ-ポ-16]

パルクール指導における動向と発生運動学的アプローチの可能性

*中村 真由美[1] (1. 清泉大学短期大学部)

[09コ-ポ-18]

３Dダンス学習支援教材の作成

第２版サンプルコンテンツを用いた試用実験と課題

*鈴木 純[1]、中川 源洋[2] (1. 宮城教育大学、2. 株式会社ニコン)

[09コ-ポ-20]

垂直跳びの沈み込み姿勢における動感

*豊嶋 陵司[1] (1. 愛知淑徳大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

[09コ-ポ-22]
大学女子ラクロスにおけるシュート精度維持可能なシュート速度域
*上北 江里華[1]、吉村 颯馬[1]、山下 直之[2] (1. 京都工芸繊維大学大学院、2. 京都工芸繊維大学)

[09コ-ポ-24]
Velocity-based trainingにおけるエキセントリックおよびコンセントリック局面の速度変化
スクワットジャンプを用いた経時的観察から
*平良 怜南[1]、砂川 力也[1,2] (1. 琉球大学大学院地域共創研究科、2. 琉球大学)

[09コ-ポ-26]
野球の打撃と走塁が組み合わさる運動において素早い切り替えによる高いパフォーマンスを発揮する選手の特徴
*大山 栞爾[1]、前田 明[2] (1. 鹿屋体育大学 大学院、2. 鹿屋体育大学)

[09コ-ポ-28]
大学生テニス選手のボレーにおける下肢の動作特性解析
*勝見 康平[1]、富岡 咲紀[1]、来田 宣幸[1]、幸田 仁志[1] (1. 京都工芸繊維大学大学院 生体行動学研究室)

[09コ-ポ-30]
大学女子一流ソフトテニス選手における切り返し動作の特徴
左右差に着目して
*堀内 健太郎[1]、西山 哲成[1]、篠原 秀典[1]、谷口 耕輔[1]、小黒 喬史[1]、和田 直樹[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

[09コ-ポ-32]
アマチュアボクシング選手の疲労に伴うパンチパフォーマンスの変化
*木本 慎也[1]、前田 明[1] (1. 鹿屋体育大学)

[09コ-ポ-34]
国立スポーツ科学センターにおけるフィットネスチェックの活用実態に関する検証
*野澤 巧[1]、後藤 晴彦[1]、沼津 直樹[1]、松林 武生[1] (1. ハイパフォーマンススポーツセンター国立スポーツ科学センター)

[09コ-ポ-36]
卓球サービスに対するレシーバーの視線の特徴
*浦 侑穂[1]、吉田 和人[2] (1. 順天堂大学大学院 スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学大学院)

[09コ-ポ-38]
同一競技における国内一流選手の体力からみたJOCエリートアカデミー選手の体力の比較
*沼津 直樹[1]、谷村 祐子[1]、山下 大地[1]、小口 貴久[2]、松林 武生[1] (1. 国立スポーツ科学センター、2. 公益財団法人日本オリンピック委員会)

[09コ-ポ-40]
大学生ラグビー選手におけるリバウンドジャンプパフォーマンスに注意方略が及ぼす影響
ポジションの違いに着目して
*古橋 侑季[1]、上岡 優二郎[2]、村冨 浩太朗[3,5]、吉田 拓矢[4]、谷川 聡[5]、前村 公彦[5] (1. 法政大学、2. 浦安D-Rocks、3. 順天堂大学、4. 国立スポーツ科学センター、5. 筑波大学)

[09コ-ポ-42]
大学女子サッカー選手を対象としたスプリントトレーニングの有効性の検討に関する事例的研究
大学女子サッカー選手におけるスプリントトレーニングに関する事例的研究
*温水 鴻介[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

[09コ-ポ-44]
日本における男女ラクロスのルールの違い
*丸山 伸也[1]、大橋 信行[2] (1. 中央大学、2. 帝京大学)

[09コ-ポ-46]
バスケットボールのゲームにおける状況認知等の基礎的知識と状況判断能力との関連による速攻場面の類型化
*八板 昭仁、青柳 領

[09コ-ポ-48]
イングランド男女サッカーリーグにおけるプレー様相の比較分析
*鈴木 健介[1] (1. 国際武道大学)

[09コ-ポ-50]
15人制ラグビーの防御局面に関する戦術研究
N大学にける実践的検証
*廣瀬 恒平[1]、髙橋 仁大[2] (1. 尚美学園大学、2. 鹿屋体育大学)

[09コ-ポ-52]
ある大学の剣道部所属学生の心理的傾向に基づく指導の検討
*玉田 理沙子[1] (1. 志學館大学)

[09コ-ポ-54]
女子バスケットボールのメンバーチェンジにおける個別最適な心理状態とその類型
*酒井 佑[1,3]、谷口 ちゆき[2]、雨宮 怜[3]、坂入 洋右[4] (1. 筑波大学　人間総合科学学術院　体育科学学位プログラム、2. 清泉女学院中学高等学校、3. 筑波大学 体育系、4. 常葉大学 教育学部)

[09コ-ポ-56]
JOCエリートアカデミー事業が競技力に及ぼす影響
*小口 貴久[1]、江田 香織[2]、谷村 祐子[3]、沼津 直樹[3]、大越 光介[4]、友利 杏奈[3] (1. 日本オリンピック委員会、2. 東洋大学、3. 国立スポーツ科学センター、4. 順天堂大学スポーツ健康科学部)

[09コ-ポ-58]
大学ラグビーにおける競技人口の推移
関西大学ラグビーリーグを対象として
*青木 敦英[1]、溝畑 潤[2] (1. 芦屋大学、2. 関西学院大学)

[09コ-ポ-60]
日本におけるサッカー女性審判員の男子トップカテゴリー参画に関する一考察
*小泉 朝香[1]、竪石 亜也子[2]、山口 香[3] (1. 株式会社トリデンテ、2. アデコ株式会社、3. 筑波大学)

[09コ-ポ-62]
志向倫理に基づくスポーツ・インテグリティ教材「Coach me」の開発と評価
ジュニアアスリートを対象として
*安永 太地[1]、藤井 基貴[2] (1. 早稲田大学スポーツ科学学術院、2. 静岡大学教育学部)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-02] 女子陸上長距離種目の指導者に向けたコーチング法の検討
女子長距離選手の月経状態に着目して

*黒川 光[1]、杉田 正明[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学　体育学部)

陸上競技の長距離種目は練習も試合も運動時間が長く、エネルギーを多く消耗するため、コンディションによって好不調の違いが明瞭に表れやすい種目である。長距離ランナーの身体組成は競技力に大きく影響しており、特に女子長距離ランナーは痩身で低体重・低体脂肪の体格を望む傾向があることから、減量等による体重管理を行うことで、慢性的なエネルギーおよび栄養素の過不足となり、無月経や月経困難症、骨粗しょう症、摂食障害などの女性アスリートの三主徴を有することが報告されている。女性は月経周期を有し、それに伴い生じる生理的・心理的な変化は、コンディション維持を難しくする一因となっているが、女性としての健康的な身体を維持するための重要な役割を担っている。しかし、陸上競技においては月経がないことは自分が頑張っている証拠だと認識するという誤った固定観念を持つ選手の実状が報告されている。また、日本陸上競技連盟の「競技者育成指針」においては、中長期的な視点での競技者育成の重要性が広く認識されていないことが懸念されている。以上のことから、競技力の向上のみならず、競技者の長期的な健康、育成を考慮した指導が求められていると考えられる。日本のトップレベルの選手および指導者の月経に関する様々な実態から課題を明らかにすることで、中長期的な視点に目を向けた指導の実現につながると考えた。そこで本研究では、高校、大学、実業団に所属する女子長距離選手および指導者を対象に月経に関するアンケート調査を実施し、女子長距離選手および指導者の実態を明らかにすることで、指導者に向けた月経問題に対するコーチング方法の知見を得ることを目的とした。対象者は、2024年度の駅伝において、全国大会、全日本大会に出場したチームに所属する高校生、大学生、実業団選手およびその指導者とし、Webアンケートを実施した。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-04] トレーニング日誌の記述情報と心拍変動による自律神経コンディションとの関係

陸上競技女子七種競技者を対象として

*伊藤 明子[1,2]、木越 清信[3] (1. 株式会社セレスポ、2. 筑波大学大学院 人間総合科学学術院、3. 筑波大学)

トレーニング日誌には、練習内容に加え、体調や日々の出来事、それに対する主観的な反応が「生きた言葉」で綴られている。しかし自由記述情報は、心拍変動（HRV）のような定量的な指標と結びつけるのが難しく、従来の指標とは分離して扱われてきた。本研究では、自然言語処理分野で用いられる代表的なテキスト指標を用いてトレーニング日誌の自由記述情報を定量化することで、コンディション評価におけるトレーニング日誌の記述情報の有用性を検証する。

本研究では、七種競技者1名を対象に、365日分のトレーニング日誌を収集し、テキスト指標（文長・トーン・可読性）を算出した。コンディション指標には、副交感神経活動を反映する指標として競技者に用いられている、隣接RR間隔の差の二乗平均平方根（RMSSD）を使用した。具体的には、従属変数に翌日のRMSSDの変化量を、独立変数に文長、トーン、可読性を含めた。さらに、RMSSDに影響を及ぼす他の要因をコントロールする目的で、前日のRMSSD、直近7日間のCV RMSSD、トレーニングの有無、Session RPE、および主観的指標（睡眠・疲労・ストレス・筋痛）をコントロール変数に含めた。全ての変数が取得可能な255観測値を用いて重回帰分析を実施し、将来コンディションとトレーニング日誌の自由記述情報の関係性を定量的に評価することを試みた。

回帰分析の結果、文長とトーンについては有意な結果は得られなかったものの、可読性スコアは10%水準で負の関連を示し、可読性が高い日誌の翌日はRMSSDが低下する傾向がみられた。本研究の結果は、日誌の記述方法の違いが、コンディションに影響を及ぼすような心身の状態を反映することを示唆するものである。今後は、分析手法の精緻化を図りつつ、対象者を拡大し、個々の競技者に特有の反応を捉えることで、コーチング現場で応用可能な共通した指標の抽出を目指す。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-06] 女子投てき競技における競技力向上に寄与する体力特性の探索的検討

*中西 啄真[1]、佐藤 大典[2]、熊﨑 敏真[3] (1. 大阪体育大学、2. 大阪体育大学スポーツ科学センター、3. 大阪体育大学スポーツ科学部)

投てき競技は，爆発的な筋力や俊敏性，スピードなど多様な体力要素が求められる競技である．これまで男子選手を対象とした研究では，コントロールテストと競技成績の関係性が報告されているが，女子選手に焦点を当てた研究は限定的である．本研究では，大学女子投てき選手を対象に，過去20年間に渡り実施・蓄積してきたコントロールテストの成績と競技記録との関係を検討し，競技力向上に寄与する体力特性の解明を目的とした．【方法】対象は，陸上部に所属経験を有する大学女子投てき選手126名 (砲丸投げ：28名，円盤投げ：26名，ハンマー投げ：15名，やり投げ57名)とした．対象者は砲丸・ハンマー投げ群，円盤投げ群，やり投げ群の3群に分類した．筆者が所属する大学では1996年以降，年に複数回，立ち両足三段跳び・立ち五段跳び・20m加速走・前方砲丸投げ・後方砲丸投げの各コントロールテストを実施してきた．各選手のコントロールテスト前後に行われた競技記録については，2025年IAAF scoring table (IAAFスコア)を用いて得点化し，その得点と各コントロールテストとの関連性についてピアソンの積率相関係数を用いて分析した．【結果】すべての群において，IAAFスコアと有意な正の相関関係にあった項目は砲丸後方投げのみであり ($r \leq 0.46$; $p \leq 0.02$)，IAAFスコアと他のテスト項目との関連は限定的であった．また，やり投げ群 ($r = 0.13$; $p = 0.33$)を除き，IAAFスコアと砲丸前方投げ ($r \leq 0.60$; $p < 0.01$)との間に有意な正の相関関係があった．【結論】女子投てき選手において，砲丸後方投げはすべての種目群で競技力と関係し得る体力指標であることが示された．また，砲丸前方投げも一部の種目群で有効であり，体幹および上肢のパワーが競技成績に寄与する可能性が示唆された．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-08] 女子円盤投選手の円盤初速を高める動作の指導法の検討

*山下 直紀[1]、杉田 正明[2] (1. 日本体育大学大学院体育学研究科、2. 日本体育大学　体育学部)

円盤初速は円盤投の記録において最も強く影響する要因であり，その獲得にはリリース局面までの体幹を中心とした動作が重要である． そこで本研究では，女子円盤投選手22名の公認競技会（2021年5月，2022年9月，2023年5月および10月）における試技を2台のデジタルビデオカメラを用いて撮影し，最も記録の優れていた試技（試技記録46.27±4.97m；範囲：32.05―55.79m）についてデジタイズを行い，身体各部と円盤中心の3次元座標値を取得した．対象者を試技記録に基づき上位群11名（49.99±2.65m）と下位群11名（42.55±3.79m）に分類し，体幹の角度および円盤速度変化量，リリースパラメータについて比較を行った．結果，上位群の選手は下位群の選手よりも投てき動作開始時における体幹の捻転角度が有意に大きく（$p<0.05$），両足支持局面中における円盤速度変化量も有意に大きかった（$p<0.05$）．また，上位群の選手はパワーポジションからリリースかけて体幹を後傾から前傾へと起こす動作が確認された一方，下位群の選手は体幹の起こしが不十分で体幹をより後傾させた状態でリリースを行っていた（$p<0.05$）．また，下位群の選手は円盤初速の水平成分が小さいこと（$p<0.05$），投射角は大きいこと（$p<0.05$），投射高は低いことが明らかとなった（$p<0.05$）．以上のことから，下位群の選手の動作指導においては円盤を加速させるために動作開始時から体幹の捻り戻しを積極的に行うことを，パワーポジションからリリースにかけては円盤初速の水平成分を獲得しながら高い位置でリリースするために、体幹を投てき方向に引き出しながら投てきすることを留意して指導を行うことが，パフォーマンス向上に重要であることが示唆された．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-10] 陸上競技400m走におけるアスリートのタイプを考慮した最適なペース配分の究明とコーチングモデルの構築

*山元 康平[1] (1. 福井工業大学)

400m走は、男子トップレベルでも45秒前後の時間を要する。そのため、高いパフォーマンスを達成するためには適切なペース配分が重要となる。「どのようなタイプのアスリートが、どのようなペース配分が最適なのか？」という問いは、国内外の400mアスリートおよび指導者にとって古くからの重大な疑問であるが、最適なペース配分の選択方法については明確な回答が示されていないのが現状である。また、アスリートは複数年にわたって多角的なトレーニングを行い、ペース配分についても試行錯誤を重ねるが、「トレーニングによって最適なペース配分が変化していくのか？」についても明らかでない。これらの問を究明するためには、先行研究を整理し、研究モデルを提案することが求められる。これらのことから本研究では、陸上競技400m走におけるアスリートのタイプを考慮した最適なペース配分について究明のための研究モデルおよびコーチングモデルを提案することを目的とした。【方法】文献研究の方法をとり、陸上競技400m走のペース配分に関する国内外の研究を精査し、陸上競技400m走におけるアスリートのタイプを考慮した最適なペース配分について究明のための研究モデルについて考察するとともに，タイプを考慮したコーチングについて事例的に検討した。【結果・考察】レース分析に関する研究から、世界トップレベルを含む幅広い競技レベルにおいて、多様なレースパターンのタイプが存在することが確認された。研究モデルとして、実験条件において個人に複数のペース配分を試行させる方法および、公式競技会におけるレース分析を継続的に調査する方法が提案された。さらに、アスリートのタイプの評価には、スピード持久力の評価法の確立が必要であることが示唆された。当日は、これらを踏まえた事例的データについても報告する。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-12] パラスポーツコーチの成長に関する体系化への試み

*橋口 泰一[1]、伊藤 雅充[2]、伊佐野 龍司[1]、大嶽 真人[1] (1. 日本大学、2. 日本体育大学)

パラスポーツはリハビリからハイパフォーマンスまで多様なレベルで展開されており、実施率向上には人的環境の整備が鍵となる。しかし、コーチに求められるスキルや育成方策は明確でなく、障害や競技特性を理解する人材の育成と拡充は、参加促進および競技力向上の両面において喫緊の課題である。カナダやオーストラリアでは、パラスポーツコーチ向けの資格制度が整備され、競技力向上に寄与している（Misener and Darcy, 2014）。特にオーストラリアはブリスベン2032パラリンピックを見据えた養成事業を進めており、物理的・社会的障壁の克服策も示されている。一方、日本では歴史的背景を踏まえつつ、コーチや支援人材の量的・質的拡充が依然として課題とされている。こうした課題は，日本のパラスポーツに関わるコーチや支援人材の成長過程が明らかにされていないことに起因していると考えられる。以上の問題背景を踏まえ，本研究はパラスポーツを対象にしたコーチの成長の体系化を試みることを目的とした。本研究を推進することで日本型のコーチ養成体系の構築に向けた基盤となることが期待される。上述の目的を達成するために，国内外の熟達したパラスポーツコーチが有する実践知に内包されたスキルや指導観、成長プロセスを半構造化インタビュー（指導観・経験・具体的な取り組み等）によって抽出した。得られたデータと共に支援者の実践知に関する先行研究（橋口ほか，2020；橋口ほか，2022；Isano et al., 2024）を統合し，パラスポーツの指導やコーチ養成に見識を有する共同研究者間の協議によって、パラスポーツにおけるコーチの成長過程を体系化した。当該体系のモデル図に、パラスポーツに関わる支援者についてもコーチの成長を支える重要な位相として位置付けられたことは、スポーツコーチと一線を画すと考えられる。詳細は当日に報告する。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-14] 保守的コーチングからの脱却プロセス

大学部活動若手指導者のコーチングのゆらぎ

*東海林 祐子[1]、加藤 亮介[2]、藤本 元[2]、會田 宏[2] (1. 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科、2. 筑波大学 体育系)

【背景】コーチングには指導者の経験知による従来からの保守的な手法に疑いを持たない「思い込み」が見られることがある．望ましいコーチングに至るまでのプロセスを可視化した「ARAP モデル」（東海林・金子，2013）において，「①迷いのコーチング」には，過去の成功体験や従来手法への盲目的な信奉（例えばヒエラルキーの強制コーチング）がベースにある「保守的コーチング」の側面が含まれている．この「保守的コーチング」を脱却しようと選手とのコミュニケーションを重視しすぎると，チームはコンフォートゾーンに留まり勝利へと導くことが難しくなることが考えられる． 【目的】本研究は指導経験の浅い指導者が，試合の采配や選手起用を通じて生じる「迷いのコーチング」について，どのような過程を経て「保守的コーチング」の脱却へ向かうのかを明らかにすることを目的とした． 【調査方法】調査期間は2025年3月～2025年5月末までの関東学生春季リーグを挟む期間であった．大学男子ハンドボール部に所属する26名(19.69±1.26)を対象に春リーグに向けた「目標設定」と「振り返り」および「チーム内での課題」をリーグ戦前後の2時点で回答を求めた．また指導者の試合の選手起用と采配の背景について，リーグ戦期間中の4回のスタッフミーティングの議事録から検討した． 【結果と考察】リーグ戦前のチーム内課題は「指導者や選手間でのコミュニケーション」が見られたことから，指導者はこれらの課題の解決に向けて選手とのコミュニケーションを図り，選手の特性に応じた起用を心がけていた．それは「保守的コーチング」の脱却へ向かう重要な過程であることがわかった一方で，選手がコンフォートゾーンに停滞してしまう勝利への導きが困難な状態をもたらすことも明らかになった．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-16] パルクール指導における動向と発生運動学的アプローチの可能性

*中村 真由美[1] (1. 清泉大学短期大学部)

近年、パルクールは都市空間を創造的に活用する身体実践として世界的に認知度が高まり、多くのスポーツ実践者の注目を集めるとともに教育現場への導入も進んでいる。多様な動きを包含するパルクールは総合的な身体能力の向上に寄与する可能性があり、現代社会における身体能力低下という課題に対する一つの解決策となりうる。日本でもパルクールを実践・指導するコミュニティが増加している。しかし、パルクールの指導において重要な課題が存在する。既存のパルクール研究は主にバイオメカニクス的分析や社会学的考察に偏っており、体系的な指導法の確立には至っていない。また、危険なイメージが先行し、パルクールに挑戦する者にとっての心理的障壁となっている側面もある。安全かつ効果的な指導法を確立するためには、実践者の運動感覚的世界を内在的に理解し、動きの習得過程を構造化する理論的枠組みが不可欠である。このような課題に対して本研究では、金子明友らの発生運動学を理論的基盤とした分析アプローチに着目する。発生運動学は「動感」「運動感覚能力」「形成位相」などの概念を通じて、実践者がどのように動きを感じ、習得し、発展させていくかを分析する視座を提供する。パルクールにおいても、実践者がどのように環境を捉え、動きのフローを構成しているかを理解することは、指導法確立の核心的課題である。この現象学的基盤を持つスポーツ運動学的アプローチは、外部観察だけでは捉えきれない「動きの感じ」を解明する上で有効性が期待される。本発表の目的は、パルクール研究の動向を整理し、発生運動学的アプローチのパルクール指導への適用可能性とその実践的意義を検討することである。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-18] ３Dダンス学習支援教材の作成
第２版サンプルコンテンツを用いた試用実験と課題

*鈴木 純[1]、中川 源洋[2] (1. 宮城教育大学、2. 株式会社ニコン)

近年では、社会的なダンスブームやSNS等の影響により、ダンス部活動数、部員数の増加が顕著であり、指導や練習環境の課題等も様々存在する。また、近年の部活動では、スマートフォンやタブレットを用いて動画から動きを練習することも当たり前の練習方法の一つとなっていることも本研究にまつわる事前調査で確認された（鈴木、2023）。しかし、動画から動きを習得した場合、平面的な動きの理解と再現になっていることが多く、筆者自身指導者として課題に感じていた。これらの今日的な課題を踏まえ、本研究では、ニコンの３D映像技術Volumetric Videoを用いたダンス学習支援教材を作成し、実験・調査などから本教材の有用性やメリットデメリットを明らかにした上で、部活動の新たなあり方や可能性を提案することを目指している。現段階では、第２版サンプルコンテンツを作成し、それらの一部を用いた試用実験を高校ダンス部２校、大学ダンス部１校で実施した。さらに、コンテンツの改善および本実験に向けて現時点での課題を明確にすることを目的とし、部員および指導者を対象にアンケート調査を実施した。試用実験では、リズム系ステップ、ブレイキンのフットワーク、コンテンポラリーダンスのコンビネーション、ペアリフト等の一部のサンプルコンテンツを用いたが、実験の観察からは、本教材の有用性や可能性はおおむね確認することができた。一方で、ダンス経験の差によって課題が異なったり、デバイスや搭載機能を有効に活用しきれていなかったりするなどの課題も様々浮き彫りとなった。なお、アンケート調査結果の詳細は当日のポスターで発表する。今後はこれまでの実験・調査結果等を踏まえて再びコンテンツの改善を行い、中長期的な導入実験に向かう予定である。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-20] 垂直跳びの沈み込み姿勢における動感

*豊嶋 陵司[1] (1. 愛知淑徳大学)

垂直方向への跳躍は、体力測定のほか、バレーボールやバスケットボールなどの競技場面においても頻繁にみられる基本的な運動である。その跳躍高はパワー発揮能力の指標といえるが、股関節や膝関節の最大屈曲角度などの動作要因も跳躍高に影響するとされている。しかし、跳躍の実施者自身が、動作中の屈曲の程度を正しく認識できているかは不明である。本研究の目的は、カウンタームーブメントジャンプ（CMJ）の沈み込み時における下肢関節について、対象者自身の動感が実際の角度とどの程度一致しているかを明らかにすることとした。

男子大学生を対象に、pre試技としてCMJを1試技行わせた。その後、pre試技で最も沈み込んだ時の姿勢をイメージさせ、体幹部、大腿部、下腿部の3セグメントが2関節で連結した線画を、定規と鉛筆を用いて紙に描画させた。その後、pre試技の映像を確認させたうえで、再度CMJを1試技（post試技）を行った。さらに、post試技の後にも線画を描かせた。pre試技およびpost試技ともに、側方からハイスピードカメラで撮影し、画像解析ソフトを用いて下肢セグメントおよび関節角度を算出した。

対象者の線画における関節角度を分度器を用いて計測し、映像解析によって算出したデータと比較したところ、pre試技において、膝関節角度は20度以上過大評価する対象者がいる一方、30度以上過小評価する対象者も存在した。股関節角度も同様に、30度程度過大評価する場合と過小評価する場合がみられた。映像解析によるデータと線画との差は、post試技において小さくなる傾向がみられた。

以上のことから、垂直跳びの沈み込み姿勢において、実施者自身の動感と実際の状態のズレは個人差が大きいが、映像を用いた観察によってその差は縮められる可能性があることが明らかとなった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-22] 大学女子ラクロスにおけるシュート精度維持可能なシュート速度域

*上北 江里華[1]、吉村 颯馬[1]、山下 直之[2] (1. 京都工芸繊維大学大学院、2. 京都工芸繊維大学)

シュートやパスの球速と精度はトレードオフの関係にある．サッカーや野球選手を対象に球速と精度の関係を検討した研究では，精度を維持できる最大速度域は最大シュート速度の80–90%であったと報告された．しかし，用具を使用してシュートやパスをするラクロス選手では，他の競技選手と同様の速度―精度関係にあるか否かはほとんど検討されていない．本研究はシュート精度を保ちつつより高速のシュートを打つための知見を得るために，女子ラクロス選手のシュート速度と精度の関係を明らかにすることを目的とした．対象者は大学生ラクロス女子選手16名（年齢，20.9 ± 2.2歳；身長，158.3 ± 3.5cm；体重，53.0 ± 4.7kg；体脂肪率，22.8 ± 5.1%；競技歴，2.2 ± 1.5年；競技レベル，2部リーグ）であった．対象者は事前に最大速度を測定した．そして最大速度の70–80%，80–90%，90%以上の各速度域においてゴールの所定の位置を狙い10回シュートし，その成功率からシュート精度を評価した．疲労の影響評価のために実験前後に最大努力で各10回シュートし，その速度の変化から疲労度の影響を評価した．球速はレーダーガンを用いて測定し，全てのシュートはランニングシュートを採用した．実験前後における最大シュート速度に有意差はなかった（p = 0.895）．シュート精度については，最高速度の90%以上でのシュートの成功率（14 ± 15%）が他の速度域の精度（70–80%, 36 ± 21% p ＝ 0.05; 80–90%, 30 ± 24% p ＝ 0.05）と比較して有意に低下した．これらの結果から，ラクロス選手はシュート精度を保ちつつより速いシュートを放つために最大シュート速度が向上するトレーニングが推奨されることが示唆された．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-24] Velocity-based trainingにおけるエキセントリックおよびコンセントリック局面の速度変化

スクワットジャンプを用いた経時的観察から

*平良 怜南[1]、砂川 力也[1,2] (1. 琉球大学大学院地域共創研究科、2. 琉球大学)

本研究は、ジャンプスクワットを用いたVelocity-based trainingにおけるエキセントリック（ECC）およびコンセントリック（CON）局面の速度変化を、トレーニング経過を通じて検討することを目的とした。対象は、運動習慣を有する健常な男子大学生9名とした。トレーニングは速度を基準に重量（1.3〜1.4m/s）と反復回数（VLC15%）を設定し（プリセッションを除く）、週2〜3回、計16回実施した。ジャンプスクワットはストレートバーを肩に担ぎ、最大努力でのジャンプ運動とし、ミクロサイクル（Micro-C）周期でセット数を漸増させた（Micro-C1: 3、 C2: 4、C3: 5）。速度はリニアポジショントランスデューサーで測定した。結果、Micro-Cにおける重量および反復回数は、若干増加したが統計的に有意な変化は示さなかった。CONの平均速度は期間を通じて一定であったのに対し、ECCはMicro-C1よりMicro-C3が有意に高く、セット内の最高速度と最終挙上時の速度についてもECCでMicro-C1よりMicro-C3が有意に高かった。したがって、速度基準のジャンプスクワットにおけるCONの平均速度はトレーニング経過に伴いセット数が増加しても極めて安定した数値を示すことが明らかとなった。さらに、トレーニング終期にはECCの平均速度が向上し、セット数増加に伴うCONの速度低下を補っている可能性が示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-26] 野球の打撃と走塁が組み合わさる運動において素早い切り替えによる高いパフォーマンスを発揮する選手の特徴

*大山 琹爾[1]、前田 明[2] (1. 鹿屋体育大学 大学院、2. 鹿屋体育大学)

野球の攻撃は単に打撃や走塁の運動ではなく、打撃後には1塁へ走塁を行うことから2つの運動は互いに組み合わさった運動であると言える。さらに2つの運動が組み合わさる場合、打撃のフォロースルー局面が走塁への動作に変容している可能性が考えられるが、インパクト以降で打撃と走塁が組み合さる運動について行われた研究は見受けられない。そこで本研究ではインパクト以降を対象とすることで、走塁への変容に伴う身体運動を明らかにし、さらに打撃から走塁への素早い切り替えによって動作時間が短い選手の特徴を明らかにすることを目的とした。大学野球選手右打者13名を対象とし、打撃・走塁条件と打撃条件にて、Inside・Middle・Outsideの3コースで実打を行った。その結果、打撃・走塁条件は打撃条件と比べ3塁側への肩および腰の回旋角度を抑制していることが明らかとなり、また、打撃・走塁条件は打撃条件に比べて、地面反力におけるX axisおよびY axisが有意に高い値を示す区間が認められた。高いパフォーマンスを発揮する選手の特徴として、地面反力の最大値を早期に獲得する選手ほど、走塁への切り替え時間が短い結果が得られた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-28] 大学生テニス選手のボレーにおける下肢の動作特性解析

*勝見 康平[1]、富岡 咲紀[1]、来田 宣幸[1]、幸田 仁志[1] (1. 京都工芸繊維大学大学院 生体行動学研究室)

【緒言】テニスにおいて攻撃的な戦術を考える上でボレーは重要な技術である。正確性やスピードを求めるにあたって、足を踏み込む動作が必要とされている一方で、その動作の特徴は不明な点が多い。そこでフォアボレーとバックボレーにおける下肢の動きに着目し、キネマティクス的視点からその特徴を明らかにすることを目的とした。
【方法】対象者の大学生テニス選手に対して、ミドルボレーをしやすい場所に球出しを行い、打ち出されたボールをターゲットエリアに向かってボレーするよう指示した。3台のビデオカメラ（120fps）でボレー動作を撮影し、Frame-DIAS Ⅴ（Q’s fix社）を用いて3次元DLT法にて反射マーカーをラケットに4ヶ所と大腿部、膝、くるぶし、つま先の計8ヶ所に付け、座標を計測した。フォアボレー、バックボレーともに５試技計測をし、打点時における両足つま先の位置関係、ボールから両足つま先の中点までの距離、大腿部および膝、くるぶしの3点がなす角度を算出した。
【結果および考察】ある対象者において、打点時のボールを原点とした際、フォアボレーの打点時の左足つま先は(X,Y)＝(-0.94±0.09, 0.22±0.12)、右足つま先は(X,Y)＝(-0.54±0.18, -0.46±0.13)となり、右足つま先はX軸方向にばらつきがあった。また同様に、バックボレーの打点時の左足つま先は(X,Y)＝(0.65±0.10, -0.65±0.06)、右足つま先は(X,Y)＝(0.79±0.09, -0.16±0.09)であった。同対象者において、打点時の膝屈曲角度はフォアボレーで116.0±9.9度、バックボレーでは106.8±9.4度であった。打点時のボール位置から両足つま先の中点までの距離は、フォアボレーで0.76±0.10m、バックボレーで0.81±0.03mとなり、フォアボレーでばらつきがあった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-30] 大学女子一流ソフトテニス選手における切り返し動作の特徴
左右差に着目して

*堀内 健太郎[1]、西山 哲成[1]、篠原 秀典[1]、谷口 耕輔[1]、小黒 喬史[1]、和田 直樹[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

テニスは急停止・急加速・方向転換を繰り返す競技であり、中でも切り返し動作は守備対応やポジション修正において重要である。従来は他競技を対象としたバイオメカニクス的研究が多く、女子ソフトテニスのトップ選手に特化した分析は少ない。そこで本研究では、一流女子大学ソフトテニス選手8名（全員右利き）を対象に、mod505テストをハードコートにて実施し、切り返し足ごとに三次元動作解析を行い、身体重心速度や体幹・下肢関節角度の変化を比較することで、パフォーマンス向上に資する知見を得ることを目的とした。

撮影にはマーカーレスモーションキャプチャシステム（Miqus, Qualisys社製）を使用し、切り返し前後の各2歩間を分析区間とした。得られたデータから、身体重心や下肢関節角度を算出し、右足切り返し（R条件）と左足切り返し（L条件）間で対応のあるt検定（有意水準5%）により比較した。

その結果、平均重心速度はR条件（2.65±0.04m/s）がL条件（2.52±0.12m/s）より有意に大きく、R条件の方が切り返し技術に優れていることが示唆された。また、体幹の角度は、切り返し動作中でR条件の方が有意に大きかった。一方、下肢三関節には有意差はなかった。以上より、女子ソフトテニス選手は、R条件において、切り返し時、体幹を軸足側にあまり倒さず、効率的なブレーキと切り返し後の一歩目の加速のための姿勢を作っていることが考えられた。一方で、L条件では、軸足側に体幹が倒れすぎていることが技術的課題であると考えられた。本研究は、女子ソフトテニス選手へのフットワーク指導や競技力向上に資する実践的資料となることが期待される。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-32] アマチュアボクシング選手の疲労に伴うパンチパフォーマンスの変化

*木本 慎也[1]、前田 明[1] (1. 鹿屋体育大学)

アマチュアボクシングは、高強度の運動を断続的に行う競技であり、疲労状態においても高いパフォーマンスを発揮することが求められる。日本ボクシング連盟によると、アマチュアボクシングの判定基準はターゲットエリアへの質の高い打撃の数を重視すると報告している。そのことから、パフォーマンスとして相手に避けられない素早いパンチを疲労状態である試合後半まで維持することが重要であると考えられる。実際、Cheraghi et al.（2014）は、アマチュアボクサーは重いパンチよりも素早いパンチを重視していることを示唆している。しかし、アマチュアボクシングにおける疲労時のパフォーマンスを調査した研究は限られており、とくに身体運動を時系列的に分析した研究は見られない。本研究では、アマチュアボクシング選手の疲労に伴うパンチパフォーマンスの変化を明らかにすることを目的とした。対象者はアマチュアボクシング選手11名とし、まず最大努力でサンドバッグに対して単発パンチ（Pre）を実施した。続いて、3分間の最大努力パンチ試技（3MPT）を行うことで疲労を誘発し、その直後に再び単発パンチ（Post1）を実施した。以降、1分間の休憩を挟みながら3MPTと単発パンチを繰り返す一連のサイクルをPost3まで実施した。パンチ動作は光学式三次元動作解析装置を用いて計測し、得られた座標データからパンチ速度および上胴や下胴等、各関節の回旋角速度などの時系列データを算出した。その結果、パンチ速度はPreと比較してPost1～Post3において有意な低下を示さなかったが、反動局面における上胴や下胴等、各関節の負の回旋角速度などは有意に増加していた。これらの結果から、単発パンチにおいては疲労状態でもパフォーマンスの維持が可能であり、高いパンチ速度の発揮と維持には反動局面における素早い動作が重要であることが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-34] 国立スポーツ科学センターにおけるフィットネスチェックの活用実態に関する検証

*野澤 巧[1]、後藤 晴彦[1]、沼津 直樹[1]、松林 武生[1] (1. ハイパフォーマンススポーツセンター国立スポーツ科学センター)

国立スポーツ科学センターでは、トップアスリートの競技力向上を目的としてフィットネスチェック（FC）を実施している。FCはアスリートの体力レベルの現状把握やトレーニングへの適応の評価に加え、過去にFCを実施した日本代表レベルのアスリートの測定値と比較することでパフォーマンスの予測にも活用されている。しかし、FC活用の実態について国際大会の成績と関連づけた検証はこれまでなされていない。本研究では、東京2020オリンピック・パラリンピック大会（東京大会）以降にFCを実施した競技団体のパリ2024オリンピック・パラリンピック大会（パリ大会）における競技成績を調査し、FCの活用性について検証することを目的とした。対象競技はパリ大会で実施されたオリンピック32競技及びパラリンピック22競技とした。対象期間はオリンピック競技、パラリンピック競技ともに東京大会閉会からパリ大会開会とし、各年度のFC実施回数を集計した。結果、オリンピック競技では16競技（50.0%）でFCが実施され、うち6競技（37.5%）で入賞以上、2競技でメダルを獲得していた。また、パラリンピック競技では5競技（22.7%）でFCが実施され、その全てで入賞以上、2競技でメダルを獲得していた。また、FCを実施している競技の中で、パリ大会でメダルを獲得したアスリートは複数年継続してFCを実施していた。FCを実施した21競技のうち11競技がパリ大会で入賞者を出していたことは、FC活用が競技成績向上へ貢献していた可能性を示すものであった。また、FCを継続実施している競技でメダルが獲得されていたことから、継続的なFC実施が重要であることが示唆された。一方、半数以上の競技ではFCの実施経験がなかったことから、今後はこれらの競技団体へのFCに関する理解促進、測定サイクルの構築、データ蓄積を通じた次世代アスリート支援の強化が求められる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-36] 卓球サービスに対するレシーバーの視線の特徴

*浦 侑穂[1]、吉田 和人[2] (1. 順天堂大学大学院 スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学大学院)

卓球のレシーブでは、世界トップレベルの選手でさえ、回転判別を誤ったことにより返球できず、失点している場面が頻繁に観察される。これは、サービスの回転を正確に判別することの重要性の高さを示している。本研究は、「サービスの回転を判別するために、レシーバーはどこを見ているか」を実験的に明らかにしようというものである。被験者は、関東学生卓球連盟に登録する20名の大学生選手とした。試技は、モニターに映し出されるサービス動画を観察し、20本のサービスに対して回転判別を行うこととした。サービスは、上回転系と下回転系の回転で、それぞれにサービス動作にフェイントを加えたものと加えていないものの4種類とした。これらのサービスの順番はランダムとした。実験時のサーバーは、フェイント動作などにより、レシーバーにとって回転判別が困難なサービスを行うことができる選手1名とした。被験者は回転を判別したタイミングで、上回転系あるいは下回転系のボタンを押して回答した。さらに、回答直後に、回転判別の確信度を回答した。被験者の視線は、サンバイザータイプのアイマークレコーダー(EMR-10、nac社)を用いて、視野映像は60Hz、注視点は120Hzで測定した。その結果、サービス動作の開始からサービス打球までの視線は、(1)終始ボールを追う、(2)ボールは追わずにサービス打球位置を予測して先回りする、(3)サーバーのラケットの動きを追う、(4)サーバーの顔を見る、(5)その他、のパターンに分類された。視線パターンは、20試技全てで同じ被験者が5名、試技間で異なる被験者が15名であった。これらについて、視線パターンと被験者の競技力や試技ごとの回転判別の確信度などとの関係を検討することが今後の課題である。今回のデータは、レシーブにおけるサービス動作の見方に関するコーチングに有用な基礎的データとなるものと期待される。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-38] 同一競技における国内一流選手の体力からみたJOCエリートアカデミー選手の体力の比較

*沼津 直樹[1]、谷村 祐子[1]、山下 大地[1]、小口 貴久[2]、松林 武生[1] (1. 国立スポーツ科学センター、2. 公益財団法人日本オリンピック委員会)

ユース年代の選手の体力測定を行う目的の１つに、発育発達過程の評価がある。高水準の競技成績を有する選手を評価する際、非アスリートも対象とした新体力テストの結果を基準値に用いると、対象者の体力を正しく評価できない場合がある。本研究の目的は、同一競技のシニアの国内一流選手を基準に、高水準の競技成績を有するユース年代の選手の体力水準を比較することとした。ユース年代の選手の値は、国立スポーツ科学センターが実施したフィットネスチェックにおいて2009年から2024年までにJOCエリートアカデミーに所属したレスリング選手，男子のべ140名女子のべ127名の測定値とした。基準となる国内一流選手の値は、フィットネスチェックハンドブックに掲載されているシニア世代のレスリング選手の平均値および標準偏差を用いた。ユース年代の選手の値はフィットネスチェック実施日における対象者の年齢から中学1年から高校3年に分類し、各学年の平均値および標準偏差を算出した。リバウンドジャンプ・カウンタームーブメントジャンプ・30秒ウィンゲートバイクテストの３項目を比較した。その結果、RJ指数は、男子中量級および女子中量級と重量級において、高校1年以降の平均値がシニア選手の平均値と同程度であった。カウンタームーブメントジャンプ跳躍高は、女子全ての階級において、高校1年以降の平均値がシニア選手の平均値と同程度であった。また、ウィンゲートテストのピークおよび平均パワーは、男子中量級選手において、中学2年以降の平均値がシニア選手の平均値と同程度であった。以上より、本研究で対象とした高水準の競技成績を有するユース年代のレスリング選手は、男女ともに高校１年時点で国内一流選手と同程度の下肢のバリスティックなパワー発揮能力を有すること、男子選手では中学2年時点で国内一流選手と同程度の無酸素性持久力も有することが明らかとなった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-40] 大学生ラグビー選手におけるリバウンドジャンプパフォーマンスに注意方略が及ぼす影響

ポジションの違いに着目して

*古橋 侑季[1]、上岡 優二郎[2]、村冨 浩太朗[3,5]、吉田 拓矢[4]、谷川 聡[5]、前村 公彦[5] (1. 法政大学、2. 浦安D-Rocks、3. 順天堂大学、4. 国立スポーツ科学センター、5. 筑波大学)

【背景】注意方略は，運動者の注意の方向を変化させて，内的注意，外的注意および中立的注意のいずれかを誘発することにより，運動パフォーマンスを変化させるコーチング手法である．これまでに，注意方略を用いることで即時的にジャンプパフォーマンスを改善できることが，いくつかの跳躍運動において報告されている．一方で，ラグビー競技のようにポジションによって選手の体格の異なるスポーツでは，ポジションごとにパフォーマンスの向上に最適なコーチングが求められる．そこで，本研究では注意方略が大学生ラグビー選手におけるジャンプパフォーマンスに及ぼす影響をポジションごとに明らかにすることを目的とした．【目的】大学生男子ラグビー選手20名を、ポジションによってフォワード群（FW群12名）およびバックス群（BK群８名）に群分けし，連続６回のリバウンドジャンプを３条件（外的条件，内的条件，中立的条件）で２回ずつ計６回実施させた．全ての試技をフォースプレート上で行わせ，いくつかのパフォーマンス変数（リバウンドジャンプ指数，跳躍高，接地時間，最大鉛直地面反力，脚スティフネス）を測定および算出した．【結果および考察】BK群では，全てのパフォーマンス変数において条件間で有意な差は認められなかった．FW群では，接地時間において，外的条件が内的および中立的条件よりも有意に低い値を示した．また，跳躍高においては内的および中立的条件が外的条件よりも有意に高い値を示した．BK群とFW群では，身体特性（体重）の違いによりジャンプパフォーマンスの特性が異なるため，同様に注意方略を用いても，その影響が異なることが考えられる．【結論】注意方略がジャンプパフォーマンスに及ぼす影響は，運動者の身体特性によって異なることが示された．また，指導者は運動者の身体特性やトレーニング課題を考慮して，注意方略を使い分ける必要があることが示唆された．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-42] 大学女子サッカー選手を対象としたスプリントトレーニングの有効性の検討に関する事例的研究

大学女子サッカー選手におけるスプリントトレーニングに関する事例的研究

*温水 鴻介[1]、杉田 正明[1] (1. 日本体育大学)

本研究は大学女子サッカー選手を対象にスプリントトレーニングを実施し、その有効性を検証するとともに、指導現場における実践的な知見を得ることを目的とした。高い疾走速度の獲得要因および疾走動作の特徴を抽出し、女子サッカー選手のスプリント能力向上を図るトレーニングプログラムを実施した。トレーニングは、スキップ、バウンディング、マーカー走やハードル走、ジャンプ種目を20~30分/回、2回/週、8週間実施した。フィジカルテストは、30m走、10m×5シャトルラン、アローヘッドアジリティテスト、垂直跳、立幅跳、リバウンドジャンプを介入の前後で実施した。30m走、10m×5シャトルラン、垂直跳、リバウンドジャンプは有意な改善が認められたが、アローヘッドアジリティテストおよび立幅跳では有意な改善が認められなかった。30m走では、ストライドは維持しピッチは有意に増加し、トレーニングプログラムの有効性が示唆された。しかし、サッカーの重要な要素である方向転換能力の種目のアローヘッドアジリティテストでは改善は認められず、サッカーのスプリントトレーニングにおいて競技の特異性を考慮したトレーニングを行う必要性が示唆された。　本研究の実施期間中は、普段のサッカーのトレーニングも実施しており、スプリントトレーニング以外の要因も影響を与えている可能性があるが、少なくともスプリントトレーニングがパフォーマンスの向上に寄与していることが示唆される。したがって、試合期においても低頻度かつ短時間のトレーニングでもスプリント能力が向上することを示しており、本研究で実施したトレーニングプログラムの有効性を明らかにすることができたといえる。今後も継続して、女子サッカーの課題であるスプリント能力の改善や向上を図るトレーニング効果の検討をし、指導現場へ還元していくことが必要である。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-44] 日本における男女ラクロスのルールの違い

*丸山 伸也[1]、大橋 信行[2] (1. 中央大学、2. 帝京大学)

ラクロスは数ある球技の中でも、男女で明確にルールが異なる競技であり、その違いが選手の身体的・精神的パフォーマンスに多大な影響を及ぼしている。男子ラクロスでは、ヘルメットやショルダーパッドなどの防具の着用が義務付けられ、ボディコンタクトが認められている。このため、プレーは高速かつ激しいものとなり、1対1の強さやチェック技術、ショットの威力など、フィジカルと個人技が重要視される。一方、女子ラクロスは原則非接触であり、スティックチェックにも厳格な制限がある。防具も最低限であり、競技は空間の活用や連携に重点を置いた戦術的なスタイルとなる。
本研究は、日本国内におけるラクロス競技において、男女間で適用されるルールの違いが、選手のプレースタイル、技術的要求、戦術理解、さらに指導・育成方法にどのような影響を与えているかを明らかにすることを目的とした。
本研究で対象は、大学リーグおよび全日本選手権とし、ビデオ撮影を行った上でにおける試合の観察を通じて、両者のプレースタイルの違いを比較した。男子はテンポの速い展開の中で個人の突破力が勝敗を左右する場面が多く、女子はゾーンディフェンスや連携プレーの完成度がチームの成績を左右していた。また、コーチングにおいてもその違いは顕著であり、男子では筋力強化や個別の技術指導が重視されるのに対し、女子では戦術理解力や判断力の育成が重要視されていた。こうしたプレー傾向や指導方法の違いは、単なる生物学的性差によるものではなく、ルールによって形成される競技文化そのものが影響を与えていることが示唆された。
したがって、日本におけるラクロスの男女差は、競技設計そのものがもたらす文化的・戦術的な違いとして理解されるべきであり、今後は性別にかかわらず多様な戦術やプレースタイルを学び合えるような育成環境と指導法の整備が求められる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-46] バスケットボールのゲームにおける状況認知等の基礎的知識と状況判断能力との関連による速攻場面の類型化

*八板 昭仁、青柳 領

バスケットボールの作戦や戦術などの競技力に関わる基礎的知識の有無は，競技中の状況判断に影響を及ぼし，プレイヤーの戦術行動に一定の関連があることが報告されている(八板ほか, 2024)．一方，基礎的知識を有するにも拘わらず正しい状況判断が困難な場面や基礎的知識に関わりなく正しい状況判断が可能な場面があることも指摘されている．本研究は，バスケットボールの速攻時の状況認知とプレイ選択に関する基礎的知識と状況判断能力の関連から速攻場面の類型化を試みようとするものである．高等学校のバスケットボール部に所属する357名を対象に，14項目(速攻場面)の紙面による静止画を用いた①基礎的知識テスト(八板ほか, 2022)と同場面の動画を用いた②状況判断能力テストを実施した．①基礎的知識テストと②状況判断能力テストの結果によって「知識○：状況判断○」，「知識○：状況判断×」，「知識×：状況判断○」，「知識×：状況判断×」の4群に分類して速攻場面別に4×14のクロス集計表を作成した．コレスポンデンス分析を用いて基礎的知識の有無と状況判断能力の関係によって速攻場面をマッピングし，算出されたカテゴリースコアによってクラスター分析し，基礎的知識と状況判断能力の関係における速攻場面の特徴を検討した．その結果，「知識○：状況判断○」はショット志向プレイの可否が明確な状況，「知識○：状況判断×」は1パスでショット試行が可能な状況，「知識×：状況判断○」はショット志向に積極的にプレイする状況，「知識×：状況判断×」は2対2等においてショット志向プレイが困難な状況，および「状況認知に関する知識が十分ではない状況」の5つのクラスターを解釈することができた．基礎的知識と状況判断能力の関係における速攻場面の特徴を類型化することで，類似の場面における状況判断に関するコーチングに貢献でき得る結果と考えられる．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-48] イングランド男女サッカーリーグにおけるプレー様相の比較分析

*鈴木 健介[1] (1. 国際武道大学)

男子サッカーと女子サッカーにおける競技特性の違いは、十分に研究が進んでいるとは言えない。近年、女子サッカーの競技レベルや注目度が国際的に高まりつつある中で、男女間におけるプレースタイルや戦術的傾向の違いを明らかにすることは、性別に応じた戦術設計や評価指標の構築において重要な課題である。そこで本研究は、男女トップリーグのプレー様相を比較分析することにより、それぞれの特性を明らかにすることを目的とした。分析対象は、2024/25シーズンにおけるイングリッシュ・プレミアリーグ（EPL）全20チームおよびウィメンズ・スーパーリーグ（WSL）全12チームとし、Wyscoutにより収集されたパフォーマンスデータ計73項目を使用した。男女間の比較にはt検定、フィッシャーの正確確率検定を用い、さらに男女別に勝ち点との相関分析を行った。結果として、女子は前半の得点生起率が高く、男子は後半の得点生起率が高かった。女子ではミドルサードおよびファイナルサードでのボール奪取生起率が高く、ディフェンシブサードでのロストが多かった。男子はディフェンシブサードでのボール奪取生起率が高く、前方へのパス成功率も女子より高かった。相関分析では、女子においてファイナルサードでのボール奪取生起率と前方パス成功率が勝ち点と正の相関を示し、ディフェンシブサードでの奪取は負の相関を示した。また男子では、フリーキックやPKによる得点が勝ち点と正の相関を示し、セットプレーの流れによる失点は負の相関を示した。これらの結果から、男子ではセットプレーを確実に得点に結びつける決定力や、セットプレー後の二次攻撃に対する守備構築の質が、勝敗に繋がる可能性が示された。一方、女子では前線からの守備の質や前方へのパス精度が勝ち点に結びついており、高い位置でのボール奪取や、前方へのプレーの質が勝ち点に寄与していることが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-50] 15人制ラグビーの防御局面に関する戦術研究
N大学にける実践的検証

*廣瀬 恒平[1]、髙橋 仁大[2] (1. 尚美学園大学、2. 鹿屋体育大学)

ラグビーに関する戦術研究はこれまで活発に行われてきたとは言い難く、その要因として、戦術を実証的に研究する方法論が未発達であったことが指摘されている。またラグビーにおける実践的な研究には、トレーニングを対象にその効果を検証したものは散見されるが、戦術を対象とした実践研究はごくわずかである。発表者はこれまでラグビーの防御戦術に着目し、ゲームパフォーマンスとプレー成功要因との数量的な関連性について継続的に調査してきた。そこで、これらの先行研究を基にした防御戦術を対象チームに導入し、導入前後のゲームパフォーマンスの比較から、戦術の有効性を検証することを本研究の目的とした。分析項目はラグビーのゲーム構造における前進および圧力に相当するタックル発生前後の様相を調査する内容とし、プレーの成否およびゲームへの影響を検討した。まず戦術の遂行状況に着目すると、タックルヒット部位において、相手の下体へのヒット比率が有意に増加した。他方、相手に対して複数で働きかけるタックルアシストに関して、発生比率に有意な変化は認められなかった。タックル発生位置については、ゲインラインを基準に相手陣地での発生比率が有意に増加した。次にプレーの成否に関して、相手に対して最初に接触した選手のタックルにおいて、相手に押し込ませずに倒した比率が有意に増加し、倒したが押し込まれた比率およびタックルを外された比率が有意に減少した。タックルアシストに関しても、同様の結果が得られた。最後にゲームへの影響として、相手によるゲインラインの突破を阻止した比率、またプレーの開始から終了までに相手陣地方向へ移動した比率が有意に増加した。以上の結果から、概ね導入した戦術の遂行が認められ、プレーの成功率が向上し、ゲームに正の影響を及ぼしたと推察されたことから、一定程度の戦術の有効性が示唆された。詳細は学会大会にて報告する。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-52] ある大学の剣道部所属学生の心理的傾向に基づく指導の検討

*玉田 理沙子[1] (1. 志學館大学)

近年、大学における部活動・サークル活動への参加率は、コロナ禍以降減少傾向にある（全国大学生協連, 2022）。一方で、こうした課外活動が学生にもたらす心理的・社会的価値は根強く、特にスポーツ経験者の間ではその重要性が体感的に理解されている。部活動は単なる競技やレクリエーションの場ではなく、集団の中での役割や人間関係を通じて多様な経験を積む機会ともなり得る。玉田ら（2025）は、ある大学で認定された課外活動団体（以下、指定サークル）に所属する学生を対象に、主観的幸福感や精神的健康との関連を調査した。これらの指定サークルは、競技力を基本としつつも必須とはせず、学業との両立や多様な成長経験を重視する柔軟な活動スタイルを特徴としている。その結果、心理的安定や大学生活への肯定的な影響に寄与する可能性が示された。一方で、活動意識の差や新メンバーとの関係性による孤独感など、参加環境における課題も指摘されている。また、玉田ら（2023）は、高校剣道指導者への質的調査を通じて、剣道指導において「人間性の育成」が重視されている実態を明らかにした。 本研究は、大学剣道部に所属する学生の心理的状態を量的に記述し、剣道指導における「人間性の育成」という理念が学生の主観的幸福感や精神的健康にどのように表れているのかを検討することを目的とする。 そのために、同調査データのうちある大学の剣道部に所属する学生33名の回答を抽出し、主観的幸福感尺度（井上ら，2022）および12項目版一般健康質問票（GHQ-12）を用いて、心理的傾向を探索的に捉えた。剣道部という特定の活動を通じて学生の心理的状態を量的に記述し、現場で指導に関わる立場から浮かび上がった問いを一事例として検討したものである。自身の指導を見直すためであると同時に、同じような立場にある指導者が実践を省みる手がかりとしても活用されることを期待している。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-54] 女子バスケットボールのメンバーチェンジにおける個別最適な心理状態とその類型

*酒井 佑[1,3]、谷口 ちゆき[2]、雨宮 怜[3]、坂入 洋右[4] (1. 筑波大学　人間総合科学学術院　体育科学学位プログラム、2. 清泉女学院中学高等学校、3. 筑波大学 体育系、4. 常葉大学 教育学部)

人がベストパフォーマンスを発揮する際の至適な心理状態は、個人、種目、状況ごとに異なると考えられている（坂入, 2022）。本研究では、女子バスケットボールのメンバーチェンジにおける個別最適な心理状態を類型化し、各類型に属する選手の特徴を検討することを目的とした。調査対象者は、大学女子バスケットボール部に所属する部員179名（20.13±1.42歳）であった。調査内容として、選手の年齢、競技歴、競技力、ポジション、メンバーチェンジ時にプレッシャーと感じるピリオドおよび試合状況に加え、性格特性として日本語版Ten Item Personality Inventory（小塩, 2012）を取得した。さらに、過去のバスケットボール試合中において、メンバーチェンジ後のプレーがプレッシャーと感じた場面を想起させ、続けて、そのような場面において、ベストパフォーマンスを発揮した場面、ワーストパフォーマンスを発揮した場面の心理状態について、二次元気分尺度（Sakairi et al., 2013）を用いて調査した。また、ベスト―ワーストの各場面における、試合の規模を尋ねた。ベスト―ワースト場面における気分状態の差得点を用い、クラスタ分析を行った。その結果、ベスト―ワースト場面間において、気分状態の差異が少ない「平常心型」、ワースト時に覚醒度が低い「だらけ型」、ワースト時に覚醒度が高い「あがり型」が見出された。これは坂入（2022）の提唱を支持するものである。続いて、各クラスタを目的変数とした多項ロジスティック回帰分析を行った。説明変数間の尤度比検定を行った結果、開放性、ポジションが各類型を説明する変数であることが示唆された（ps<.05）。今後は、指導者などが選手個々人のベストパフォーマンスを発揮できる心理状態を理解し、性格特性やポジションの特徴を考慮したメンバーチェンジを行うことが有用であると考えられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-56] JOCエリートアカデミー事業が競技力に及ぼす影響

*小口 貴久[1]、江田 香織[2]、谷村 祐子[3]、沼津 直樹[3]、大越 光介[4]、友利 杏奈[3] (1. 日本オリンピック委員会、2. 東洋大学、3. 国立スポーツ科学センター、4. 順天堂大学スポーツ健康科学部)

日本オリンピック委員会（JOC）が実施しているJOCエリートアカデミーは、中学生および高校生の選手を対象とした事業であるが、オリンピック出場やメダル獲得にどのように寄与しているかは十分に検証されていない。そこで本研究では、東京2020大会およびパリ2024大会に出場したTEAM JAPAN選手を対象に、出場年齢やアカデミー在籍期間などを分析し、JOCエリートアカデミーが選手の競技力に与える影響について基礎的知見を得ることを目的とした。
東京2020大会およびパリ2024大会に出場したアカデミー修了生は、レスリング、卓球、フェンシング、水泳／飛込の4競技で、男子6名、女子7名、計13名であった。これはアカデミー修了生全体（95名）の13.7%相当であった。2大会に連続して出場したアカデミー修了生は、男子2名、女子3名の計5名であり、4競技のアカデミー修了生全体に対する割合は7.2%であった。競技別ではフェンシングが10.0%と最も高く、次いで卓球（8.0%）、レスリング（5.0%）であった。メダル獲得数について、アカデミー修了生は金5個、銀2個、銅5個の計12個のメダルを獲得していた。これは、TEAM JAPAN全体のメダル数103個の11.7%に相当し、4競技のTEAM JAPAN選手におけるメダル獲得数50個のうち24.0%をアカデミー修了生が占めていた。アカデミー入校からオリンピック出場までの年数の中央値（四分位範囲）について、男子10.0年（6.3 – 10.8年）、女子8.0年（7.0 – 9.0年）、男女合計で8.0年（7.0 – 10.0年）であった。これらのことから、JOCエリートアカデミーはオリンピック出場のみならず、メダル獲得を狙える競技力の高い選手を輩出しており、入校してから約10年を要する育成・強化プロセスであることが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-58] 大学ラグビーにおける競技人口の推移

関西大学ラグビーリーグを対象として

*青木 敦英[1]、溝畑 潤[2] (1. 芦屋大学、2. 関西学院大学)

日本ラグビーフットボール協会の発表によると、大学生の競技登録者数は2023年9253人、チーム数は275チームであり、2012年と比較すると登録者数は2449人減少、チーム数は47チーム減少している。これまでにラグビー競技においては単一カテゴリーの競技人口の調査や競技レベルごとの競技人口の推移について報告されていない。本研究では2008年から2024年までの17年間の関西大学ラグビーリーグにおける選手数の推移について調査を行った。調査方法は、リーグ戦を開催する際に関西ラグビーフットボール協会から発刊される関西大学ラグビーリーグプログラム（2022年までは「関西大学ラグビーリーグメンバー表」）に掲載された選手（マネージャー、学生コーチ、学生トレーナなどを除く）の人数およびチーム数を集計した。関西大学ラグビーリーグの総選手数の推移についてみると2016年および2018年で最も多い2357人であったが、2024年では1921人と6年間で400人以上減少していた。リーグ（競技レベル）別の１チームあたりの平均選手人数をみると、Aリーグでは2008年は平均91.5人であったが、2013年以降は平均で100人を超えている。またリーグの総選手数に対するAリーグの選手数の割合は2020年以降では40%を超えていた。一方で下位リーグでは2019年以降BリーグおよびCリーグの選手数は減少傾向にあり、2023年の１チームあたりの平均選手数はBリーグで48.5人、Cリーグでは26.4人と上位リーグであるAリーグの平均選手数と比較して半分以下であった。これらのことから、リーグの構造を鑑みると人数配分に格差が拡がっていることが懸念される。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-60] 日本におけるサッカー女性審判員の男子トップカテゴリー参画に関する一考察

*小泉 朝香[1]、竪石 亜也子[2]、山口 香[3] (1. 株式会社トリデンテ、2. アデコ株式会社、3. 筑波大学)

女性の活躍推進は、システムと同様に組織・グループのインクルージョンされている状態が望ましい。そこで、本研究の目的は、サッカー男子トップカテゴリーで審判経験を有する女性たちが感じるインクルーシブな状態とは何かを明らかにすることとした。また、JFA審判委員会が行ってきた女性審判員の登用システムの構築およびインクルーシブな環境整備に関する取り組みについても検証し、課題と取り組むべき方策を検討した。調査対象者は、日本国内の男女トップリーグで審判を行った経験のあるサッカー女性審判員５名、JFA審判委員会委員長もしくは審判委員会女子部会長の役職経験のある５名とした。半構造化インタビューを行い、得られた発言をもとに修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。結果は、女性審判員は、周囲や自らの《無意識のバイアス》を実感するも、徐々に周囲から《受容達成》が行われ、女性審判員は《自分らしさの発揮》や《帰属感》を獲得していった。JFA関係者は、《無意識のバイアス》が存在しながらも、社会的背景もあいまって女性審判員を男子リーグに登用することに強い関心を持ち始め、《組織の風土醸成》に努めていた。女性審判員に実践の機会を与えながら周囲との相互理解を進め《女性審判員への適切な理解》が広がっていた。現在は、 女性審判員の登用システムが構築され、表面的には成功しているように見えるが、今後は、女性審判員が「自らが選んだ場所で、自分らしくやりがいを持って取り組む」環境作りが必要である。また、フィールド外においても能力が認められ、期待されているという受容感を得ていくことが、更なるインクルーシブな状態に繋がっていく可能性がある。今後は、審判員において、外見（性別）に関する認知傾向が他者の評価に及ぼす影響を定量的に解明し、無意識のバイアスに寄らない能力の特性を評価する指標の構築を検討したい。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：コーチング学

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:30 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／コーチング学

[3b1251-281] コーチング学（偶数演題）／ポスター発表

[09コ-ポ-62] 志向倫理に基づくスポーツ・インテグリティ教材「Coach me」の開発と評価

ジュニアアスリートを対象として

*安永 太地[1]、藤井 基貴[2] (1. 早稲田大学スポーツ科学学術院、2. 静岡大学教育学部)

競技スポーツではオンラインカジノや未成年飲酒・喫煙などの問題が生じ、スポーツ・インテグリティの重要性が指摘されている。これらの問題に対する教育的アプローチを整理すると、不正行為を抑制する「予防倫理」と、理想や価値を体現しようとする「志向倫理」の二つの理念的側面がある。先行研究によれば、従来のスポーツ倫理教育は「やってはいけないこと」を示す予防倫理に偏重しているといった課題が残る。そこで本研究では、志向倫理の視点からの教材開発を試みる。筆者らは既に中学生向けに志向倫理を軸としたスポーツ・インテグリティ教育を実践した（安永・藤井，2024）。一方で、小学生を対象とした教材や取り組みは十分とは言えず、発達段階に応じた教材やプログラム開発が課題として残されている。本研究では、小学生でも具体的に考えることができ、かつ取り組みやすい志向倫理に基づくスポーツ・インテグリティ教材「Coach me（コーチミー）」を開発し、同教材を使ったワークショップを実施して、その効果を検証する。同教材は、試合や練習の苦しい場面において、「どのような声かけ」が選手の心に響くかを「価値」と「コーチング」の両面から考えさせ、ゲーム形式で発表し合うものである。これにより、自身の「見方・考え方」を言語化させるとともに、多様な価値観に触れる機会を創出した。テスト実施として、全日本卓球ユース選手として活動するジュニアアスリートを対象に研修を実施し、事後アンケートを通じてその効果を検証する。本研究を通じて、志向倫理を育むインテグリティ教育の可能性を検討するとともに、アスリートの見方・考え方を指導者が把握し、日常の指導に活かすことを目指す。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-02]

Awe and Sport fan pro-environmental behavior

*Kuo Che-Chun[1]、Chen Lung Hung[2] (1. National Taiwan University of Sport、2. National Taiwan Sport University)

[03心-ポ-04]

Leisure, Psychology, Flow, Text Mining, Social Network Analysis, Textom, CONCOR, Digital Culture, Emotion, Experience.

*lee Jaegyun[1]、Oh Chae Yun[3]、Jang Deok JIn[2]、Choi Jae Woo[4]、Hur Seung Eun[5]、Lee Joon Hee[6]、Oh Kyung Rok[7] (1. Kyung Hee University、2. Shin Han University、3. Kyung Hee Univ、4. KyungHee University、5. In Ha University、6. Kyung Hee Uni、7. Kyunghee University)

[03心-ポ-06]

Structural Analysis of Psychological and Mental Keywords in Elite Sports
A Social Big Data Network Approach

*oh chaeyun[1]、Jang DeokJin[2]、Hur Seungeun[3]、Oh KyungRok[1] (1. Kyung Hee Univ.、2. Shin Han Univ.、3. Inha Univ.)

[03心-ポ-08]

走運動の上下反転が勢い知覚に与える影響

*山本 真史[1]、荒木 雅信[1,2] (1. 日本福祉大学、2. 大阪体育大学)

[03心-ポ-10]

個人間の力発揮課題におけるプレッシャーが力の誤差補正に与える影響

*升本 絢也[1]、原 幸輝[2] (1. 広島文化学園大学、2. 広島文化学園大学大学院人間健康学研究科)

[03心-ポ-12]

他者身体との空間的/解剖学的適合性のパフォーマンスへの影響

*成瀬 九美[1] (1. 奈良女子大学生活環境学部)

[03心-ポ-14]

バーチャルリアリティを用いたボール追従時の頭部運動とタイミング予測の関係の検証

*原薗 迪子[1]、渡邉 諒[2,3]、井上 純輝[1]、中本 浩揮[2]、樋口 貴広[1] (1. 東京都立大学大学院、2. 鹿屋体育大学、3. 日本学術振興会特別研究員（PD）)

[03心-ポ-16]

ウエイトリフティングのスナッチにおける挙上重量が視線行動およびバーベルの運動学的特徴に与える影響

*新谷 遼[1]、菊政 俊平[1] (1. 金沢学院大学スポーツ科学部)

[03心-ポ-18]

ラグビー選手の有効視野におけるポジション間の比較

*國部 雅大[1]、近藤 克磨[2]、上野 壮士朗[2]、三枝 徹平[2] (1. 筑波大学、2. 筑波大学大学院)

[03心-ポ-20]

女子大学生の運動物体の予測特性
斜め下方向と水平方向の比較

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

*戸枝 美咲[1]、山﨑 紀春[2]、中島 弘毅[3]、新井 健之[4]、竹市 勝[5] (1. 日本女子大学、2. 上智大学、3. 松本大学、4. 高千穂大学、5. 国士舘大学)

[03心-ポ-22]

スポーツにおける指導行動認知尺度の開発に向けた検討

*村上 弘通[1]、杉山 佳生[2] (1. 九州大学大学院人間環境学府、2. 九州大学大学院人間環境学研究院)

[03心-ポ-24]

自己決定理論による動機づけ及び基本的心理欲求が運動継続の自信に与える影響
批判的思考態度の高低に焦点を当てて

*鳥井 淳貴[1]、中須賀 巧[2] (1. 宝塚医療大学、2. 兵庫教育大学)

[03心-ポ-26]

創作ダンス活動におけるリーダーシップ及び動機づけと集団凝集性との関連

*鈴木 ゆきの[1] (1. 聖徳大学)

[03心-ポ-28]

教師の指導スタイル、運動有能感、劣等コンプレックスが将来の運動実施意欲に及ぼす影響

*山田 佑響[1]、山本 浩二[2]、中須賀 巧[1] (1. 兵庫教育大学大学院、2. 関西福祉大学)

[03心-ポ-30]

Jリーグクラブのユース選手がプロサッカー選手になるために必要な心理的能力および心理的特性
プロサッカー選手を輩出した指導者による視点

*北橋 達朗[1]、寺岡 英晋[1]、高井 秀明[1] (1. 日本体育大学)

[03心-ポ-32]

指導者がチーム内の人間関係に感じる困難さと認知的方略の関係

*木村 駿介[1] (1. 静岡産業大学)

[03心-ポ-34]

自然体験活動において児童がポジティブ感情を経験する場面の探索的検討
環境感受性の個人差に注目して

*矢野 康介[1] (1. 筑波大学)

[03心-ポ-36]

レジリエンスとグリットは退学リスクの予測因子になり得るか
GPAと大学不適応感との関連から

*重藤 誠市郎[1] (1. 新潟医療福祉大学)

[03心-ポ-38]

中学校体育におけるフィードバックの認知と学習成果との因果関係の推定
学年に焦点を当てた検討

*山本 浩二[1]、中須賀 巧[2]、島本 好平[3]、杉山 佳生[4]、尼子 尚公[1] (1. 関西福祉大学、2. 兵庫教育大学、3. 法政大学、4. 九州大学)

[03心-ポ-40]

ポストコロナの身体活動量とレジリエンスの関連性に関する研究
アドベンチャー教育プログラム実施後の比較から

*江川 潤[1]、吉田 雅人[1] (1. 神田外語大学　体育・スポーツセンター)

[03心-ポ-42]

個人競技者の年代別・競技レベル別にみるチームへの帰属意識

*中村 詠美[1]、畝中 智志[1] (1. 北翔大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

[03心-ポ-44]
バーンアウトの発症プロセスにおける競技状態の年代別比較
中学生から社会人までを対象として
*田中 輝海[1] (1. 駿河台大学)

[03心-ポ-46]
大学生の男女共習体育授業に対する意識と男女平等意識および運動有能感との関連
*金沢 翔一[1]、豊田 隼[2] (1. 山梨大学、2. 東京大学・日本学術振興会)

[03心-ポ-48]
ゲーミフィケーションを取り入れた大学教養体育の教育的有効性の実践的検討
運動に対する動機づけと健康意識の変化に着目して
*松浦 佑希[1]、福地 修也[2]、水野 哲也[3] (1. 宇都宮大学　共同教育学部、2. 筑波大学大学院　人間総合科学学術院、3. 東京科学大学大学院 地域・福祉口腔機能管理学分野)

[03心-ポ-50]
Transformational Coaching Scaleの日本語版作成と因子構造の検討
*深見 将志[1] (1. 日本大学商学部)

[03心-ポ-52]
体育授業における運動技能指導に関する教員の認識
運動技能の指導に動作意識は活用されているのか
*永山 貴洋[1]、髙橋 功祐[1] (1. 石巻専修大学)

[03心-ポ-54]
ジュニアユースサッカーチームにおけるチームビルディングの事例的検討
*松井 花織[1]、伊藤 英之[2] (1. 日本体育大学、2. 國學院大學)

[03心-ポ-56]
トラウマを抱えながら生きる
異なる行為形態の対人暴力被害による複雑性PTSDの発現リスク
*豊田 隼[1,2]、尾見 康博[3] (1. 東京大学、2. 日本学術振興会、3. 山梨大学)

[03心-ポ-58]
大学新入生における運動習慣が体力に及ぼす直接効果と特性的自己効力感による間接効果
*今野 亮[1] (1. 明治薬科大学)

[03心-ポ-60]
受傷した女子大学生アスリートが期待していたサポートと予測していなかったサポートに関する一考察
*安田 貢[1] (1. 山梨学院大学スポーツ科学部)

[03心-ポ-62]
野球の審判員の心理的課題と対処行動に関する検討
2024–2025年調査からの報告
*西貝 雅裕[1]、来田 宣幸[2] (1. 太成学院大学高等学校、2. 京都工芸繊維大学)

[03心-ポ-64]
大学生アスリートの身体意識と反芻・省察に関する縦断的調査
多変量潜在成長モデルを用いた検討
*堀 彩夏[1]、高井 秀明[1]、篠原 秀典[1]、齋藤 雅英[1] (1. 日本体育大学)

[03心-ポ-66]

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

大学生アスリートの認知的方略と心理的能力との特徴
J-PATEAを用いて

*藤本 太陽[1] (1. 大阪産業大学)

[03心-ポ-68]
パリ2024大会における村外サポート拠点での心理サポート利用に関する調査

*柄木田 健太[1]、冨永 哲志[1]、大西 壮流[1]、立谷 泰久[1]、本郷 由貴[1] (1. ハイパフォーマンススポーツセンター　国立スポーツ科学センター)

[03心-ポ-70]
サッカーの公式試合に伴うレフェリーの心理的変化

*高井 秀明[1] (1. 日本体育大学)

[03心-ポ-72]
グループでのダーツ実施による心理的・対人的効果
個人戦・チーム戦形式における気分と親密度の変化

*吉武 誠司[1]、酒井 佑[2]、坂入 洋右[3] (1. 目白大学短期大学部、2. 筑波大学人間総合科学学術院、3. 常葉大学教育学部)

[03心-ポ-74]
複数選択肢下での適切な意思決定と正確な運動出力の両立を支える運動制御方略
サッカーのインサイドキックを対象として

*三宅 麟太郎[1]、中本 浩揮[2] (1. 鹿屋体育大学大学院、2. 鹿屋体育大学)

[03心-ポ-76]
フェイント対処時の脳内情報処理
電流源密度推定法を用いた運動準備電位による検討

*木村 勇大[1]、正木 宏明[2] (1. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科、2. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

[03心-ポ-78]
スポーツ版不合理な信念尺度の再検討

*伊藤 英之[1]、土屋 裕睦[2] (1. 國學院大學、2. 大阪体育大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-02] Awe and Sport fan pro-environmental behavior

*Kuo Che-Chun[1]、Chen Lung Hung[2] (1. National Taiwan University of Sport、2. National Taiwan Sport University)

Recent research has shown that awe facilitates not only self-oriented but also other-oriented behaviors. Thus, exploring whether and how awe experienced in the context of sports can positively influence individuals' extra-role behaviors across various life domains is particularly meaningful. If such a spillover effect exists, professional sports organizations may enhance business outcomes and contribute to broader social benefits. The purpose of this study was to investigate the relationship between awe and sports fans’ pro-environmental behavior. Specifically, the study examined the direct effect of awe on pro-environmental behavior among sports fans, drawing on the social functional approach to emotion. Data were collected from 219 fans attending professional sports events. The results suggest that awe was positively associated with behavioral intentions related to self-improvement spending and pro-environmental spending. However, no significant effect was found for awe on behavioral intentions concerning time devoted to self-improvement and pro-environmental activities. Theoretical and practical implications are discussed.

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-04] Leisure, Psychology, Flow, Text Mining, Social Network Analysis, Textom, CONCOR, Digital Culture, Emotion, Experience.

*lee Jaegyun[1]、Oh Chae Yun[3]、Jang Deok JIn[2]、Choi Jae Woo[4]、Hur Seung Eun[5]、Lee Joon Hee[6]、Oh Kyung Rok[7] (1. Kyung Hee University、2. Shin Han University、3. Kyung Hee Univ、4. KyungHee University、5. In Ha University、6. Kyung Hee Uni、7. Kyunghee University)

This study aimed to explore how leisure activities influence individuals' psychological well-being and flow experiences by analyzing discourse patterns and attributes using social big data. Focusing on the core keywords “leisure,” “psychology,” and “flow,” the study collected a total of 1,595 data entries from September 1, 2021, to August 31, 2024, across major Korean web portals, including Naver, Google, and Daum. The unstructured text data were processed using the Textom software for text mining and UCINET6 for social network analysis.
Text mining techniques such as frequency analysis and Term Frequency–Inverse Document Frequency (TF-IDF) were employed to identify frequently appearing terms and their relative importance. Results showed that keywords such as “flow,” “psychology,” “leisure,” “time,” and “activity” had the highest frequency. Meanwhile, “time,” “game,” “happiness,” and “experience” ranked high in TF-IDF, indicating their contextual significance within the dataset. Furthermore, CONCOR analysis was used to extract word clusters based on relational similarities between terms. This process yielded four meaningful clusters: (1) Reflective Leisure Flow, (2) Psycho-Social Leisure Management, (3) Positive Emotion-Based Flow Experience, and (4) Digital Culture and Leisure Psychology. Each cluster reflects a unique thematic dimension of how leisure and flow are experienced and conceptualized within Korean digital discourse.
The findings offer a comprehensive and multidimensional perspective on leisure psychology and flow, highlighting their connections to self-reflection, emotional regulation, and modern digital behaviors. This study provides empirical insights that can serve as a foundation for developing leisure-based psychological intervention programs and evidence-informed leisure policy planning.

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-06] Structural Analysis of Psychological and Mental Keywords in Elite Sports

A Social Big Data Network Approach

*oh chaeyun[1]、Jang DeokJin[2]、Hur Seungeun[3]、Oh KyungRok[1] (1. Kyung Hee Univ.、2. Shin Han Univ.、3. Inha Univ.)

This study explores key themes in exercise psychological therapy by analyzing social big data related to “sports,” “psychology,” and “mental.” A total of 3,896 text entries were collected from Korean portals between September 2021 and August 2024. Using text mining and CONCOR-based social network analysis, four keyword clusters emerged: (1) performance enhancement, (2) coaching applications, (3) mental strength and self-awareness, and (4) mental health and well-being. These findings highlight critical psychological dimensions in elite sports and support data-driven strategies for athlete mental support programs.

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-08] 走運動の上下反転が勢い知覚に与える影響

*山本 真史[1]、荒木 雅信[1,2] (1. 日本福祉大学、2. 大阪体育大学)

重力は、スポーツをはじめとする私たちの身体運動における強力な制約因子である。点光源から成るバイオロジカルモーション刺激を知覚する際、その刺激を上下反転させると知覚パフォーマンスが低下することが知られており、これは私たちに備わる重力バイアスに起因すると考えられている。最近私たちは、走運動のバイオロジカルモーション刺激が有する「運動の勢い」の知覚特性を調査し、その成果を報告した（Yamamoto & Araki 2025）。本研究では、刺激の上下反転がこの勢い知覚に及ぼす影響を検討した。実験には19名が参加したが、１名のデータが欠損したため、18名のデータを分析対象とした。使用した刺激は、5.6、8.0および10.4km/hで走行するバイオロジカルモーション刺激であった。参加者には、標準刺激（正立かつ8.0km/h）と比較刺激（正立または反転、および5.6、8.0または10.4km/h）を呈示し、どちらの刺激の勢いが大きいと感じたかを判断させた。その結果、刺激方向と速度との間に有意な交互作用が認められた（p<.001）。下位検定の結果、正立刺激では5.6km/hが他の2速度よりも高い正答率を示し（いずれもp<.01）、反転刺激では10.4km/hが他の2速度よりも高い正答率を示した（いずれもp<.05）。さらに、5.6および8.0km/hでは、反転よりも正立で高い正答率が示された（いずれもp<.001）。一方、10.4km/hでは、正立よりも反転で高い正答率が認められた（p<.01）。これらの結果は、走運動刺激が上下反転されることで、その勢いが大きく知覚されやすくなることを示しており、5.6および8.0km/hでは誤知覚が増加する一方で、10.4km/hでは反転によってむしろ判断の正確性が高まる方向に働いたことを示唆している。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-10] 個人間の力発揮課題におけるプレッシャーが力の誤差補正に与える影響

*升本 絢也[1]、原 幸輝[2] (1. 広島文化学園大学、2. 広島文化学園大学大学院人間健康学研究科)

2人が人差指で力発揮し、その総和を目標値に一致させる課題を行った時、２人の力発揮が負の相関関係となり、両者の一方の力が強くなると他方の力を弱くするような協応関係（力の誤差補正）が生じる。本研究は個人間の力発揮課題において、プレッシャーを与えた時、課題パフォーマンスや力の誤差補正がどのように変化するのかを検討した。24名の参加者は2人でペアを作り、課題を行った。課題は2人の参加者が分離的に力発揮し、力の総和を最大発揮筋力の10%の目標値に対して一致させることであった。まず課題のレ州として、50回（1秒力発揮し、1秒間インターバル）の力発揮を1試行とし、5試行を行った。その後、非プレッシャー条件とプレッシャー条件を実施した。非プレッシャー条件は、参加者に練習試行と同様の50回の力発揮をさせた。プレッシャー条件は、参加者に報酬に関する教示を与え、50回の力発揮をさせた。報酬について、3ペアを1グループとした（計4グループを形成）。参加者にはグループ内で力の正確さ（力の総和の絶対誤差）に応じて順位を付け、1位のペアは両者に4000円、2位のペアは両者に2000円を与え、3位のペアは0円を与えると教示した。その結果、プレッシャー条件は非プレッシャー条件よりも力の絶対誤差が大きく、プレッシャーにより個人間のパフォーマンスが低下した。さらに、プレッシャー条件は非プレッシャー条件よりも２人の力の負の相関係数が低くなり、力の誤差補正が低かった。したがって、本研究の新知見は個人間の力制御課題において、プレッシャーが課題パフォーマンス低下と力の誤差補正の低下をもたらすことを示唆した。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-12] 他者身体との空間的/解剖学的適合性のパフォーマンスへの影響

*成瀬 九美[1] (1. 奈良女子大学生活環境学部)

運動学習には身体模倣の現象が多様にみられる．動きの習得時に，示範者が学習者に対面し左右方向を違えて示す場面や示範者が背面になり示す場面などでは，その位置関係によって両者の身体部位が空間的もしくは解剖学的に適合する．Catmur & Heyes (2011)は，SC(反応刺激)の背景にMC(無関係な運動刺激)を提示する刺激反応適合性パラダイム実験を行い，他者（MCモデル）と自身の身体（SCへの反応）に空間的適合性または解剖学的適合性がある場合に反応時間が短縮することを報告した．本研究では，MCモデルと実験協力者との間に，空間的適合性のある対面一致条件，解剖学的適合性のある対面不一致条件，両適合性のある背面一致条件，両適合性のない背面不一致条件の4条件を設定し，ボタン押し課題（SCに対して指示された左右の人差し指で左右どちらかの反応ボタンを押す）を用いて実験を行った．大学生女子24名が実験に参加した（奈良女子大学研究倫理審査委員会承認番号21-67）．対面一致条件は他の3条件よりも反応時間が短縮した．SOA（刺激開始非同期．MC出現からSC出現までの時間的遅れ)が150 msと200 msの場合，対面不一致条件は背面不一致条件よりも有意に反応時間が短縮し，解剖学的適合性効果がみられた．適合性効果と個人特性との関連性について，多次元共感測定尺度 (桜井, 1988)と思索家型・芸術家型認知様式質問紙 (伊田・坂野, 1988)を用いて相関を求めた．共感4尺度との相関は認められなかった．分析性・抽象性尺度（視覚情報をそのまま捉える傾向）とSOA100 msの反応時間に有意な負の相関が認められた．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-14] バーチャルリアリティを用いたボール追従時の頭部運動とタイミング予測の関係の検証

*原薗 迪子[1]、渡邉 諒[2,3]、井上 純輝[1]、中本 浩揮[2]、樋口 貴広[1] (1. 東京都立大学大学院、2. 鹿屋体育大学、3. 日本学術振興会特別研究員（PD）)

スポーツ熟練者は，捕球動作時にボールの動きと連動させるように頭部を動かすことが報告されている。頭部回転運動に伴う感覚入力が，捕球のタイミング予測に有益であると考えられている。本研究の目的は，ボール追従時の頭部運動の貢献が，非熟練者にも当てはまるかを明らかにすることにある。捕球動作が苦手とされる発達生協調運動症者は，捕球動作時のタイミング予測精度が低いと指摘されている。本研究は，発達生協調運動症者のタイミング予測改善に頭部運動への介入が有益であると考えて着想した。実験参加者は一般成人26名とし, バーチャルリアリティ環境下で，フライボールの捕球課題を行った。実験条件は捕球条件, ボール消し-頭部自由条件, ボール消し-頭部固定条件とした。ボール消しの2条件ではボール射出直後のみボールを提示した。ボール消し-頭部固定条件では頭部運動を制限した。Head-ball angle（頭部角度とボール角度の差）とGaze-ball Angle（視線角度とボール角度の差），タイミング誤差を測定した。ボール消し-頭部自由条件とボール消し-頭部固定条件間で対応のあるt検定，捕球条件のHead-Ball angle，Gaze-Ball angleとタイミング誤差の間で相関分析を行った。結果として，ボール消し-頭部固定条件とボール消し-頭部自由条件のタイミング誤差で有意差はなかった。捕球条件では，Head-ball angleとタイミング誤差の間で相関があった。頭部固定によってタイミング誤差が変わらなかった理由として，ボール消去の影響が大きく, 頭部操作による違いを示せなかったと考えられる。捕球条件では, 頭部とボールの動きが連動している人ほどタイミング予測精度が高いことが明らかになった。ボールが見えている状況で頭部を動かすことは，タイミング予測に貢献する可能性が示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-16] ウエイトリフティングのスナッチにおける挙上重量が視線行動およびバーベルの運動学的特徴に与える影響

*新谷 遼[1]、菊政 俊平[1] (1. 金沢学院大学スポーツ科学部)

本研究では、ウエイトリフティングのスナッチにおける挙上重量が視線行動およびバーベルの運動学的特徴に与える影響について検討することを目的とした。大学ウエイトリフティング競技部に所属する男子89kg級の選手12名を対象とした。視線を測定するため眼球運動測定装置を装着した上で、低重量条件（最大挙上重量の50%）と高重量条件（最大挙上重量の80%）の2条件を3試技ずつ行った。スタートポジションからキャッチポジションまでの時間におけるバーベルの水平方向変位や鉛直方向変位、最高速度や平均速度について分析を行った。また、眼球運動測定装置に記録された映像をもとに、視線角度の最大値、最小値、最大値-最小値、平均値を算出した。バーベルの運動学的変数および視線角度について、低重量条件と高重量条件の違いについて分析を行った。その結果、挙上重量が軽い場合の方が重い場合に比べて、バーベルの最大速度が高いことや、前方への変位が大きく、キャッチ高が高いことが明らかになった。次に、視線角度については、挙上重量が軽い場合の方が重い場合に比べて、特にファーストプル局面（動作時間の20%の時点）で視線が下方を向いていることが明らかになった。これらの結果は、挙上重量が視線行動やバーベルの運動学的特徴に影響を及ぼしていることを示唆するものである。さらに、バーベルの運動学的変数と視線角度の関係について相関分析を行った結果、視線角度の変化とバーベルの水平方向の動きが関係しており、挙上重量が重い場合は、視線角度の変化が大きいほど、バーベルが水平方向の最大速度が低く、後方変位が大きいこと、挙上重量が軽い場合は、視線角度の変化が大きいほど、バーベルの前方変位が小さく、後方変位が大きいことが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-18] ラグビー選手の有効視野におけるポジション間の比較

*國部 雅大[1]、近藤 克磨[2]、上野 壮士朗[2]、三枝 徹平[2] (1. 筑波大学、2. 筑波大学大学院)

本研究の目的は、視野内の様々な情報をもとに状況判断や意思決定を行うことが求められるラグビー選手を対象に、有効視野の観点からポジションの特性を比較検討することであった。大学ラグビー選手26名が参加し、ポジションはフォワード（FW）10名、ハーフバックス（HB）6名、バックス（BK）10名であった。有効視野の測定は、暗室にて立位でディスプレイ中央の注視点を注視した状態で行った。注視点の位置に50ms間文字が呈示される中心課題（４種類の文字を識別）、および中心課題と同時に6つの視野偏心度（5〜30度）で4方向（左上、左下、右上、右下）のいずれかに50ms間光点が呈示される周辺課題（光点呈示方向を識別）について、キー押しにより回答した。その際、中心課題を必ず正答するよう注意を向けた上で周辺課題に対しできるだけ正確に回答するよう教示した。48試行の練習後、本試行を360試行行った。周辺課題の誤答率について分散分析を行った結果、視野偏心度に有意な主効果が認められ（p<.001）、30度では他の視野偏心度に比べて誤答率が高くなった。また、ポジションに有意な主効果が認められ（p<.01）、誤答率はHBにおいて最も低かった。要因間の交互作用はみられなかった。大きな視野偏心度で誤答率が高い結果は先行研究と類似していたが、非運動選手を対象とした先行研究の結果と比較すると誤答率が低かったことから、ラグビー選手は競技経験により広い有効視野を有している可能性が考えられる。また、ポジション間比較の結果から、特にHBの選手は有効視野が広いことが示唆された。HBの選手はFWやBKに比べて、プレー時に広い視野を用いて判断することが求められることから、有効視野の広さはHBのポジション特性を反映していることが考えられる。有効視野の測定により、スポーツ選手の視覚情報処理特性の一端が明らかになることが期待される。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-20] 女子大学生の運動物体の予測特性

斜め下方向と水平方向の比較

*戸枝 美咲[1]、山﨑 紀春[2]、中島 弘毅[3]、新井 健之[4]、竹市 勝[5] (1. 日本女子大学、2. 上智大学、3. 松本大学、4. 高千穂大学、5. 国士舘大学)

【はじめに】 学校体育およびスポーツの現場において、物体の運動を予測することは、運動物体の捕捉のために重要な運動能力の１つである。これまでに、男子大学生を対象とした物体の運動予測は、水平右方向よりも斜め右下方向の方が、より運動速度を遅く予測する可能性があることが示唆されている（中島2022）。今回は、女子大学生を対象に同様の実験を行い、方向の違いによる女子の運動予測の特性について検討する。 【方法】 被験者は女子大学生12名とし、自作のバーチャルリアリティー環境で実験を行った。運動物体（ボール）が画面左端から右方向へ等速10deg/sで水平移動し、画面中央から右側に設置した長方形の板（目盛付き）の後ろに隠れるように移動する画像を提示した。ボールが板の後ろに隠れ、一定時間経過後、板の色を変色させた（トリガー刺激）。被験者はトリガー刺激提示時刻のボールの位置を目盛で回答した（回答位置）。トリガー刺激までの時間は5段階でランダムに提示し、20施行実施した。次に、モニターを時計回りに45度回転することにより、右下方向へ運動物体が移動する課題を実施した。横軸に遮蔽時間（板の後ろに隠れてからトリガー刺激までの時間）、縦軸に板左端からボールの移動距離を取り、回答位置のプロットから回帰直線を求めて、傾き（距離/時間）を被験者が予測した遮蔽中の運動物体速度（予測速度）とした。縦軸との切片を視覚刺激提示による進行方法への位置錯覚量とした。 【結果・考察】 予測速度は、水平右方向5.19±1.25deg/s、斜め右下方向4.34±1.31deg/sという結果となった。t検定をした結果、予測速度に有意な差は認められなかったが、男子大学生を対象とした、中島ら（2022）の先行研究と同様の傾向を示し、水平右方向よりも斜め右下方向の方が、より運動速度を遅く（移動距離を短く）予測する可能性があることが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-22] スポーツにおける指導行動認知尺度の開発に向けた検討

*村上 弘通[1]、杉山 佳生[2] (1. 九州大学大学院人間環境学府、2. 九州大学大学院人間環境学研究院)

スポーツにおけるコーチの指導行動は、選手の動機づけや成果に大きな影響を及ぼす重要な要因である。自己決定理論（Self-Determination Theory: SDT）では、自律性・有能感・関係性という基本的心理欲求の充足が内発的動機づけや心理的健康を促進し、逆に阻害されると心理的不適応やモチベーションの低下を招くとされている（Deci & Ryan, 2000）。近年では、コーチの自律性支援行動が選手の心理的適応を高め、統制的行動が心理的負担や不適応を助長する可能性が示されており（Bartholomew et al., 2011）、こうした行動が選手の心理的プロセスに与える影響を包括的に理解する重要性が増している。こうした背景から、本研究では、自己決定理論に関連する文献の系統的レビューを通じて、スポーツ場面におけるコーチの指導行動研究の動向を整理し、その評価に用いられてきた尺度の構成や活用状況を明らかにした。分析の結果、自律性支援行動は主に Perceived Autonomy Support Scale for Exercise Settings（PASSES；Hagger et al., 2007）、統制的行動は Controlling Coach Behaviors Scale（CCBS；Bartholomew et al., 2010）により評価されていることが確認されたが、両側面を統合的に捉える尺度は依然として限られていた。また、伊藤（2016）は両側面を含む統合的な尺度の開発を試みたが、対象が中学生に限られていたことや、指導行動を網羅的に把握できていない点が課題として指摘されている。以上を踏まえ、本研究では、既存尺度の構成要素を活かし、自律性支援行動と統制的行動を統合的に測定可能な新たな指導行動認知尺度の開発の検討を目的とする。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-24] 自己決定理論による動機づけ及び基本的心理欲求が運動継続の自信に与える影響

批判的思考態度の高低に焦点を当てて

*鳥井 淳貴[1]、中須賀 巧[2] (1. 宝塚医療大学、2. 兵庫教育大学)

身体活動・運動の量が多い者は，生活習慣病やうつ病，認知症の発症・罹患リスクが低いことに加え，思考力や学習力，幸福感を高められるとされている（厚生労働省，2023）．このような運動の恩恵が認められているのにも関わらず，我が国で運動習慣のある者の割合は男性で36.2%，女性で28.6%であり，約10年間横ばいの現状がある（厚生労働省，2023）．換言すれば，運動実践の重要性が広く浸透していない可能性があるため，これを正確に認識し，主体的な運動習慣の獲得に結びつける必要がある．本研究では自己決定理論による動機づけ，基本的心理欲求，運動継続の自信に着目し，批判的思考態度の高低の側面から検討することを目的とした．大学生582名を対象に，「運動に関する自己決定動機づけ尺度」（松本ほか，2003）を独立変数，「基本的心理欲求充足尺度（以下，欲求）」（西村・櫻井，2015）を媒介変数，「大学卒業後の運動継続への自信（以下，自信）」（直井・佐藤，2018）を従属変数とした仮説モデルを設定した．「批判的思考態度尺度短縮版」（楠見・平山，2013）における尺度合計得点の高低によって群分け（以下，批判高群及び批判低群）を行い，共分散構造分析を実施した．結果，内発的動機づけは両群において自信へ正の影響を示した．また，批判高群のみ欲求へ正の影響を示し，関係性は自信へ負の影響，自律性は自信へ正の影響をそれぞれ示した．同一視的調整は批判低群のみ自信へ正の影響を示した．また，欲求にも正の影響を示し，有能感は自信へ正の影響を示した．批判高群の同一視的調整は有能感のみに正の影響を示した．取り入れ的調整は，批判高群では自律性へ負の影響を示し，その自律性は自信へ正の影響を示した．批判低群では関係性へ負の影響を示した．最後に，批判低群のみ，外的調整は有能感へ正の影響，非動機づけは自律性へ負の影響をそれぞれ示した．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-26] 創作ダンス活動におけるリーダーシップ及び動機づけと集団凝集性との関連

*鈴木 ゆきの[1] (1. 聖徳大学)

近年、学校教育においてダンス授業は小学校から中学校2年生まで必修科目となっており、中学校段階では、創作ダンス、フォークダンス、現代的なリズムのダンスの3領域で構成されている。このうち創作ダンスは、グループで動きを一から創り上げる活動であり、個人の創造性を尊重しながらも、協調性や課題解決力の育成が期待されている。また、授業で行う創作ダンスは競技性を伴う部活動とは異なり、完成度や活動を通じた達成感といった観点から集団凝集性が重視される。
本研究では、大学のダンス授業における創作ダンス活動を対象に、集団凝集性を高める要因としてリーダーシップとメンバーの動機づけに着目し、その関連を検討することを目的とした。
調査は、関東地方の女子大学に通う、創作ダンスの授業が必修となっている2年生174名を対象に、5月に質問紙調査を実施した。測定には、吉村（2005）の主将のリーダーシップ尺度、鈴木ら（2021）の部活動における動機づけ尺度、杉山ら（2021）のスポーツにおける集団凝集性尺度を用いた。３つの尺度は、創作ダンスの活動に合うように質問文を修正して使用したため、各尺度に対して探索的因子分析を行った。その結果、リーダーシップは「人間関係調整」「技術指導」「規範的指導」、動機づけ尺度は「内的調整」「外的調整」、集団凝集性は単一因子で構成された。
次に、集団凝集性への関連要因を検討するために、リーダーシップおよび動機づけの下位尺度を説明変数、集団凝集性を目的変数とする重回帰分析を行った。その結果、「内的調整」（$\beta = .61, p < .01$）と「人間関係調整」（$\beta = .32, p < .01$）が有意に規定していた。 これにより、創作活動自体を楽しむことや、他のグループより上達したいという内発的な動機づけが、集団凝集性の向上に寄与することが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-28] 教師の指導スタイル、運動有能感、劣等コンプレックスが将来の運動実施意欲に及ぼす影響

*山田 佑響[1]、山本 浩二[2]、中須賀 巧[1] (1. 兵庫教育大学大学院、2. 関西福祉大学)

本研究の目的は、高等学校体育における教師の指導スタイル、運動有能感、劣等コンプレックスが将来の運動実施意欲に及ぼす影響を検討することであった。本目的を遂行するにあたり、教師の指導スタイルを独立変数、将来の運動実施意欲を従属変数、そして運動有能感と劣等コンプレックスを媒介変数とした分析モデルを設定した。大学１年生５４９名を対象に、体育授業における教師のフィードバック行動測定尺度（山本ほか，２０２２）、課題・過去・他者を基準とする運動有能感尺度（藤田，２００９）、体育授業における劣等コンプレックス尺度（佐々木ほか，２０１６）、将来の運動実施意欲を問う質問紙調査を実施した。分析モデルの検証には共分散構造分析を用いた。分析の結果、モデルの適合度は十分な値であった。モデル内で確認された主な有意なパスについて述べると、教師からの称賛が生徒の過去基準有能感と課題基準有能感に正の影響を与え、その過去基準有能感と課題基準有能感は運動スキルコンプレックスに負の影響を与えた。さらに、運動スキルコンプレックスは将来の運動実施意欲に負の影響を与えた。一方で、教師からの助言は生徒の過去基準有能感と課題基準有能感に負の影響を与え、その過去基準有能感と課題基準有能感は運動スキルコンプレックスに負の影響を与えた。さらに、運動スキルコンプレックスが将来の運動実施意欲に負の影響を与えることが確認された。以上のことから、教師の指導スタイルに関して称賛が豊富であったと認知する生徒ほど、過去や課題を基準とした運動有能感が高まり、それによって運動スキルコンプレックスが低下し、その後の運動を実施することに対しても意欲的に取り組める可能性があることが示唆された。しかし助言には、過去や課題を基準とした運動有能感の低下、それによる運動スキルコンプレックスの向上、将来の運動実施に対する意欲低下を促すプロセスが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-30] Jリーグクラブのユース選手がプロサッカー選手になるために必要な心理的能力および心理的特性

プロサッカー選手を輩出した指導者による視点

*北橋 達朗[1]、寺岡 英晋[1]、高井 秀明[1] (1. 日本体育大学)

サッカー選手の成長やプロキャリア移行に至るまでの過程では、心理的能力や心理的特性が重要な役割を果たすといわれている（Morris, 2000）。そのため、欧州諸国では育成年代のサッカー選手の心理的要因に関する研究が多く行われているが（e.g., Harwood, 2008）、日本ではあまりみられない。そこで、本研究の目的は、経験豊富なサッカー指導者の視点から、ユース年代のサッカー選手がプロサッカー選手になるために必要な心理的能力および心理的特性を明らかにすることであった。調査対象者は、Jリーグクラブに現在所属している、または過去に所属していたサッカー関係者10名であった。なお、調査対象者は（1）日本サッカー協会公認のBライセンス以上、またはUnion of European Football Associations公認のBライセンス以上の資格保持者、（2）指導経験10年以上、（3）これまでにU15-18カテゴリーの指導経験があり、その期間にプロサッカー選手を輩出した実績があった。本研究の方法には、オープンエンド型の半構造化インタビューを採用し、調査対象者の希望に応じて1名以外はオンライン形式で実施した。インタビューによって収集された言語データは、Reflexive Thematic Analysis（Braun & Clarke, 2022）を採用して帰納的、演繹的に分析した。その結果、心理的能力および心理的特性に関する16のサブテーマと4つの潜在的なテーマが識別された。なお、4つの潜在的なテーマは、Awareness、Goal-directed attributes、Resilience、Emotional Intelligenceで構成された。今後は、これらの体系化された心理的要素を競技環境で育むための取り組みについて検討する必要がある。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-32] 指導者がチーム内の人間関係に感じる困難さと認知的方略の関係

*木村 駿介[1] (1. 静岡産業大学)

認知的方略とは，“個人が個人的に関連のある目標を追求する時の期待，評価，計画，努力，回顧の一貫したパターン“である（Cantor et al.，1987）。認知的方略は，過去と将来のへの認知と期待によって次の4つの認知的方略が存在することを示唆している。過去のパフォーマンスに対するネガティブな認知をもつ一方で，将来に対する期待は高い「非現実的楽観主義」，過去のパフォーマンスに対するネガティブな認知をもち，将来に対する期待も低い「真の悲観主義」，過去のパフォーマンスに対するポジティブな認知をもち，将来に対する期待も高い「方略的楽観主義」，過去のパフォーマンスに対するポジティブな認知をもち，将来に対する期待は低い「防衛的悲観主義」である。これまでの研究から，防衛的悲観主義と方略的楽観主義を採用するものは高いパフォーマンスを発揮する傾向にあり，真の悲観主義と非現実的楽観主義を採用する者は低調なパフォーマンスにとどまる傾向にあることが示唆されている。しかし，認知的方略がスポーツ指導者のパフォーマンスに与える影響やその機序についての研究はこれまでほとんど行われてきていない。

そこで本研究では，認知的方略がスポーツ指導者のパフォーマンスに与える影響に関する基礎的な調査として，「チーム内の人間関係で難しい，困難だと感じるのはどのようなこと」に関する自由記述調査を行い，テキストマイニング手法のひとつである共起ネットワーク分析を用いてそれぞれの認知的方略を採用する者が感じている困難さについて探索的に検討を行った。調査はウェブ調査サービスであるFreeasy（アイブリッジ株式会社）を利用して実施し，271名（男性217名，女性54名；平均年齢42.8歳，SD = 11.4）を最終的な分析対象とした。分析の結果，それぞれの認知的方略において感じられている困難の特徴について抽出された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-34] 自然体験活動において児童がポジティブ感情を経験する場面の探索的検討

環境感受性の個人差に注目して

*矢野 康介[1] (1. 筑波大学)

【背景と目的】児童の適応や発達を促す取り組みの一つとして、自然体験活動が推進されているが、その効果には大きな個人差が見られることが指摘されている。このような個人差を規程する要因として、心理学領域では、種々の環境要因に対する反応性を表す概念である環境感受性に注目が集まっている。本研究では、自然体験活動からポジティブな感情を経験する場面についての自由記述データを収集し、環境感受性の程度ごとに分析を行うことで、自然体験活動の効果において個人差が生じるメカニズムを明らかにするための基礎的知見を提供することも目的とした。
【方法】本研究では、小学4〜6年生の児童1200名に対して、インターネット調査を行った（男子599名、女子595名、その他・不明6名；各学年400名）。すべての調査対象者は、①環境感受性の測定尺度であるHSCS-C（岐部・平野，2020）、および②自然体験活動において「たのしい」と感じる場面に関する自由記述項目に回答した。以上の手続きは、研究協力者の所属機関の倫理審査委員会より承認を得た。HSCS-C合計得点について潜在クラス分析を行い、調査対象者をいくつかの群に分類した後、自由記述項目について、各群を外部変数とした共起ネットワーク分析を実施した。分析には、Mplus8.3およびKH Coder3を使用し、有意水準は5%に設定した。
【結果と考察】潜在クラス分析の結果、環境感受性の高群・中群・低群の3つが抽出された。また、共起ネットワーク分析において、感受性高群では非日常的かつ景観の美しい場所で活動すること、感受性中群では自由な活動を通じて自然の快適さを感じること、感受性低群では非日常的な活動を通して新たな発見をすることが、それぞれポジティブ感情と関連すると解釈された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-36] レジリエンスとグリットは退学リスクの予測因子になり得るか
GPAと大学不適応感との関連から

*重藤 誠市郎[1] (1. 新潟医療福祉大学)

令和3年度の大学中退者のうち、15.7%が学生生活不適応・修学意欲低下を理由としており、その割合が高まっている。大学中退者は1年次前期のGPAが低く、2年次前期までの累積GPAが2以下の場合は退学リスクが高まる。一方で、退学リスクが高い状況にもかかわらず、退学に至らない者もいる。この現象との関連が予測される心理特性として、レジリエンスとグリットが考えられる。そこで本研究では、大学不適応感とGPAに対するレジリエンスとグリットとの関連性について明らかにする。大学1年生を対象に調査を行い、大学不適応感と大学1年次前期のGPAに対するレジリエンスとグリットの関連性について分析する。令和6年9月から10月にかけて、N大学スポーツ系学科1年生に対してGoogle formsによる調査を実施した。1年生266名のうち、238名から回答が得られ、同意書に「同意しない」を選択した23名を除いた215名を研究対象とした（有効回答率81%）。　1年次前期のGPAでは、「3〜3.49」が79名（36.7%）と最も多く、次いで「2.5〜2.99」が63名（29.3%）、「2〜2.49」が40名（18.6%）であった。1年次のGPAは、大学生活不安尺度の修学意欲因子と大学満足因子、日本語版Grit-s尺度の根気因子、二次元レジリエンス要因尺度の資質的レジリエンス因子と獲得的レジリエンス因子に有意な正の相関がみられた。また、欠席回数、大学生活不安尺度の大学不適応因子には有意な負の相関がみられた。Gritとレジリエンスをそれぞれ合計得点ごとに3群に分け、一要因の分散分析を実施した。GPA得点、欠席回数、大学生活不安尺度の3因子に有意差がみられ、Gritやレジリエンスが高い群において、GPA得点や修学意欲因子、大学満足因子の得点が有意に高く、欠席回数と大学不適応因子の得点が有意に低かった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-38] 中学校体育におけるフィードバックの認知と学習成果との因果関係の推定

学年に焦点を当てた検討

*山本 浩二[1]、中須賀 巧[2]、島本 好平[3]、杉山 佳生[4]、尼子 尚公[1] (1. 関西福祉大学、2. 兵庫教育大学、3. 法政大学、4. 九州大学)

本研究の目的は、中学校体育における生徒のフィードバックの認知と学習成果の因果関係を、先行研究の知見（スモール・スミス、2008）に基づき、学年の要因から検討した。　調査は、体育授業を受講した中学生596名（1年生：257名　2年生205名　3年生134名）を対象とし、2022年6から7月，11から12月，2023年2月に実施した。調査内容は「フィードバック認知測定尺度」（下位尺度：称賛、助言、授業態度に対する注意、運動技能に対する指摘　山本ほか、2022）と小野ほか（2018）を参考に作成した「体育授業の学習成果を評価する項目群（学習成果）」（運動技術の習得、コミュニケーション能力の涵養、運動と知識の修得、運動の魅力の感受、身体能力の向上）であった。分析は、学年を要因とする多母集団同時分析による交差遅れ効果モデルを用いて、フィードバックと学習成果の因果関係を推定した。その際、称賛と助言を肯定的フィードバック、授業態度に対する注意と運動技術に対する指摘を否定的フィードバックとし、それぞれを起点とした分析を実施した。　分析の結果、モデルの適合度は肯定的フィードバックおよび否定的フィードバックを起点とするモデルにおいて、それぞれ十分な値が示された。次に、肯定的フィードバックを起点とする因果関係について、1年生の2時点目の肯定的フィードバックが3時点目の学習成果に正の影響を、2年生の2時点目の学習成果が3時点目の肯定的フィードバックに正の影響を示した。3年生は1時点目の肯定的フィードバックが2時点目の学習成果に正に影響し、その学習成果が3時点目の肯定的FBに影響を示した。以上の結果から、学年による因果関係の違いは学年の進級による学習内容の難易度が挙げられた。また、体育授業において否定的フィードバックの活用には慎重な検討の必要性が示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-40] ポストコロナの身体活動量とレジリエンスの関連性に関する研究
アドベンチャー教育プログラム実施後の比較から

*江川 潤[1]、吉田 雅人[1] (1. 神田外語大学　体育・スポーツセンター)

WHOは2020年1月30日に新型コロナの国際的な緊急事態宣言を発令した。それから4年後、WHOは2023年5月5日に国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態宣言の終了を発表した。その間、世界中でワクチン接種や行動制限などの対策が施されたが、様々な犠牲があったことは周知の通りである。教育現場においては、緊急事態宣言を受けて自宅でのオンライン授業が広がった。著者らは先行研究においてアドベンチャー教育プログラム（対面）とオンライン授業(非対面)において有効だと思われた要素、課題を明らかにしてきた。その中では学校内における対面授業のマスク着用、給食時の黙食、会話の制限やマスク着用における表情認識を取り扱ったが、それらが及ぼす心理的、身体的影響に関してはこれまで取り組まれてきていない。そこで本研究は、当時コロナ禍の高校生だった現在の大学生を対象に身体活動量とレジリエンスの関連性を検証することを目的とした。対象者は首都圏の大学生105名であった。身体活動におけるTotal METはInternational Physical Activity Questionnaire (IPAQ) short versionの日本語版を用いて測定した。この尺度では、平均的な1週間に、激しい身体活動と中程度の身体活動を行った日数と時間数を測定した。この尺度では、IPAQのガイドラインに基づき歩行、中程度の身体活動、強い身体活動の項目を指定された計算式を用いてトータルMETsを算出した。レジリエンスは小塩ら（2002）が作成した精神的回復力尺度を用いて「新奇性追求」、「感情調整」、「肯定的な未来志向」の3因子21項目を測定した。当日は身体活動量とレジリエンスの関連性をアドベンチャー教育プログラム実施後の比較から発表することとする。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-42] 個人競技者の年代別・競技レベル別にみるチームへの帰属意識

*中村 詠美[1]、畝中 智志[1] (1. 北翔大学)

集団競技においては、パフォーマンスが高いチームの特徴として帰属意識の高さがあげられる(遠藤、2009；スポーツ心理学辞典、2008)など、競技成績と帰属意識の関係についての研究が進められている。一方、多くの個人競技団体でチームとしての目標決めや役割分担などの帰属性を高める取り組みが行われているにも関わらず、個人競技と帰属意識の関係を明らかにした論文は少ない。その理由は、個人での取り組みである日々のフィジカル・スキトレーニングや試合時のパフォーマンス発揮が競技成績に直結するためと考えられる。しかし、帰属意識が関与する動機付けモチベーションの変化や心理的安定が、個人競技におけるパフォーマンス発揮に影響するのではないかと考える。そこで本研究では、個人競技における帰属意識と競成績の関係について明らかにすることを目的とした。中学生・高校生・大学生の陸上競技部員を対象に、部活動への帰属意識と競技成績について、アンケート調査を実施した。まず、各年代別カテゴリーでの帰属意識を調査した結果、中学生と高校生のスコアが大学生よりも優位に高いことが明らかになった。この結果から、中学・高校のカテゴリーでは大学と比較して帰属意識を高める取り組みが行われている可能性が挙げられる大学では各個人の活動として部活動以外の所属コミュニティーが広がり、部活動に対する帰属意識が相対的に低下するのではないかと考える。次に、競技レベル別(地区大会・都道府県大会・全国大会)の帰属意識の変化を検討した。その結果、競技レベル別での帰属意識の高さに差は見られないことが明らかとなった。つまり、帰属意識が個人ではなく部活動全体の雰囲気と関連している可能性が考えられる。今回の調査対象となった学校は限定的であったため、学校ごとの比較ができなかったが、今後対象を増やし、学校の競技レベル別での検討を行う必要がある。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-44] バーンアウトの発症プロセスにおける競技状態の年代別比較

中学生から社会人までを対象として

*田中 輝海[1] (1. 駿河台大学)

スポーツ領域のバーンアウトは、発症に至るまでに大きく4つの競技状態（熱中、停滞、固執、消耗）を段階的に辿ると考えられている（中込・岸、1991）。熱中は、充実した競技生活を送れている状態、停滞は、上達を実感できず、競技成績が伸び悩んでいる状態、固執は、競技継続以外の選択肢がないと感じている状態、消耗は、競技への興味や関心が薄れ、心身が疲弊している状態を指す。そして、これらの競技状態は、バーンアウトの発症者に限らず、程度の差はあれどれも誰もが経験し得るものである。そして、これらの経験の程度や各競技状態への適合度は選手の年代により異なることが考えられる。すなわち、各年代で競技が日常生活に占める割合や取り組み方の傾向は異なるため、各競技状態への適合度にも違いが生じる可能性がある。そこで本研究は、中学生から社会人を対象に、年代による各競技状態の適合度の違いを検討することを目的とした。分析対象は、中学生（1007名）、高校生（907名）、大学生（722名）、20～30代の社会人若年層（929名）、40～60代の社会人高年層（918名）であった。4つの競技状態の適合度の評定には「スポーツ選手版バーンアウトプロセス尺度第2版（ABPQ-2）」を用いて、対応のない一要因分散分析により検討した。分析の結果、熱中、停滞、固執、消耗の各競技状態において、年代による適合度の差の有無や傾向に違いがみられた。これらのことから、スポーツ選手の競技状態を測定する際には、年代を考慮した基準の設定や解釈の工夫が求められることが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-46] 大学生の男女共習体育授業に対する意識と男女平等意識および運動有能感との関連

*金沢 翔一[1]、豊田 隼[2] (1. 山梨大学、2. 東京大学・日本学術振興会)

本研究では、大学生の男女共習体育授業に対する意識構造を明らかにし、男女平等意識および運動有能感との関連を明らかにすることを目的とした。研究１では、大学生の男女共習体育授業に対する意識構造を捉える測定尺度を開発することを目的とした。予備調査は、大学生222名を対象に「男女共習の体育授業に感じることについて入力してください」と提示し、自由記述で回答を求めた。回答を文意ごとにカテゴリー化し25項目の原案を作成した。本調査は、大学生230名を対象に原案について5件法で回答を求めた。分析は、まず天井・床効果がみられた項目を削除し、その後探索的因子分析を行った。その結果、2因子17項目が抽出され、各項目の特徴から第１因子を「肯定的意識」、第２因子を「否定的意識」と命名した。なお各因子のα係数は0.7以上であった。次に大学生252名を対象に確認的因子分析を行った。その結果、適合度指標は、概ね許容できる値であった（χ^2 (119) = 342.00, p<0.01, CFI=0.93, TLI =0.92, RMSEA=0.09 (90% CI [0.08,0.10]), SRMR=0.10）。研究２では、大学生の男女共習体育授業に対する意識構造と男女平等意識および運動有能感の関連性を明らかにすることを目的とした。大学生252名を対象に大学生の男女共習体育授業に対する意識と平等主義的性役割態度スケール短縮版および運動有能感測定尺度との積率相関係数を求めた。その結果、平等主義的性役割態度スケール短縮版では、肯定的意識（r=-0.19, p<0.01）との間に負の相関がみられ，運動有能感測定尺度では、肯定的意識と身体的有能差の認知（r= 0.34, p<0.01）、統制感（r= 0.34, p<0.01）、受容感（r= 0.48, p<0.01）、運動有能感（r= 0.46, p<0.01）との間に正の相関がみられた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-48] ゲーミフィケーションを取り入れた大学教養体育の教育的有効性の実践的検討

運動に対する動機づけと健康意識の変化に着目して

*松浦 佑希[1]、福地 修也[2]、水野 哲也[3] (1. 宇都宮大学　共同教育学部、2. 筑波大学大学院　人間総合科学学術院、3. 東京科学大学大学院 地域・福祉口腔機能管理学分野)

大学体育授業を通して健康づくりや身体活動に対する動機づけを高めることは，公衆衛生的側面から重要な役割を果たすと言われている（木内・橋本，2012）．しかしながら，コロナ禍を経て大学生の身体活動量は低下していることが報告されている（西山ほか，2021）．そこで，本研究では大学体育授業において身体活動に対する動機づけを高める手段として，ゲーミフィケーション（Deterding et al., 2011）に着目し，その要素を取り入れた大学体育授業を実施して，授業前後における活動に対する動機づけや健康への興味・関心の変化について検討を行った．その結果，授業前後で運動に対する内発的動機づけの得点が高まる傾向が認められ，授業前と比較して，運動が好きな者が有意に増加し，さらに運動への意欲も有意に高まった．健康に関連する指標については，健康習慣得点の有意な改善に加え，「授業前と比較して自身の心身の健康に興味を持つようになった」と回答した学生が有意に多かった．その一方で，健康関心度得点は有意な低下が見られた．これらの結果から，運動に対する意欲や動機づけについては，ゲーミフィケーションを取り入れた実技授業によって高まることが示唆された．その一方で，健康への興味関心については，一見矛盾した結果が得られているが，これは各尺度が測定する内容の相違によるものだと考えられる．授業を通じて自身の健康への興味・関心が喚起された一方で，客観的に見直す機会が与えられたことにより，以前は「関心が高い」と自己評価していた学生が，自己の関心度を再定義し，相対的に低く評価した可能性が考えられる．また，健康への興味関心が高まった学生の多くが，その理由として授業内に行われた講義での学びについて挙げており，健康への興味関心を高めるには，実技授業の中で健康に関する講義を組み合わせて行うことの必要性が示唆された．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-50] Transformational Coaching Scaleの日本語版作成と因子構造の検討

*深見 将志[1] (1. 日本大学商学部)

本研究の目的は，Turnnidge＆Côté（2019）の理論に基づいて開発されたTransformational Coaching Scale（TCS）の日本語版を作成し，その因子構造および信頼性を検討することである．近年，コーチがアスリートの競技力のみならず，心理的・社会的発達に与える影響が注目されており，特にTransformational Leadership（TL）は，Idealized Influence（理想化された影響力），Inspirational Motivation（人を鼓舞する動機づけ），Intellectual Stimulation（知的な刺激），Individualized Consideration（個別的配慮）の4つの次元から成るリーダーシップスタイルとして，スポーツ現場においても重要視されている（Bass & Riggio, 2006）．一方で，これまでのTLに関する研究の多くはビジネスや教育の分野を中心に展開されており，スポーツ特有の文脈に即した測定尺度の必要性が指摘される．
そこで本研究では，こうした課題に対応するため，TCSの日本語版を作成し，競技現場への適用可能性を検討することとした．まず，TCS原版を翻訳し，集団競技の運動部に所属する高校生を対象に質問紙調査を実施した．得られたデータに探索的因子分析を行った結果，原版と同様の4因子構造が抽出され，各下位尺度におけるCronbachのα係数も十分な信頼性を示した．これにより，日本語版TCSは，競技現場におけるコーチのTL行動を測定する信頼性の高いツールとなり得ることが示唆された．今後は，確認的因子分析や他尺度との関連検討を通じて，さらなる妥当性の検証を進めていく必要がある．本研究は，日本におけるトランスフォーメーショナル・リーダーシップ研究の発展に貢献する基盤的な研究となることが期待される．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-52] 体育授業における運動技能指導に関する教員の認識

運動技能の指導に動作意識は活用されているのか

*永山 貴洋[1]、髙橋 功祐[1] (1. 石巻専修大学)

ICT機器の普及により映像を活用して運動技能を視覚的に示すこと，学習者が自身の動作を観察しながら学習することが容易になった。しかしながら，ICTを活用した授業では，動作を第３者的に外側から観た映像が用いられることが多く，その映像から体をどのように動かせばよいのか，すなわち動作意識について児童・生徒が理解することは困難である。児童・生徒が経験の少ない運動も扱う体育授業では，動作遂行につながる動作意識についても指導することが望ましい。この問題について現状を把握するために，本研究では，体育授業において教員は動作意識を活用して運動技能を指導しているのか，また運動技能指導において困っていることは何か，運動技能指導に関する教員の認識を明らかにすることを目的とした。調査は，体育授業研究会に参加した教員を対象に実施した。参加者に対してアンケートを配布，調査内容を説明し，参加を承諾した場合のみ回答するように依頼したところ，75名（小学校教員42名，中学校教員33名）から回答が得られた。分析の結果，自身の動作意識を活用している教員は72%（小学校66%，中学校78%）であり，児童・生徒の動作意識を活用している教員は60%（小学校69%，中学校48%）であった。運動技能指導において困っていることで最も多かった記述は，「児童・生徒がイメージを動作遂行に反映できないこと」（16%）で，続いて多かった記述は教員自身が動作を遂行する際の「感覚の表出化」（14%）であった。さらに，「児童・生徒に合わせた言語化」（13%）に悩んでいる記述も多くみられた。以上の結果から，小学校教員，中学校教員は，動作意識を活用して運動技能を指導していると認識しているものの，動作意識の表出化，児童・生徒に合わせた言語化に難しさを感じており，結果的に児童・生徒が動作意識を学習に活用できていない状況にある可能性が示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-54] ジュニアユースサッカーチームにおけるチームビルディングの事例的検討

*松井 花織[1]、伊藤 英之[2] (1. 日本体育大学、2. 國學院大學)

チームスポーツにおいてチームワークはパフォーマンスを向上させるために重要である。チームワークの心理的側面には集団効力感と集団凝集性があり（Carron, 1982）、この2つの概念はチームパフォーマンスと正の相関関係が報告されている。(永尾ほか，2010)したがって、実践現場での運用を考慮した集団効力感と集団凝集性を高めるプログラムの作成はパフォーマンスの向上への寄与が期待される。そこで本研究では、チームで取るべき行動の目標設定や目標達成に向けたグループワークによるチームビルディングプログラム（TBP）が集団効力感および集団凝集性に及ぼす影響を検討することとした。対象者は、サッカーのジュニアユースチームに所属する男性選手 19名（平均年齢12.8土0.7歳）であった。そのうち、13歳以下（U-13）は10名（平均年齢12.2土0.4歳）、14歳以下（U-14)は9名（平均年齢13.3土0.5歳）であった。TBPはチームの行動目標の達成に関するグループワーク形式で構成され、202X年4月～7月にU-13とU-14のそれぞれに月1回の計3回ずつ実施された。プログラムの効果の評価は、集団効力感尺度（Short et al., 2005）と集団凝集性尺度（織田，2007）を用いて行い、対象者にはTBP 前後（4月と8月）に回答を求めた。その結果、U-13においては、集団効力感の下位因子である努力と準備力（p<.05）、忍耐力（p<.01）が有意に高まり、集団凝集性の下位因子である社会的側面に関する集団の一体感（p<.05）がTBP前後にかけて有意に高まった。また、U-14においては、集団効力感の下位因子である準備力（p<.05）がTBP前後にかけて有意に高まった。以上のことから、本研究におけるTBPは、集団効力感および集団凝集性を高める可能性が示された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-56] トラウマを抱えながら生きる

異なる行為形態の対人暴力被害による複雑性PTSDの発現リスク

*豊田 隼[1,2]、尾見 康博[3] (1. 東京大学、2. 日本学術振興会、3. 山梨大学)

指導者による対人暴力の防止を筆頭に、今日、セーフスポーツの実現に向けた動きが学術と社会の双方で加速している。そして近年では、日本においても、対人暴力被害者の精神健康問題の同定を試みる知見が蓄積されつつある。本研究の目的は、国内外の先行研究の課題点を踏まえ、性的暴力の実態とネガティブライフイベントの関与可能性を考慮した上で、いかなる対人暴力の行為形態が心的外傷後ストレス症（PTSD）および複雑性PTSD（CPTSD）の該当リスクを説明するのかを明らかにすることであった。スクリーニング抽出した18歳から30歳までの閾値に基づく対人暴力被害者391名（*M*=25.04, *SD*=3.13）を分析対象とした。本研究は山梨大学大学院総合研究部教育学域研究倫理委員会の承認を得て実施された。個人属性や競技レベル、出来事チェックリスト（ECL：金, 2001）、対人暴力の目撃経験を統制変数、身体的暴力、心理的暴力・ネグレクト、性的暴力の被害経験頻度（VTAQ-Coach：Parent et al., 2019）を独立変数、国際トラウマ質問票（ITQ：Cloitre et al., 2018）に基づくPTSDとCPTSDのカットオフを従属変数としたロバスト標準誤差によるロジスティック回帰分析を行った。その結果、競技レベルやECLの該当有無を統制してもなお、身体的暴力と性的暴力の被害経験頻度がPTSDおよびCPTSDの該当リスクを正方向に説明していた。両モデルの分散説明率は中程度の効果量を示し、多重共線性も認められなかった。これらの結果は、対人暴力の行為形態のうち，特に身体的暴力と性的暴力がトラウマ発現のリスクを独立して高めることを示したとともに、日本では実証知見が極めて乏しかった性的暴力によるトラウマの症状形成への言及を可能にした点で、今後の被害者支援の具体化に寄与すると考えられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-58] 大学新入生における運動習慣が体力に及ぼす直接効果と特性的自己効力感による間接効果

*今野 亮[1] (1. 明治薬科大学)

本研究の目的は，大学新入生を対象に運動習慣が体力に及ぼす直接効果と特性的自己効力感による間接効果について検討することであった．調査内容は，特性的自己効力感尺度，中学，高校，現在における運動習慣の有無であった．体力測定は，新体力テスト6種目が実施された．分析は，まず全ての項目間について相関係数を算出し，相関が認められた変数において重回帰分析を繰り返し行った．次に，そこで得られた結果から有意なパスを抽出してパスモデルを作成し，共分散構造分析を行った．特性的自己効力感を介した運動習慣と体力の因果モデルは，男女ともに適合度は良好であり，運動習慣から体力に対する直接効果，特性的自己効力感による間接効果，総合効果が確認された．性別にみると体力に対して最も影響を及ぼしていたのは，男子は現在における運動習慣，女子は中学における運動習慣であった．以上より，現在における運動習慣，及び中学における運動習慣が体力に対して直接的に影響を与えていることに加えて，特性的自己効力感を介して間接的にも影響を与えていることが示された．男女ともに特性的自己効力感から体力への直接効果も認められ，体力は運動習慣による影響は大きいものの，特性的自己効力感からも影響を受けていることが明らかになった．大学新入生にとって体育授業に代表される教育的介入は，運動継続や体力を高めることの重要性への気づきを得ることや彼ら自身のGSEが向上する機会となることが期待される．したがって，大学側が新入生に対して体育実技授業の履修や身体を動かすことを主としたクラブやサークル活動への参加や学生が自主的に行う運動・スポーツ活動を促していくような働きかけも重要になるといえる．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-60] 受傷した女子大学生アスリートが期待していたサポートと予測していなかったサポートに関する一考察

*安田 貢[1] (1. 山梨学院大学スポーツ科学部)

アスリートは怪我に伴い、競技意欲が低下し、不安や焦燥感を強めてしまうことや受傷から復帰までの時期によるソーシャルサポート希求（サポート提供者とサポート内容）の違いが明らかにされている（鈴木・中込,2013）。しかし、先行研究は質問紙調査であることから受傷選手の詳細なソーシャルサポート希求を把握できているとは言い難い。そこで本研究では練習試合で1ヶ月程度の怪我を負った大学女子サッカー部に所属しているA選手に対して、受傷から復帰までの各期間（受傷段階（1期）、リハビリテーション段階（2期）、復帰段階（3期））にサポート提供者とサポート内容に関する面接調査を行った。その結果、「A選手が期待していたが、提供されなかったサポート」は、1期では怪我をしていないチームメイトからの励ましや心配の声掛けや身体的サポート、2期ではトレーナーからの疲労度に合わせたリハビリメニューの提供、3期ではトレーナーからの再受傷予防のためのトレーニングメニューの提供であった。「A選手は予測していなかったが、提供されたサポート」は、1期では監督からのポジティブな声掛けや両親からの精神的サポート、2期ではコーチや怪我をしていないチームメイトからの精神的サポートやトレーナーからの怪我の進捗状況説明であった。さらに、1期から3期を通して、同時期に怪我を負ってリハビリに励んでいるチームメイトからの精神的サポートも挙げられた。これら結果は、A選手が自らのコンディションや相談事をトレーナーに気軽に伝えられるチーム雰囲気ではなかったことが考えられ、日頃から周囲の他者とコミュニケーションを密に図ることが望まれる。そして、同時期に怪我を負ってリハビリに励んでいる選手からの激励や尊重してくれる精神的サポートは同じ境遇にある選手として競技復帰に向けた原動力になっていった意味づけがA選手になされたことが推察される。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-62] 野球の審判員の心理的課題と対処行動に関する検討

2024–2025年調査からの報告

*西貝 雅裕[1]、来田 宣幸[2] (1. 太成学院大学高等学校、2. 京都工芸繊維大学)

【緒言】スポーツ現場において審判員は、公正な試合運営を担う重要な存在であり、競技者と同様に高度な判断力と心理的安定性が求められる。特にアマチュアスポーツの審判員は年齢や経験、生活背景も多様であり、心理的課題やその対処には個人差が大きい。本研究は、野球審判員を対象に心理的課題とその対処行動の実態を明らかにすることを目的とし、2024年度に発表した研究に2025年2月までの追加データを加えて再分析を行った。【方法】2024年1月～2025年2月に「審判心理的スキル評価尺度」（村上ほか, 2017）を実施した野球審判員358名に対し、「困っていること・心配なこと」「自身の心理面」「心理面の向上・改善の工夫」の3点についてウェブ上で自由記述式質問を行った。【結果および考察】自由記述の分析から、審判活動における困難は大きく二つのカテゴリーに分類された。一つは「年齢・体力」「技術・知識」「心理的側面」といった個人内要因であり、加齢による集中力の低下、判定への不安、過度の緊張、ミスの引きずり、自信の欠如、SNSによる可視化の影響などが挙げられた。もう一つは「人間関係・コミュニケーション」「家庭・仕事との両立」「組織的課題」といった社会的・対人的要因であり、指導者や選手との関係、家庭や職場の理解不足、若手審判の育成などが含まれていた。特に心理的側面では、特に心理的側面に関しては、「緊張・不安」「ミスを引きずる傾向」「自信のなさ」「感情のコントロールの難しさ」「集中力の維持の困難」といった課題が明確に示され、大会規模や観衆の視線、他者評価への敏感さが影響していると考えられた。対処行動としては、「深呼吸」や「ルーティン」「イメージトレーニング」「自己暗示」などの工夫が多く報告され、審判員に対するメンタルトレーニングや個別支援の重要性が示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-64] 大学生アスリートの身体意識と反芻・省察に関する縦断的調査

多変量潜在成長モデルを用いた検討

*堀 彩夏[1]、高井 秀明[1]、篠原 秀典[1]、齋藤 雅英[1] (1. 日本体育大学)

大学生アスリートにおいて、反芻はストレス反応と正の関連、省察はストレス反応と負の関連が示されており（Yamakoshi and Tsuchiya, 2016）、大学生アスリートの心理的適応には反芻の減弱と省察の促進が有効であると考えられる。反芻や省察は比較的安定した特性で、変容させることは困難であると考えられているが（山越・土屋、2017）、反芻の変容を明らかにした研究もある（Haeffel and Hames, 2014）。本研究では、堀ほか（2024）にデータを追加し、潜在成長モデルを用いて身体意識および反芻、省察の変容および関連を検討した。調査対象者である大学生アスリート74名には、4回の調査を2ヶ月の期間をあけて実施し、Rumination-Reflection Questionnaire日本語版（高野・丹野、2008）、Body Awareness Scale（Fujino, 2012）に回答させた。まず各変数における経時的な得点の変化を検討するため、一要因分散分析を行った。その結果、身体症状と反芻では一部の時期に有意な差が認められ、身体症状や反芻の得点は変容する可能性が示された。次に、身体症状、身体感覚への意識、反芻、省察の変化について潜在成長モデルによって切片と傾きを推定した。その結果、切片と傾きの相関係数は有意ではなかった。この結果を踏まえ、身体症状と反芻、身体感覚への意識と省察の経時的な影響を検討するため、それぞれの切片と傾きとの関連を検討した。その結果、身体症状と反芻では、傾き同士の共分散が有意であり、身体症状の変化量が大きいほど反芻の変化量も大きいことが明らかとなった。以上のことから、身体症状や反芻は変容することが明らかとなり、身体症状への意識が高まるほど反芻が増強する可能性が示された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-66] 大学生アスリートの認知的方略と心理的能力との特徴
J-PATEAを用いて

*藤本 太陽[1] (1. 大阪産業大学)

競技スポーツにおいて、「心・技・体」の調和が競技力発揮に不可欠であり、特に心理面は重要な要素とされている（石倉, 2008）。こうした競技場面で必要とされる心理的能力の強化には、メンタルトレーニング（MT）が用いられてきた。MTは、不適応な思考や行動、情動反応を適応的なものへと修正・変容させることを目的としている。しかし近年では、個人の望まない思考に意識を向けて変容を図る行為自体が、かえって不適応な状態を活性化させる逆説的効果をもたらす可能性が指摘されており（Wegner, 1994；木村, 2004）、個人の特性に応じた支援の必要性が高まっている。こうした個人特性の一つとして、認知的方略が注目されており、スポーツ領域においてもその有用性が検討されている（藤本，2023；高橋，2023）。しかし、認知的方略と心理的能力との関連については、十分に解明されていない。そこで本研究では、大学生アスリートを対象に、認知的方略と心理的能力との関連を明らかにすることを目的とした。調査対象者は大学生アスリート281名であり、調査内容は認知的方略尺度（外山，2015）、JISS競技心理検査（J-PATEA）（立谷ほか，2020）であった。分析の結果、認知的方略は悲観主義群（RP）、方略的楽観主義群（SO）、非現実的楽観主義（UO）、防衛的方略群（DP）の4群が抽出された。続いて、各群と心理的能力の特徴については、SO群とDP群は「自己コントロール」「目標設定」「自信」「自己分析」など多くの因子でRP群、UO群よりも高得点を示し、特にSO群は総合得点でも最も高い得点を示した。一方、UO群は全体的に得点が低く、心理支援の優先対象となる可能性が示唆された。

以上のことから、大学生アスリートの心理的競技能力を高めるには、認知的方略に基づいた心理支援が重要であることが明らかとなった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-68] パリ2024大会における村外サポート拠点での心理サポート利用に関する調査

*柄木田 健太[1]、冨永 哲志[1]、大西 壮流[1]、立谷 泰久[1]、本郷 由貴[1] (1. ハイパフォーマンススポーツセンター　国立スポーツ科学センター)

日本スポーツ振興センターでは2024パリオリンピック・パラリンピック大会において村外サポート拠点を開設し、選手村外での他分野横断のトータルサポートを行った。本調査では、2024パリオリンピック・パラリンピック大会に出場した選手を対象にアンケート調査を行い、大会期間を通じての心理サポートのニーズと今後の心理サポートへの要望を抽出することを目的とした。調査は2024年10月～2025年1月、パリ2024大会に出場した日本人選手を対象に、Webアンケートを実施した。分析対象は123名（男性61名、女性62名、平均年齢28.70±8.39歳）であった。その結果、大会期間中における心理サポートの利用は8件であった。心理サポートを利用しなかった理由を尋ねたところ、回答者の約6割が「利用する必要がなかった」と回答した。一方で「利用手続きがわからなかった」、「利用できることを知らなかった」や「心理サポートで何をするのか知らなかった」の回答が約2割を占めており、心理サポートの利用方法、サポート内容の周知の不足が明らかとなった。さらに「利用することに抵抗があった」の回答も見られた。心理サポートへの要望の回答においては、大会前からの継続した心理サポートの必要性や大会中に何ができるのかといったサポート内容の周知、また大会終了後の心理サポートの必要性などが挙げられた。加えて、パラ競技においては伴走者など周囲のスタッフへの心理サポートの要望も挙げられた。これらの結果から、平時から心理サポートを継続して行うことの重要性が示された。また、具体的に心理サポートでどのようなサポートが受けられるのかというサポート内容の周知・教育の必要性が示された。心理サポートの認知を広げることで、大会前からの心理サポートに繋がり、選手やチームとの間のラポールを形成することで、大会期間中に必要なサポートが展開できると考えられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-70] サッカーの公式試合に伴うレフェリーの心理的変化

*高井 秀明[1] (1. 日本体育大学)

レフェリーは、競技者や指導者とは異なる固有のストレスに晒されていることが予想されるが、実際の公式試合に伴う心理的な特徴について検討した研究はあまり見受けられない。そこで、本研究においては、サッカーのレフェリーを対象とし、公式試合の前後でどのような心理的変化がもたらされるのかについて調査し、その特徴を明らかにすることとした。調査対象者は、サッカーの公式試合を担当したレフェリー112名（男性104名、女性8名、20.08±1.07歳）であった。なお、調査対象者は、主審が32名、副審が58名、第4審判が22名であった。試合前後には、POMS2（Profile of Mood States 2nd Edition）の心理尺度の7尺度とネガティブな気分状態を総合的に表すTMD得点に回答させた。また、試合後には「審判活動」「試合での困難さ」「試合でのパフォーマンスの発揮」「試合での気持ちのコントロール」「試合での冷静さ」「試合での正しい状況判断」の7項目について5件法で自己評価させた。例えば、データの分析では、レフェリーの属性（主審、副審、第4審判）から試合前後でのPOMS2の各尺度とTMDの得点を比較検討するため、2要因の分散分析（属性：主審、副審、第4審判×タイミング：試合前、試合後）を行なった。その結果、属性の要因による違いはみられなかったが、タイミングの要因では違いがみられた。緊張−不安（TA）と活気−活力（VA）の得点は試合前から試合後にかけて有意に低下した。また、疲労−無気力（FI）の得点は試合前から試合後にかけて有意に高まった。したがって、本研究によって属性に関係なく、レフェリーはストレスに晒されていることが示された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-72] グループでのダーツ実施による心理的・対人的効果

個人戦・チーム戦形式における気分と親密度の変化

*吉武 誠司[1]、酒井 佑[2]、坂入 洋右[3] (1. 目白大学短期大学部、2. 筑波大学人間総合科学学術院、3. 常葉大学教育学部)

ダーツは年齢や性別を問わず誰でも気軽に楽しめるスポーツであり、共通の的を使用し、互いに声を掛け合いながら進行するという特性をもつ。そのため、ダーツ実施によりポジティブな気分になり、かつ一緒に行う人との親密度を高められる可能性がある。そこで本研究では、グループでの個人戦およびチーム戦形式におけるダーツ実施が心理的および対人的側面に与える影響の検討を目的とした。
対象は大学生90名（男性62名、女性28名、平均年齢18.28±0.50歳）で、個人戦形式に38名、チーム戦形式に52名が参加した。いずれの形式も会話をしたことがない相手とペアを組み、座位での話し合い後にダーツを実施した。実施前後の気分（快適度・覚醒度）の変化を、二次元気分尺度（Sakairi et al., 2013）から評価し、さらにペアの親密度は心理的・身体的距離の変化量から評価した。心理的距離はIOS尺度（Aron et al., 1992）、身体的距離は対面での座位話し合い時の椅子間距離を指標とした。
その結果、個人戦・チーム戦のいずれにおいても、ダーツ実施後に快適度（$p<.05$）および覚醒度（$p<.001$）の有意な向上が認められ、快適な興奮が生じることが示された。また、ペアの心理的距離は有意に縮まり（$p<.001$）、身体的距離も有意に縮小していた（$p<.01$）。特にチーム戦形式においては、自然な会話や役割分担といった協働的なやり取りが促され、身体的距離による親密度のさらなる向上が示唆された（$p<.05$）。加えて、ダーツのパフォーマンス向上も確認され、チーム内での協力関係が親密度のみならずパフォーマンス発揮にも良好な影響を及ぼす可能性が示された（$p<.05$）。
以上の結果からダーツ実施が快適度を高めることと、一緒に行う人との親密度を高めることに有効であり、特にチーム形式での実施によりその効果がより一層高まる可能性が示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-74] 複数選択肢下での適切な意思決定と正確な運動出力の両立を支える運動制御方略

サッカーのインサイドキックを対象として

*三宅 麟太郎[1]、中本 浩揮[2] (1. 鹿屋体育大学大学院、2. 鹿屋体育大学)

オープンスキル競技（例：サッカー）では、運動遂行中であっても時々刻々と変化する環境に伴い最適な選択肢が変化する中で、適切な意思決定と正確な運動出力の両立が求められる。そのため、熟練者は運動遂行中でも選択肢を柔軟に切替可能な運動制御を採用するはずである。この切替可能な運動制御は、複数の選択肢に対応可能な運動準備段階の共通動作を利用することで実現され、厳しい時間制約下でも判断時間を延長できると考えられる。そこで、本研究では、運動準備局面に着目し、未来事象が不確定な環境下において運動出力の柔軟な切替を可能にする運動制御方略を明らかにすることを目的とした。
実験参加者は男子大学サッカー選手10名とした。実験課題は、右前方（R）および左前方（L）に設置された標的を狙ったインサイドキックとし、キック方向が事前に確定している「確定条件（C）」と、キック動作中にキック方向が変更される可能性がある「不確定条件（U）」の2条件を設定した。試技中の身体およびボールの運動を光学式動作分析装置で計測し、体幹・下肢のキネマティクスを算出した。なお、左利きの選手については、得られた座標値の左右成分を反転させ、右利きの選手として分析を行った。
主要な結果として、軸脚踏み込み時の骨盤の姿勢はLC条件と比較して他の3条件（RC、RUおよびLU条件）が有意に右回旋位であった（all, $p < .001$）。右脚でのキック動作では軸脚接地後、蹴り脚のスイングに伴い骨盤が左回旋するため、通常の運動準備では右方向の標的への運動修正が困難となる。したがって熟練者は、スイングによる骨盤の左回旋を考慮して踏み込み時に右回旋位の姿勢を取ることで切替可能な制御を実現していたと考えられる。このような切替可能な運動準備は、動的かつ時間制約のある環境下において、正確な意思決定を実現するために判断をぎりぎりまで遅らせることを可能にすると思われる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-76] フェイント対処時の脳内情報処理

電流源密度推定法を用いた運動準備電位による検討

*木村 勇大[1]、正木 宏明[2] (1. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科、2. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

オープンスキルスポーツでは相手のフェイント動作に対して素早くかつ正確に反応する必要がある。本研究ではフェイント対処時の脳内情報処理を明らかにするため偶有性を含む課題遂行時の反応時間(RT)と事象関連電位(ERP)を測定した。

実験参加者はモニタ中央に呈示された三角形の向き(上・下)に対して、縦配置のキーを使って左右第3指によるキー上げ反応を行った。刺激は上下方向の三角形が交互に呈示されたが、フェイント刺激として直前刺激と同方向の三角形が20%の確率で呈示された。RTは刺激呈示からキー上げまでを測定した。ERPは電流源密度推定法を適用しC3'およびC4'電極を分析対象とし、反応前50 msの対側陰性電位と同側陽性電位の平均振幅を測定した。いずれもフェイント試行に対する時系列変化を観察するためフェイント試行(N0試行)とフェイント前1〜3試行(N-1~-3試行)を分析した。RTはフェイント試行の成否×時系列の2要因分散分析、ERPは成否、時系列、左右半球の3要因分散分析に供した。

RTは成否と時系列との交互作用が有意であった($F = 379.92$, $p < .001$)。単純主効果検定の結果、N-3~0試行の全てで失敗試行よりも成功試行で有意に遅延した。また成功試行ではN0はN-3、N-2、N-1より遅延し、失敗試行ではN0はN-3、N-2、N-1より短縮していた。ERPには2次の交互作用が有意であった($F = 3.56$, $p = .021$)。半球ごとに成否×時系列の単純交互作用検定を行ったところ対側陰性電位に成否と時系列との交互作用が有意であった。N0の電位は成功試行よりも失敗試行で減衰し、またN-1、N-2よりも減衰していた。このように失敗試行(N0)では反応直前（50 ms前）に反応肢と対側運動野で急速な賦活停止が生じていた。一方、同側の抑制機能はフェイント対処に寄与しないことが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

2025年8月29日(金) 11:15 ~ 12:15 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／体育心理学

[3b141-79] 体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-78] スポーツ版不合理な信念尺度の再検討

*伊藤 英之[1]、土屋 裕睦[2] (1. 國學院大學、2. 大阪体育大学)

不合理な信念は、ネガティブな思考や感情、行動を生起させる原因であることが指摘されており、選手の競技パフォーマンスだけでなく競技生活にも影響しうるものと認識されている。これまで、不合理な信念を評価するための心理尺度の作成は試みられているものの、研究や心理サポートにおいて広く活用されているものはみられない。現状では、これまで作成された尺度の妥当性や信頼性に課題がある可能性が考えられ、まずは既存の尺度を再検討する必要があると思われる。そこで、本研究は、伊藤ほか（2008）のスポーツ版不合理な信念尺度（SIBT）の再検討をすることを目的とした。202X年12月および202X＋1年5月に、3つの大学（関東2大学、関西1大学）にて、競技スポーツを行っている大学生392名を対象に調査を実施した。質問項目は、SIBTの作成の手続きにならい、森ほか（1994）が作成したJIBT-20の20項目を、スポーツ場面に適応する表現に改変して作成した。分析は、質問項目の天井・床効果の有無を検討した後、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い、Cronbachのα係数を算出した。その結果、JIBT-20における「自己期待」の1項目、「依存」の4項目、「倫理的非難」の2項目、「問題回避」の4項目、「無力感」の1項目の計12項目が、天井・床効果や因子負荷量による質問項目の採用基準を満たせず削除され、最終的に3因子・8項目（「自己期待（3項目、α=.731）」、「無力感（3項目、α=.670）」、「倫理的非難（2項目、α=.486）」）が抽出された。以上の結果より、SIBTは、本来の不合理な信念尺度のモデルを反映する因子構成がなされなかったことが示された。このことより、今後、有用な尺度作成を目指し、スポーツ選手特有の不合理的信念を探求する必要があると考えられる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-01]

Toward indicator-driven governance: Hybrid AHP applications in sustainable community sports policies

indicator-driven governance for sustainable community sports policies

*WENBIN LIN[1] (1. Taipei National University of the Arts)

[07発-ポ-02]

児童における身体組成と下肢の運動機能の関連性

*髙橋 功祐[1] (1. 石巻専修大学)

[07発-ポ-03]

幼児の着地衝撃緩衝能に関する予備的研究

*多胡 陽介[1] (1. 聖泉大学)

[07発-ポ-04]

幼児の運動能力と家庭における運動あそびの頻度および内容との関連

走・跳・投運動に着目して

*濱長 勇馬[1]、髙本 恵美[2] (1. 大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科、2. 大阪体育大学)

[07発-ポ-05]

中学野球選手における補食摂取が身体づくりに及ぼす影響

*笹原 千穂子[1] (1. 明星大学)

[07発-ポ-06]

習慣的なトランポリン運動経験と運動調節能力・バランス能力の関連性

*小板橋 京汰[1]、吉藤 恵里子[1]、青木 和浩[2]、河村 剛光[2] (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部)

[07発-ポ-07]

新体力テストからみた中学生の誕生月別体力推移の分析

相対年齢効果に着目して

*木戸 大貴[1]、吉川 鷹吏[1]、佐藤 智樹[1]、大島 秀武[2] (1. 京都教育大学大学院、2. 京都教育大学)

[07発-ポ-08]

中学生における運動嗜好と体力レベルの関係

学年別傾向の検討

*佐藤 智樹[1]、木戸 大貴[1]、吉川 鷹吏[1]、大島 秀武[2] (1. 京都教育大学大学院、2. 京都教育大学)

[07発-ポ-09]

幼児の簡便な運動能力評価ツールSMC-Kidsの結果票作成システムの開発

*香村 恵介[1]、出村 友寛[2]、髙橋 功祐[3]、小椋 優作[4]、松浦 稜[5]、喜屋武 享[5,6]、縄田 亮太[7] (1. 名城大学、2. 仁愛大学、3. 石巻専修大学、4. 中部学院大学短期大学部、5. 琉球大学、6. 京都大学、7. 愛知教育大学)

[07発-ポ-10]

発育発達を考慮した体格指標の検討

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

*石原 勇次郎[1]、宇野 直士[2]、新美 尚行[3]、松田 晃二郎[4] (1. 岡山理科大学、2. 山陽小野田市立山口東京理科大学、3. 九州国際大学、4. 城西大学)

[07発-ポ-11]

高這い姿勢の幼児が手で体を支える運動指導方法の開発

*佐近 慎平[1]、中曽根 裕[2]、中井 聖[3]、金子 勝司[4] (1. 新潟医療福祉大学、2. 仙台青葉学院短期大学、3. 大阪電気通信大学、4. 大阪体育大学)

[07発-ポ-12]

大学生の主観的健康感と体力レベルおよび生活習慣との関係

*吉川 鷹吏[1]、木戸 大貴[1]、佐藤 智樹[1]、大島 秀武[2] (1. 京都教育大学大学院、2. 京都教育大学)

[07発-ポ-13]

トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験に関する大規模調査（1）

単純集計による実態把握

*篠原 俊明[1]、長野 康平[2]、堀内 亮輔[3]、中村 和彦[4] (1. 共栄大学、2. 比治山大学短期大学部、3. 東京女子体育短期大学、4. 山梨大学)

[07発-ポ-14]

トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験に関する大規模調査（3）

性差による検討

*長野 康平[1]、篠原 俊明[2]、堀内 亮輔[3]、中村 和彦[4] (1. 比治山大学短期大学部、2. 共栄大学、3. 東京女子体育短期大学、4. 山梨大学)

[07発-ポ-15]

幼児期における国際交流経験は記憶を通じたSES向上につながるか

南アフリカとの身体活動・体験活動を通して

*山﨑 幸歩[1]、村山 敏夫[1]、樺澤 茉宝[1]、亀岡 雅紀[2] (1. 新潟大学、2. 新潟医療福祉大学)

[07発-ポ-16]

トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験に関する大規模調査（2）

マルチスポーツ経験による検討

*堀内 亮輔[1]、篠原 俊明[2]、長野 康平[3]、中村 和彦[4] (1. 東京女子体育短期大学、2. 共栄大学、3. 比治山大学短期大学部、4. 山梨大学)

[07発-ポ-17]

幼児の日常活動における運動遊びと身体活動動作

保育者調査から

*佐々木 玲子[1]、石沢 順子[2] (1. 慶應義塾大学、2. 白百合女子大学)

[07発-ポ-18]

大学1年生アスリートのキャリア観とキャリア支援の実態 －個別対話の有用性に着目して－

1対1の対話によるキャリア形成支援の可能性を探る －競技生活からワークキャリア・ライフキャリアへの拡張－

*竪石 亜也子[2]、小泉 朝香[3]、山口 香[1] (1. 筑波大学、2. アデコ株式会社、3. 株式会社トリデンテ)

[07発-ポ-19]

小学校教諭養成課程のシラバスから見た運動遊びの位置づけと幼児期との接続に関する教授内容

*吉田 伊津美[1] (1. 東京学芸大学)

[07発-ポ-20]

セーリング競技における帆走に関する宣言的知識の艇種による違いについて

*坂口 英章[1]、青柳 領 (1. 日本経済大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

[07発-ポ-21]

妙高市産学官連携による幼児の数学的な能力に着目した自然体験型運動あそびプログラムの開発と実践

*樺澤 茉宝[1]、木下 昭二[2]、村山 敏夫[3] (1. 新潟大学大学院、2. ミズノ株式会社、3. 新潟大学)

[07発-ポ-22]

５歳児の足圧中心動揺における試行間信頼性

*溝畑 潤[1]、青木 敦英[2]、秋武 寛[3]、三木 伸吾[4]、田路 秀樹[2] (1. 関西学院大学、2. 芦屋大学、3. 西南学院大学、4. 島根大学)

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-01] Toward indicator-driven governance: Hybrid AHP applications in sustainable community sports policies

indicator-driven governance for sustainable community sports policies

*WENBIN LIN[1] (1. Taipei National University of the Arts)

Introduction: This study investigates the application and integration of Multi-Criteria Decision-Making (MCDM) theory and the Analytic Hierarchy Process (AHP) in the development of sustainable sports policies in Taiwan. In the context of 21st-century sports governance—marked by increasing complexity, diverse stakeholder values, and demand for participatory approaches—MCDM provides a robust, flexible, and quantitative framework to support policy decisions at both interdepartmental and multi-level scales. Methods: Using the “Sports Village Certification” program initiated by Taiwan’s Sports Administration, Ministry of Education as a case study, we employed AHP to develop a structured and localized indicator system. The AHP model incorporated dimensions such as sports organizations, program participation, facility availability, and promotional strategies. To enhance methodological efficiency and reduce expert judgment load, we integrated three hybrid AHP approaches: SWARA-AHP, BWM-AHP, and VAHP. Results: The integration of hybrid AHP methods addressed the limitations of traditional AHP, particularly in reducing cognitive burden and improving consistency ratio management. These approaches provided stable, efficient evaluation outcomes and reinforced the validity of community-based sports policy assessment frameworks. Conclusion: We presents a theoretically grounded and practically oriented framework for sustainable sports policy analysis. The findings support the advancement of community-centered governance, indicator-driven evaluation systems, and scientifically informed decision-making. The integrated MCDM–AHP model offers valuable insights for future policy planning in localized and participatory sports development.

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-02] 児童における身体組成と下肢の運動機能の関連性

*髙橋 功祐[1] (1. 石巻専修大学)

【目的】本研究では，児童の立ち上がり動作の際に発揮される筋力や素早さ，安定時間等の下肢の運動機能に着目し，それらと脂肪量や徐脂肪量等の身体組成との関連性について明らかにすることを目的とした。【方法】本研究の対象は，M県I市内の小学校9校の1年生から6年生に在籍する958名（男子504名，女子454名）の児童であった。身体組成は，タニタ社製体組成計MC-780A-N（マルチ周波数８電極BIA方式）を用いて測定した。項目は，体重，筋肉量，体水分量，推定骨量，除脂肪量，体脂肪率および体脂肪量，であった。得られた結果から，タニタ（2009）の基準に準拠し，「肥満傾向児」，「標準児」，「痩身傾向児」に分類した。運動機能の測定は，タニタ製の運動機能分析装置ザリッツ（BM-220）を使用した。項目は，筋力（F/w），素早さ（RED/w），安定時間（Stable Time），左右方向変動値（Vx），荷重変動値（Vw），左右動揺（Vx/Vw），であった。身体組成と運動機能との関連性を検討するために，ピアソンの積率相関係数を算出した。さらに，「肥満傾向児」「標準児」「痩身傾向児」の体格分類の違いによる運動機能の関連性を検討するために，一元配置分散分析並びに多重比較検定を実施した。【結果】ピアソンの積率相関係数を算出した結果，男女ともに，脂肪量と F/w，Stable Time，Vw，Vx/Vwとの間，筋肉量とStable Time，Vw，Vx/Vwとの間に有意な関連性がみられた。また，一元配置分散分析の結果，男子ではF/w，Stable Timeとの間に，女子ではRED/w，Stable Time，Vx/Vwに有意な主効果が認められた。多重比較検定の結果，男子ではF/w，Stable Timeで，女子ではRED/w，Stable Time，Vx/Vwで有意な平均値の差が確認された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-03] 幼児の着地衝撃緩衝能に関する予備的研究

*多胡 陽介[1] (1. 聖泉大学)

子どもの着地動作は、跳ぶことに先立って発達する重要な基本的動作の一つである。高所からの着地動作において、子どもは成人に比べて身体に受ける衝撃力が大きく、衝撃を緩衝する能力（着地衝撃緩衝能）が十分に発達していないことが報告されている。しかし、幼児や小学生児童を対象とした着地衝撃緩衝能の研究は、1990年以降、本邦では見当たらず、運動不足や体力低下が指摘されている現代の子どもの着地衝緩衝能の発達程度は明らかでない。そこで、本研究は横断的な調査を行う前の予備的な研究として年長児の幼児を対象に着地衝撃緩衝能を測定した。対象は年長児の幼児24名であった。複数回の練習を行った後、40 cm（動作意識なし）、40 cm（動作意識あり）、60 cmの高さの順で巧技台から2回ずつ飛び下りるよう指示した。着地時にはフォースプレートを用いて、体重当たりの鉛直最大床反力と衝撃緩衝能（体重当たりの鉛直最大床反力／鉛直最大床反力までの時間）を測定した。分析は、性別（男児・女児）、生まれ月（4〜9月生まれ・10〜3月生まれ）、動作意識の有無（フワッと柔らかく着地することへの意識）の観点よりt検定を用いて有意差を検証した。結果については、学会発表時に報告する。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-04] 幼児の運動能力と家庭における運動あそびの頻度および内容との関連

走・跳・投運動に着目して

*濱長 勇馬[1]、髙本 恵美[2] (1. 大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科、2. 大阪体育大学)

子どもの体力・運動能力の低下が長期的に続いており（スポーツ庁, 2024；森ら, 2018）、背景には、遊び場の減少、共働き家庭の増加、デジタル機器の普及など生活環境の変化があるとされている。こうした変化により、幼児の身体活動の機会は家庭での過ごし方に左右されやすく、家庭での運動あそびの重要性は複数の先行研究で指摘されている（阪江ら,2020；大和,2014；香村ら,2011）。家庭での運動あそびに関する頻度の研究で、森ら（2011）は、保護者が子どもと遊ぶ頻度や家庭での運動経験が、幼児の運動能力の発達に関係していることを報告しており、家庭における日常的な遊びの機会の多さが運動能力に影響を与える可能性が示されている。また、阪江ら（2020）は、自然あそびや製作あそびなどの遊びの頻度が高い幼児は握力や投能力といった体力・運動能力において有意な関連を示すことを明らかにしている。一方、遊びの内容に着目した研究では、大和（2014）は、親の遊びへの積極的な関与が幼児の跳ねる・よじ登るなどの動的な姿勢制御を伴う遊び機会の多さと関連していることを報告している。また、鈴木ら（1973）が、日常における遊びの傾向が動的遊び中心か静的遊び中心かによって運動能力に差が生じることを報告しており、動的な遊びを中心とする幼児はより高い運動能力を示すとしている。こうした先行研究を踏まえ、本研究では家庭における運動あそびの頻度および内容と、幼児の基本的な運動能力（走・跳・投）との関係を検討した。対象は3〜5歳の幼児131名（男児59名、女児52名）とし、25m走、立ち幅跳び、およびテニスボール投げの記録を測定した。保護者には家庭で実施している遊びの種類（ジャンプ遊び、ボール遊びなど）とその頻度について質問紙調査を行った。得られたデータに記述統計を行い、相関分析、t検定または一元配置分散分析により検討した。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-05] 中学野球選手における補食摂取が身体づくりに及ぼす影響

*笹原 千穂子[1] (1. 明星大学)

【目的】本研究では、硬式野球チームに所属する中学野球選手を対象に、プロテインまたはプロテインの代替品摂取が体組成や野球に関連する体力要素への影響を明らかにすることを目的とした。【方法】被験者は東京都内硬式野球チームに所属する中学2年生34名を対象とした。プロテイン群12名、乳製品群11名、対照群11名の3群に分け、週3回3週間、練習終了後に対象飲料（プロテイン，乳飲料，水）を摂取した。介入前に食事調査、プロテインに関するアンケートを行い、介入前後に体重・体組成、体力テストの測定を行った。体力テストは、握力、塁間走、一周走、背筋力、反復横跳び、腹筋力、球速、投球回転率の計8項目とした。アンケート結果はクロス集計表にまとめ、X^2検定を行った。体重・体組成、体力テストの結果は介入前後と群別の平均値の比較は二元配置分散分析を行い、食事調査の群別の平均値の比較は一元配置の分散分析を行った。【結果】アンケート調査の「プロテインを飲みたいと思いますか」に対する回答で、プロテインを週2回飲んでいる選手は「飲みたい」、週3回以上飲んでいる選手は「すごく飲みたい」と思っている傾向がみられた。全ての群で筋量と骨量が増加し、骨量はプロテイン群、乳製品群、対照群の順番に増加が大きい傾向がみられた。反復横跳びではすべての群で増加し、プロテイン群、乳製品群、対照群の順番に大きい増加がみられた。食事調査では乳製品群で炭水化物の摂取が少ない傾向にあった。本研究の全ての群でカルシウム摂取量が不足しており、プロテイン群は葉酸が推奨量を満たしておらず、補食摂取により補えた可能性が推察された。【結論】本研究では、中学野球選手を対象にプロテインまたは乳製品を摂取した結果、骨量や反復横跳びなどの値の向上がみられ、日常の食生活で不足している栄養素をプロテインまたはプロテインの代替品で摂取することが有効と考えられた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-06] 習慣的なトランポリン運動経験と運動調節能力・バランス能力の関連性

*小板橋 京汰[1]、吉藤 恵里子[1]、青木 和浩[2]、河村 剛光[2] (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部)

【目的】短期間のトランポリン運動介入は子どもの運動調節能力・バランス能力の向上に寄与することが示唆されている。しかし、身体機能の発達が著しい時期における長期の習慣的なトランポリン運動経験の影響に着目した研究は乏しい。よって本研究は子どもにおける習慣的なトランポリン運動経験が運動調節能力、バランス能力に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。【方法】対象はトランポリンクラブに通う64名(男子35名, 女子29名 10.1±2.0歳)であった。測定項目は、バランス能力として閉眼片脚立ちテストおよびYバランステスト（YBT）を実施した。YBTでは、片脚立位（支持脚）から3方向への非支持脚での最大リーチ距離を測定し、脚長で正規化した値を各方向で算出した。また、3方向の正規化されたリーチ距離から算出される複合スコアも用いた。運動調節能力の評価では、立ち幅跳びと垂直跳びを使用し、最大努力での跳躍に対して主観的に半分の努力だと思う跳躍を各3回実施させた。各跳躍について、最大跳躍に対する相対値（%）から50%を減じた誤差を絶対値化し、3回の平均誤差（%）を評価指標とした。分析は、経験年数により2年未満（短期経験群 n=21）と2年以上（長期経験群 n=43）に群分けし、各項目の群間比較には共分散分析(共変量:性別・年齢)を実施した。【結果】YBTの全評価項目および閉眼片脚立ちテストには有意な群間差を認めなかった。運動調節能力では、立ち幅跳びにおいて短期経験群（平均誤差：24.4±9.5%）と長期経験群（平均誤差：17.8±8.8%）に有意な群間差が認められた。垂直跳びにおいても、短期経験群（平均誤差：19.6±10.3%）と長期経験群（平均誤差：13.4±7.1%）に有意な群間差が認められた。【まとめ】長期の習慣的なトランポリン運動経験が子どもの運動調節能力向上に寄与することが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-07] 新体力テストからみた中学生の誕生月別体力推移の分析
相対年齢効果に着目して

*木戸 大貴[1]、吉川 鷹吏[1]、佐藤 智樹[1]、大島 秀武[2] (1. 京都教育大学大学院、2. 京都教育大学)

本研究は、中学生における体力の発達と誕生月の関係、特に「早生まれ（1〜3月生まれ）」の生徒に焦点を当て、体力テストの結果に相対年齢効果（RAE: Relative Age Effect）が見られるかを検討したものである。学年制を採用する日本の教育制度では、同学年内で最大11か月の発育差があり、誕生月によって身体能力に差が生じることが知られている。これまで、小学生の段階からすでに誕生月による体力差が確認されており、特に早生まれの児童は握力や50m走などで遅生まれに比べて不利な傾向があることが報告されている。このような差は中学・高校と進学する中で競技成績や選抜に影響を与え、結果として、全国大会出場選手の多くが相対的に年齢の高い、いわゆる遅生まれの選手で占められていることも明らかになっているが、一般中学生の縦断的な体力の変化とRAEの関係を検討した研究は少ない。
本研究では、中学校に在籍する男女の生徒を対象に、毎年行われている新体力テストの8項目（握力、上体起こし、長座体前屈、反復横跳び、持久走、50m走、ハンドボール投げ、立ち幅跳び）の３年間のデータを分析し、誕生月と体力の関係を明らかにした。誕生月は4つのグループに分け、特に早生まれの生徒の体力傾向に着目した。
結果として、中学1年生の段階で、女子には有意な相対年齢効果は見られなかったものの、男子では長座体前屈と反復横跳びを除く6項目で相対年齢効果が確認された。中でも握力・50m走・立ち幅跳びの3項目は3年間を通して継続して差が存在し、早生まれの男子生徒が一貫して低い成績を示した。一方で、その他の項目では学年が進むにつれてその差は縮小傾向にあった。
これらの結果は、体格差や筋力差によって早生まれの生徒が運動能力で劣って評価される可能性を示しており、運動への苦手意識や体育嫌いにつながるおそれがあることが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-08] 中学生における運動嗜好と体力レベルの関係

学年別傾向の検討

*佐藤 智樹[1]、木戸 大貴[1]、吉川 鷹吏[1]、大島 秀武[2] (1. 京都教育大学大学院、2. 京都教育大学)

近年、子どもの体力低下が社会的な課題として注目されており、とりわけ運動を好まない、いわゆる「運動嫌い」の子どもたちの増加が指摘されている。小学生を対象とした先行研究において、体力レベルが低いグループでは運動有能感、すなわち「自分は運動が得意だ」と感じる感覚が低い傾向が示されている。また、運動有能感が低いことは、運動に対する苦手意識や消極的態度を生む要因ともなり、結果的に体力の低下につながるという悪循環が報告されている。そのため、心理的側面と体力との関係性をより長期的な視点から明らかにすることが求められている。そこで本研究では、中学1年生から3年生までの生徒を対象として、運動嫌いと体力レベルとの関係性を明らかにすることを目的とした。対象は、中学1年生133名、2年生127名、3年生120名とし、新体力テスト（握力、上体起こし、長座体前屈、反復横跳び、20mシャトルラン、50m走、立ち幅跳び、ハンドボール投げ）実施するとともに、運動に対する好意度を質問紙によって調査した。その結果、運動やスポーツをすることが「嫌い」または「やや嫌い」と回答した生徒の割合は、男子で16%、女子で30%であったことから、特に女子生徒に着目して分析を行った。運動やスポーツをすることが「好き」または「やや好き」と回答した生徒を高嗜好群、「嫌い」または「やや嫌い」と回答した生徒を低嗜好群として分類した結果、1年生では、上体起こし、20mシャトルラン、50m走、ハンドボール投げの４項目において両群間に有意な差が認められた。2年生では、反復横跳び、立ち幅跳びを加えた6項目において、3年生では、全8項目において有意な差が認められた。以上の結果より、運動に対する好き嫌いが学年の進行とともに体力レベルに顕著に表れることが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-09] 幼児の簡便な運動能力評価ツールSMC-Kidsの結果票作成システムの開発

*香村 恵介[1]、出村 友寛[2]、髙橋 功祐[3]、小椋 優作[4]、松浦 稜[5]、喜屋武 享[5,6]、縄田 亮太[7] (1. 名城大学、2. 仁愛大学、3. 石巻専修大学、4. 中部学院大学短期大学部、5. 琉球大学、6. 京都大学、7. 愛知教育大学)

幼児期の運動能力は、健康のみならず、認知機能や学習の基盤にも影響を与える重要な指標である。しかし、保育現場における運動能力測定の実施率は依然として低い。そこで我々は、特別な用具や広いスペースを必要とせず、短時間で実施可能な簡便な測定法「Simple Motor Competence-check for Kids（SMC-Kids）」を開発した。SMC-Kidsは、10m折り返し走と紙ボール投げの2項目から構成されており、3〜6歳の幼児1650名（7県32園）のデータを基に、年齢別・性別のパーセンタイル基準値が作成されている。本研究では、SMC-Kidsを保育現場で効果的に活用するため、測定データの管理・評価・共有を支援するExcelマクロによる結果票作成ツールを開発した。仕様の検討には、測定経験のある幼稚園教諭2名および子どもの身体活動・運動に関する研究者7名との意見交換を踏まえた。ツールは、個人・クラス・学年・園全体の各単位で結果票を自動生成できる。個人結果票では、複数時点の測定結果から運動発達の推移を視覚化できるとともに、結果票を見て保護者の関心が高まった際に、すぐに実践できる親子遊びを結果票の下部に併記した。保護者への更なる情報提供に使用するQRコードや結果票の見方を記載するスペースも設け、このスペースは使用者の実情に応じて差し替えることもできる柔軟な運用を可能とした。クラス・学年別結果票では、運動発達が緩やかな子（スコア1・2）を一覧で表示し、担任が支援対象を把握しやすい構成とした。園全体の結果票では、学年別平均スコアに加え、スコア1・2の割合の経年変化も提示することで、平均の変化に加え、発達の底上げ状況も可視化した。本ツールは、保育現場や家庭、地域において、幼児の運動発達を手軽に「見える化」する支援ツールとしての活用が期待される。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-10] 発育発達を考慮した体格指標の検討

*石原 勇次郎[1]、宇野 直士[2]、新美 尚行[3]、松田 晃二郎[4] (1. 岡山理科大学、2. 山陽小野田市立山口東京理科大学、3. 九州国際大学、4. 城西大学)

本研究は、発育発達研究（石原・村木、2022）で提案された身体組成カテゴリーモデル（以下、カテゴリーモデル）と体力・運動能力に関する調査を行った。カテゴリーモデルは、身体組成指数である除脂肪量指数（FFMI）と脂肪量指数（FMI）の組み合わせに基づき、体格を6つのカテゴリーに分類したものである。各カテゴリーは次のように定義されている：カテゴリー1（低FFMI・低FMI）、カテゴリー2（低FFMI・普通FMI）、カテゴリー3（高FFMI・低FMI）、カテゴリー4（高FFMI・普通FMI）、カテゴリー5（高FFMI・高FMI）、カテゴリー6（高FFMI・超高FMI）。これらのカテゴリーにおいて、FMIとFFMIの組み合わせは異なる。カテゴリーモデルと体力・運動能力との関連性については、新体力テスト8項目の合計点（以下、総合点）および体力要素との関連が確認されている（石原・村木、2022）。しかし、本モデルの作成および体力との関連は、大規模（全校生徒約1,500名）の1つの高校のみで検討されている。そこで本研究では、特性の異なる対象を基に、カテゴリーモデルの外的妥当性を検討することを目的とした。対象は、福岡県、島根県、岡山県内の男子高校生とした。測定項目は、形態（身長、体重）および身体組成、体力・運動能力とした。体力・運動能力の評価には文部科学省の新体力テストを用い、得られた総合点をカテゴリー1から6まで並べると、カテゴリー3と4が高い値を示し、逆U字のような放物線を描いた。この結果は、モデルを作成した高校および異なる高校の両方で同様に得られた。これらのことから、カテゴリーモデルと体力・運動能力との関係は強固であると考えられる。今後は、カテゴリーモデルの普遍性を検証し、体力・運動能力評価方法の改善点を洗い出し、より実用的な評価基準を確立することが必要である。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-11] 高這い姿勢の幼児が手で体を支える運動指導方法の開発

*佐近 慎平[1]、中曽根 裕[2]、中井 聖[3]、金子 勝司[4] (1. 新潟医療福祉大学、2. 仙台青葉学院短期大学、3. 大阪電気通信大学、4. 大阪体育大学)

幼児の顔面外傷の原因は，転倒が1位，ぶつかった相手は，床・地面（40%）が最も多い．我々はその原因の一つとして「手で体を支える動き」を挙げている．移動手段の発達と共に，手の自由を担保するために，手で体を支える動きの減少の影響も考えられる．乳幼児は，寝返り，ずり這う，四つ這い，つかまり立ち，つたい歩き，そして，二足歩行へと移動手段が進む．歩行を開始するまでの移動手段として，ずり這いと四つ這いと比べ，高這いはあまり出現しない．そのため，高這いは，保育者や指導者などによる介入が必要である．これまで我々は，幼児の高這い走の動作をスロー映像で分析して，高這い走の動作を分類してきた．高這い走の速い幼児の四肢動作は，四肢で接地離地の内，１点支持の出現が多くみられた．さらに，１点支持は，同側での2点支持が前動作として見られる傾向にあった．そのため，高這い姿勢での運動環境，床でのボルダリング提案してきた．その運動環境を楽しく，幼児が継続するための補助教材としてドレミマーカーを開発した．ドレミマーカー・ボルダリングは，体支持持続時間の時間が短い女児年長において改善が見られた．しかし，ドレミマーカーを使用した運動環境は，幼児の主体性を担保しているが保育者による指導方法が明らかになっていなかった．そのため，本研究では，同側での2点支持，手で体を支える運動の指導方法を開発した．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-12] 大学生の主観的健康感と体力レベルおよび生活習慣との関係

*吉川 鷹吏[1]、木戸 大貴[1]、佐藤 智樹[1]、大島 秀武[2] (1. 京都教育大学大学院、2. 京都教育大学)

主観的健康感は、高い人ほど疾患の有無に関わらず生存率が高いことや、平均寿命に影響を与えるとされており、死亡リスクの予測妥当性の高い指標として用いられている。WHOによると、健康とは、「単に病気がないだけでなく、肉体的、精神的、社会的な全てにおいて良好な状態であること」として定義づけられている。その一方で、「健康日本21」によると青年期での健康観は、病気の有無ではなくむしろ美容やファッションという視点で健康を捉えているとされている。大学生は、一人暮らしや長時間の通学、部活動、サークル活動、アルバイト、ボランティア活動など、社会環境の変化によって生活習慣にも変化が起こり、運動習慣の不足や睡眠不足、ストレスなどの様々な要因が主観的健康に影響していると考えられる。そこで本研究では、生活習慣や体力レベルが大学生の主観的健康度とどのように関連しているのかを明らかにすることを目的とした。
対象は大学1回生の男性97名、女性170名とし、主観的健康感、運動習慣、朝食摂取の有無、睡眠満足度を質問紙により調査した。体力レベルについては新体力テスト（握力、上体起こし、長座体前屈、反復横跳び、20mシャトルラン、50m走、立ち幅跳び、ハンドボール投げ）を実施し、その合計得点を算出した。主観的健康感の結果から、健康群（非常に健康である）、やや健康群（まあ健康である）、非健康群（あまり健康でない・健康でない）の3群に分けて比較検討を行った。
結果として、体力レベルについては、男女共に3群で有意な差が認められ、健康感が高い群ほど体力レベルも高値を示した。生活習慣については、男性は睡眠満足度のみ差が認められた。女性では、運動習慣、睡眠満足度に差が認められた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-13] トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験に関する大規模調査（1）

単純集計による実態把握

*篠原 俊明[1]、長野 康平[2]、堀内 亮輔[3]、中村 和彦[4] (1. 共栄大学、2. 比治山大学短期大学部、3. 東京女子体育短期大学、4. 山梨大学)

【背景】遊び・運動・スポーツ経験は、子どもの発育発達に加え競技力向上においても重要である。アスリートの過去の運動経験に言及した研究は少なく、言及した研究をみると大学生や特定の競技のトップアスリートを対象としたものとなっている。他方、我が国にはボール競技毎に最も競技レベルの高いトップリーグが存在している。各ボール競技のトップリーグで活躍するトップアスリートを対象とした大規模調査を実施することで、より詳細にアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験の実態を把握することが可能となり、健全な発育発達や競技力向上において重要な知見が得られる。【目的】各ボール競技のトップリーグで活躍するトップアスリートを対象に、過去の遊び・運動・スポーツ経験の実態を大規模調査から把握することを目的とした。【方法】一般社団法人日本トップリーグ連携機構に加盟する9競技、12リーグに在籍する・在籍していた選手1184名に回答を依頼し、同意が得られた日本国籍の1156名を解析対象とした。質問項目は、性・年齢・専門競技・代表歴等の基本属性、トップアスリートを目指すための運動経験に関する考え、専門競技の成績、幼少年期（3歳から10歳）の専門競技の取組状況および外遊び状況とした。トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験の概況を捉えるために単純集計を行った。【結果】トップアスリートを目指す場合いつ専門競技のみに絞って取り組むことが良のかという質問について、小学校1年生、中学校1年、高校1年生という進学のタイミングで割合が高くなり、中学1年生が25.8%で最も高かった。幼少年期において、平日に専門競技に取り組んでいなかったとの回答は、幼児期で84.3%、低学年で62.5%、中学年で39.0%となった。外遊びを平日5日間していた割合は、幼児期、低学年、中学年はいずれも50.0%前後であった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-14] トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験に関する大規模調査（3）

性差による検討

*長野 康平[1]、篠原 俊明[2]、堀内 亮輔[3]、中村 和彦[4] (1. 比治山大学短期大学部、2. 共栄大学、3. 東京女子体育短期大学、4. 山梨大学)

【目的】トップアスリートにおける過去の遊び・運動・スポーツ経験、トップアスリートを目指すための運動経験に関する考えに、性差があるか検討すること。【方法】一般社団法人日本トップリーグ連携機構に加盟する9競技、12リーグに在籍する・在籍していた選手で同意の得られた1177名のうち、性別の回答がなかった6名、および国籍が日本以外であった21名を除いた1150名（男性：601名、女性：549名）を解析対象とした。過去の専門競技／専門競技以外の取組状況、トップアスリートを目指すための運動経験に関する考え等の性差の検討には、カイ二乗検定を行い、有意差が認められた場合は残差分析を行った。【結果】専門競技の開始時期は、男性が幼児・高校生・大学入学以降が有意に高い割合を示し、小学校低学年・小学校中学年では女性が有意に高い割合を示した。過去の最高競技成績では、一貫して女性が高い競技成績をおさめていた割合が高く、日本代表経験も、女性が有意に高い割合を示した。幼少児期の競技経験についても性差が認められ、男性は3種目以上経験している割合が有意に高かった。トップアスリートを目指すための運動経験に関する考えは、ひとつの競技に専門的に取り組むことの至適学年は、女性が小学校中学年・高学年の割合が高く、男性は高校生・大学入学以降の割合が有意に高かった。トップアスリートを目指す際に、各世代で、ひとつの競技だけに取り組むべきか、複数の競技に取り組むべきかについては、一貫して複数の競技に取り組むの回答は男性が有意に高い割合を示した。【結論】トップアスリートにおける過去の遊び・運動・スポーツに経験、トップアスリートを目指すための運動経験に関する考えには、性差が認められ、女性はより早期から専門競技を実施する傾向があり、トップアスリートを目指すことを考えた場合、男性よりも早期に単一種目を志向する傾向がみられた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-15] 幼児期における国際交流経験は記憶を通じたSES向上につながるか
南アフリカとの身体活動・体験活動を通して

*山﨑 幸歩[1]、村山 敏夫[1]、樺澤 茉宝[1]、亀岡 雅紀[2] (1. 新潟大学、2. 新潟医療福祉大学)

【背景・目的】
少子高齢化やグローバル化が進行する現代社会において、幼児期からの異文化理解や国際的視野の育成が注目されている。質の高い幼児教育は、言語使用や早期の識字・計算、社会情緒的スキル（SES）など多様な発達と、就学後の学習にも有益とされる。中でも身体活動を含む体験的な国際交流は、幼児の発育や社会性・情動面の育成に資する可能性があるが、その中長期的影響を検討した研究は少ない。本研究では、南アフリカの子どもたちとの交流による身体活動や栽植体験などが、幼児にどのような影響を与えたかを、交流から半年後のインタビューで明らかにすることを目的とした。
【方法】
N市内の4保育園の年長児を対象に、2024年5月～12月にかけて、各園で2回（各回最長60分）の国際交流活動を実施。活動には、野菜の栽植、遊び、絵本の読み聞かせや体操などを含めた。半年後、参加児へインタビューを行い、記憶、印象、異文化理解について分析した。
【結果】
①多くの幼児が「ジェスチャーゲームをした」「野菜を植えた」など、身体を使った体験を具体的に話していた。
②ある園では「教室に地図があったから南アフリカを知っていた」との回答が多く、事前の環境設定の効果が示唆された。
③「楽しかった」と答えた幼児ほど、交流内容を具体的に説明できた。
【考察・結論】
身体活動や体験を伴う国際交流は、半年後も幼児の記憶に残りやすいことが示唆された。また、事前・事後の情報提供や環境設定が体験の理解を深める可能性がある。今後は、発達段階に応じた国際交流プログラムの設計と評価を通じて、SESを含む実践的教育手法の構築が求められる。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-16] トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験に関する大規模調査（2）

マルチスポーツ経験による検討

*堀内 亮輔[1]、篠原 俊明[2]、長野 康平[3]、中村 和彦[4] (1. 東京女子体育短期大学、2. 共栄大学、3. 比治山大学短期大学部、4. 山梨大学)

【目的】トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験とマルチスポーツ経験との関連について明らかにすること。【方法】一般社団法人日本トップリーグ連携機構に加盟する9競技、12リーグに在籍する・在籍していた選手で同意の得られた1177名のうち、有効な回答が得られた1156名を解析対象とした。専門競技を始めた学年、専門競技を中心的に取り組み始めた学年等とマルチスポーツ経験との関連には、カイ二乗検定を行い、有意差が認められた場合は残差分析を行った。なお、マルチスポーツ経験については、幼少年期に取り組んでいた運動・スポーツの種目数のうち、3種目以上が37.1%、2種目が32.1%、1種目が30.6%であったことから、単一群、2種目群、3種目以上群の3群に分類した。【結果】トップアスリートが幼少年期に取り組んでいた運動・スポーツの種目数は2種目群、3種目群のマルチスポーツを経験していた割合が69.4%を占め、単一群よりも多かった。専門競技を始めた学年では、単一群は小学校低学年の割合が有意に高く、幼児期の割合が有意に低かった。一方、3種目以上群は中学生の割合が有意に高く、小学校低学年の割合が有意に低かった。専門競技を中心的に取り組み始めた学年では、単一群は小学校低学年、小学校中学年の割合が有意に高く、中学生の割合が有意に低かった。一方、3種目以上群は中学生の割合が有意に高く、小学校低学年、小学校中学年の割合が有意に低かった。【結論】トップアスリートにおける過去の遊び・運動・スポーツ経験には、マルチスポーツ経験による関連が認められ、単一群では、専門競技のスポーツ開始時期や中心的に取り組み始めた時期は小学校低学年が多く、3種目以上群では中学生が多かった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-17] 幼児の日常活動における運動遊びと身体活動動作
保育者調査から

*佐々木 玲子[1]、石沢 順子[2] (1. 慶應義塾大学、2. 白百合女子大学)

幼少期は、神経系の発達が著しい時であり、体を動かすことにより様々な運動刺激を継続的に受けて動きを獲得していき、さらに上達していく時期である。幼児にとって、幼稚園、保育所などの保育施設は、身体活動の量、質ともに確保される大切な場となっている。特に保育活動中の運動遊びの中には、走る、跳ぶ、投げるなどを始めとして多くの動作が含まれており、それらを通じた活動は、子どもたちにとって多様な動き、運動パターンを経験し身につける重要な機会となっている。本研究では、実際の保育現場において、子どもたちが日常どのような活動（運動遊び）を行い、それらを通じてどのような動きを経験しうるのかについて、保育士へのアンケートを用いてその現状を調査した。
東京都内の幼稚園14園の、保育現場で直接子どもたちとかかわりを持つ保育者（クラス担任など）を対象として、アンケート調査を実施した。各園の日常の園活動において、幼児が実際に行っている頻度の高い運動遊びおよびその遊びに含まれる基本的動作について、アンケート用紙を作成し、回答を得た。併せて、園の広さ、所有する設備、遊具、等の環境要素についても尋ねた。これらの回答から、運動遊びの実施状況、実施している遊びの数や種類、および含まれる動作の種類について明らかにすることを試みた。
調査の結果から、鬼ごっこ系の遊びは、すべての幼稚園で、どの学年においても頻度高く実施されていた。しかし、動作に着目すると、そこに含まれる動作は、年少児は「歩く」「走る」が主体であったのに対し、年長児では「かわす」「つかまえる」動きが増えるなど、動作の種類が多様になる傾向がみられた。また、遊具を使った遊びは、どの学年も同程度に実施され、またそれに伴って同様に一定の動作が引き出されることが推測された。全般的に、年齢に伴って、遊びの種類および動きの質が異なり変容していくことが推察された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別）｜専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-18] 大学1年生アスリートのキャリア観とキャリア支援の実態 －個別対話の有用性に着目して－

1対1の対話によるキャリア形成支援の可能性を探る －競技生活からワークキャリア・ライフキャリアへの拡張－

*竪石 亜也子[2]、小泉 朝香[3]、山口 香[1] (1. 筑波大学、2. アデコ株式会社、3. 株式会社トリデンテ)

本研究は，筑波大学体育専門学群に推薦入試で入学した大学1年生アスリートを対象に，キャリア観およびキャリア形成支援の現状を明らかにすることを目的とした．

対象者は，水泳・柔道・陸上・体操・バドミントンの個人競技に取り組む10名であり，半構造化インタビューを通じてキャリア観および支援の実態を探った．分析にはKJ法を用いたインタビューの逐語録をもとに，時系列に沿ったキャリア観の変化を図解化および叙述化した．

インタビュー結果からは，大学進学の動機として「競技力の向上」や「実業団への通過点」といった競技キャリアへの意識が強調される一方，「教職課程の取得」「指導者としての道を模索したい」といったワークキャリアへの興味も確認された．また，「興味のある分野を見つけたい」「引退後のキャリアに不安がある」といったライフキャリアへの関心も見られた．筑波大学体育専門学群において必修科目として設置されている《スポーツキャリア形成》は，学生がキャリアについて考える契機として機能しているが，さらに今回の1対1の対話時間を通じて「普段話せないことまで話せた」「自分のキャリアについて振り返る機会になった」という声が多く寄せられた．これにより，必修科目の学びを補填する場としての1対1対話の有用性が確認された．特に，キャリアコンサルティングのような場が設けられることで，学生は自身の経験や価値観を言語化し，「次のステップが見えた」「漠然と考えていた進路が少し具体化した」といった前向きな効果が得られていた．

今後は，体育専門学群の《文武不岐》の理念を軸に，必修科目の学びを深化させる1対1対話の体系化およびその効果の検証が求められる．

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-19] 小学校教諭養成課程のシラバスから見た運動遊びの位置づけと幼児期との接続に関する教授内容

*吉田 伊津美[1] (1. 東京学芸大学)

【目的】保育現場の運動指導は活動中心に偏っている傾向がある。「運動遊び」や「動き」に関し平成29年告示の要領等では乳児期から幼児期、さらには児童期(小学校)まで連続したつながりが示されたといえる。幼稚園教諭養成校のシラバスでは領域健康の指導法及び専門的事項において「運動」がもっとも多く記載されていた一方で、「多様な動き」「小学校」とのつながりについては必ずしも扱われていなかった(吉田,2025)。そこで本研究では、小学校教諭養成課程の初等体育科関連科目に着目し、幼児期との接続に関する内容の位置づけと教授内容をシラバスから明らかにすることを目的とした。
【方法】令和5年4月現在、小学校教諭一種免許が取得可能な通学制262大学の内(文部科学省,2023)、Webより入手可能な「教科及び教科の指導法に関する科目」を中心とする初等体育科に関する641科目(250大学)を収集した。各シラバスの項目の内、内容および授業計画に記載の事項に対しKHcoder3(樋口,2004)により共起ネットワーク分析を行った。
【結果と考察】全体的には教職課程コアカリキュラム(教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会,2017)や教科教育モデルコアカリキュラム(広島大学大学院教育学研究科,2018)で示されている事項等が網羅されていた。「運動遊び」は低学年に関する内容がほとんどであったが、一部幼児や保育・幼稚園等における「運動遊び」の記述もあり、幼児期から体育への移行や接続を扱っている科目もごく少数みられた。関連語検索により「幼児期」「運動遊び」と共起する語では、「幼児期」は「運動」「運動遊び」「発達」「児童」などと、「運動遊び」は中学年、高学年の領域名との結びつきが強かった。「運動遊び」は中学年以降の各領域との関連が主で、幼児期からの接続や基本的な動きとの関連はシラバス上ではほとんど見られなかった。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-20] セーリング競技における帆走に関する宣言的知識の艇種による違いについて

*坂口 英章[1]、青柳 領 (1. 日本経済大学)

【緒言】セーリング競技においても状況判断能力の基礎として宣言的な知識の有無が重要である。特に、二人で共同して操船する場合と一人で操船する場合では必要とされる知識には違いがあることが考えられる。そこで、本研究ではセーリング競技において中心的知識となる帆走について問う知識の艇種による違いについて検討する。【方法】2019年F県大会と茨城夢国体セーリング競技そして、2019年全国高校総体ヨット競技に参加し、本研究の趣旨に賛同した174名を対象に40項目からなる艤装に関するテストを行った。互いの知識間の影響を一定にして関連を検討するために、正答は1、誤答は0と変換したデータに数量化理論 II 類を適用し、重相関比、偏相関係数、カテゴリーウエイトのレンジを求め、両者の違いを検討した。【結果】求められた重相関比ηは0.499と高い関連を示し、正判別率は70.59%と高く、帆走に関する宣言的知識の艇種による違いがみられた。偏相関係数(PC)およびカテゴリーウエイトのレンジ(RG)が大となったテスト項目は、「サイドジャイブ手順(RG=0.9403、 PC=0.2249)」など8項目であった．その中では，求められた判別得点の平均値が「一人乗り」が負で，「二人乗り」が正であったことから、「アビーム角度」「セールシェイプリンクル」では「一人乗り」の方が優れ、それ以外の「サイドジャイブ手順」「マストベンドリンクル」「風上側のテルテールの反応」「風下側のテルテールの反応」「ジャイビング」「上マーク回航トリム」では「二人乗り」の方が優れていた。この点については、①対象者の競技レベル、②「二人乗り」の場合、役割が分かれているのでそれに該当しない者の知識がないこと、③艇の構造の違いによりそのような点を特に考慮する必要がないことなどが知識の差の原因と考えられた。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-21] 妙高市産学官連携による幼児の数学的な能力に着目した自然体験型運動あそびプログラムの開発と実践

*樺澤 茉宝[1]、木下 昭二[2]、村山 敏夫[3] (1. 新潟大学大学院、2. ミズノ株式会社、3. 新潟大学)

近年、幼児期の運動あそびを通じた数的思考や認知能力の発達が教育において重要な位置づけとなっている。特に、体力・運動能力と数学的な能力との関連を明らかにする研究が進んでおり、抽象的な概念を実体験に基づいて理解する体験的な学びの場の重要性が指摘されている。一方で、従来の幼児教育では、それぞれの学びが分離して扱われることが多く、五感や身体を使った体験を通じて数学的な能力を育む実践は限定的である。そこで本研究では、新潟県妙高市をフィールドに、産学官連携による自然体験型運動あそびプログラムの実践について報告する。本プログラムは、自然環境との関わりを重視し、屋外での身体活動を通じて体力・運動能力を育みながら、創造力・探究心・数的思考への導入を目的としている。開発に際しては、新潟大学、妙高市、ミズノ株式会社の連携体制をとり、学術的視点と教育現場の実践を融合させて体験内容を構想した。また、本プログラムを妙高市内の園で実施し、子どもたちの活動中の継続的な観察記録をもとに、プログラム内容の検証と改善を行った。本研究では、実践を通じて得られた成果として、遊びながら学ぶ楽しさの実感、自然環境を活かした運動と学びの統合、子どもの創造性・探究心の発現、数的・科学的思考の萌芽について具体的なエピソード事例を交えて報告する。また、現場の保育者から得られたフィードバックに基づく今後の改善点や、継続可能な運営体制についても考察する。本研究は、地域資源を活かした新たなSTEAM教育モデルとして、今後の地域教育の質向上と子どもの学びの多様性を促進する一助となることが期待される。さらに本研究を発展させていくことで、妙高市の豊かな自然資源を活用した幼児期の教育プログラムを構築していく。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)／発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-22] ５歳児の足圧中心動揺における試行間信頼性

*溝畑 潤[1]、青木 敦英[2]、秋武 寛[3]、三木 伸吾[4]、田路 秀樹[2] (1. 関西学院大学、2. 芦屋大学、3. 西南学院大学、4. 島根大学)

【目的】本研究は５歳児の足圧中心動揺の試行間信頼性について明らかにすることを目的とした。【方法】被験者は大阪府下のA幼稚園に在籍する５歳児男女14名（男児6名、女児8名）であった。足圧中心動揺の測定にはアニマ社製グラビコーダーGS―７を使用し、開閉眼における変数それぞれ６項目（外周面積、単位軌跡長、単位面積軌跡長、総軌跡長、矩形面積、実効値面積）を分析した。測定は日本平衡神経科学会、平衡機能検査基準化委員会（日本平衡神経科学会，2006）が定めた環境を設定して、午前中に実施した。測定に際して、被験者には最初に検査台後方の椅子に着席させ、リラックスした状態であることを確認した後、検査台上に閉足の直立姿勢をとらせた。被験者の手の位置（両腕が体側に接している）、視線の位置（2m前方の目の高さに固定した視点を注視している）、直立姿勢の安定を確認した後、開閉眼条件でそれぞれ30秒間測定した。測定は１分間の休息を挟み3回連続して実施した。なお、休息時は検査台上の足の位置が変わらないように椅子に座らせた。【結果および考察】開眼の級内相関係数（ICC）はいずれの変数も0.75以下であり、総軌跡長の0.72が最も高かった。一方、閉眼のICCは単位軌跡長（0.75）、単位面積軌跡長（0.89）および総軌跡長（0.75）が0.75以上であった。筆者らの小学4年生を対象にした足圧中心動揺の試行間信頼性の報告と同様に、開眼よりも閉眼の方が優れていた。【結論】本研究の結果から、幼児期から閉眼の足圧中心動揺の試行間信頼性が高いことが示唆された。

© Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences